ボディーガードは魔法少女

建御雷神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ボディーガードは魔法少女

【Ｎコード】
Ｎ７３３５Ｘ

【作者名】
建御雷神

【あらすじ】
７月２７日、明日から夏休みという事で浮かれていた俺こと、高校２年生の真之乃秀（まのしゅう）の前に謎の金髪碧眼のツインテールの少女が現れた。自分は未来からやってきたというトンデモ設定を語る少女は更に自分の事を『上級魔術師（トップソーサレス）』――つまりは、“魔法少女”だと言う。色んな設定が混じっているようなそいつは更に俺に対してトンデモ発言をしてきて――。

7月27日

「夏休み、どうする？」

「あん？」

7月27日――高校の終業式からの帰り道にて。

腰の辺りまである艶やかな黒髪が特徴の少女――夜華霧歌（やかきりか）は俺にそんな事を問いかけてきた。

「どうするって……明日から否応無しにやってくる夏休みに対しての今の心境を語ればいいのか？」

「私がそんな捻くれた答を待ち望んでいると思う？」

「いや、全く以て思わないな」

「そう思うのなら、そんな事は言わない事、良い？」

「は、ハイ……いや、その、ちょっと明日からの夏休みに浮かれてさ。ちょっとした悪ふざけを敢行しようと思い立ったから」

「全くもう……秀ちゃんはいつまで経ってもそういう所だけは変わらないんだから」

そう言って――俺の隣を歩く霧歌はぷうっと不満気に頬を小さく膨らませる。

夜華霧歌――彼女は一言で言うなら、俺の幼馴染だ。

彼女とは幼稚園の頃からの付き合いで、その後は小学校、中学校、そして今の高校と――ずっと共に歩みを進めている。

もしかすると、このまま二人でハッピーエンドまで到達してしまうのではないか。

余りにも歩む道が同じ過ぎて俺は時折そんな事を考えてしまう――のだが。

まぁ、そんな事は無いのだろう。

だって、僕は単なる平凡な学生で、彼女は生徒会の副会長も務めていて、学校では常に成績がトップのエリートだからだ。

同じ道を歩んでいても、互いに起きる変化は言うまでも無く大きく違う。

嫌になってくる程に――違っている。

昔、一緒に遊んでいた男女――その内の男子が平凡になって、その内の女子がエリートになる。

よくある話だ。

そして、大概はその後に二人を待ち構えているのは困難を乗り越えた先にあるハッピーエンドなのだが――。

今の所、ハッピーエンドの兆しどころか、困難さえ俺達の目の前に

立ちはだかる気配は感じられない。

非常に残念だ。

いや、冗談抜きで。

「ねぇ、秀ちゃん」

「あのな、霧歌……その呼び方、中学の時にはもう止めてくれって俺何度も頼まなかったっけ？」

「アレ？　そうだったかな？」

そうだったかな、じゃねーよ。

女子なら未だしも、男子が女子からあだ名で呼ばれるという事に何かしらの抵抗の意思を俺が見せ始めたのは中学校に入ってからだ。

そこで、俺は霧歌に土下座までしてそのあだ名を止めてくれるように頼んだのである。

「忘れたとは言わせねーぞ。俺なんかお前の前で土下座までして見せたんだからな」

「過去を勝手に改竄（かいざん）するのは止めてよ……秀ちゃん、私に土下座なんてしてないよ？」

「……」

どうやら、土下座まではしていなかったらしい。

それはそれで安心した。

何と言うか……男としてのプライドが護られたような気がする。

「とにかく、俺の事をもうあだ名で呼ぶのは止せ」

「えーっ、何でよー。可愛いよ？　あだ名」

「男に可愛さなんて要らない」

「それはおかしいよ……何かこう、女尊男卑（じょそんだんぴ）みたいな」

「難しい言葉を使って誤魔化そうとするな。そんな言葉、見た事も聞いた事も無いぞ。男尊女卑（だんそんじょひ）なら知っているが」

「……秀ちゃん、女尊男卑は今の日本を語る為の、男尊女卑に変わる四字熟語だよ？」

「……」

……時折、無知は俺に“羞恥”という贈り物をくれる。

いや、好きで貰っている訳では無いのだが。

「あ、揚げ足を取りやがって……」

「秀ちゃんがもっとちゃんと勉強すれば良い話じゃない」

「ふざけるな。俺は勉強なんかしない」

「高校生が言う言葉じゃないねぇ……」

呆れたように苦笑を見せる霧歌。

「夏休み明けには実力テストがあるんだよ？」

「知ってるよ。夏休み明けには忘れているだろうけど」

「秀ちゃん、夏休み明けにあるテストを夏休み明けには忘れている って、かなり危ない事だという事に気付いてる？」

「とにかく、俺は勉強なんかしねーよ。来年もあるし、来年一年間頑張ればどっかの大学くらい受かるだろ」

「そういう安易な考えが足元を突き崩すんだよ……秀ちゃん。仕方ないなぁ……それじゃあ、夏休みの何日間か私が個人レッスンして上げるから、頑張らない？」

「こ、個人レッスンってお前……俺達、まだ高校生だぜ？」

「……秀ちゃん」

「ハイ」

「怒るよ」

「……申し訳ありませんでした」

俺は素直に謝った。平謝りをした。

今のは完全に悪ノリをした俺が悪い。

いや――悪ノリをしている時点で悪いのはどう考えても俺なのだが。

7月27日？

「それで、話は元に戻るけど……夏休みはどうする？　私と一緒にお勉強する？」

「夏休みにお勉強、ねぇ……」

「物凄く嫌そうな顔だね……まぁ、解ってはいたけどさ」

再度、俺の顔を見て苦笑を見せる霧歌。

ていうか、顔を見られて苦笑を浮かべられるというのもどうなのだろうか。

「そうだなぁ……まぁ、気が向いたらお願いしようかな」

「おっ、普段の秀ちゃんに似合わず前向きな考えだね～」

「オイ、それは一体全体どういう意味だ」

今の言葉だけで俺は“前向き”だと捉えられてしまうのか。

それじゃあ、普段の俺はどんだけ“後向き”な人間だと言うのだ。

「まぁでも、私と一緒に勉強会した方が秀ちゃんも得だと思うよ？」

「えっ、何で？」

「秀ちゃん、今日夏休みの宿題貰ったでしょ？」

「ああ、そういえばそんなものも貰ったっけ……一瞬、現実逃避しようとして教室のゴミ箱に捨てそうになったけど」

「……秀ちゃん、あなたは一体どれだけ勉強というものが嫌いなのですか？」

「戦争や紛争、その中で死んで行く子供達――そんな感じの現実と同じくらいに嫌いだな」

「なるほど……秀ちゃんがどれくらい勉強というものが嫌いなのかが理解できた」

「それで、どうしてお前と一緒に勉強会した方が俺にとって得なんだ？」

「だって、解らない所は一緒に考えられるでしょ？」

「なるほど、確かに……解らない所は霧歌から写して貰えば良いし――」

「解らない所は一緒に考えられる、でしょ？」

「……ハイ、そうですね」

……霧歌は俺の言葉を遮る勢いでこちらに眼前まで顔を近付けつつ半ば俺を脅すようにそう言うのだった。

つーか、怖いよ、霧歌。

今のはマジで怖かったよ。

「それに……秀ちゃんと一緒に居られる時間も増える、し」

「あん？　今何か言った？」

「う、ううん……何でも、ないの、何でも」

「そうか……それならいいけど」

今、霧歌が何か口走ったような気がしたんだけど……空耳だったか。

「それじゃあ、早速明日から勉強会を決行しましょうか」

「明日から！？」

余りの急ピッチな予定に俺は思わず叫び声を上げてしまっていた。

俺達の通う高校は住宅街の傍にあって、無論今も俺達は住宅街の中にある帰路を使っている為――もしかしたら、家の中に居る主婦や子供達に声を聞かれてしまったかも知れない。

「あ、明日から、って、お前……幾ら何でも早過ぎるだろ」

「そうかな……私はいつもそうしてるけど？」

「あのな、エリートのお前の日常を平凡な俺に押し付けられても困るんだよ」

お前の日常はお前にとって日常であり、俺にとっては非日常だから

な。

天と地、月とスッポンくらいに違うのだ――過ごしている時間は同じでも。

「エリートって……私は別にエリートでも何でも無いよ」

「お前をエリートと呼ばずして他に何と呼べと言うんだよ。頭脳明晰で成績優秀――そんなお前がエリートという呼ばれ方を嫌うのなら今日から俺はお前の事を『エリート・ウーマン　霧歌』と呼ぶぞ」

「うーん……別にカッコイイからそれでも良いけど」

「マジで言ってんのかお前！」

しまった……霧歌のこういうネーミングセンスが壊滅している事をすっかり忘れていた。

壊滅しているというか、荒廃しているというか、崩壊しているというか、何だろう。

とにかく、霧歌のこういったセンスは酷いのだ。

それを考慮するなら、“秀ちゃん”というあだ名はまだマシなのかも知れない。

……いや、だからと言ってそのあだ名を認める訳では無いが。

「ていうか、夏休みの初日から宿題をする私を秀ちゃんは“エリート”って呼ぶけど……あっ、『エリート・ウーマン　霧歌』だっけ

？」

「言うな。そのあだ名はもう忘れろ」

何か俺が恥ずかしくなる。

くそっ……霧歌を辱める為に作り上げたあだ名でどうして俺が羞恥で悶えないといけないんだ。

何かまた揚げ足を取られているような気がする。

気のせいだろうか。

気のせいであって欲しい。

「それ自体は別段“エリート”って訳じゃないのよ？　夏休みの初日から宿題をする人くらい、沢山（たくさん）居るし」

「それって本当なのか……？　夏休みの宿題を夏休みの最終日辺りに全て片付けている俺にとってはお前達の考えは解らないな」

「ていうか、秀ちゃんって毎回夏休みの宿題は最終日まで全く手を付けない人だったんだね……まぁ、そこはあえて今はツッコまないけどさ」

「大体」と霧歌は人差し指を立てて説明口調で続ける。

「夏休みの初日から一週間以内に宿題を全て終わらせたら、それ以降は夏休みが終わるまでずーっと宿題の事なんか気にせずに遊べるんだよ？　そっちの方が得だと思わない？」

「……あのな、霧歌？」

「うん、何？」

「お前に良い事を教えてやるよ」

「良い事？」

「俺みたいな宿題を最終日まで全く手を付けない奴って言うのはな、まず、夏休みが始まった瞬間から宿題という“存在”そのものを頭の中から消してしまっているんだよ。だから、夏休みが始まって一週間以内に宿題を終わらせた方が得――なんて考えさえ、最初から俺の頭の中には入っていないという訳なのさ。解ったかい？」

「それは解ったけど……あの、そういう事を何か得意気に語られても私困るんだけど」

「でもまぁ、夏休み中は何度かお前に宿題を写させて――いや、一緒に考えさせて頂こうかな、うん」

その言葉を言い切る途中で俺は霧歌から鋭い視線で睨まれたので――ほぼ条件反射で台詞を言い直した。

「……まぁ、秀ちゃんが来てくれるのなら、もう何でも良いかなぁ」

「えっ、それじゃあ宿題を――」

「写させませんから安心して下さい」

「……」

どうやら、どうあっても霧歌は俺に宿題を写させる気は無いらしかった。

つーか、安心して下さいって。逆に安心できねーよ。

不安だ……難問にぶち当たったら、その問題で一日の貴重な時間を費やしてしまいそうな気がする。

7月27日？

「仕方ない……宿題の件はそういう事にしておくか」

「何で上から目線なのよ」

「ていうか、霧歌。ちょっと脈絡も無い話をしてもいいか？」

「脈絡も無い話という時点で何かアレだけど……まぁいいわ、どうぞ、秀ちゃん」

「夜華霧歌って名前……何か、物凄くレアな感じだよな」

「本当に脈絡も無い話ね……」

「何だよ、ちゃんと話す前に“脈絡が無い”って俺は言ったぞ」

「まぁ良いけど……そうね、『夜華霧歌』――確かに珍しい名前よね。苗字も、名前も……まぁ、そういう所を実は気に入ったりしているんだけど」

「その点については俺も同感だな。『夜華霧歌』って……何か、カッコイイ名前だよな」

「でも、珍しい名前と言えば、秀ちゃんの名前だってそうだよね？」

「えっ、そうか？」

「そうよ。真之乃秀（まのしゅう）なんて……名前はともかく、苗字は珍し過ぎる

ほどに珍しいわよ」

「うーん……そうか？　俺は今までこの苗字だったから、そこまで珍しいとも思わなかったけどな」

「ポケモンで言うなら、草むらから色違いポケモンが出て来るくらいにレアだと思うな」

「止めろ、霧歌。その例えだけは止めてくれ」

何か色々と危ない気がする。ていうか、その例えは確実に危ない。

「しかし、そうか……お前の例えが当たっているのなら、俺の名前――と言うより、苗字は中々に珍しいものだったんだな、今更ながら気付いてしまったぜ」

「この世に生を受けて17年――大きな発見だね、秀ちゃん」

「おうよ、やったぜ、霧歌」

「やっぱり、その嬉しさは色違いが草むらから出て来たくらいに嬉しいの？」

「だから、その例えは止めてくれって言ってんだろ。いや、まぁ、そのくらいに嬉しいかも知れんが」

「でも、色違いと言えば、最近やってないなぁ……黒と白が出たけど、ちょっと熱中したら全クリしちゃったし」

「……霧歌、お前さっきから発言が色々とギリギリだぞ」

「秀ちゃんは黒白どっち派？」

「お前、さり気無く俺の事も巻き込もうとしているだろ」

「良いから、答えてよ、秀ちゃん」

「俺は……白だな、ていうか、白以外には考えられないな」

まぁ、白以外には黒しかもう選択肢は無いのだけれど。

「黒って何か……ほら、伝説がゴツゴツしてるって言うかさ」

「えーっ、でもネーミングに関してはこっちの黒の方が上だと思うなー」

誰もお前にだけはネーミングの事を言われたくは無いと思う――そう思う俺だったが、決して口には出さない。

口に出せば、霧歌が怒るか、もしくは凹んでしまう事間違い無しだからだ。

「ほら、カッコ良くない？　ゼクロ――」

「わ――――――――っ！　言うな！　何言ってんだお前！　バカかお前！」

「秀ちゃんにバカだと言われる日が来るんなんて……何か心外だなぁ」

「いや、お前バカだろ！　実はバカだろ！　エリートと見せかけて実はバカなんだろ！」

「私はバカじゃないし、そもそもエリートでも無いよ、秀ちゃん。ていうか、バカって言う方がバカなんだよーだ」

そう言って霧歌は俺に舌を出してくる。

典型的な相手を挑発する行為の一つだ。

しかし――まぁ、何と言うか、霧歌がやると長髪で苛々する以前に何か萌え――ゴホン、いや、俺は何も言っていない。

別に、霧歌が俺に向かってべーっと舌を出してきたとしても、俺はその行為に対して“萌え”を感じたりはしないし、心に何かキュンと来るものを感じたりもしない。

本当だから。

いや、冗談抜きでこれは本当だから。

可愛いとは思ったけれども。

……。

「……秀ちゃん？」

「は、ハイッ？」

「今、何か私に対して邪な想像と言うか、感情を抱かなかった？」

ば、バレてる!?

何だこいつ、まさか霧歌には人の心を読む力があると言うのか！

「……そ、そんな訳ないじゃん。俺がお前に対して邪な想像とか感情を抱くなんて……なぁ？　知ってるか？　俺って、家の中では『善意の塊』って呼ばれてるんだぜ？」

「へーっ、それはまた狭い範囲の中での通り名だね、秀ちゃん、私見直しちゃった」

「そ、そうだろう？　どうせなら、もっともっと尊敬してくれても構わないぜ？」

「……秀ちゃん」

「何だ？」

「余り調子に乗ると怒って、それから……」

「何でそこで言葉を区切るの!?　なぁ、お前が怒った後にはどんな壮絶な仕打ちが俺に待ち受けているんだよ!」

聞きたくはないけど逆に気になって仕方が無い！

「あっ、気付けばもういつもの分かれ道だね」

霧歌の言う通り、気付けば俺達の前には左右に分かれたT字路があった。

ここで、いつも俺達は別れる。

霧歌は右の道に、俺は左の道に。

それぞれ――別れて、歩いて行く。

「それじゃあね、秀ちゃん」

「おう、霧歌」

「帰ってからまた、メールするからね」

「ああ、明日の打ち合わせだろ？　待ってるよ」

「うん」と霧歌は何故か嬉しそうに満面の笑みを俺に見せて。

「じゃあね、秀ちゃん」

そう言って俺に大きく手を振った霧歌は――俺に背を向けて自身の帰路を歩き始める。

「……さてと」

そして、帰路を歩いて行く霧歌を暫しの間見送った俺も自身の帰路をゆったりとマイペースに歩き始める。

どうせ、明日からは夏休みだ。

実質、終業式が終わった今日から既に夏休みは始まっていると言っ

ても良い。

それ以前に急ぐ用事も無いし――時間もある。

だから、ゆっくりと家に帰ろうと思った矢先だった。

「……ん？」

俺は地面に落ちていた“それ”を蹴飛ばしてしまった。

俺に蹴飛ばされた“それ”はアスファルトの上を滑空し――それから、ガチャンという金属音を立てて道路の上に落下した。

7月27日？

「何だ、あれは……？」

俺はそう疑問の声を漏らしながらも、その蹴飛ばしてしまった“それ”に歩み寄り、“それ”を拾い上げる。

俺が蹴飛ばしてしまったもの――ペンのような形をした白い物体だった。

いや、ペンのような形をしているとは言っても実際にはペンではないのだが。

ペンではなく――“それ”は何かの欠片に見えた。

ペンに近い形状をした何かの、欠片。

“それ”を俺は拾い上げたのだ。

「宝石……じゃあ、ない、よな？」

誰にでも無くそう確認を取る俺。

無論、俺は先ほど霧歌と別れたばかりであり、周囲には誰も居ない為、その問いに対する回答は幾ら待っても帰って来ない。

そして、俺がそんな問いかけをしてしまった理由は――ただ一つ。

その白い何かの欠片がキラキラと――太陽の光に反射してまるで宝

石のように煌びやかに光っていたからだ。

いや、ていうか、最早これは宝石なのではないだろうか？

「……」

えっ、どうしよう。

この場合……交番に届けた方が、いいのか？

交番に届けた場合、その落とし物を拾ってくれた人には何割かお礼が貰える制度があったような気がする。

いや、お礼が欲しいが為に交番に届けるんじゃないぞ？

ただ純粋に、純粋に落とし主の事を思っての行動だからな？

勘違いしないように。

「……」

――そして。

周囲の景色と、たった今拾い上げた宝石のような白い何かの欠片を何度も――何度も、何度も見比べて。

俺は。

◆

◆

◆

突然だが、ここで余談を一つしておく事にしよう。

余談と言うか雑談だ。

俺の家は二階建ての一軒家である。

そして、俺の部屋はその一軒家の二階にあった。

俺の部屋にあるベランダに出る為の窓からは住宅街の屋根の海が一望できて――それはそれで俺はその景色を少し気に入っていたりする。

時が流れて、夕刻になれば外から暖かな茜色の光が差し込んで来て――外に広がる景色は一層幻想的なものへと変化する。

無論、俺の部屋にも窓からその光が差し込んでくる。

今は夏なので少しばかり暑い気もするが――それを気にしないほどに、俺は夕暮れ時の太陽が放つ茜色の光が好きだった。

――そして。

現在、時は夕刻。

今日もベランダに通じる大窓から太陽の光が部屋の中に差し込んでいる。

壁、床、ベッド、パソコン――色々なものが茜色の光に染まってい

る中で。

俺の勉強机の上に置かれたその宝石のような白い何かの欠片もキラキラと神々しい光を放っていた。

「……」

……ああ、そうだよ。

結局、持ち帰って来てしまったのだ。

何とか夕暮れ時の茜色の光だとか、その辺りの素晴らしい風景で誤魔化そうかと思ったのだが――どうも、上手く行かなかったようだ。

幾ら現実逃避をしようとして目を逸らそうにも、実際に俺の勉強机の上には先ほど持ち帰った白い何かの欠片が置かれているのだから。

「ヤバい……何かヤバい代物だったらどうしよう……！」

俺はまるで土下座するかの如くベッドの上で小さく蹲(うずくま)りながら恐怖に慄(おのの)く。

「ヤバい……何か、マフィアとかヤクザとか、その辺りの人達の所有物だったらどうしよう……！」

その可能性も決して否めない訳では無い。

あんなにキラキラと輝く美しいものだ――そういう裏の人間達の所有物だったとしたら。

俺の人生はもう、終わりだ。

「ヤバい……質屋で高値で売れてしまったらどうしよう、１００万とか」

そもそも、質屋とはそういう金額も出してくれるのだろうか。

俺は実際行った事無いから解らないけれど……ドラマとか、その辺の知識からすればそんな値段を出した所は一度として拝見した事が無い。

「ヤバい……宝石店で物凄く高値で売れてしまったらどうしよう、１億円とか」

もう、あれだ、１億円とかで売れてしまった暁には俺はもう高校を止めて、大学にも行かなくて、勉強せずとも人生を満喫――。

……。

「って、俺途中からこの謎の物体を売る前提で話を進めてるじゃん！　恐怖に慄いている俺は一体全体どこに行ってしまったんだよ！」

そんな感じで俺はベッドから勢い良く起き上がると全力でノリツッコミをした。

自分でボケて、自分でツッコんで、一つだけ解った大切な事が有る。

――それは。

「……空しくなるだけだったな」

空しくなるだけだった。

悲しくなるだけだった。

心に一生モノの傷が入るだけだった。

もう二度と一人ボケ、ノリツッコミはしないでおこう――俺はそう心に固く誓った。

7月27日？

「ってオイ、違うだろう」

言っている傍からノリツッコミをしてしまっている俺であるが、そこは華麗にスルーして欲しい。

問題なのは、この謎の物体の正体だ。

本当にこれは一体全体何なのか？

俺の予想通り、これは宝石の類なのか？

宝石の類なら、これは質屋や宝石店で売れるのだろうか――って違う、そうじゃなくて。

「……何なんだろうな、これ」

宝石――と、一概に思おうと思えば、俺はその物体を宝石と認識する事が出来ただろう。

――しかし。

何かが、違う気がしたのだ。

どうしてそう思ったのかは解らない――どうしてそう言い切れたのか、その自信がどこから来たものかも解らない。

――ただ。

その白い何かの欠片は――“宝石”ではない。

何故か、俺はそう思う事が出来た。

誰かにこれが何なのかと問われれば、正体は解らなくとも、とりあえず“宝石ではない”――と俺は答える事が出来ただろう。

――そして。

ピンポーン、と。

不意に家のインターホンが鳴り響いたのだ。

「あっ、ハーイ」

俺はそのインターホンに――つい、いつものように応対してしまった。

どうして、もう少し細かく考えなかったのか。

この謎の物体を手に入れた直後にこの家を訪ねてくる者であるのにも関わらず。

――しかし。

インターホンが鳴るという事はつまり、この家に客人が訪れた事。

インターホンを“そういう風”に認識してしまっている俺は殆ど条件反射で立ち上がり、ベッドから下りて、部屋を出ると、一階へと

足を運んだ。

それから、俺は玄関に辿り着くと、扉の鍵を解除して。

「ハーイ、どちら様～？」

そう言いながら――俺は玄関扉を押し開ける。

玄関に射し込んでくる茜色の光。

扉の向こう側――我が真之乃家の玄関には変わった客人――もとい、少女の姿があった。

背丈は俺と同じくらいで、紅のライダースーツのようなぴっちりとしたものを身に纏っていた。

肩や膝、そして手首に装着しているのは何かの防具だろうか――何か見慣れない機械のようなものにも見えるが。

――そして。

その格好こそ珍しかったが――俺の目を引いたのはその少女の“髪の色”。

少女の髪の色は金色、だった。

真っ直ぐに切り揃えられた前髪、後ろ髪は二つに分けて結ばれている――いわゆる、ツインテールというヤツだろう。

「……」

俺は目の前に現れたその少女に言葉を無くす。

それから、対する少女は俺の姿を見てニッと笑みを見せると。

こう言った。

「……あなた、真之乃秀よね――」

その少女の言葉は最後まで俺の耳には届かなかった。

何故なら、俺が玄関扉を勢い良く閉めたからだ。

それならば、何故扉を閉めたのか――そう問われてみるとこれと言った理由は浮かんで来ない。

強いて理由を挙げるとするなら――そうだな、本能的なもの？

だって、よく考えてみろよ。

突然目の前に現れた不思議な雰囲気を漂わせる少女がどういう訳か俺の名前を知っているんだぜ？

もう本能的に閉め出すしかないだろうよ。

嫌な予感しかしねーよ。

「……さて、と……今日の晩御飯は何にするかなぁー」

「ってちょっと！　何で閉め出すのよ！　意味解んない！」

俺の後ろで扉が開く音が聞こえたと思えば、それとほぼ同時に先ほどの金髪の少女のものと思われる怒声が飛んできた。

俺は憂鬱な気分で後ろを振り返る。

やはり、先ほどの金髪の少女は有ろう事か家の玄関扉を勝手に開けて玄関に足を踏み入れていた。

「オイコラ、お前」

「お前って呼ばないで！　ちゃんと名前で呼んでよ！」

「いや、俺お前の名前知らないし」

「フンッ！　私だってあなたなんかに教える名前なんか持ち合わせていないわよ！」

「お前、言葉が支離滅裂になってるぞ！？」

俺に名前を呼ばたいのか、それとも呼ばせたくないのか、どっちなんだよ。

「いや、それ以前に、何でお前人の家に勝手に入って来てるんだ。お前はさっき門前払いをしたはずだろうが」

「ていうか、それ以前にどうして私の門前払いしたのか、理由を聞かせて貰いましょうか！」

「怪しかったから、以上」

「理由が簡易過ぎる！　ていうか、一目見ただけで私が怪しい人物なのかどうか見抜ける訳がないでしょ！　常識的に考えて！」

「解るよ、解るに決まってんだろ。突然現れた見知らぬ金髪の女性が俺の名前を何故か知っていた、これだけでお前は十分に、いや、十二分に怪しい奴だよ」

「解らないじゃない！　ただ単にあなたの事を好き好んで日々ストーキングしている可愛い女の子かもしれないじゃない！」

「ただのストーカーじゃねーか！」

「誰がストーカーよ！」

「いや、お前が言ったんだろ！？」

何だよ、こいつ……超遣り辛いんだが。

「それで、お前の用件は何だよ。何の為にここに来たんだ。まさかガチでストーカーじゃないだろうな」

「自惚（うぬぼ）れてんじゃないわよ。あなた、まさか自分がストーカーされるようなモテモテな人だって誤認しているんじゃないでしょうね」

「……」

明らかに罵られた訳だが――何だろう。

返す言葉が見付からなかった。

というより、何だか、穴があったら入りたい気分に途轍(とてつ)もなく襲われた。

「……最後に確認を取るけど、アンタが真之乃秀――で、良いのよね？」

「ああ、そうだけど……お前は？」

「私の名前は――ウリアール＝ブレイザー。あなたに会いに来たの」

「俺に会いに……？　何だ、告白でもしに来たのか？」

「あなた、次に話を逸らしたら殺してやるからね」

「……」

何か、物凄い形相で凄まじい脅し文句を言われた。

冗談だったのに……。

「……俺に会いに来たって、用件は何だよ」

「……あなたを“護る”為よ、真之乃秀」

「俺を護る――って、一体何から？」

「私達の、敵から」

「俺達の……敵？」

「ええ、そう」と金髪の少女――ウリアール＝ブレイザーは頷いて。

俺に対してこんなトンデモ発言を放ったのだった。

「私はあなたを護る為に未来からやってきた『上級魔術師（トップソーサレス）』――魔法少女よ」

上級魔術師

時計の秒針が時を刻む音が一定のリズムで部屋に響く。

俺は腕組みをした状態で部屋の机の椅子に堂々とした姿で座っていた。

「……もうそろそろか」

俺は部屋の時計を見上げて呟く。

あと１０秒、あと7秒、あと3秒、あと1秒――。

「よしっ、完成だ！」

午後7時３８分――俺は机の上のカップラーメンの蓋(ふた)を勢い良く開けた。

その瞬間、湯気と共に部屋をカレーの香ばしい匂いが包み込む。

ちなみに、例のカップラーメンのシリーズの中で俺が一番好きなのはカレーだ。

まぁ、だからこうして家の中にある数あるカップラーメンの中からカレーを選んでいるのだが。

「相変わらず美味そうだな……よし、いただきまーす」

俺は礼儀作法の一つである食事前の挨拶をすると夕飯であるカップ

ラーメンの容器を手に取る。
そして、箸で口にカレーに塗れた麺を加えるとそれを一気に啜って――。
すぐ左隣でベランダに通じている大窓が開く音が聞こえた。
「あら、良い匂いね」
「ブ――――――――ッ！」
俺は口に含んでいた麺をスープごと全て吹き出した。
「うわっ、ちょっと何やってんのよ！　汚いわね！」
「ゲホッ、ゲホッゲホッ……だ、誰のせいだと、思って、いるんだよ……！」
ていうか、それ以前に。
「ていうか……お前、どうやってベランダから入って来たんだ」
「さぁね。詳しい理屈は話さないけど、私が魔法少女だからじゃない？」
「まだ言ってんのかよ、お前それ……」
つい先ほども、俺はこの少女――ウリアール＝ブレイザーからそんなトンデモ発言を聞いていた。

有ろう事か、この少女は何の躊躇(ちゅうちょ)も無く自分の事を“未来からやってきた魔法少女”だと抜かしやがったのだ。

その時、俺はこう思った。

ああ、これは物凄く痛い奴が来たな、と。

だから、俺はこいつをとりあえずもう一度外に閉め出して、ちゃんと玄関に施錠して、夕飯を食べるべく部屋に戻って来ていたのだが――。

「ていうか、お前って言わないでよ、ちゃんと名前は教えたでしょ？」

「えーっと……ウリアーロ＝イレイザーだっけ？」

「ウリアール＝ブレイザー！　人の名前を間違えるなんてどういう事なのよ、あなた！」

「いや、だって、お前みたいな名前なんか今まで覚えた事も無いし……」

ていうか、それ以前に外国人の友人を持った事すら無い。

こいつを外国人の“友人”だと呼んでいいのかは――まだ、解らないけれど。

「何か、ややこしいんだよな、外国人の名前って……カタカナだし、パッとしないって言うか」

「あなた、今世界中の名前がカタカナ表記の人に喧嘩を売ったからね？」

「ていうか、実際ウリアーロ＝イレイザーの方がカッコ良くね？もういいだろ、ウリアーロ＝イレイザーで。いっその事、それに改名しろよ、ウリアーロ＝イレイザーに」

「何であなたの意見で勝手に私の名前を改名しないといけないのよこの屑が」

「屑？　お前今俺の事を屑って言ったか！」

「いいえ、言っていないわ、ゴミ屑の聞き間違いじゃない？」

「もっと酷くなってんじゃねーか！」

「ていうか、それを言うならあなたの名前だってややこしいじゃないの。真之乃秀……ああもう、何で“の”が苗字にそれも連結して二つも入っているのよ、殺すわよ」

「いや、先祖代々受け継がれてきた苗字に苛立ちを覚えて俺を殺そうとするな。それは色々と間違っているというか、根本的に何かが間違ってるから」

そもそも、殺人予告をする事自体が間違っているのだが。

「真之乃秀、真之乃秀、真之乃秀……ああもう、やっぱり言い辛いわ。ねぇ、苗字の“の”を1個少なくしてよ」

「知ってるか？　苗字と言うものはそんなに簡単に変えられるもの

じゃねーんだよ」

「良いじゃない、真乃秀の方が私的には結構カッコイイと思うわよ？」

「えっ、マジで？」

自分の苗字を否定される事は少し気に食わないけれど、何だろう、それでもカッコイイと言われる事は嬉しいと言うか、やぶさかではないと言うか、何と言うか。

「まぁ、カッコイイというのは嘘なんだけど」

「嘘だったのかよ！」

畜生！　人の心を弄（もてあそ）びやがって！

「鬼！　悪魔！　鬼畜！　人外！」

「ちょっ……な、何なのよ、急に！」

「今が青春の男子高校生の心を弄んだ罪だ！　この悪魔！」

「私は弄んでなんかいないわ。勝手に私に弄ばれたあなたが悪いのよ」

「自分の責任を被害者に押し付けるなんて最低だぞお前！」

「ていうか、もうあれね。真之乃なんて呼び難いから……あなたの事はこれから秀って呼ばせて貰うから」

「……」

さり気無く俺の事を呼び捨てにする事を決定しやがった……。

「さて、ところで秀」

「何だ」

「お腹が空いたわ。私にもそれ作ってよ」

「外で生ゴミでも漁(あさ)ってろ――って痛ってえ！」

脇腹に蹴りを食らった。

加害者の方は言うまでも無く、あいつだ。

上級魔術師？

「何しやがんだ！」

「何で私が生ゴミなんか漁らなきゃいけないのよ！　むしろ、秀がそれを私に譲渡して秀が生ゴミを漁りに行けば良いじゃないの！」

「お断りだね！　断固としてお断りだね！　せめてこれがシーフードだったらお前にやったかも知れんが、残念ながらこれはカレーだ！　カレーは断固として譲渡しないと俺はこの世に生を受けたその日に神に誓ったんだよ！」

「何よ、そのどうでもいい誓いは！」

「どうでもいいって言うな！　どうでもいいって！　いや、俺も半ばどうでもいいって思っているけれど、他人からどうでもいいって言われると何かイラッと来る！」

「秀もどうでもいいって思ってるんじゃないのよ！」

そんな時だった。

ぐうううううう……。

何か――音が聞こえて来た。

正確は、誰かの腹が鳴る音が。

無論、自分の腹が鳴った事くらい解る為、今の音は俺の腹のもので

はない。

――と、言う事は。

「……！」

――ていうか、そんな考えを巡らす前にウリアール＝ブレイザーが自分から赤面して自らの腹を両腕で抱き抱えるように隠していたので今の腹の音の犯人は一目瞭然だった。

「……はぁ」

「ちょっ、何ため息ついてるのよ！　い、今のはっ、そのっ、別にお腹が空いた訳じゃなくて、そんな訳じゃ、なくて、その……！」

「……解ったよ」

そう言って俺は立ち上がると部屋の扉を開ける。

「ちょっと、何が解って――ていうか、どこに行くつもりなのよ」

「……シーフード」

「……えっ？」

「シーフード、今から下で作って来るから。その間に、俺のカレー盗み食いするんじゃねーぞ」

俺はそれだけを言い残して部屋の扉を閉めようとして――。

「しゅ、秀！」

不意に部屋の中から聞こえて来たウリアール＝ブレイザーの声に手を止めた。

俺は部屋の中を振り返る。

そこには、先ほどの羞恥による赤面とは明らかに違う――頬を若干赤らめたウリアール＝ブレイザーの姿があって。

「……そ、その」

そして、彼女はボソボソと呟くような声でこう言うのだった。

「あ……ありがと、ね？」

「……どういたしまして」

――そいつのお礼を初めて聞けたのが嬉しかったのだろうか。

そう言って、扉を閉める俺の顔にはほんの少しの笑みが浮かんでいた。

◆◆◆

シーフードのカップラーメンを作った俺はついでにグラスにお茶も注いでトレイにそれらを乗せて部屋まで運んだ。

部屋の扉を開けると同時に、中でウリアール＝ブレイザーが立ち上がるのが見えた。

そこまで腹が減っているという事なのだろうか。

まぁ……あれほど大音量で腹の虫が鳴くのを聞いてしまえばそんな事は一目瞭然、と言うよりも、一耳瞭然なのだろうけれど。

「ほらよ、作って来てやったぞ、有り難く食べろ」

「あ、ありがと……秀」

「どういたしまして」

俺は適当に彼女に言葉を返しながら机の上に運んで来たトレイを置く。

そこで、俺はとある一つの小さな問題に気付いた。

しまった……彼女にどこで食事をさせるべきか。

「……」

少し考えた後、俺は先ほどまで食べていたカレーのカップラーメンの容器と箸を持ってベッドの上に腰を下ろした。

「えっ、そこで食べないの？」

「明らかに不法侵入してきているお前に席を譲るのも何かアレだけど……それ以前に、お前は女子だからな。男尊女卑ならぬ、女尊男

卑じゃないが、こういう時は女子を優先させるべきだろ」

さり気無く、今日霧歌から学んだ言葉を使っている俺なのであった。

大丈夫、こいつは霧歌の存在までは知らないだろうから、俺が霧歌から学んだ言葉をパクっている事には気付かないはずだ。

「そ、そっか……ふーん」

ウリアール＝ブレイザーの方はまた若干頬を赤らめて――俺に背を向けて、代わりに勉強机と向き合った。

「い、意外と……良い所あるのね、秀って」

「意外で悪かったな」

「……ね、ねぇ」

「何だよ、早く食べないとラーメン伸びるぞ」

「秀は……どうして、私の事を名前で呼んでくれないの？」

「さっきも言ったけど、お前が不法侵入者である事も理由の一つだし、お前には失礼かも知れないが……アレだよ、長いんだよな、お前の名前」

「それなら……ウリアで良いわ」

「えっ？」

「う、ウリア……ウリアで、いいから」

「名前で、呼んでよ……」とウリアール＝ブレイザーはこちらに背を向けたままそう頼み込んで来た。

「……」

そして、俺はと言えば、そんな彼女の背中を見上げて――まぁ、特にその頼みに断る理由も見付からなかったので。

「別に良いけど……それじゃあ、ウリアって、今度からそう呼べばいいんだな？」

「……呼んで、くれるの？」

「お前が呼べって言うんだ。仕方ないだろ」

すると、今度はウリアール＝ブレイザー、もとい、ウリアは嬉しそうな満面の笑みを浮かべてこちらを振り返って。

「秀って、やっぱり意外と良い所あるのね！」

――そう、言った。

「だから、“意外と”は余計だって言ってるだろ。お前は――」

「ウ・リ・ア！」

「――ウリアは、素直に人を褒めるという事を知らねーのか」

「知らない」

「一言であっさりと答えてんじゃねえ」

「ていうか、秀。何かトレイの上にお箸とフォークが乗ってるんだけど……何で？」

「いや、お前見た目外国人っぽかったから、念には念を入れてフォークも持って来てみた」

「フンッ、残念だったわね。私にはフォークなんて要らないのよ」

「そうか。それじゃあ、お前は箸を使えるという事なんだな？」

「使えないわ」

「使えないのかよ！　何なんだよそのオチは！」

「という訳で、まぁ、フォークを持って来てくれたのには素直に感謝するわ。ありがとね、秀」

「最初から箸は使えないって言えばいいのに……」

ブツブツとそう言いながら俺はすっかり伸び切ってしまっているカレーのスープに浸かった麺を箸で持ち上げる。

「……んっ！　これ美味しい！　ねぇ、これ美味しいわよ！　秀、ねぇ！」

「解った、解ったから。美味しいのは解ったから黙って食え」

「えーっと、これ“しーふーどー”って、言うのよね？　美味しい

わねー、これ。明日もこれを私に譲渡する事を要求するわ、秀」

「要求するわ、じゃねえ。お前――」

「だから、ウーリーア！」

「――ウリア、お前は一体いつまでこの家に居座るつもりなんだよ」

「決まってるでしょ？　あなたを敵から完全に護り切るまでずーっとよ」

「だから敵って何なんだよ……」

訳が解らん。

何言ってんだこいつは。

あれだろうか……いわゆる、“設定”というヤツなのだろうか。中二病に掛かっている奴が良く言うと言われている。

まぁ、俺も中二病に掛かっている奴と面と向かって出会った訳では無いから良く知らないんだけど。

そして、こいつが――ウリアが、中二病だという可能性も有り得る訳だし。

ひょっとしたら、こいつが初めて面と向かって出会う中二病に掛かっている奴になるかも知れないのかぁ……。

……いや、別に嬉しくとも何ともないけれど。

「……それで？　お前は一体どんな脅威から俺の身を護ってくれるんだ？」

「『混合機関（デュアルシステム）　科学発展側（サイエンスサイド）』」

「いや、そんな急に専門用語を使われても一寸たりとも理解が及ばないんだが」

「まぁ、秀みたいな頭の中に脳味噌が入っているかどうかも怪しい人の為に簡単に言わせて貰うと」

「簡易的な説明を行ってくれるのは助かるが、どう考えてもその前に一言余計な文章が添付されているのは気のせいか？」

「魔術と科学の二つの文明を合わせた後に、科学側へと更に発展を遂げた機関って事よ」

「……なぁ、それって簡易的な説明なんだよな？」

「えっ……まさか解らないの？　今の説明で？」

「ガチで引いてんじゃねーよ！　ていうか、今の説明でお前の話を理解できる奴が居たらここに連れて来て欲しいわ！」

「はぁ……これは、私が来た世界の事から話す必要がありそうね」

「ああ、是非ともそうしてくれ」

とは言うものの、俺はウリアの話を信じるつもりは毛頭も無いのだ

が。

だって、どうせ全てが“設定”だろ？

どんなに巧みで壮大で細かな設定を今から語るのか知らないが――

まぁ、何にしても、俺はこいつの話を信じるつもりは無い。

何故なら――有り得ないからだ。

未来だとか、魔術だとか。

そんなものはこの世に存在しないはずのものだからだ。

人間は実際に目の当たりにしたものしか心の底から信じる事は出来ない。

幽霊とか、ＵＭＡとか、ＵＦＯとか――それらも本当に信じているとか言う人は居るけれど。

その人でさえもきっとそれらの存在を心の底から認められている訳では無いのだ。

何故なら――実際に目の当たりにした事が無いから。

だから、俺もウリアが言う未来や魔術の事は一切信じない。

薄情と思われるかもしれないが――人間とはそういうものである。

事件を起こした際に、物的証拠で有罪か無罪かが決まる。

きっと、それと同じ事だろうから。

だから、俺は“そういう志”の下に――ウリアの話をラーメンを啜りながら聞き始めた。

「――私はね？　２０５６年からやってきたの」

「２０５６年って……えっと、今が２０１１年だから、４５年後の世界か」

「そうね、４５年後の世界」

「４５年も――半世紀近く経つと、やっぱり世界も色々と変わっているのか？」

「ええ、変わってしまっているわよ、色々と」

「例えば……どんな所が？」

「世界そのものが変わってしまったわ。まず、２０２３年に日本の首都圏で大地震が起こったの」

そう言えば――そんな話を俺は聞いた事がある。

今から３０年以内に首都圏で大地震が起きる確率が――えっと、何パーセントだっけ？

とにかく、ほぼ１００パーセントの確率で起きる、らしい。

これはあくまで予想であり、推測であり、噂なのだが。

「その大地震で首都圏をやられた日本は土地的にも国家的にも壊滅を余儀なくされたわ。そして、日本は藁(わら)をも縋(すが)る思いで外国に――アメリカに助けを求めた」

「……その結果は？」

「まぁ、アメリカも鬼じゃないからね。日本が伸ばしてきた手をちゃんと握り返してくれたわ。えっと、今のアメリカの大統領は……？」

「オバマだよ、バラク・オバマ」

「ああ、そうそう、そのオバマさんは本当に良い人よね」

どうでもいいけどオバマさんって。

お前はアメリカ大統領の友達か何かなのか。

まぁ、俺も呼び捨てにしているけれど。

「……って事は、２０２３年――だったか？　その今から１２年後の未来には、まだオバマは大統領としてご健在なのか」

「ええ、そうね。その年――２０２３年にはオバマさんは命を落としてしまうんだけど」

「えっ……何だよ、まさか暗殺とか？」

俺の問いかけに――ウリアは無言で首を左右に振って。

「――ハリケーンよ」

と、答えた。

「ワシントンがかつてない規模の大型ハリケーンに飲み込まれたの。ワシントンにはホワイトハウスがあるから――いや、“あったから”、オバマさんはそれに飲み込まれて死亡したわ」

「マジか……それは、その、大変だな」

「他人事みたいに言っているけれど、そのハリケーンの被害は秀達――日本人にも襲い掛かったのよ」

「えっ、どうしてだよ」

「その大型ハリケーンはね、アメリカ国土の殆どを横断して回ったのよ……だから、首都圏の大地震で一時的に避難していた日本人もそのハリケーンに襲われて殆どの人が亡くなったわ」

「そして」とウリアは真剣な表情のまま続ける。

「事態はハリケーンだけじゃ終わらなかった――今度は地球上のあらゆる国で地震や竜巻、様々な自然災害が起こったのよ」

「……それじゃあ、世界は」

「だから言ったでしょう？　世界そのものが変わってしまったって。自然災害は２０２３年から２０２５年の２年間に渡って世界中で連

続的に発生し続けたわ」

「……」

いつの間にか――俺はウリアの語りに思わずラーメンを食べる手も止めて真剣に聞き入っていた。

どうしてだろう。

ウリアの語りは全て――“設定”のはずなのに。

「それから、２０２６年――世界の人口も現在の3分の1くらいまで減ってしまったそんな世界で、世界中のあらゆる国々が同盟を結ぶの」

皆で生き残る為の同盟――とウリアは言う。

「自然災害によって、世界は人だけでは無く資源や食糧も失ってしまっていたから……まぁ、同盟は妥当な手段だと“思われていた”わ」

「……待て、“思われていた”？」

「そう……同盟を組んだ事が間違いだったの。結び合った契約は意外と簡単に解けてしまうものなのよ」

「それは……一体、どういう……？」

「今の戦争や紛争が行われている地域の事を考えればすぐに解るはずよ」

「……ああ」

「そういう事か」と俺は残念そうに呟く。

何となく解った気がした。

幾つもの自然災害が引っ切り無しに襲い掛かって来ていた非日常を切り抜けた後に。

そんな恐怖の日々を過ごした後に。

人々の精神が――まともなはずがない。

自然災害によって愛する人を失った人も居ただろう。

自然災害によってロクに食べ物や飲み物を供給できない日々を過ごした人も居ただろう。

言うなれば――戦争に負けた後の国、だろうか。

そんな荒廃して荒れ果てている国の中で真っ先に起こる事などたかが知れている。

「……紛争が、起こったんだな？」

俺の問いかけに――ウリアは無言で一度頷いた。

「幾ら同盟を結んだ所で、世界中の資源や食糧の数は決まっている――だから、人々は数少ないそれらを求めて、紛争を起こし、それ

はやがて戦争へと繋がり、同盟を組んだはずの世界はやがて2つに分裂したわ」

「そんな時よ」とウリアは俺を真っ直ぐに見つめてこう言った。

「あなたが――秀が、この世に本当の奇跡を齎（もたら）したのは」

「……俺が、世界に、奇跡を？」

「秀は――２０３０年に、かつて地球上で栄えていた文明の一つ――『魔術』を復活させたの」

「俺が魔術を……復活？　そんな馬鹿な、俺は単なる平凡な一人の人間だぞ？　ていうか、２０３０年まで自然災害から生き抜いている事自体も奇跡なのに……そんな俺が、魔術を復活させた、なんて、有り得る訳が無い」

「……ねぇ、秀？」

そして――ウリアが次に放った言葉に俺は驚愕して目を見開く事になる。

「今日――“白い宝石のような何かの欠片”を拾わなかった？」

「……！」

それを――“その事”を聞かれた瞬間、俺は余りに驚き過ぎて一瞬何の言葉も出せなかった。

「……ウリア、お前どうしてその事を……知って……！」

「……やっぱり、拾ったのね」

「それは鍵よ」とウリアは言った。

「いや、正確には鍵ではないのだけれど――実際は、その欠片は鍵のような役割を果たしたわ。秀の持っているその欠片がかつて栄えていた魔術の文明と共鳴したの」

「それで……この世に再び、魔術の文明が復活、したのか？」

「そう。秀の手によって魔術は完全にこの世に復活した。火・水・風・雷――様々な力を無限に創造する事が出来るその文明を世界に復活させた事で、戦争は治まるかと思われていたの」

「……でも、違ったんだな」

「……さっき、同盟を結んでいた世界が２つに分裂した――って、言ったわよね？」

「ああ」

「世界中で復活した魔術的な文明はすぐさまその分裂した2つの世界のそれぞれで活用されたの――“兵器”として」

「それで、戦争が更に激化したのか」

「そういう事よ。そして、その分裂した2つの世界――ううん、2つのグループにはそれぞれ名前が付いたわ。科学と魔術を融合させて、更に魔術的に発展したグループ――『混合機関（デュアルシステム）　魔術発展側（マジックサイド）』、そして、こっちはさっきも言ったけれど、科学の魔術を融合させて、更に科学的に発展したグループ――『混合機関　科学発展側』」

「それで、お前の話によると俺は後者の――その、科学側に命を狙われているみたいだけど。どうして、俺はそいつらに命を狙われているんだ？」

「元々、グループ同士の戦争で優勢だったのはその科学側だったのよ。科学的にもそっちのグループの方が技術力は上だったから。――でも、そんな時に」

「俺が魔術を復活させてしまった――って訳か」

「そういう事に……なる、のかな」

「という事は……お前は、その魔術側の人間、という事になるのか」

しかし、俺のその問いかけにウリアは意外にも首を横に振った。

「えっ……それじゃあ、お前は科学側の人間なのか？」

「ううん、それも違う……ていうか、まぁ、私はどちらかと言えば魔術側の人間だけど、私はどちら側の意思でも動いていないの」

「私を動かしているのは」とウリアは俺を微笑と共に見つめて言った。

「あなた――２０５６年の秀よ」

「……未来の、俺？」

「私は、未来の秀に頼まれて、２０５６年から過去の秀――つまり、現代のあなたを護る為に過去にやってきたの」

「……そう、だったのか」

俺はそう呟くと既にもう完璧に伸び切ってしまって――食べられない事は無いのだが、色々と手遅れなカレーのカップラーメンを床に置くとベッドから立ち上がる。

そして、机の引き出しの中から“それ”を――白い宝石のような何かの欠片を取り出した。

「これが……遠い未来、魔術を復活させる鍵になるのか」

「そうらしいわね。私は初めて見たけれど」

「えっ？」

俺はそのウリアの発言に少し疑問を持った。

「初めて見たって……未来の俺はウリアにこれを見せなかったのか？」

「見せる以前に……私と未来の秀があったのは、ほんの一瞬だけだから」

「……お前、よくそれで俺の為に過去までやって来れたよな」

「わ、私にも色々あるのよ、色々ね！」

どんな色々があればそこまで知らない赤の他人の為にこんな過去までやって来れると言うんだ。

ていうか、もしもそれが本当なら、意外とこいつ心が寛容なのかも知れなかった。

意外と、だが。

ここ重要ね。

「……ていうか、少し皮肉な話をしてもいいか、ウリア」

「……皮肉な話？」

「ちょっと考えたんだけど……今のお前の話が本当ならさ」

「それって」と俺は自嘲めいた笑みと共にその欠片を見下ろして言う。

「ここで俺とこの欠片がこの世から消えれば――そんな残酷な未来は訪れないんじゃないか？」

「……はぁ」

ため息をつかれた。

ウリアから呆れられたようにため息をつかれた。

あれ、どうしてだろう。今の俺結構真剣な雰囲気と口調で言ったつもりだったのに。

「オイ、ため息をつくとは一体全体どういう事だ」

「やっぱり……秀は秀、よね」

「あ？」

「未来の――２０５６年の秀が言っていたのよ。２０１１年の俺は自己犠牲的な事を言うかも知れないけど見捨てないでやってくれ、ってね」

「……」

……流石は俺。

当たり前だが、４５年経ってもどうやら俺は俺のようだった。

俺の事をよく熟知していらっしゃる。

まぁ、他でも無い俺自身の事だから、それは当たり前なのだろうけど。

上級魔術師？

「……そして、未来の秀からは、もう一つだけ伝言があるの」

「……何だ？」

「世界を救って欲しい、だって」

「……」

「この世界の俺には無理だったけど、４５年前の俺なら――世界を救い、未来を変えられるはずだって」

「……」

そのウリアの言葉に――正確には、未来の俺からの伝言に俺は再度嘲笑する。

オイオイオイオイオイオイ。

未来の俺……何を言い出すかと思えば。

お前が俺なら、俺の事をちゃんと解っているはずだろう？

俺は単なる平凡な一般人だ。

そこら辺を適当に歩ければ幾らでも居るような。

映画やドラマで映像の端から端を歩いて消えて行くエキストラみた

いな。

俺の人生においての立ち位置は――そんなものなんだよ。

それなのに――何だって？

世界を救え、だって？

馬鹿げている――ウリアの作り話も、全てが馬鹿げている。

ていうか、それ以前にウリアが今語った話は全て出鱈目（でたらめ）なのだ。

出鱈目で、単なる設定で、妄想で、想像で、幻想で――作り話。

平たく言えば、嘘だ。

そんな作り話に登場した未来の俺からの伝言に頭を悩ませるなんて――。

それこそ、馬鹿げているではないか。

「……今話した全ての事を、今ここで信じてくれとは言わないわ」

「でもね、秀」とウリアは言う。

「あなたには、どうせこの先、嫌でも今の話を信じなければならなくなる時が来るから……事前に、私がここにやってきた事情だけでも話しておきたかったの」

「ああ……お気遣いありがとな、ウリア。……でも」

……でも。

どんなに気を遣われたって、どんな事情を聞いていたって。

俺は……俺には。

「俺には……世界を救うなんて、未来を変えるなんて、そんな大それた役目を担うだけの器は無いぜ？　精々、受け止められるのは今の自分の人生くらいだからな。世界がどうとか、未来がどうとか言う前に、俺は今生きている人生を生き抜くだけでも精一杯なんだから」

「……そうね、そうかもしれない」

「けれど」と。

ウリアは椅子から立ち上がると――俺の前に移動してきて笑みを見せる。

その笑みは理屈も無く心が何だか落ち着くような――そんな笑顔で。

「だからこそ……私が、秀が受け止めきれないものを代わりに受け止める為に、未来からやってきたのよ？」

「……ウリア――」

俺がウリアの名前を呟いた時だった。

不意に、ウリアが何かの気配を察知したように急に目の色を変えて

ベランダに通じる大窓を――その向こう側に広がる景色を振り返った。

外にはいつの間にか夜の帳（とばり）が下りていた。

まぁ、夕飯を食べ始めた時点で既に時刻は午後8時を回っていたから――それは当然の事だろう。

「……オイ、ウリア、どうかしたのか？」

「……秀」

「ちょっと来て」と俺はウリアから手を掴まれると引っ張られる形でベランダへと強制的に出させられた。

「オイ……本当にどうしたんだよ」

俺はウリアに問いかける――しかし、ウリアは何も無い夜空を頻（しき）りに見渡していて俺の問いかけには何も答えない。

本当に何があったんだ……。

俺がうんざりした心境と共に心の内でそんな事を呟いた時だった。

不意に――本当に何の前触れも、音も、相図も無く。

俺の手の中で――その欠片が白く発光したのだ。

「な、何だよ、これ……！」

突如、俺の持つペンの形状をした欠片から放たれた白い光に――流石に恐怖はしなかったが、純粋に俺は驚いた。

しかし、俺の隣に居るウリアはどこと無く冷静な口調で。

「やっぱり……！」

納得したように呟いて――再度夜空を振り仰いだ。

俺も訳の解らないままウリアに続いて夜空を見上げる。

今夜は雲一つない快晴だった。

いや、夜なので快晴という言葉が正しいのかどうか解らないが――とりあえず、雲一つない、満天の星と綺麗な月の拝める申し分無い夜空だった。

――そして。

そんな夜空が――景色が不意に“歪んだ”。

「えっ……」

無論、歪み始めた景色に唖然とした声を上げたのは俺だ。

歪みを帯びた景色は更に歪みを重ねて、捻れて渦を巻き――。
最終的に夜空よりも黒い漆黒の穴を創造した。

「……来る」

そして、俺は漆黒の穴を仰いだままそう呟いたウリアの声を聞き逃さなかった。

「えっ、来るって、一体何がだよ」

俺のその問いかけにウリアは勇敢にも――いや、勇敢とは呼べないかも知れないが――その場で跳び上がってベランダの手摺の上に着地した。

「秀！　掴まって！」

俺はウリアから差し出された手を言われるがままに掴む。

すると、信じられない話だがウリアは俺の体を片腕で軽々と持ち上げた。

それが魔術の力なのか――それとも手首の辺りに装着されている機械の仕業なのか。

それは解らなかったが。

とにかく、ウリアは俺の体をまるで発泡スチロールのように軽々と持ち上げるとそのまま自身の体に押し付けるようにして抱き締めた。

「オ、オイ、ちょっ、お前……！」

まぁ、そのウリアの行動によって俺の顔は必然的にライダースーツのようなぴっちりとした服装によって強調されたウリアの谷間に埋まる訳で。

ていうか、こいつ意外と胸大きいんだな。

スーツで強調されているからだろうか。

下手すると霧歌クラスのバストを持ち合わせているのかもしれない。

霧歌もアレで意外と大きいからなぁ――。

「秀！」

「は、ハイッ！」

不意にウリアから名前を呼ばれた俺は邪な想像がウリアに伝達してしまったのかと焦って思わず裏返った声を発してしまった。

「この近くに、どこか……えっと、広い場所はある！？」

「何だよ、いきなり！　つーか、何そのアバウトな質問は！」

「いいから！　どこでもいいから答えて！　出来るだけ人が居ない所！」

「そ、それなら……確か、近くに海岸があったはずだ！」

「海岸――海の事ね、解った！」

どうして、ウリアが今そんな質問を俺にしてきたのか。

そんな疑問を考える余裕も無く――次の現象が起こった。

何と、ウリアの足元に赤く光るいわゆる“魔方陣”のようなものが出現したからだ。

そして、きっとその魔方陣の効力なのだろう。

次の瞬間、ウリアの背中から深紅の炎の翼が生えて来た。

「ウリア……お前……！」

「しっかり掴まっててね、秀！」

ウリアはその炎の翼を使ってベランダから空中へと飛び上がる。

それから、俺を抱えたウリアが屋根よりも高い位置に辿り着いた所で。

俺は――見た。

夜空に空いた漆黒の穴から出て来る――その“巨大な生物”を。

しかし、俺はその謎の生物の姿をハッキリと捉える事は出来なかった。

何故なら、その時には既にウリアが“飛行”を始めていたからだ。

一口に飛行とは言っても、ハングライダーとかパラグライダーとかそんな娯楽的なものでは決して無かった。

飛行中――周囲の景色が“歪んで見えた”。

それほどの速度で俺達は飛んだという事なのだろう。

人間の体は音速には耐え切れないという説があったような気もするが――俺の体は大丈夫なのだろうか？

しかし、そんな心配は無用だったようで。

俺がそんな疑問を感じ始めた頃には俺達は海岸の上空へと到着していた。

ウリアは深紅の炎の翼を羽ばたかせ――段々と降下していき、俺を砂浜の上に下ろした。

俺の顔がウリアの胸の谷間から離れる。

正直、もう少しあのまま飛行を続けていたかった――とは決して言わない。

広い場所と言われてハワイ沖を指定すれば良かったとも決して思っていないから。

変な下心は無いから。だって俺は紳士だもの。

ジェントルマンだもの。

「……大丈夫、心配しないで、秀」

そして、ウリアはそう言いながら――砂浜に俺を残して一人ゆっくりと上昇を開始した。

炎の翼を携えて夜空へと吸い込まれるようにして昇って行くウリアの姿は。

「私が……秀の事を、護るから」

まるで――天使のように思えた。

しかし、俺はそんな錯覚――と言うよりも、幻覚から一気に解き放たれる。

ウリアが飛んでいる高度よりも遥か上空を猛スピードで巨大な“何か”が飛び去った。

その巨大な“何か”は海上で旋回するとまたこちらに戻って来た。

かなりの速度で飛行しているのだろう――その巨大な“何か”が通った後、少し遅れて海面がまるで爆発したかのように水飛沫を上げた。

そして、その巨大な“何か”は俺とウリアの目の前で急停止する。

その巨大な“何か”に纏わり付いていたのだろう――それが停止した瞬間、凄まじい突風がこちらに向かって襲い掛かってきた。

舞い上がる砂塵――俺は目を瞑ると同時に片腕を文字通り目の前に持って来た。

段々と消滅していく砂塵。

完全にそれが消えた頃を見計らって俺は目を開けると――上空に佇んでいる“それ”を仰いだ。

“それ”の体は――“その生物”の体は全てが金属で構成されているようだった。

月明かりを反射している所を見るとおそらくはそうなのだろう。

そして――俺の予想では“その生物”は“機械”だ。

それならば、それは“生物”ではなく“機械”じゃないか――そう思うかもしれない。

だが、実際目の当たりにするとその見解はやはり“生物”に落ち着くだろう。

その“機械”染みた“生物”は――途轍もなく巨大な鳥の形をしていたのだから。

動きもかなりリアル――まるで、“本物の鳥のように”動いている。

空中で停止しておく為に一定の間隔で羽ばたく灰色の鉄製の翼。

同じく鉄製の尾も翼が動くリズムに合わせて左右に揺れている。

ライトでも仕込んであるのだろうか――本来、目が有るべき場所では黄色い光があった。

「……私が相手よ」

そう言って、ウリアはその鉄製の鳥の顔と同じ高さまで飛翔する。

「秀には……指一本触れさせない」

そして――そのウリアの挑発に対抗するように。

その鉄製の鳥は――鳴いた。

鳴いたとは言っても、凄まじいノイズを放っただけなのだが。

思わず耳を押さえたくなるようなそんなけたたましいノイズを。

その空間をも歪ましてしまいそうなノイズが解き放たれた瞬間、ウリアは凄まじい速度で海上へと移動し始めた。

その動きを目で――正確には黄色いライトで追う鉄製の鳥。

海上の上空に辿り着いたウリアは停止して鉄製の鳥と向き合う。

――その直後だった。

不意に鉄製の鳥がその巨大な口を開けて――そして。

どこからとも無く一瞬で集約させた光の束を凝縮させた光の弾をウリア目掛けて解き放った。

しかし、挑発するだけあってウリアもその弾に易々と当たるつもりは毛頭も無いらしい。

ウリアは光速で――冗談抜きで光の速度で迫ってきたその弾をいとも容易く躱す。

標的を失った光の弾は水平線上の彼方まで飛んで行き――。

海の果てで大爆発を起こした。

海の果てが一瞬だけ昼間になった――それほどの光が遥か水平線上の彼方で解き放たれたのだ。

そして、その光よりもワンテンポ遅れて台風の時でもここまで酷くは無いと思える突風が俺の立っている砂浜を襲った。

あれほどの距離からここまでの威力の風が吹き荒れるくらいである。

あの爆発の衝撃で津波が押し寄せて来る可能性もありそうだ。

それから、俺はウリアと鉄製の鳥との戦闘へと視線を向ける。

しかし、向けられたのは視線だけで実際には速過ぎて殆ど視界に捉える事は出来なかった。

時折、どちらかが更なる加速をする為に空中で一旦停止するくらいで。

それ以外はウリアも鉄製の鳥も、俺はその姿を捉える事すら出来なかったのである。

どちらが優勢なのだろう。

俺がそんな事を思った時――光速の戦闘が繰り広げられている上空で何かオレンジ色の光が一瞬だけ光った。

――そして。

おそらく、あの鉄製の鳥の片翼と思われる鉄の塊が砂浜に落下して

きた。

「ちょっ……うおおおおおおおっ！？」

俺は間一髪、砂浜に飛び込む形で落下してきたその巨大な翼を避け切る事が出来た。

「あ、危ねえ……死ぬかと、思った……！」

ていうか……うん、俺を助けてくれるのは物凄く嬉しいのだけれど。

ウリア、翼を落とす場所をもう少し考えて下さい、マジで。

そんな地味に九死に一生を得た俺はそれを教訓に砂浜の端の方へと急いで移動する。

そして、その俺の行動はどうやら正解だったらしく。

俺が移動した直後にすぐさまもう片方の鉄の翼が落下してきた。

その翼も轟音を発しながら落下した際に地震並みの揺れを大地に齎した。

「……」

ていうか、両方の翼を？がれてしまったら流石に飛べないのではないか。

俺がそんな素朴な疑問と共に夜空を見上げた瞬間――本当にその瞬間。

今度は本体が砂浜に落下してきた。

それと共に翼とは比べものにならないほどの轟音と、揺れと、砂塵が俺に襲い掛かる。

舞い上がった砂塵の向こう側に――俺はオレンジ色の光を捉えた。

そして、その砂塵が晴れて行く中で俺はその光の正体が鉄製の鳥の本体の上に仁王立ちするウリアが持つ炎の剣だと気付く。

ウリアはその炎の剣の切先を鉄製の鳥に向けたまま――最期にこう言った。

「――バイバイ」

ウリアが相手へと贈ったその言葉は単なる別れの挨拶だったのか、それとも単なる皮肉の言葉だったのか。

――何にせよ。

ウリアはそう言って炎の剣を鉄製の鳥の胸に深々と突き刺した。

魔導獣機？

断末魔めいた凄まじいノイズをその口から発する鉄製の鳥。

すると、どういう理屈か、鉄製の鳥のその全てが一瞬にして劫火に呑まれた。

鉄製の鳥の顔も、胴体も、尾も、？がれた翼でさえも。

その全てが――一瞬にして炎に包まれて。

消失――いや、焼失、した。

跡に残ったのは深紅の炎の翼を背に生やしたウリアだけだった。

――それは一瞬の戦いだった。

呆気無いとも言って良い。

けれど――俺にとって、ウリアにとって今の戦闘は命を懸けた戦闘なのだ。

その戦いに何か“別のもの”を求める方が間違っているのだろう。

俺がそんな事を思っているとウリアがこちらに歩いて来るのが見えた。

ウリアの手に握られていたオレンジ色の光を放つ炎の剣はこちらに向かって来る途中にただの炎となって空中に霧散した。

そして、俺の前にやってきたウリアは得意気な笑みと共に腕組みをしてこう言った。

「……何か言う事は？」

……そんなもの。

お前に今言うべき事なんて一つしか無い。

「……お前って、意外と胸デカいんだな」

「キーックッ！」

「痛ってえ！」

ウリアから蹴られた。

また脇腹を今度は全力で蹴られた。

ていうか、威力が強過ぎて俺はそのまま砂浜の彼方まで吹き飛ばされた。

「ぐ、ぐふっ……！」

俺は蹴られた脇腹の辺りを押さえながらその場に立ち上がる。

つーか、俺の脇腹ちゃんとご健在だよね？

蹴られた衝撃で抉（えぐ）られていないよね？

「秀――――っ！」

すると、５０メートルほど向こうから怒りに満ち溢れたウリアの声が飛んできた。

「こっちは決死の覚悟で秀の為に戦ったのに、戦闘後に私に掛ける言葉が私の胸の感想って一体全体どういう了見なのよ――――っ！」

「スマン！　お礼を言うべき場面はあそこだと思ったんだよ！」

「この変態！　バーカ！　秀みたいな変態はもうここから歩いて帰ればいいのよ！」

「えっ――あっ、オイ！　ちょっと待て！　ウリア！」

俺の呼び止める声も空しく――夜空の彼方へと消えて行く深紅の光。

つーか、ウリアの奴、マジで俺だけ置いて帰りやがった……。

「……口は災いの元、か」

今度から真剣な場面ではボケないようにしよう。

俺は先人達が遺してくれたその言葉の意味を噛み締めながら、自宅へと何とか辿り着く為に歩き出す。

ちなみに、この後俺はちゃんと家に帰り着く事になるのだが……。

５時間くらい掛かった。

マジで足が棒になるかと思った。

◆◆◆

翌朝――俺は携帯の画面に表示された『13：12』という時間に驚愕してベッドから跳び上がるように起床した。

「遅刻――ってああ、何だ、そう言えば今日から夏休みか」

7月28日。

“昨日の事”で――何かもう日付が1週間くらい過ぎてしまっているような気がする。

偶然拾った宝石のような白い何かの欠片。

突然この家を訪れた金髪碧眼のツインテールの少女。

その少女から聞かされたとんでもない未来の話。

突如、俺の前に現れた機械の怪物。

そして、それをいとも容易く――容易過ぎるほどにあっさりと倒して見せたウリア。

「昨日の事が全て……夢だったらいいんだろうけど」

そう言いながら、俺は何故かベッドの傍でうつ伏せに行き倒れている少女――ウリアを見下ろして現実逃避すら不可能な事に気付いた。

「……オーイ、そこの金髪の少女」

「……何よ、秀」

「お前、特徴の一つであるツインテールはどうした」

「それよりも今は聞くべき事があるでしょーが！」

ガバッと昨日の戦闘ではないが光の速度で起き上がったウリアは涙目で俺の眼前まで顔を近付けてきた。

「どうして！　私が！　ここで！　行き倒れて！　いるのかとか！」

「いや、それも気になったんだけどさ。それよりも俺はお前の髪型の方が気になったから」

「部屋の中でまでツインテールはしなくていいって思ったのよ！　ほら私は秀の質問に答えたわ！　だから昨日の“しーふーどー”を出しなさいよ！」

「待て、その等価交換はおかしいだろ」

ていうか、まず等価交換すら成立していない。

「解ったよ……とりあえず、腹が減ったって事で良いんだよな？」

「当たり前よ……だって秀、何か昼まで起きないんだもん、死んじ

やったのかと思ったわ」

「俺を勝手に殺すんじゃねえ」

「だって秀、私がこんなにお腹空いてるのに昼まで起きないんだもん、殺してやろうかと思ったわ」

「さっきとは別の意味で俺を勝手に殺すんじゃねえ！」

ていうか、お前って立場的に俺のボディーガードなんだよな？
それで度々俺に対して殺人予告をするってどうなんだよ。

「ウリア」

「何よ、下僕――あっ、間違えた、秀」

「何をどうしたら俺の名前と下僕と間違えるのか聞いてみたいものだな。ええ？」

「いや、今のは態とじゃないのよ？　偶々、秀の事を“下僕”って呼ぼうとしたらそう呼んでしまっただけの事で」

「要するに意図的に呼んだって事じゃねーか！」

「ちっ、バレたか。馬鹿な秀には解らないと思って言ったのに」

「解るわ！　流石に無知な俺でもそれくらいは解るよ！」

ていうか、そこまで俺は馬鹿じゃないから！

「全く……ほら、付いて来いよ」

「私に命令しないで」

「シーフード欲しくないのか？」

「あなたに付いて行きます、どこまでも」

「……」

従順なのか否か――よく解らない奴である。

ていうか、こいつはただ単に欲望に忠実なだけなのかも知れない。

要約すると単なる馬鹿だ。

……俺も人の事は言えないけれど。

◆◆◆

一階に下りて、台所に辿り着いた俺はシーフードのカップラーメンが切れている事に気付く。

本来、俺が日々を生き抜く為に必要なカップラーメンの数々はキッチンの一角に山積みしているのだが――。

「……アレ、無いな、シーフード」

「え――――――――っ！？」

「うるさいぞ、ウリア。こんな事で絶望染みた声を上げるな」

「私には死活問題なのよ。地球温暖化で南極の氷が解けるみたいな」

「お前の問題を世界レベルの問題と同列に考えるな」

「仕方ないわねぇ……それじゃあ、こうしましょう、秀」

「どうするんだ？　別のヤツにするか？」

「今から急いで“しーふーどー”を買って来てよ」

「ふざけるな。昼飯どころか夕飯も抜きにするぞ、お前」

とりあえず、俺はカレーと――シーフードはやはり探しても見付からなかったので、スタンダードスタイルの味のカップラーメンをウリア用に作る事にした。

そのスタンダードスタイルのカップラーメンのパッケージを見たウリアは――。

「ねぇ、秀。これ何か“しーふーどー”みたいに何味か書いていないんだけど。まさか、これって味の無いヤツなの？」

とか何とか余りにも馬鹿げた発言をしていたので俺は無視してラーメン作りに取り掛かる事にした。

まぁ、ラーメン作りとは言っても単にお湯を注いで三分待つだけなのだが。

「しかし、このカップラーメンを世に生み出してくれた人は本当に天才だな」

「そうね。秀の方は甜菜（てんさい）って感じだけど」

「俺を北海道を中心として栽培されている野菜と一緒にするな」

「だって、秀の顔って甜菜っぽい形してるじゃない」

「止めろ！　勝手に俺の容姿について変な情報を語るな！　ただでさえ俺は自分の容姿についてここでは語っていないんだから！」

「それじゃあ、私が説明するわね。何と言うか……秀は人の首から甜菜が生えた感じの容姿をしています」

「ただの化物じゃねーか！」

「頭からは髪の毛の代わりに甜菜の葉が生えています」

「黙れ！　誰が上手い事を言えと言った！」

いや、実際問題そこまで上手くは無いのだが。

そして、俺がウリアとそんな遣り取りとしている内に三分が経過してカップラーメンが完成した。

俺は二つのカップラーメンを両手にリビングへと向かい――何と言うか、久しぶりに使う食卓、もとい、テーブルの上にそれらを置いた。

俺は四つある椅子の内の一つに腰を下ろす。

ウリアは俺の正面の椅子に座って――。

「いっただっきまーす！」

――すぐさまそう声を上げるとフォークを引っ掴んでカップラーメンを食べ始めた。

それほどお腹が減っていたという事だろうか……まぁ、部屋の中で行き倒れるくらいだしな。

「ていうか、一つ思ったんだけどさ――」

「何、秀、それ食べないの？」

「……いや、食べるけど。俺が言いたいのはそういう事じゃなくて」

俺はカップラーメンの蓋を開けながら言う。

「その食事前の挨拶――って言っていいのかな。それって、２０５６年の未来でも皆普通に使っているものなのか」

「モグモグ……世界中のそういう挨拶とか言葉は変わっていないわ。私の場合は知識として日本の言葉とか挨拶とか色々なものを知っているから、それを使っているだけよ」

「ああ……お前、そう言えば日本語かなり達者だもんな」

「でしょう？」

「でもお前、言葉が達者な割には箸を使えないんだな」

「あー、“しーふーどー”じゃないけどこっちも意外と美味しいわねー」

「……」

誤魔化しやがった。

白々し過ぎるだろ。絶対誤魔化すの下手だよ、こいつ。

魔導獣機？

「まぁ、いいや……いただきます」

「ていうか、秀……未来の事を聞いて来るって事は、私の話を信じるつもりになったの？」

「当たり前だろ……ていうか」

俺の脳裏に浮かび上がる“昨日の出来事”――。

「……あんなものを見せられちゃ、信じるしかないだろ」

人間は見た事が無いものを絶対に信じない代わりに――“見てしまったもの”に対しては否が応でも信じてしまう生き物なのだから。

「ていうか、昨日のアレは一体なんだ。あの機械の鳥は何なんだよ」

「『魔導獣機（メカニカルビースト）　大鳥型（タイプ・ファウル）』よ」

「だから、昨日も言ったけど、急に専門用語を出されても解らないって」

「単にこういう名称は英単語を繋げているだけなんだけど……ああ、そっか、秀って馬鹿だもんねー。英語とかも解らないかー」

「……カップラーメンを没収する」

「ヤだ！　このカップラーメンだけは絶対に譲らないから！」

俺が伸ばした手から容器を持ち上げる事でスタンダードのカップラーメンを頭上に避難させるウリア。

「全くもう……解ったわよ。良心的な私が豆粒並みの脳味噌しか持ち合わせていない秀に解るように説明して上げる」

「それは有り難いんだけど、俺の脳味噌の事を悪く語っている時点で“良心的”って言葉は間違っていると俺は思うぞ？」

「『メカニカル』、『ビースト』――つまりは、“機械的な獣”の事で、『タイプ』、『ファウル』――こっちはつまり、“鳥の形”って事よ」

「ああ、なるほどね……。ウリア、お前って精神的にはかなり子供だけど、頭脳的にはかなり大人なんじゃないか？」

「殴るわよ、秀」

「何だ、高校生時代に変な薬でも飲まされたか？」

「だから殴るわよって！　ていうか、それはどういう意味よ！」

そんな時だった。

テーブルの上の俺の携帯が震えたのは。

「電話……霧歌から？」

「もしもし？」と俺はラーメンを食べる手を一旦休めて霧歌からの

電話に出た。

（あっ、秀ちゃん？　ゴメンね、昨日はメールできなくて）

「ああ、良いよ、別に。お前の事だから、どうせ塾とか習い事とか、その辺の事で忙しかったんだろ？」

（うん、そうなの……ゴメンね？）

「だから、別に良いって。お前はお前で、俺には俺の日常があるんだからさ。お前の都合を俺に合わせる義務なんか無いんだし」

（でも、私的には何か秀ちゃんにお詫びがしたいなぁ、って思っている訳なのよ）

「お詫びって……だから、別に良いって。そう言うのは」

（何でも良いから、何でも良いから私に何かお詫びをさせてよ。そうしないと、私死んじゃう）

「お前はお詫びをしないと死んでしまう病気にでも掛かっているのか」

（だから、ね？　お願い）

「……解ったよ。それで、具体的には何をしてくれるんだ？」

（秀ちゃんは、何か今私にして欲しい事は無い？）

「霧歌にして欲しい事……そうだな、メイドコスで１日だけ俺のメ

イドに――」

（却下）

「……それじゃあ、もう、お前が考えていいよ」

（ていうか、それ以外に私にして貰いたい事が無かったんだね……逆にショックと言うか、安心したと言うか、何と言うか）

携帯電話の向こう側で霧歌は俺に対して呆れているようだった。

まぁ……当たり前だろうけど。

（うーん、そうだなぁ……私が秀ちゃんに出来る事……）

「……」

何やら、霧歌が無言で考え始めたようなので、俺は霧歌が次に喋り始めるまでの繋ぎにカップラーメンの容器を持ち上げるとそれを口に傾けてスープを飲んで――。

（解った！　それじゃあ、今から秀ちゃんの家に行く！）

「ブ――――――――ッ！」

俺は口に含んでいたカレーのスープを盛大に前方へと吹き出した。

あれ？

ていうか、何かデジャヴじゃね？

昨日もこんな事があったような――。

そんな事を思っていたら、俺は正面でカレー塗れになっているウリアに気付いた。

誰のせいでああなったのだろう――またそんな事を思っていたら、ウリアがこちらを鋭い視線で睨んで来たので、俺の現実逃避は崩壊した。

間違いない、俺のせいだ。

俺のせいで全身カレー塗れになったウリアは怒りに体を打ち奮わせている。

（秀ちゃん？　どうしたの？　大丈夫？）

携帯電話の向こう側からは何やら俺を心配している霧歌の声が頻りに聞こえて来た。

しかし、今の俺にはその声に対してリアクションを取る余裕などなく――。

「何をして……くれるのよこのバカ――――――――――ッ！」

そう家の外まで響き渡りそうな怒声と共にウリアが投げてきたスタンダードのカップラーメンを俺は顔面で受けた。

「ふぐっ！？」

（河豚？）

「っていうか、あっつっ！」

（えっ？　河豚が熱いの？　ていうか、秀ちゃん、こんなお昼から河豚食べてるの？）

「いや、違う！　そういう訳じゃない！」

俺はとりあえず霧歌に向かってツッコミを入れながらこちらも全身ラーメンのスープ塗れになった体をどうしようかと椅子から立ち上がる。

俺の前では同じくウリアも「あーもうベタベタ～」と髪やスーツに付着したカレーに心底嫌そうな声を漏らしていた。

……。

何かエロかった。

「て、ていうか、あの霧歌。今ちょっと緊急事態に陥ったからさ、とりあえず今は電話切ってもいいか？」

（緊急事態？　大丈夫なの、本当に？）

「ああ、大丈夫だから。ちょっと今は切らせて貰うな！　それじゃあ！」

（あっ、ちょっと秀ちゃ――）

俺はその霧歌の返事を待たずしてその通話を切った。

その直後、空かさず俺にウリアの怒声が飛んでくる。

「ちょっと！　本当に何をしてるのよ！　どうして急にラーメンを吹き出したりしたのよ！」

「いや、だって霧歌が――俺の友達が家に来るなんて言うから」

「友達が家に来る事の何が駄目なのよ」

「いや、別に駄目では無いんだけど……ほら、だって、今はお前が居るだろ？」

「……私が居たら何か駄目なの？」

カレー塗れのウリアはそう言って小首を傾げた。

どうやら、本当に解っていない様子だ。

本当にこいつは……肝心な所で馬鹿なんだから。

まぁ、カレー塗れなのは何か興奮するし？　今の小首を傾げた動作も何か可愛かった――いや、何でも無い。

「……だからな？　普段は一人暮らししている俺の家に、お前のような俺と同世代の女の子が居たら何かと誤解を受けるだろ？」

「良いじゃない、説明して上げれば。昨日から俺の家に居候する事になったウリアです、昨日はこいつと一緒に一晩過ごしました――って」

「お前の言い回しに悪意を感じざるを得ないんだが！　つーか、お前は俺を社会的に抹殺（まっさつ）するつもりか！」

「私は秀の事を身体的には護るけれど、秀の事を“社会的”に護るつもりは毛頭ないわ」

「何爆弾発言を言っちゃってるんだよ！」

「ていうか、秀。何か体がベタベタするんだけど……どうしたらいい？」

「そうだな。俺が今からタオルを持って来るから、俺がお前の体の隅々を吹いて――」

「秀、社会的にも身体的にも今すぐここで殺して上げましょうか？」

「スマン、冗談だ。だから怒るな」

……本気の殺意が込められた視線を初めて受けたような気がした。

「仕方ない……それじゃあ、風呂使えよ。風呂は流石に２０５６年にもあるよな？」

「あるに決まっているでしょ。お風呂はどこにあるの？」

「そこの扉からリビングを出たら玄関前に出るから、左に曲がれば風呂場に繋がる扉がある」

「そっか、りょーかい」

「あっ、それと、お湯は入れてもいいが、入るならシャワーでカレーを洗い流してから入れよ」

「解ってるって、私、これでもかなりの常識人なのよ？」

常識人は日常的に相手に殺人予告などはしない。

そうツッコミを入れようと思ったが――あいつをカレー塗れにしたのは俺なのであえて言わない事にした。

つーか、魔術を使える時点で常識人とは掛け離れているような気がする。

「……」

そこで、俺は昨日ウリアが使っていた魔術の数々を思い出す。

背中から出現した深紅に光る炎の翼――オレンジ色に光る炎の剣。

「……魔術、か」

ウリアはその魔術を駆使して昨日の怪物をいとも簡単に薙ぎ倒した。

――つまり、魔術は“兵器的”にそこまで強力という事だ。

そして、俺が――今ここに立っている俺が今から19年後にその魔術を世界に復活させる。

余りにも理解し難い話だった。

余りにも現実的ではない話だった。

しかし、それは当たり前の事で。

今から“起こる事になっている”未来の事を――現実的に理解しようとしても無駄な事だ。

蛇足――と言うのが正しいか。

だって、本来ならば。

未来というのは――何が起こるか解らないものなのだから。

◆◆◆

「……」

ウリアが風呂に入りに行ってから――1時間近くが経過していた。

つーか、遅いよ。

あいつ、まさか箸の時と同じで実は風呂の使い方を知らなかった――とか、そんなオチを用意しているんじゃないだろうな。

ちなみに、俺はウリアから被せられたラーメンのスープを浴びた後の格好のままで居る。

洋服を着替えればいい話なのだが――何と言うか、どうせ風呂に入るのなら着替えるのはその後でも良いと思ったのだ。

洗濯機も風呂場の脱衣所にしか置いていないから。

万が一、着替え途中のウリアと鉢合わせしてしまったら、社会的には未だしも身体的に本当に殺されかねない。

……それにしても。

「遅い、遅過ぎる……」

流石の俺も業を煮やしていた――ていうか、何度も言うけど流石に遅過ぎだって。

「……まさか」

まさか――湯船で溺れているとか、そんな事は無いだろうな。

いや、流石にウリアでもそんな事は有り得ないだろう。

いや、でも、万が一、しかし――。

「……はぁ」

俺はため息をつくと立ち上がる。

いや、これはウリアの事が心配なだけだから。

万が一、ウリアが溺れているなんて事態になっていたら――なぁ？

だから、これはただ単にウリアが心配なだけだから。

別にあわよくばウリアの着替えシーンを覗く事が出来るなんてそんな下心は全くないから。

皆無だから。

そんな言葉を自分自身に言い聞かせながら俺は脱衣所へと繋がる扉の前に立った。

「……」

俺は無言で扉を二回ほどノックしてみる。

しかし、ウリアからの返事は無い。

「おーい、ウリアー？」

今度はノックに加えて中に居るはずのウリアに向かって呼び掛けてみた。

しかし、またもや返事は無い。

「……」

リアルに心配になってきた俺は恐る恐る扉を少しだけ開けてみる。

魔導獣機？

脱衣所の中にウリアの姿は無かった。

「……あれ？」

疑問に思った俺は脱衣所に足を踏み入れる。

本来、脱いだ洋服を入れている銭湯に置いてあるような脱衣籠の中にはウリアの洋服も、下着も、何も入れられていなかった。

「……」

別に、ウリアの下着が入っていなかった事に若干俺は残念に思ってなんかいない。

むしろ、安心できた。

脱衣籠の中に衣類が入っていないという事は、ウリアは既に風呂から上がったという事なのだろう。

「全く、上がったなら上がったで一声掛けろよ……つーか、風呂の電気も点けっぱなしだし」

曇りガラスが嵌め込まれた風呂場へと繋がる扉の向こう側には電気が灯っていた。

今はエコがどうとか騒がれている時代なのだが――魔術が復活した時代にはその辺りの思考も無くなってしまうのだろうか。

まぁ、魔術さえ使えれば大概生活には困らないような気がする。

火を生み出す事が出来ればガス代掛からないし、水を生み出す事が出来れば水道代掛からないし、雷を生み出す事が出来れば電気代要らないからな。

「……ん？」

そこで、俺は脱衣籠の中にウリアが肩や腰、手首などの様々な箇所に装着していた防具や機械などが入っている事に気付いた。

「何だ、あいつ、忘れて行ったのか……やっぱり、こういう所は抜けてるんだな」

そう言いながら俺は洋服を全て脱ぎ終えると風呂場へと繋がる扉を押し開ける。

そして、俺は一糸纏(まと)わぬ姿のウリアと“対面”した。

「……」

「……」

互いに向き合ったまま言葉を失い――互いの姿を呆然と見据える俺とウリア。

しかし、俺も思春期真っ盛りの平凡な男子高校生である。

別に変な下心は無かったのだが――俺の視線はウリアの顔から首よ

りも下の方へと勝手に移動し初めて。

「キャ――――――――ッ！」

またもや、カレーの時の怒声と同じく家の外まで伝わってしまいそうな悲鳴を上げたウリアは俺の体を突き飛ばした。

「おっ、おお！？」

不意な出来事だったので、俺はバランスを取る事が精一杯で――風呂場を出て、脱衣所を抜けて、そのまま廊下に尻餅を着いてしまった。

「痛てててて……て？」

そして――気付けば目の前にはバスタオルを身に纏ったウリアの姿が。

「……何か言う事は？」

そこで、俺は今の状況が昨日あの鉄製の怪鳥を倒したシチュエーションとほぼ同じだという事に気付く。

違うのは、俺とウリアが裸で――ウリアの顔に浮かんでいるのは得意気な笑みでは無く、明らかに“殺意”が込められた黒々しい満面の笑みだという事だ。

あっ、ヤバい、殺される。

俺の中の本能的な部分が周囲のただならぬ雰囲気からそれを察知し

た。

おそらく、何を言っても殺されるだろう――謝罪の言葉を述べたとしても。

……それならば。

ここで言うべき事なんて一つしか無い。

「ウリア……お前の胸、やっぱりあれはスーツで強調されていただけみたいだな」

「死ね――――――――――っ！」

ウリアに蹴られた。

しかし、今回蹴られたのは脇腹では無く顔面だった。

正確に言えば側頭部。

本来ならば俺はまた５０メートルほど吹き飛ばされていたのかも知れないが――。

魔術的な力が込められていなかったのか、それともウリアの怪力の根源はあのスーツにあるのか。

俺は玄関の辺りまで飛ばされただけでそのまま玄関を突き破って外まで飛び出すような事にはならなかった。

身体的には死ぬ所だったが――そういう意味では俺は社会的には死

ななくてラッキーだと思える。

――しかし。

そんなラッキーも長くは続いてくれなかった。

何故なら、玄関扉が開く音が聞こえて来たからだ。

俺は頭だけを動かして玄関の方へと視線を向ける。

そこに立っていた人物に――俺は驚愕して目を見開いた。

「……きり、か……？」

何故か、そこには霧歌が立っていた。

「……」

霧歌は呆然と頬りに状況を整理しようと視線を至る所に彷徨(さまよ)わせている。

――さて、ここで問題を一つ。

俺の幼馴染、夜華霧歌が俺の家を訪ねた際、彼女は玄関先でこんな光景を捉えました。

一つは、俺、もとい、自分の幼馴染が全裸で玄関先に転がっている光景。

そして、もう一つは廊下の奥では誰か見知らぬ女子が明らかに風呂

上りで――しかも、裸にバスタオル一枚という格好でそこに立っている光景。

――さて。

その二つの光景を合わせた際、霧歌の頭の中に生み出される見解は一体何でしょうか？

「……」

そして、霧歌の中でその問題に対する見解が出たのだろう。

霧歌は無言で扉を閉めて我が真之乃家の玄関から姿を消した。

「ってちょっと待て！　待って下さい霧歌さん！　これは誤解なんです！　俺の話を聞いてくれ！　いや、聞いて下さい！　霧歌さん！」

俺は玄関に向かって手を延ばす。

しかし、無論そこには霧歌の姿は既に無い訳で。

そんな俺を見兼ねてか――後方でウリアのこんな言葉が俺の耳に届いたのだった。

「……無様ね」

紅焔天使

7月２８日。

僕は幼馴染に裸を見られてしまいました。

しかも、玄関という余り裸で居る事に相応しくない場所で。

だから、僕はもう社会的に抹殺されたのも同然です。

社会的に――死んでしまったも、同然です。

だから、僕は身体的にも死んでしまおうと思います。

お父さん、お母さん。

今まで、こんな変態で馬鹿で脳味噌も空っぽな僕の事を育ててくれてありがとう。

今更ですが、僕はお父さんやお母さんが望んだような――そんな息子になれていたでしょうか。

それだけが気がかりです。

それ以外には気がかりなんてありません。

最期に、それだけが気がかりです。

お父さん、お母さん。

僕を生んでくれてありがとう。

僕を育ててくれてありがとう。

僕に笑顔を見せてくれてありがとう。

僕におもちゃを買ってくれてありがとう。

他にも色々と――言い尽くせないけれど、本当にありがとう。

ありがとう、お父さん、お母さん。

――さようなら。

◆◆◆

「何書いてんだお前」

何やら俺の部屋の勉強机で一心不乱に何かを書いているウリアの背後に忍び寄り、その書いていた紙を奪い取った。

「……何だ？　これ」

「何言ってるの、遺書に決まってるじゃない」

「誰の？」

「秀の」

「何でお前が俺の遺書を書いてるんだよ。遺書というものは本来その人自身が書くものだろうが」

いや、俺も今書くつもりは毛頭ないけれども。

「だって、今から秀自殺しちゃうんでしょ？」

「俺を勝手に自殺志願者に仕立て上げるな」

「だって、あの幼馴染の人に裸を見られたんだもん……自殺するくらいまで落ち込んで、悩んで、死にたがっているのかと思った」

「確かに落ち込んで、悩みもしたが、死にたいとは思ってねーよ」

「何だぁ……残念」

「オイ、今残念って言ったよな？　絶対に言ったよな？」

「言っていないわ。残念と思ったのは本当」

「お前は否定したいのかしたくないのかどっちなんだよ！」

「そっかぁ……」とやはり残念そうな声色でウリアは俺の手の遺書（仮）を取る。

「折角書いたのに無駄になっちゃったなぁ……」

「お前が勝手に遺書なんて書くからだろうが」

「だって、自殺する際には遺書が必要でしょ？」

「だから自殺なんてしないって言ってるだろうが。ていうか、何度も言うけど、お前って俺の身を護る役目を担ってるんじゃないのかよ」

「秀が自殺を志願した場合には止めない事にしているの」

「いや、止めろよ！　自殺なんて絶対にしないけどそこは止めてくれよ！」

「私、個人の意見を尊重させようと思っているの」

「確かにそれは良い事だが、今使うべき言葉じゃねえ！」

本当にこいつは俺のボディーガードなのだろうか……いや、実際に昨日は俺の事を護ってくれたが。

「……ん？」

と、そこで俺はとある疑問に辿り着く。

「なぁ、ウリア」

「何？　自殺するつもりになった？」

「残念ながらそんな思考には辿り着いていない。それから、嬉しそうに目をキラキラと輝かせるな――それと残念そうに顔を伏せるな！」

「……それで、何よ」

「昨日の怪物……あれって、機械なんだよな？」

「そうよ」とウリアは答える。

「正確には――“生きた機械”、とでも言っておこうかしら」

「“生きた機械”？」

「ああいう『魔導獣機』の全ての機体には『ＡＩ』――つまり、『人工知能』が搭載されているから」

「ああ、なるほどね――って」

今、何て言った？

「……待て、昨日の化物以外にもその『魔導獣機』とやらは存在するのか？」

「当たり前でしょ。それなら態々『大鳥型』なんて呼び名を付ける訳が無いじゃない」

「ああ、そう言われてみれば、そうだな」

「多分だけど――今夜辺りにも、また秀の命を狙って別の『魔導獣機』が現れると思う」

「随分と重要な案件をさらりと言ってくれるものだな……。それじ

ゃあ、あの『魔導獣機』に人工知能が搭載されているって言うのなら、あいつらは勝手に俺の命を狙ってここまでやって来ている――って事なのか？」

「ううん、それは“ちょっとだけ”違うわ」

「言ったでしょ？」とウリアは椅子を回転させて面と向かって俺を見上げてきた。

これは単なる余談で聞き流して貰っても一向に構わないが――上目遣いのウリアは何だか可愛かった。

「あいつらはね、人工知能を搭載しているとは言っても単なる“機械”なのよ」

「……どういう事だ？」

「知っているとは思うけれど、『魔導獣機』は未来の科学が作り出したもの――と、なれば、この世界に『魔導獣機』を呼ぶ為には、勿論、過去と未来の時空を繋ぐ架け橋を作る為の人間が必要になる」

「……って、事は。お前以外にも誰か未来の人間がこの時代に来ていて、未来から『魔導獣機』を転送――しているって事なのか？」

「そういう事よ」

ウリアは俺の問いに頷いて、続ける。

「だから――そうね、その『魔導獣機』を転送している奴を“消せば”……一応、今の所は安全になる」

「オイオイ“消せば”って……また随分と物騒な言い回しをするじゃないか、ウリア」

「解ってる。解ってはいるけれど……秀？　あなたの方こそ解っているの？」

「……ああ、解ってるよ」

解っている、つもりだ。

やらなきゃ、やられる。

俺が今立っているのはそんな危ない場所――そう、言うなれば戦場の真っただ中に俺は今立っているのだ。

だから――“そんな事”は解っている。

――だけど。

「でも、それは……その『魔導獣機』を転送している奴を“殺す”なんていうのは」

「……大丈夫。心配しないで」

「秀の手は汚させない」とウリアは椅子から立ち上がってこう言った。

「汚れるのは……私の手だけで十分だから」

「いや、だから……それも違うだろ」

「……秀、お願い」

そして――ウリアは俺にこう懇願してきた。

「今は……今だけは“そういうもの”だって……割り切って、お願いだから」

「……ウリア」

「秀がそうしてくれなきゃ……いつか、私は秀の事を護り切れなくなるかもしれない」

「……」

間違っている――ウリアの考え方は絶対に間違っている。

俺はそう思う。

――けれど。

今が“そう思うべき”なのなら――“そう思わざるを得ない”のならば。

……俺は。

「……解ったよ、ウリア」

「うん、ありがとう、秀。……そして、ゴメンね、秀」

「気にするな……お前は俺を護る為に、頑張ってくれているんだからな」

「だから、謝らなくていい」と俺は言う。

……まぁ、皮肉を言わせて貰うと俺の事を護る為に頑張っている奴が勝手に俺の遺書を書くのもどうかと思うが。

「……さてと、それじゃあ」

しかし、そんなウリアでも俺を護る為に頑張ってくれているのは列記とした事実な訳で。

「今晩の戦闘の前に……腹ごしらえでもしておくか」

◆◆◆

そして、夜はやってきた。

現在――時刻は午後9時半。

てっきり、また昨日と同じような怪物がやって来るのなら予め昨日の海岸に移動するのかを俺は思っていたので――今夜、ウリアが戦闘を行う為に選んだ場所に俺は少しばかり驚いていた。

俺とウリアは未来から転送されてくるであろう『魔導獣機』を待ち構えるべく――自宅から少し離れた住宅街の通路のど真ん中に立っていた。

「……なぁ、ウリア。本当にこんな所で戦うつもりなのか？」

「ええ、勿論」

「勿論って……お前、昨日の同じくらいの規模で戦ったら、ここら辺一帯が吹き飛ぶぞ」

「だから、言ったでしょ、ここを出る前に。今日の戦闘は……あくまで、『魔導獣機』を未来から転送している奴を見付ける為」

「だから」とウリアは昨日と同じく夜空を見上げたまま言う。

「心配しないで……『魔導獣機』が転送されたら、それを一瞬で倒して、私は転送している奴を捜しに行くから」

「……何だろう。普段のお前を見ているとその言葉に一寸たりとも頼もしさを感じない」

「なっ！　ちょっ、それは一体全体どういう意味――」

――その時だった。

俺の手の中で白い欠片がこちらも昨日と同じように光を放ったのだ。

「来たわね……」

そう言って――夜空を振り仰ぐウリア。

しかし、俺は未だ光り輝くその欠片を見据えたまま先ほど家でウリアが語ったこの欠片についての説明を思い出していた。

◆◆◆

「その欠片はね、魔力に対して反応を示すの」

俺の部屋にてウリアは俺が持っているペン状の白い欠片を指差して言った。

「だから、昨日は『魔導獣機』が現れた時にその欠片が光ったのよ」

「なるほど……まぁ、古代に滅びたはずの文明に反応するのなら、『魔導獣機』にも反応するのか――って、あの化物、原動力は魔力なのか？」

「ガソリンとかで動いているのかと思った？」

「……い、いいや？」

正直、そう思っていたけれど俺はとりあえず誤魔化した。

ここで、俺がガソリンで動いていると思っていたなんて白状したらまたウリアに脳味噌が入っていないとか罵倒を浴びせられかねないからだ。

「『魔導獣機』の原動力は魔力――そして、あの巨大な機体自体も魔力であの形を保っているようなものなの」

「そうだったのか」

「そう。だから、『魔導獣機』の中にある『核（コア）』と呼ばれる場所を破壊すれば、『魔導獣機』の機体の全ては一瞬にして破壊されて、跡にはその欠片すらも残らないわ」

「……なるほど」

俺は昨日のウリアが破壊した『魔導獣機』の事を思い出す。

あの時――砂浜でウリアが炎の剣を『魔導獣機』の胸辺りに突き立てた瞬間、本体から？がれた翼までもが一気に焼失した。

「……とりあえず、秀が拾ったその欠片は、鍵であり、センサーのようなものだから。その欠片が光った時は――『魔導獣機』か、その他の何かが来ると思って警戒した方が良いわね」

◆

◆

◆

――以上が、ウリアのこの白い欠片についての説明だった。

「本当に光った……って、事は」

俺は隣に居るウリアと同様に夜空を見上げる。

その瞬間、またもや空の景色の一部が歪みを帯び始めた。

「……なぁ、ウリア。ちょっとした質問があるんだけど」

「何よ。手短にね」

「この欠片が魔力に反応するのなら、どうしてこの欠片はお前に反応しないんだ？」

「それは……その、私には周囲に感知されないように、私の中の魔力を外に出さない為の――そう、術が掛かっているから」

「そうなのか……いや、聞きたい事はそれだけだ。宜しく頼むな、今夜も」

「うん、任せておいて、秀」

そう言って――前方へとゆっくりと歩き出すウリア。

――何だろう。

俺が今の質問を――どうしてウリアそのものにこの欠片が反応しないのかを聞いた時。

気のせいかも知れないが……ウリアはどこか、その問いに答え難そうにしていた。

どうしてだろう。

そんな疑問を考えている内に――俺から5メートルほど離れた距離で立ち止まったウリアの足元に深紅に光る魔方陣が出現した。

魔方陣から湧き上る魔力のせいだろうか――ウリアのツインテールが空に向かってフワフワと上向きに漂っている。

……ていうか、今更だけどいつの間にかあいつツインテールに戻してるな、髪型。

戦闘中はあの髪型だと落ち着かないのだろうか。

そして――そんなどうでもいい思考を俺が巡らせている中で、夜空に段々と漆黒の穴が形成されていく中で。

ウリアは――“唱え始めた”。

「――天よ。我は器なり」

夜空ではそこに広がる満天の星を呑み込むかのように空間の捻れが激しさを増していく。

「神の力を受けるべき、器なり」

捻れはやがて渦へと変化して――そして。

「天よ――その神の器である我に神の力を授けよ」

夜空よりも暗い――漆黒の穴を創造した。

「神の力――紅焔天使（ウリエル）の力を」

不意に――俺の前からウリアの姿が消えた。

いや、消えたのではない――俺にはそう見えただけだ。

正確には“突如地上から溢れ出した巨大な火柱にウリアが呑み込まれた”――と言うべきなのか。

「ウリア……！」

初めはウリアが敵の攻撃に呑まれたのかと俺は誤解した。

しかし、まだ漆黒の穴からは『魔導獣機』は出て来ていない。

それならば――この炎の柱の正体は何なのか。

そう思った所でゆっくりと目の前の炎の壁が解け始めた。

そして――俺はその中に。

劫火の中に佇むウリアの姿を発見した。

「……ウリア」

炎の中からその姿を現したウリアは昨日と同じように背中から翼を生やしていた。

しかし、その翼は昨日の翼とはまるで“姿形（すがたかたち）”が違っていた。

昨日、ウリアが背中から生やした翼は単なる炎で形成された深紅に光る翼だった。

――けれど。

今、ウリアが背中から生やしているその翼は――何と言うか“実体”が完全に再現されていた。

正確に言うならば、炎で無理矢理翼を象っているのではなく、深紅の光を仄かに帯びた白い天使の翼――と言った所だろうか。

そして、咄嗟に今俺が使った“天使の翼”という呼称はあながち間違ってはいなかった。

ウリアの頭の上には――その翼と同じように深紅に光る天使の輪が浮かんでいたからだ。

まさしく――今のウリアは天使だった。

すると、不意にウリアはその天使の翼を羽ばたかせて上空へと飛翔した。

それと同時に空に出現した漆黒の穴からも何かが出て来た。

最初は――その『魔導獣機』を俺は蛇かと思った。

しかし、現代の常識が未来の常識にどれほどまで通用するかは解らないが――少なくとも、蛇は空を飛ばない事を俺は知っている。

それならば、その非常に蛇に近い『魔導獣機』は何をモチーフにして創られたのか。

――それは。

紅焔天使？

「……龍……！」

漆黒の穴から出て来たのは灰色の鉄製の巨大な龍だった。

その巨大な龍は蛇のようにくねくねと空中を滑るように進んで行く。

すると、その龍の進行方向に天使化したウリアが立ちはだかった。

巨大な機械の龍はそのウリアの姿を捉えると――その大きな口を開けて昨日の怪鳥のように鳴いた――いや、吠えたと言うのが妥当か。

何しろ、凄まじくけたたましいノイズのような鳴き声を発したのは間違いなかった。

そして、昨日は建物も無い殺風景の海岸で戦っていたから解らなかったのだろう。

そのノイズで――周囲の家の窓ガラスが一瞬にして吹き飛んだ。

「うわっ！」

俺は降って来るガラス片に咄嗟にその場にしゃがみ込んで最低限自身を護る。

上空ではウリアが俺の為に戦ってくれているのだ。

俺だって――最低限は自分の身を自分で護らなければ示しが付かな

いだろう。

「くっ……！」

ガラス片の雨を凌ぎ切った俺は再度その場に立ち上がって上空を見上げた。

そこでは未だウリアと巨大な機械の龍が対峙している所だった。

すると、ウリアの“右手”に変化が起こった――深紅の光がその手に集約する。

そして、その光は大きな深紅の弓へと姿を変化させた。

創造された深紅の弓――更にウリアの“左手”にも深紅の光が集約し始める。

ウリアの“左手”に創造されたのは矢の方だった。

そのウリアの動きに『魔導獣機』は危険を察知したのか――それとも、それを転送した人物の方が危機を感知したのか。

不意にその巨大な機械の龍はウリア目掛けて突進を開始した。

昨日の怪鳥ほどでは無いが――それでも、龍は猛スピードでウリア目掛けて空中を突き進んでいく。

対するウリアは迫り来る巨体に臆する事無く――創造した光の矢を同じく創造した弓で構える。

ウリアの手によって矢が引かれる――光の弓の弦が軋んだ音を立てた。

――そして。

ウリアは左手を光の矢から“離した”。

解き放たれた深紅の光の矢は巨大な龍の口を貫通し、胴体を貫通し、最後に尾を劈(つんざ)いて――光の一閃となって夜空の彼方へと消えた。

それは一瞬の出来事だった。

光の矢に劈かれたその巨体は――昨日の怪鳥とは違い、燃えるのではなく大爆発を起こした。

周囲に響き渡る轟音――吹き荒れる突風が空中に漂っている爆煙を纏めて吹き飛ばした。

しかし――結果は昨日と同じだった。

爆発の跡に残っていたのは――やはり、天使の如く翼を生やしたウリアの姿だけだったのだから。

「……ウリア」

俺は戦いの終わりを見届けて――安堵の息を漏らす。

――けれど。

ウリアの戦いの方はまだ終わっていなかった。

巨大な龍を一瞬で破壊したウリアは光の弓をその手から消すと再び足元に深紅の魔方陣を出現させる。

それから、暫しの沈黙の後――ウリアはこう言った。

「……見つけた」

そう呟いたかと思うや否や、ウリアはその深紅の光を帯びた天使の翼で羽ばたき――どこかへと飛び去ってしまった。

◆◆◆

巨大な機械の龍が――『魔導獣機』が私を殺そうと迫ってくる。

けれど、私は全く臆しない。

恐怖すらも、感じない。

私はただ、弓を携えて、矢を構えて――ただそれを解き放てばいいのだから。

私の放った光の矢は私の飲み込もうとその両顎（りょうあご）を上下に開いた『魔導獣機』の口の中に命中した。

そして――その矢は命中しただけでは止まらなかった。

光の矢はその龍の胴体を貫通し――大穴を空けて、夜空の彼方へと

まさしく光速で過ぎ去ってしまったのだから。

私の前で龍が爆発を起こす。

秀は大丈夫だろうか――いや、大丈夫だろう。

爆発を起こしたという事は私の矢は見事『核』を撃ち抜いたのだから。

破片が秀に当たる訳が無い。

だから、私は次の行動を起こした。

爆風で空中に立ち込めていた灰色の煙が吹き飛ばされていく中で――私は発動している弓を一度解除して、更なる魔方陣を出現させる。

この魔方陣は――今の『魔導獣機』を現代に転送した人間を探索する為のものだ。

転送した人間の中に宿る魔力によって『魔導獣機』は人間からの命令を理解して、動く。

だから、周囲に残っている魔力の流れを辿れば――自(おの)ずと、先程の『魔導獣機』を操っていた人間のもとに辿り着く事が出来るのだ。

そして、私の思惑通り――魔方陣に反応があった。

「……見つけた」

私はそう呟いて背中に生やした翼で飛び――光の速度でその人間の

もとへと向かう。

紅焔天使？

住宅街の外れ――そこにあった森の広場に。

その男は、居た。

私はその男の居る広場へと降り立つ。

私が地面へと足を着いた瞬間、背後の木々の陰から新たな『魔導獣機』が飛び出してきた。

おそらく、この男が予備として念の為に転送しておいたものなのだろう。

モチーフとしている形は『狼』――だったのだろうか。

よく解らなかった。

何故なら――私はその『魔導獣機』が飛び出してきた瞬間に条件反射で創造した炎の剣を振るっていたから。

私の放った斬撃はその『魔導獣機』の首を刎ね飛ばした。

それから、私はやっとその『魔導獣機』の姿をちゃんと見る為にその機械の獣と向き合う。

首は無くなっているが――おそらくはモチーフは『狼』、もしくは『犬』だろう。

少しばかり――私の知っているそれらとはサイズが大きいような気もするけれど。

「くそっ！」

そして、私の後ろでそんな男の悪態を付く声と草むらを揺らす音が聞こえて来た。

逃げたか――私はそう思いながらも首を失った『魔導獣機』と対峙する。

首を刎ねたとしても、そこに『核』が無ければ倒した事にはならない。

「……」

私は無言で炎の剣の柄を握り締める。

それと同時に首を失った『魔導獣機』が私に襲い掛かって来た。

しかし――遅い。

私は翼を羽ばたかせ――光速で移動しながら剣を振るう。

一般的に『魔導獣機』の『核』はその機体の中心にある。

だから、私は『魔導獣機』の機体を真っ二つに両断した。

二つに分かれた『魔導獣機』の機体は――地面に落下する前に劫火に焼かれて焼失した。

「……」

焼失した『魔導獣機』に私は先ほどの男が逃げたであろう森の中を振り返る。

しかし、無論そこには既に男の姿は影も形も残ってはいなかった。

けれど、私は秀の為にあの男を殺さなければならない。

秀の為に、殺さなければならない。

「……後で、秀に怒られるかも知れないなぁ」

いや、秀はきっと怒るだろう。

これだけの規模の森林を“焼き払ったら”――自然保護団体でなくとも、怒りを覚えるだろう。

でも――仕方ないのだ。

秀の命を護る為には。

例え森林を巻き込んだとしても――その命を狙う人間を殺さなければならない。

だから、私は周囲から取り込んだ魔力を光に変換して――その光を炎の剣に集約させる。

集約された光は炎の剣を進化させ、その形状を変化させ、“炎の塊

”から“本物の剣”へとその姿形を変化させる。

私はその変化させた剣の柄を両手で握り締めると――目を閉じて、その切先を天に向けるように構えた。

すると、私が立っている森の広場から炎が巻き起こった。

湧き上った劫火は渦を巻いて――私が天に掲げている剣の刀身に集中していく。

――そして。

私は一度閉じた瞼を開けると――そのまま、一気に掲げていた剣を前方に広がる森林に向かって振り下ろした。

その瞬間。

広大な森林を――深紅の劫火が一瞬にして呑み込んだ。

◆◆◆

「……」

俺はウリアの帰りを家の前で待っていた。

ていうか、先ほど住宅街の外れの森の方でオレンジ色の――まるで、森全体が燃えたかのような、そんな光が見えたのだが。

気のせいだろうか……気のせいであって欲しい。

まさかのウリアでも、俺を護る為とか言いながら森林を全て焼き尽くすほど、馬鹿では無いだろう。

馬鹿では――。

「……いや、馬鹿かも知れないなぁ……」

俺は遠い目でそんな事を呟いた。

だって、カップラーメン如きで俺に忠誠を誓うかのような事を言う奴である。

そんな事を思っていると――夜空に深紅の光を帯びた天使の翼を携えた少女が飛んできたのが見えた。

ていうか、紛れも無くウリアだった。

「よう、お帰り、ウリア」

「う、うん、ただいま、秀」

「お疲れ様、今日も大活躍だったな」

「で、でしょう？　もっともーっと褒め称えてくれてもいいのよ？」

「ああ、跡で褒め称えてやるよ。……でも、その前に一つだけお前に聞きたい事があるんだけど」

「な、何？」

「さっき、住宅街の外れの森がある辺りで、まるで大火災みたいな、そんな感じの勢いの炎の光が見えたような気がしたんだが……」

「……」

「まさかお前、俺を護るとか言う名目の下に、森を全部燃やした――なんて事は言わないよな？」

「……」

「……」

俺はウリアの頭をチョップした。

「い、痛いわね！　急に何すんのよ！　私まだ何も言ってないじゃない！」

「うるせえ、三点リーダの数、と言うか、沈黙が既に答を語ってるんだよ」

「解らないじゃない！　ただ単に文字数を稼ぐ為の三点リーダの羅列かも知れないじゃない！」

「なるほどな、そういう考えもあるが、そっちの方がもっと駄目だ」

「だ、だって、仕方ないじゃない……あの『魔導獣機』を操っていた奴を倒す為にはああするしかなかったんだから」

「……」

俺は目の前であからさまにしゅんとしてしまっているウリアに少し驚いていた。

だって、戦いの時もそれ以外の時もずっと強気のウリアが――俺の前で凹んだ表情を見せたのである。

何か……こう、更にからかいたくなるのは何故だろうか。

もしかすると、俺は物凄くサディスティックな人間なのかも知れない。

「……って事は、ウリア。お前はあそこにあった森林を全て燃やし尽くしてしまったと言う訳だな？」

「う、うん……ゴメンナサイ」

「仕方ない……それじゃあ、罰として今日のお前の夕飯は抜きだ」

「ええっ!?　な、何で!?」

「実は、俺って森林愛好家なんだよ」

「そ、そうだったの!?」

「ああ、実はそうだったんだよ。お前は気付かなかっただろうが、俺の部屋の至る所には森林に関する本や雑誌が置いてあって、更にパソコンの中にはマイベスト森林画像が山ほど保存してある――俺はそれほどの森林愛好家なんだ」

「そ、そうだったんだ……あのっ、えっと、私……秀がそんな趣味を持っている事なんか、気付かなくて――ていうか、知らなくて」

「ああ、残念だなぁ、あの森には二度と行けないのか……あの森には週に一度散策をする為に三年前から通い詰めている物凄く馴染みのある森だったんだけどなぁ」

「ええっ、そ、そうだったの!?」

「ああ、最近ではあの森の精霊の声が聞こえるくらいにまで達してしまったくらいだ」

「そ、そこまで……！　秀、あなたって聞こえない声が聞こえてくるほどの痛いくらいの森林愛好家だったのね……ゴメンナサイ、私その事知らなくて」

「……」

本気で凹んでいるのか、それとも今俺の目の前に居るウリアが猫を被っているのか――何か解らなくなって来た。

「で、でも！　心配しないで、秀！　今日あなたの最後の友達の幼馴染の子は秀を見捨てちゃったけれど、今度からは私が秀の唯一無二の親友になって上げるから！」

「勝手に話を進めるな！　俺にだって友達くらいは居るよ！　流石に！」

「えっ、でも、友達が居ないから有りもしない友達を――いわゆる、エア友達を森の中で勝手に作っていたんじゃないの？」

「違うわ！　俺はそこまで残念な性格じゃねーよ！」

「えっと、友達の名前はトモちゃんだっけ？」

「それは俺の事を言っているのか、それとも他の誰か残念な性格を持つ架空のキャラに対して言っているのか、どっちだ」

ていうか、それ以上は言わないで欲しい。

色々と危ないような気がする。

「ああもう、いいよ、解った……森を燃やした件は水に流してやるよ」

「えっ、ほ、ホント！？」

「ああ、本当だ」

まぁ、俺一人の権限でどうにかしていい問題ではないのだろうけれど。

「けど、今度からはあそこまで大規模な事はやらかすなよ、ウリア」

「うん、解った……解ったから、その、今日の夕飯は……？」

「……」

そこで気になるのが夕飯の事かよ。

「解ったよ。夕飯もちゃんと作ってやるから、そこまで凹むな、からかいたくなるだろうが」

「えっ？」

「間違えた。心配になって来るだろうが、そこまであからさまに凹まれると」

「……もしかして、私の事、心配してくれてた？」

「当然だろ。今に限らず、お前が戦っている時はいつも心配してやってるよ」

俺はウリアに向かってそう言った。

すると、俺は背中に衝撃を受けた。

ウリアに叩かれでもしたのだろうか――俺はそんな事を考えたがど

うやら違うようだった。

何故なら、未だ俺の背中には“その感覚”が残っていたからだ。

その――“二つの柔らかい弾力のある感触”が。

そう、俺は今、後ろからウリアに抱き着かれたのである。

「……う、ウリア？」

「私の事を心配してくれていたみたいだから……そのお礼で、抱き着いて上げたのよ」

「同世代の可愛い女子に、後ろから抱き着かれる」とそう言いながらウリアは俺の背中から顔を離してこちらを仰いできた。

「男子のロマンの一つでしょ？」

「フッ……自分で可愛いとか自惚れた言葉を言う女子に抱き着かれても……なぁ？」

「何よそれー、素直じゃないんだからー」

「俺はあくまで素直だよ。単に素直な感想を語っただけで」

「何よ、もー」

「折角抱き着いて上げたのにー」とウリアはぷくーっと頬を膨らませながら少し不機嫌な様子で家の中へと入って行った。

そして――ウリアが家の中へと姿を消したのを確認した俺は。

「……はぁ……！」

ずっと我慢していたため息をついた。

ため息とは言っても――呆れたものでは無く“至福”のため息である。

「う、ウリアの奴……不意打ちにも程があるだろ……」

実際、俺はウリアに抱き着かれた時、冷静な言葉を述べていたのだが――内心はドッキドキだったのである。

つーか、あのシチュエーションでドキドキしない方がおかしい。

正直言うとウリアが戦っている時よりも緊張したような気がする。

不謹慎だろうか。

「……しかし」

俺はまだ微かに残っている“その感触”に先ほどのウリアが抱き着いてきた時のシーンを思い出した。

「ウリア……やっぱり、あの妙なスーツ着ている時の方が胸デカいよな……ずっと着てればいいのに」

「秀～？」

「お、おう、どうした！」

おおう、危ない……まさか、今の俺の独り言聞かれてないよな？

「早くしてよ。私、戦った後でお腹ペッコペコなんだけど」

「ああ、解った……カップラーメンで良いんだよな？　ていうか、それしかないけど」

「あったりまえじゃない！　本当は“しーふーどー”があればいいんだけど、今日はまたあの無味の方で勘弁して上げるわ」

「無味って言うな、スタンダードと言え。ていうか、何気にお前あっちの味も気に入ってんじゃねえか」

そんな事を言いながら俺はウリアと共に家の中へと入る。

ウリアはどうやらシーフードと言うかカップラーメンそのものが大のお気に入りらしい。

今度カレー味のヤツも食わせてやるか。

俺はそんな事を思った。

そんな事を思えるくらいに――俺はウリアに心を許せるようになってきた。

7月29日

（昨夜、●●町の住宅街の外れの森林が一夜にして焼失するという怪現象が起こりました）

「……」

（周囲の住民の話に寄れば、その怪現象が起こる前に謎の音で窓ガラスが割れたり、大きな爆発のような音がしたりした模様で、警察側はこの一連の騒動がテロの可能性もあると懸念しており、●●町の住人に注意を呼び掛けて――）

そこで俺はリモコンの遠隔操作でテレビの電源を落とした。

見ていられなかった――聞いていられなかった。

つーか、これ以上見たくもなかったし、聞きたくもなかった。

すると、リビングに大きな欠伸をしながらウリアがやってきた。

家の中ではやはりツインテールを解いているらしく――その金髪は寝起きだからなのか至る方向へとボサボサに跳ねてしまっている。

「あっ、おはよう、秀。今日は早いのね――って、何よ、何か顔色悪いわよ？　大丈夫？」

「……俺の顔色が本当に悪いのなら、それは多分お前に原因があると俺は思う」

「ちょっと、何を勝手に私のせいにしているのよ。どうせ、アレでしょ？　変な夢でも見て夜中によく眠れなかったんでしょ？」

「……いや、よく眠れなかったのは事実なんだけどな」

しかし、変な夢を見た訳では無い。

昨日の夜、ベッドで寝ていた俺はウリアによって強制的にそこから立ち退かされる羽目になったのだ。

ウリアは俺の部屋で俺と一緒に寝ているのだが――いや、別に変な下心が俺にある訳では無くて。

寝惚(ねぼ)けていたのか、意図的にやったのかは解らないけれど――とにかく、俺はウリアの手でベッドから立ち退く羽目になったのである。

ていうか、引き摺り下ろされたと言っても良い。

放り投げられたと言っても過言では無いだろう。

「いやー、昨日はよく眠れたわ……お陰でもう昼なのに今の今までグッスリ眠っちゃったもん」

「そうか……ベッドは寝心地良かっただろ？」

「うん、案外良かったわね……って、あれ？　私、昨日ベッドで寝たっけ？」

「さぁな、俺は“部屋の床”でグッスリ眠っていたから知らないな」

「そう。それならいいけど」

「……」

態と“部屋の床”という部分を強調して皮肉交じりに言ったつもりだったのだが――どうやら、効果どころか、昨日自分が寝惚けてやった事を思い出す気配すらない。

まぁ、普段使っているベッドで女子が寝るというシチュエーションも中々――って、いやいや、何を言っているんだ、俺は。

「ていうか、テレビ点けないの？」

「点けたいなら点けろ。そして、現実を受け止めろ」

「何よ、それ……訳解んないんだけど」

そう言いながらウリアはテレビの電源を入れるとリモコンを弄って適当なチャンネルに合わせ始める。

すると、意外にもウリアがチャンネルを合わせたのはとあるニュース番組だった。

それも、地方のニュース番組だから丁度良く先ほど俺が見た“その怪現象”の事が報道されていた。

「……」

俺は傍にあった新聞を手に取りながらウリアの反応を見る。

さて、こいつは自分が起こした“怪現象”に対してどんなリアクションを見せるのか。

俺は新聞の記事を読むフリをしながら――ウリアの反応を伺う。

そして、そのニュース番組にてその“怪現象”についての報道が終わった所でウリアはこう言った。

「……ふーん、世の中不思議な事も起こるものね」

「……」

俺は筒状に丸めた新聞でウリアの頭を比較的強く殴った。

「痛いわね！　昨日もそうだったけれど、何で急に私の頭を叩くのよ！」

「お前に罪の意識が全く存在していなかったからだ」

「何よそれ！　全く以て意味が解らないんだけど！」

「うるさい、黙れ。お前に戦闘以外の何かを期待した俺が馬鹿だった」

「何言ってるのよ！　私だって戦う以外に出来る事くらいあるんだから！」

「ほー、それじゃあ、何か一つ見せて貰おうじゃないか」

「良いわよ。秀、それじゃあ」

そう言って――握り拳を俺に見せ付けたウリアは。

「ジャンケン――ポン！」

ウリアの掛け声に俺は反射的にグーを出す。

ちなみに、ウリアはチョキを出していた。

「……」

「……」

――そして。

「……ほらね！」

「ほらね、じゃねーよ！　ジャンケンくらいルール知ってたら誰でも出来るよ！　そして、そのドヤ顔を止めろ！　何かイラッと来るから！」

つーか、お前負けてるし！

ジャンケンが出来るって主張したいのならせめて俺に勝ってから言えよ。

「……ていうか、話は変わるけどさ、ウリア」

「何よ、秀」

「お前、着替えなくていいのか？」

「着替え？」

「いや、だから、お前ずっとその洋服着てるじゃんか。だから、その……他の洋服に着替えたくはないのか？」

「うーん、そうねぇ……確かにこの洋服はいわゆる戦闘服みたいなものだから、動き易いけど、正直に言えば可愛くないわよね」

7月29日？

「だろう？　だったら、他の洋服に着替えてみたいよな？」

「それは着替えてみたいけど……それ以前に、この家って女物の洋服あるの？」

「あるに決まっているだろう」

「……」

「……えっ、何で俺は今ウリアから蔑（さげす）むような視線を受けているんだ？」

「……何で、今の所、秀しかこの家の住人を見た事が無いのに、この家に女物の洋服があるのよ」

「……」

……あっ。

「お前、俺を女装が趣味の変態だと思っているな！？」

「それ以外にどう思えって言うのよこの変態！」

「既に“変態”という呼ばれ方が定着している！？　違う！　この家に洋服があるのは俺に姉が居るからだ！」

「……その姉って、秀が女装した際に生み出される姉という設定の

話じゃないわよね？」

「お前、どんだけ俺に女装趣味を定着させたいんだよ！」

「女装趣味を定着させたい訳じゃないわ。秀に変態キャラを定着させたいの」

「断固拒否させて貰おうか！」

「ていうか、既に秀には変態キャラが定着しているけれどね」

「何っ！？　莫迦（ばか）な、一体いつ俺に変態キャラが定着していたと言うんだ……！」

「私の胸に顔を埋（うず）めたり、私の裸を見たり」

「全部不可抗力じゃねーか！」

それは決して俺のせいではない！

「全く、不可抗力で変態扱いされては堪らないぜ……確かに、幼馴染の霧歌にはメイドコスを頼もうとした事はあるが」

「……」

「……」

「……ねぇ、ちょっとそこの変態」

「変態じゃない！　幼馴染の女子にメイドコスを頼む事くらい日常

茶飯事だろ！？」

「今すぐに黙らないと私が強制的に黙らさせるわよ」

「えっ、キスで？」

そして、俺はウリアの拳を鳩尾（みぞおち）に受けた。

「ぐっ、おおおおおおお……！」

「……拳で黙らせるって、言ったのよ」

「言ってないじゃん！　言う前に飛んできたぞ、お前の拳は！」

「それで？　秀のお姉さんの部屋はどこにあるのよ。さっさと案内しなさいよこの変態」

「案内してやるのは構わないけれど、俺の呼称を“変態”で統一し始めるのは止めろ」

「えっ？　秀って罵（ののし）られる事に快感を覚える特殊な性癖の持ち主じゃなかったっけ？」

「それこそただの変態じゃねーか！　俺は生憎（あいにく）、そんな特殊な性癖を持ち合わせてなんかいない！」

「ふーん……それで？　そこの変態さん」

「兵隊さんみたいに言うな。名前で呼べって言ってんだろ」

「真之乃変態さん」

「俺の名前は変態じゃねえ！　俺の大事な名前に何て事をするんだ！」

「えっ？　名前で呼べって言うのは“変態”という呼称を名前の代わりに使って下さいって意味じゃなかったの？」

「何そのお前の捻くれた理解の仕方は！　違うに決まってるだろ！」

「解ったわよ……それじゃあ、変態秀さん」

「今度は苗字に何て事をしやがるんだ！　つーか、いい加減に俺の名前をちゃんと呼んで下さい、お願いします！」

「まぁ、そこまで頼まれちゃ仕方ないわね……」

「……」

こいつ……！

実は、生粋のSだな……！

「……まぁ、いい。俺の名前の事は許してやろう」

「あら、怒らないの？」

「怒らないよ。今は、な」

「……“今は”？」

「今日のお前の夕飯を抜けば済む事だからな」

「なっ……！」

すると、ウリアは戦慄した表情を見せると椅子からガタッと音を立てて立ち上がった。

「わ、私の夕飯を抜くなんて……！　秀、私はあなたがそんな極悪人だなんてちっとも思わなかったわ……！」

「お前、何か昼ドラでも観たのか？」

台詞が演技染みていると言うか、昼ドラ染みているのだが……。

「冗談だよ。別に怒ってなんかいないから、さっさと俺に付いて来い」

「何だ。やっぱり、秀って女子から罵られると興奮するような変態だったのね」

「だから変態じゃないって言ってるだろ」

「見直したわ」

「見直すな！　俺は見直されるような事は一度もしていない！」

そんな会話を交わしながら俺はウリアと共に二階の姉の部屋へと向かうのだった。

◆
◆
◆

姉の部屋は俺の部屋のすぐ隣に存在する。

俺は部屋の扉を押し開ける。

扉の向こう側には――当たり前だが、姉の部屋があった。

姉の部屋を見るのは――何年ぶりだろうか。

初めてくらいに感じるほどに――久しい感じがする。

7月29日？

「へーっ、ここが秀のお姉さんの部屋なのね……」

すると、俺より先にいつの間にかウリアが姉の部屋に入っていた。

「……ああ、そうだよ」

俺は何となく苦笑しながらウリアに続いて姉の部屋に入る。

部屋に敷かれた赤いカーペットも、タンスも、机も、何もかもが昔のままだ。

しかし、少しだけまた埃（ほこり）が溜まっているだろうか。

また今度掃除をしなければならない。

「そこのタンスに洋服が入っているはずだから、適当に出して合わせて良いぞ」

「実の姉の洋服がどこに収納されているかを熟知しているなんて……流石は秀ね、尊敬するわ」

「どういう理屈で尊敬したのかは知らないが、本来、尊敬すべきではない事柄で俺の事を勝手に尊敬し始めるのは止めろ」

「実の姉の洋服がどこに収納されているかを熟知しているなんて……流石は秀ね、尊敬するわ」

「オイ、何故その言葉を二回言った」

「実の姉の洋服がどこに収納されているかを熟知しているなんて…
…流石は変態ね、軽蔑（けいべつ）するわ」

「だから、何故その言葉を――」

……ん？

「あっ、お前！　今さり気無く俺の事をまた“変態”って言ったな
！」

「“変態”とも言ったし、“軽蔑する”とも言ったわよ」

「何だと!?　お前、いい加減にしないと今度は俺がお前の口を黙
らせるぞ！　主にキスで！」

「そんな事をしたら、警察を呼ぶわよ」

「警察だけは勘弁して下さい、お願いします」

気が付けば、俺はまだ未遂であるにも関わらずウリアに平謝りをし
ていた。

ていうか、どうして俺はウリアに謝っているのだろう。

これでは、まるで俺が日常的に犯罪染みた行動を取っているみたい
ではないか。

そんな事を思っていたら、タンスの引き出しを開ける音が聞こえて

来たので俺は顔を上げた。

「……ていうか、秀」

「何だ？」

「洋服を貸してくれるのは嬉しいんだけど……これ、私が勝手に使ってもいいの？　お姉さんのでしょ？」

「ああ、良いんだよ、別に」

「ていうか、秀にお姉さんが居るのなら……そのお姉さんはどこに居るのよ。今の今まで一度も見掛けていないけど」

「姉は東京の大学に見事合格して、今は向こうに住んでるんだよ」

「へーっ……東京――首都圏辺りの大学って、もしかして名門なんじゃないの？」

「ああ、名門の中の名門だ。日本一頭の良い大学と言っても過言では無いかも知れないな」

「……秀のお姉さんってそんなに頭が良い人なんだ。秀のお姉さんだから、てっきり馬鹿な人だと思い込んでた」

「お前、遠回しに俺の事を馬鹿呼ばわりしていないか？」

「気のせいじゃない？　私はそんな事、微塵（みじん）たりとも思っているわよ」

「微塵には思っているんじゃねーか」

「それじゃあ……ついでに聞くけど、お父さんとお母さんは？」

「母さんはここことは別の県で――別の場所で、とある洋服のブランドの専属デザイナーをしていて、滅多に家には帰って来ない。まぁ、仕送りをいつも送ってくれているから、文句は全くないけど。それで……」

……父さんは。

「父さんは……三年前に、交通事故で死んじまった」

すると――俺のその言葉にウリアはハッとして罰の悪そうな表情を浮かべて。

「あっ……その、ゴメンナサイ、秀」

「気にするな。三年前の事だ……俺ももう流石に“その事”を気にしていないから」

「……でも」

「ほら、そんな事よりも早く色々と着て回れよ。俺はお前が洋服を選んでいる間にカメラを持って来るから」

「……うん、解った――って、ちょっと待ちなさい」

姉の部屋を出ようとした所で俺はウリアから呼び止められた。

「……ねぇ、秀」

「……何かな、ウリア」

「シリアスな雰囲気に呑まれて見落とす――いや、聞き落す所だったけれど。どうして、今から私が色々と洋服を着て回るのにカメラが必要な訳？」

「……なぁ、ウリア」

「……何よ、秀」

「シーフードのカップラーメン……買って来ようか？」

「そうね、久しぶりに食べたいわね、“しーふーどー”。買って来てくれたら、今の秀の失言については忘れて上げようかしら」

「そ、そうか……それじゃあ、俺ちょっと行って来るから」

「うん、解ったわ。いってらっしゃい、秀」

「おう、行って来るわ」

そう言って――俺はウリアの視線を背中に感じながら部屋の外に出ると扉を閉めた。

「……」

シリアスな雰囲気で誤魔化せると思っていたのだが――。

「世の中……そこまで上手く行く訳ないか」

そう呟いた俺はトボトボとした足取りで寝間着から洋服へと着替える為に部屋へと戻るのだった。

◆◆◆

晴れ渡った雲一つない晴天の下。

家から出て――近くのスーパーの前まで来た所で俺はふと疑問に思った。

「……そういえば、俺って追われている身なんだよな？」

今更ながらの疑問であったが、俺はそんな事を思って咄嗟（とっさ）に周囲を見渡す。

7月29日？

「拙（まず）いな……ウリアに同伴して貰えば良かった。でも、そういえば、今まで『魔導獣機』が襲ってきたのは夜だったよな……」

それに、ウリアは昨日その『魔導獣機』を操っていた奴を――倒したのだ。

「……それなら、比較的安心なのか」

若干の平穏を感じつつ俺はとりあえずスーパーの中へと足を運ぶのだった。

◆◆◆

「シーフード、シーフード……おっ、あった」

俺は買い物籠に棚から発見したシーフードのカップラーメンを入れる。

「それから、後は……ついでにカレーでも買っておくか」

続いて、俺はカレー、及び、スタンダードのカップラーメンを適当な数だけ買い物籠に入れた。

しかし、こうやって買い物籠にドカドカと商品を入れる行為というのは、些細（ささい）か心地よい気分になる。

何だか、大富豪になったみたいな――そんな気分を味わえるからだ。

まぁ、買い物籠にドカドカと入れられる商品が未だにカップラーメンから一向に増えないのも考える所ではあるが――。

「……ん？」

――と。

そこで、俺は野菜コーナーを歩いている霧歌の姿を発見した。

「おっ、きり――」

俺は霧歌にいつも通り声を掛けようとして――口を噤（つぐ）む。

何をやっているんだ、俺は。

俺は一度、玄関で霧歌に全裸で居る所を見られたんだぞ！

しかし――このまま霧歌に誤解を受けたまま夏休みを終わらせる訳には行かない。

せめて、二学期が始まるまでには霧歌との関係を修復しておかなければならない。

そして、これが唯一無二のチャンスかも知れない。

……それならば。

俺が取るべき行動は――たった一つだ。

「……き、霧歌～！」

俺が選択した行動はいつも通りに霧歌に向かって声を掛ける事だった。

大丈夫、大丈夫だ。

霧歌なら――ちゃんと事情を説明すればあの事を許してくれるはず。

俺の呼び掛ける声に霧歌は陳列している野菜から俺へと視線を向けた。

――そして。

「……あっ、真之乃君じゃない。どうしたの？」

そう言って――俺に笑みを見せてくれた。

良かった。

どうやら、霧歌は怒っていないようだ――って、ん？

んん？

あれ、何か違和感が……あるような気がする。

今、霧歌は俺の事を何と呼んだ？

「き、霧歌？」

「何？　真之乃君、あなたの名前は真之乃君でしょ？　何を名前を呼び間違えられたみたいな顔をしているのよ、真之乃君は」

「いや、だって、最近まで霧歌、俺の事を下の名前で――正確にはあだ名で呼んでいたじゃないか」

「あれ、そうだったっけ？　ゴメン、よく思い出せないわ。どうしてかしら。もしかしたら、最近途轍もなく記憶の中から抹消（まっしょう）したい出来事があったからかも。ゴメンナサイね、真之乃君」

「……」

――ここで、俺は確信する。

こいつ、絶対に“あの事”を根に持ってやがる！

いや、当然と言えば当然なのだろうけど、まさかここまで根に持っているとは！

明らかに苗字で呼んでいるのも態とだし！

さり気無く会話の中に“あの事”を臭わせる発言を織り交ぜているし！

怖い！　やっぱり、こいつ怖いよ！

「……あ、あの、霧歌、さ」

「何？　真之乃君――って、あっ、またカップラーメンばかり買おうとして～。駄目よ、真之乃君。ちゃんとカップラーメンだけじゃなくて、料理を作れとは言わないけれど、他にもちゃんと食べないと。栄養、偏っちゃうよ？」

「いや、うん、忠告ありがとう、霧歌。ところでさ――」

「あっ、それから、真之乃君はちゃんと夏休みの宿題は終わらせてる？　駄目よ、ちゃんと日々一つずつ終わらせないと。夏休みというのものはね、永遠に続きそうで実は短いんだからね？　真之乃君、ちゃんとそこら辺理解してる？」

「ああうん、理解してる……でさ、霧歌――」

「本当に？　理解してるの、真之乃君は。今の今まで夏休みの宿題を真之乃君は期日までに終わらせた事が無いんだから、本当に、ちゃーんと理解しなきゃ駄目だよ、真之乃君は。真之乃君が今年の夏休み、提出日までに宿題を終わらせて来なかったら私怒っちゃうんだから――」

「俺が悪かった！　この通りだ！」

俺は咄嗟にその場で土下座をしていた。

周囲の視線など関係無かった。

俺がこんな所で土下座をするような格好悪い人間だと思われても良かった。

女子の前で土下座をするようなそんな格好悪い人間とも思われても

全然構わなかった。

ただ、長い事名前で俺の事を呼んでくれた幼馴染からこれ以上苗字で呼ばれ続けるのには――精神的なダメージがあった。

一言で言えば嫌だった。

いや、意外と辛いんだよ、苗字で呼ばれるのって。

死ぬほど辛いんだって、本当に。

ていうか、辛い以前に――俺はきっと霧歌から嫌われたくなかった。

あんな誤解を受けたまま嫌われるのが嫌だったのだ。

どうしようもなく嫌だったのだ、俺は。

多分、だけど。

7月29日？

「……」

当然ながら、俺には今霧歌がどんな顔をしているのか解らない。

だって、土下座をしているから地面――もとい、スーパーの床しか見えていないからだ。

だから、霧歌が今どんな表情をしているのか――俺には到底解るはずもない。

もしかしたら、“あの事”で軽蔑した表情を浮かべているかもしれない。

こんな真昼間から公衆の面前で土下座をした俺に引いているかもしれない。

ていうか、それ以前にもう既に俺の前から音も無く立ち去ってしまった後なのかもしれない。

そして、俺はただ一人で無言のまま土下座をしている状態なのかもしれない。

……。

最後のだけは、何か嫌だな。

そんな自分を思い浮かべるだけで何か泣きたくなってくる。

「……顔――いや、体を上げてよ」

すると、頭上から霧歌の声が降って来た。

その声に俺は少しばかり安堵する――どうやら、霧歌はこんな俺を無視して立ち去るほど薄情な奴では無かったようだ。

まぁ、霧歌がそんな事をしないのは幼馴染だから知っていたけどな！

……。

さて。

霧歌から声を掛けられた俺はゆっくりと――顔を上げて見る。

顔を上げた先には、無論、霧歌の姿があった。

そういえば、今更だけど霧歌の私服姿を見たのは随分と久しぶりな気がする。

幼馴染とは言えども、小学校くらいから余り遊ばなくなったからなぁ……。

だから、今の俺には霧歌の私服姿は物凄く有り難いものであり、また、物凄く萌えるものなのであった。

……いや。

今はそんな事を言っている場合じゃないな、うん。

「……この前の事、だけど」

霧歌は床に座ったままの俺を見下ろして言う。

「ちゃんと、私が納得してくれる説明をしてくれるのなら……許して、上げる」

「あ、ああ、する、するよ。ちゃんと霧歌が納得してくれるような、説明をするから……だから」

「……うん、解った」

「それじゃあ、許して上げる」と。

そう言って——霧歌は俺に笑みを見せてきた。

「えっ……も、もう、俺の事を許してくれるのか？」

余りの呆気無さに俺は拍子抜けしてしまった。

「だって、私が納得するような説明をちゃんとしてくれるんでしょ？」

「あ、ああ……勿論」

「だったら、“あの事”が一体どんな状況下で起きた事であっても、ちゃんとした説明をしてくれるのなら、私は許すよ？」

「……霧歌、お前——」

「でも、正確な説明をした上で、“あの事”が納得できたとしても“私的に”納得できなかったら――その時は、どうなるか解っているよね？」

「あ、ああ、うん……勿論、だよ」

霧歌は黒々としたオーラと共に俺に向かって満面の笑みを見せて来たのだった。

つーか、やっぱり怖い。

小学校の頃はそこまで怖くなかったのになぁ……何が霧歌をここまで変えてしまったのか。

「それじゃあ、今はとりあえず、呼び方を“秀ちゃん”に戻して上げる」

「ていうか、やっぱり態とだったのか……。もう二度とその呼び名で呼ばれないかと思うとヒヤヒヤしたぜ」

「あれ？　秀ちゃん、あだ名で呼ばれるのは嫌いじゃなかったっけ？」

「あだ名で呼ばれるのは嫌いだが、お前にあだ名で呼ばれる事自体は嫌っていないのさ」

「何よそれ、変なの」

そう言って――小さく笑う霧歌。

いつも笑っていれば可愛いのだが……こいつも。

いや、笑っていなくても十分に可愛いが。

◆◆◆

俺は自宅の前に辿り着いた所で重要な事に気付いた。

いや、ていうか、何故家に辿り着くまでに“その事”に気付かなかったのか。

俺は馬鹿か。

その場面はカットされたから――何て理由は言い訳にはならない。

ていうか、俺が言っていい台詞では決してないだろう。

俺が自宅前で――漸く気付いた重要案件（そのこと）。

それは――霧歌にウリアの事を“どうやって”納得させるか、だった。

ウリアの事を納得させる為にはウリアの全てをありのままに語ればいいのだろうか。

例えば――。

「こいつはウリアだ。俺の事を護る為に、２０５６年の未来からやってきた魔法少女なんだよ」

いや、無理だろう！

絶対に無理だ！

大体、ウリアのその説明自体にも無理があるのに！

そもそも、未来からやって来たのに魔法少女って、ウリアは色々と混ざってるんだよなぁ！　設定が！

未来からやって来た未来人なのか！

それとも、魔法少女なのか！

せめてどちらかにしてくれよ！

そして、例えそんな説明をしたとして――。

「へーっ、そうなんだ～。凄いね、ウリアちゃん。私、ちょっと尊敬しちゃった☆」

なんて展開になる訳が無い！

霧歌が語尾に『☆』を付けた口調になる事も含めて有り得ない！

誓ってもいい――神に誓ってそんな展開には絶対になる訳が無い。

7月29日？

「……」

どうしよう。

どうすればいいんだろう、この状況。

「秀ちゃん」

「えっ、な、何？」

「入らないの？　家に」

「い、いや、入るよ？　入るけど……えっと、その、鍵をズボンのどちらのポケットに入れたか忘れちゃって」

「秀ちゃん、それは多分両手を同時にポケットに突っ込んじゃえば解決すると思うよ？」

「……」

そう言えばそうだ。

何を言っているんだ俺は。

追い詰められていたとしても今の言い訳は酷過ぎるぞ。

そんな訳で、俺は両手をズボンのポケットに同時に突っ込んで（ち

なみに、鍵は左のポケットに入っていた）鍵を取り出すと玄関の施錠を解く。

とりあえず、霧歌は俺の部屋に上げよう。

ウリアはきっと今、リビングで何かしらテレビを見ているはずだ。

２０５６年――ウリアが話した通りの世界ならば、テレビなんて代物は余りお目に掛かれないはずだから。

きっと、ウリアは今頃テレビに熱中している事だろう。

だから、ウリアに気付かれないように霧歌を俺の部屋に上げる。

ウリアの説明はそれからだ。

「……よし」

完璧な作戦を一瞬にして作り上げた俺は玄関扉を引き開けて――。

「あっ、やーっと帰って来た」

――玄関に座っているウリアの姿を発見した。

「もう、何やってたのよ、秀は。お腹空き過ぎて死んじゃうかと思ったじゃない」

「……」

そのウリアの言葉と共に――俺の中で折角作り上げた完璧な作戦が

音を立てて崩れて行くのを俺は感じていた。

いや、そもそも完璧な作戦だったのかどうかさえ、崩れ去った今では解らないけれど。

とりあえず、作戦が崩壊してしまったのだけは解った。

「……」

……つーか。

「何でお前こんな所に居るんだよ！」

「ええっ！？　何か秀が急に怒り始めた！？」

「折角、普段は活用しない脳細胞を全てフルに使って作り上げた最上級の作戦が台無しだろうが！　どうしてくれるんだよ！」

「ちょ、ちょっと、何を理不尽な怒りを私にぶつけているのか知らないけど、それは多分私のせいじゃ――」

「うるせえ！　責任取れ！　責任取って後で俺の前でメイドコスをしろ！」

「秀！　ドサクサに紛れて私にメイドさんの格好をさせようとしてるでしょ！」

「つーか、何でお前テレビ見てないんだよ！　２０５６年から来たお前にはテレビは結構珍しいはずだろうが！」

「いや、確かに珍しいんだけど……この時間帯は昼ドラとニュースばかりで余り面白くないと言うか何と言うか」

「確かにそれには俺も同意だがな！　何で昼ドラの再放送ばかりするのかと夏休み中には特に思ってしまうがな！　それでも昼ドラは面白いものなんだよ！　ニュースは為になるものなんだよ！　余り見た事無いけどさ！」

「秀、何かさっきから言っている事が支離めとぅれ――メチャクチャだよ！」

「言えろよ！　支離滅裂ぐらい言えろよ！　まさかお前、日本語が達者っていう設定も実は嘘なんじゃないだろうな！」

「せ、設定って言うな！　今のはちょっと噛んじゃっただけだもん！　本当だもん！」

――そして。

「秀ちゃん、何をそんなに怒って――あっ」

「あっ」

ウリアと霧歌は――出会った。

出会って、しまった。

つーか、出会わなくて良かったのに。

……そして。

互いに出会った二人が互いに向けて言った言葉はこうだった。

「この前、この家の廊下でタオル一枚で居た人じゃない」

「この前、全裸で居る秀に親友としての見切りを付けて出て行った人だ」

霧歌とウリアは――そんな言葉を互いを指差して交わしたのだった。

それが二人の交わした最初の言葉だった。

そして、それは二人の交わした最初の言葉であると同時に、最悪の言葉でもあった。

シチュエーション的にも。

俺のイメージ的にも。

今後の――展開的にも。

色々と――最悪の言葉だった。

三つ巴

『三つ巴（みつどもえ）』――という言葉をご存知だろうか。

『三つ巴』という名の通りなのか否かは解らないけれど、とにかくその単語には三つの意味が存在する。

一つは、三つのものが互いに対立して入り乱れる事だ。

人とか、国とか――とにかく、三つのものが抗争を繰り広げたりする事を言う。

そして、もう一つは紋所（もんどころ）、及び、文様（もんよう）の名前だ。

紋所・文様とはいわゆる家門の事であり、特に、お玉杓子（たまじゃくし）のような形をした『巴』と呼ばれる柄が三つ合わさって円形になっているものの事を『三つ巴』と言う。

それから、最後の三つ目の意は――三人が向かい合って座る事である。

その場合は『三つ巴』ならぬ『三つ鼎（がなえ）』とも言うらしい、のだが。

何故俺が何の脈絡も無く、何の前置きも無く、突如こんな日本語の意味をペラペラと語り始めたのかと言えば。

「……」

「……」

「……」

まさに――現在がその『三つ巴』状態だったからだ。

7月29日、この日遂に俺の幼馴染である霧歌と俺の家に居候している身であり、未来からやってきた魔法少女であるウリアは出会ってしまった。

しかも、“昨日の事”もある為なのか――こうして、今はリビングのテーブルに三人の人間か一堂に会していると言うのに、『三つ巴』状態と言うのに。

「……」

「……」

「……」

誰も――本当に誰も、一言も、一単語も、一文字も喋らないのである。

こういう時にこそ、ウリアにはいつもの馬鹿げた発言をして欲しいものなのだが――この場の雰囲気を流石に察知しているのか、ウリアでさえこの状況には口を開かないで居る。

「……」

「……」

「……」

……つーか。

誰か喋れよ。喋ってくれよ。

沈黙が辛いという事もあるが――何より。

このまま無言で一章が終わってしまいそうな事が何よりも怖い。

一章の全てが三点リーダで無言と言う名の会話を交わすだけなんて――誰も見ないし、読まないぞ、そんな物語は。

――という訳で。

とりあえず、俺がこの場を打開する事にした。

いや、今言ったメタ発言が俺の勇気を奮い立たせた訳では決して無いのだが。

とりあえず、ね。

ただし、“昨日の事”もあって、霧歌には話し掛け辛いので――俺はとりあえず、ウリアに話を振る事にした。

意気地無しとも、ヘタレとも思って頂いて構わない。

だって、怖いもの。

怖いものは怖いもの。

「……そ、そういえば、ウリア？」

「えっ……な、何よ」

「お前、上の部屋で着替えの為に洋服を選んでいたんじゃなかったのか？　さっきはちょっと動揺していて完全に忘れていたけれど、そういえばお前その変な格好のままじゃないか」

「へ、変な格好って言わないで。これは立派な戦闘服なんだから。……いや、その、着替えようと思ったんだけど、着た事無い服ばかりだったから、着方が解らなかったって言うか……何より」

「……何より？」

「何より……その」

ウリアは俺の方を暫し無言で見据えると――俺を避けるかのように若干頬を赤らめて視線を逸らして。

「な、何でも無い。とにかく、着る事が出来なかったから、着替えていないのよ」

「あ、ああ。そうだったのか……ふーん。それは何か、悪かったな」

「いや、別に……秀のせいじゃ、ないけれど」

「だ、だよなぁ……」

「……」

「……」

……拙い。

また沈黙が訪れてきやがった。

つーか、呼んでねーよ、沈黙。

お前どこかに帰れよ、沈黙。

そんな感じで俺が有りもしない存在に心の中で罵倒を浴びせていた時だった。

俺が勇気を奮い立たせた事がどうやら沈黙を打ち破る打開策になり得たようで。

「……ねぇ、秀ちゃん」

霧歌が――漸(ようや)くその口を開いたのである。

「その人の事、私に紹介してくれないの？」

「えっ……ああ、紹介、紹介、ね。ああ、勿論するよ」

「ほら」と俺はウリアの背中を軽く叩いてこう促した。

「ウリア、霧歌に挨拶するんだ」

「ハーイ……えーっと、ウリアール＝ブレイザーよ。ウリアって呼

んで貰っても構わないわ」

「ウリアール＝ブレイザー……って事は、やっぱり見た目からもそうだけど、外国人なのね。えーっと……ウリアちゃん、で良いのよね？」

「ええ、勿論よ。何なら神とでも呼んで崇（あが）めて貰っても一向に構わないわ」

何やら意味も無く調子に乗ってきたウリアの後頭部を俺は叩いた。

そして、ウリアはその衝撃に勢い余ってテーブルに顔面をぶつけた。

「な、何するのよ、顔が痛いじゃない……特に鼻」

「うるせえ。お前が勝手に何か調子に乗り始めるからだ」

三つ巴？

「え、えーっと……」と俺とウリアの遣り取りに呆れたのか、それともウリアの言い回しに呆れたのか、どちらかは解らないが霧歌は苦笑を浮かべてこう言った。

「ウリアちゃんは……その、何と言うか、この前この家でお風呂に入っていたみたいだけど。その……秀ちゃんとは、一体全体どういう関係なの？」

「……」

その問いかけに――頭を叩かれた事を根に持っているのか、ウリアは俺を横目でじっと見据えた後に、その霧歌の質問に対してこう答えた。

「私は、この家に居候させて貰っている身なの。もう、秀とは本当に仲良くさせて頂いて。昨日なんか、私は秀がいつも使っているベッドで、それも秀と同じ部屋で寝たわ」

「オイ、お前！　どうしてそんな勘違いされるような表現をあえて使うんだ！」

「何よ、私は嘘は言っていないわよ？」

「確かにそうだけども！　霧歌に誤解を招いたらどうするんだよ！　折角この前の疑いが晴れそうと言う時にお前はまた爆弾を落としやがって！　お前は俺をそんなに社会的に抹殺したいのか！」

「抹殺したくないと言えば嘘になるわね……」

「要するに抹殺したいと思っている訳だな！　お前、やっぱり後で罰として夕飯を抜かれるか俺の前でメイドコスをするかどちらかを選べ！」

「ていうか、秀はどうしてそこまでメイドコスに拘（こだわ）るのよ！　そこまでメイドさんの格好をした誰かが見たい訳！？」

「メイドさんにはなぁ！　夢と希望が沢山詰まっているんだよ！」

「何それ訳解んない！　私が抹殺する以前に秀は社会的にはもう終わっちゃってるよ！」

そこで俺はハッと我に返る――いや、ずっと素面（しらふ）だったつもりなのだが、世間一般的には“我に返る”という言葉を使った方が良いだろう。

そして、ハッと我に返った俺はただならぬ黒々しいオーラを放っている霧歌の存在に気付いた。

「……」

あっ、ヤバい。

今のメイドさん発言で更に引かれてしまったかもしれない。

もしかすると、日々俺はこの居候しているウリアに対してメイドコスを強要しているような変態だと思われてしまったのかも知れない。

……。

いや、もしかしなくてもそう思われて当然か。

「拙い、墓穴を掘ってしまった……ん？　墓穴？　ああ、なるほど、穴があったら入りたいという言葉は元々こういう組み合わせを用いる為に作られた言葉だったのか」

「秀ちゃん」

「それ違うから」

前方と左隣から一斉にツッコミが来た――ていうか、ツッコまれたという事はまだ俺は完全に霧歌、及び、ウリアの二人に見放されてしまった訳では無いらしい。

「『墓穴を掘る』というのはね？　自分で自分のお墓を作るという事から、自らが進んで破滅に向かっていく事を表した言葉なの。解った？　秀ちゃん」

「そして、『穴があったら入りたい』は、身を隠したいほどに恥ずかしいと思える事から、自分の身を隠せる穴があるならば今ここで入ってしまいたい――という心情を表した言葉なのよ」

「『穴をして入るべからしむ』も大体そんな感じの言葉だったかな」

「そうそう、『汗顔の至り』とか、それから、『面目ない』って言葉も確かそういう感じの意味よ」

「あら、意外と物知りなのね～、ウリアちゃん。私見直しちゃった

☆」

「エヘヘ～、イヤー、それほどもであるかなー、なんちゃって☆」

「……」

……何、お前等急に仲良くなっちゃってんの？

つーか、霧歌……お前が語尾に『☆』を付けて話すなんて思っても見なかったよ。

そして、ウリア。お前も少しは否定しろよ。

それからお前は語尾に『☆』を付けるな。

何かイラッと来る。

「……」

……しかし、待てよ。

この状況はもしかして……かなり良い感じの雰囲気なのではないだろうか。

これは更に会話を交わして雰囲気をより緩和させるべきだな、うん。

「……ま、まぁ、その程度の言葉くらい、俺は知っていたけどな。ほら、アレだよ、アレ。日本人だから、あえて、日本語を間違えたみたいな？　ウリアは外国人だから、何と言うか……ハンディキャップみたいな、そんな感じのノリで俺はあえて間違えたんだよね、

実は」

「秀ちゃん」

「『嘘吐(うそつ)きは泥棒』の始まりって言葉知ってる？」

「……スミマセン、本当は知りませんでした」

つーか、何なの、お前等の驚異のシンクロ率は。

お前等さっき出会ったばかりじゃんか。

それなのに、どうしてそんなにシンクロして話す事が出来んの。

あれか、俺のコミュニケーション能力が低いだけなのだろうか？

それは何と言うか……嫌だな、何となく。

いや、こうして幼馴染の霧歌はともかく、出会ってまだ三日しか経っていないウリアとこうして仲良く話せているのだから、コミュニケーション能力が皆無という事は無いのだろうが――“仲良く”という部分は差し引いたとしても、だ。

「それで？　秀ちゃん？」

「ん？　どうした、霧歌」

「秀ちゃんからも、ウリアちゃんの事を紹介してよ」

「紹介して――って、たった今ウリアから紹介があったばかりじゃ

ないか。ていうか、自己紹介の順番的に今度はお前がウリアに自己紹介をすべきだと俺は思うんだけど」

「それはそうだけど……そうだけど。でも、これは私の勘でしかないけど――ウリアちゃんの事で、まだ私に何か隠している事があるよね？」

「……」

全く、こいつにはいつも驚かされてばかりである。

忘れていた――霧歌にあらゆる隠し事は通用しないのだ。

先日、終業式の帰り道の際に俺が霧歌から心を見抜かれた事もそうである。

超能力では無いのだろうが――霧歌は人の心の内の、それも、隠し事有無について見抜く事に長けているのだ。

それは霧歌が人の事をよく見ているという事もあるのだろう――『観察眼』を持っている、とも言うのだろうか。

三つ巴？

とにかく、霧歌に隠し事は一切通用しない。

それならば――ありのままを全て語るしか他に道は無いだろう。

例えその“ありのまま”を霧歌が受け入れてくれなかったとしても。

「……あのさ、霧歌」

「何？　秀ちゃん」

「今からウリアの事を語る前に――お前に一つ、忠告しておかなければならない事がある」

「どうぞ、何なりと言っちゃって」

「ウリアの事――今から話す事を聞いてしまったら、もう後戻りは出来ない。今、俺とウリアが関わっている問題に、お前は必然的に“巻き込まれる”事になる。知ってしまった以上は、お前は俺達に“関わってしまう”事になる――それでも、俺とウリアが隠している事を、聞きたいか？」

「うん、聞きたいよ」

「当たり前じゃない」と霧歌は平然とした表情で即答する。

「例え、秀ちゃんとウリアちゃんが隠している事がどんな事だったとしても――私はそれを受け止められる自信がある。それに……秀

ちゃんとは幼馴染同士、ウリアちゃんとは――友達同士。そんな親密な間柄に隠し事なんて野暮だと思わない？」

「と、友達同士って――私と、あなたが？」

すると、ウリアが若干焦った様子で霧歌にそんな事を尋ねた。

そして、そんなウリアに霧歌は優しげな笑みを浮かべて言う。

「勿論よ、当たり前じゃない。私はまだしていないけれど、ウリアちゃんは私に名前を語ってくれた――自己紹介をしてくれたでしょ？　自己紹介を互いに交わした間柄というのは、その瞬間から友達同士になれるものよ。……まぁ、尤も、それはウリアちゃんが私の事を友達だと認めてくれないと成立しないのだけれど――どうかな？　ウリアちゃん」

「そ、それは……その、私もあなたと友達になれるのはやぶさかではないと言うか、嬉しくないと言えば嘘になると言うか、むしろ嬉しいと言うか……」

「こういう時くらい素直になったらどうだ」

「う、うるさいわね！　秀は黙っててよ！」

顔を赤らめながらウリアは俺に向かって怒声を放って来た。

まぁ、何と言うか……嬉しいというのは本当の事なのだろう、今のこいつを見る限り。

ウリアの心を疑った訳では無いが。

「……それじゃあ、本当に話しても良いんだな？　霧歌」

「うん、話してくれても構わないよ、私は。どんな話をされたって、私はその言葉を信じてみせるよ」

「だって」と霧歌は俺にそう言って微笑み掛けてきた。

「他でも無い、秀ちゃんの言葉だもの」

「……そ、そうか。それは何よりだ」

その笑顔に魅せられて少し照れるように俺は霧歌から視線を逸らす。

すると、何故か俺はウリアから左足を踏み付けられた。

「痛ってーな！　何するんだよ、急に！」

「……鼻の下が延びてるわよ、変態」

「えっ、マジで――ていうか、さり気無く俺の事をまた“変態”って呼び始めるな」

「ふーんだ」

「何を急に不機嫌になってるんだよ……まぁ、いいか」

後でシーフードのカップラーメンを作ってやればウリアの苛々も治まる事だろう。

――だから。

「……それじゃあ、話すぞ、霧歌」

そう言って――俺は霧歌に全てを打ち明けた。

ウリアが２０５６年からやってきた未来人であり、尚且つ、魔法少女だという事。

２０１１年以降――日本が、そして、この世界がどんな道筋を辿るのかという事。

そして、２０３０年に俺が古代の文明――『魔術』を復活させてしまう事。

そのせいで俺は２０５６年の『混合機関　科学発展側』という組織から命を狙われているという事。

その組織の魔の手から俺を護る為に――ウリアはボディーガードとして２０５６年の俺からこの時代に派遣されてきたという事。

俺はその全てを話した。

正直――霧歌はどんな話でも信じるとか言ってくれていたけれど。

俺は霧歌がそれらの全てを信じてくれるとは到底思っていなかった。

前にも語った事だが――未来人だとか、魔法少女だとか、この世に存在しないはずの摩訶不思議な存在を人は簡単に信じる事は出来ない。

宇宙人然り、ＵＦＯ然り、ＵＭＡ然り――例え、それらを支持する人が居たとしても、その人々でさえその曖昧な存在を完全に信じていると言う訳では無いのだ。

何故なら――人は、実際にその目で見たものしか信じられないから。

それ以前に、俺の隣に座っているウリアという存在は――現在騒がれている宇宙人だとか、ＵＦＯだとか、ＵＭＡだとか、その辺の噂話とは訳が違う。

“２０５６年からやってきた魔法少女”――そんな余りにも馬鹿げた話を信じられるのはきっとウリアの力を目の当たりにした俺くらいだろう。

そう思って、いたのだが。

「なるほど……それじゃあ、ウリアちゃんは２０５６年の秀ちゃんが、この時代――２０１１年の秀ちゃんを――えっと、『デュアルシステム　サイエンスサイド』だっけ？　その組織からこの時代の秀ちゃんを護らせる為に派遣された未来人で、尚且つ、魔法少女――という訳なんだ」

「……」

「……え？　何？　秀ちゃん。私の聞く限りではそう聞こえたんだけど……私、何か間違った事言った？」

「いや、間違っていると言うか――こんなとんでもない話を聞いて、それを素直に纏められているお前にただただ驚いているだけだ」

「素直に纏められているって――私、話す前に言ったよね？　どんな事でも、秀ちゃんの話は信じる、って」

三つ巴？

「いや、でも、お前――普通は信じないだろ。こんな何の確証も無い話なんか、普通は」

「確証は無いけれど、筋は通っていたから一応信じる事にしたの。２０１１年以降に本当に世界がそんな事になってしまって、２０３０年に秀ちゃんが本当に『魔術』を復活させたとして、未来の世界が戦争を行っていたのなら――秀ちゃんがその組織みたいなものから命を狙われる理由は解るもの。『デュアルシステム　サイエンスサイド』――アレよね？　名前と今秀ちゃんが話してくれた事から推測するに、魔術と科学を合わせた結果、更に科学の方を発展させる事に成功した組織――みたいな感じよね？　当てられた漢字を知らないから、まだ自信無いけど」

「いや、うん……大体合っているというか、もう殆ど正解と言うか……何で、お前そんな事解るの？」

「えっ、そんな事って？」

「いや、だから、『デュアルシステム　サイエンスサイド』って組織の名前だけ聞いて、その組織がどんな組織か解るなんて――お前、やっぱりエリートの頭してるよな」

「えっ？　普通は名前と今の粗筋（あらすじ）を聞いたら誰でも解ると思うけどなぁ……」

いや、普通は誰でも解らないだろ。

お前くらいだよ、そこまで理解できるのは。

しかも、余り説明の上手くない俺の語りで。

「……ていうか、こいつの――ウリアの、未来人で魔法少女という設定を霧歌は信じてくれるんだな？」

俺は霧歌に問いかける。

左側から「だから設定って言うな！」というツッコミが聞こえて来たような気がしたが――それはとりあえずスルーで。

「だから、信じるって言っているじゃない。何でそこまで頑（かたく）なに秀ちゃんは私の事を信用しないかなぁ」

「いや、信用するしない以前に――ほら、だって、“未来人”に“魔法少女”だぞ？　どちらかなら未だしも、両方なんて逆に怪しいとは思わないのか？」

「思わないよ？　ていうか、そんなのフィクションの世界だと案外、粗（ざら）にある設定だよ？」

「……まぁ、確かに。“未来人、兼、魔法少女”という設定を否定してしまったら、２０１１年に大ヒットしたあの名作アニメを否定してしまうような気もしないでもないな」

「まぁ、あれは実際には未来人じゃなくて、ただ単に一度経験した時間軸を何度も行き来していただけなんだけどね」

「霧歌、それ以上は言うなよ。それ以上のメタ発言は無しだ」

「でも、今の話をし始めたのは秀ちゃんだよ？」

「例えそうだったとしても、実際問題、根本的に悪いのは“未来人、兼、魔法少女”という設定を持ったこいつだ」

「って何で私が悪者扱いされてるのよ！　ていうか、何度も言うけど設定って言うな！」

「いや、お前の存在を否定する訳では無いけれど、逆に設定という言葉以外で説明しようとすると難しいんだよ、意外に」

「だからって必要以上に連呼する必要は無いでしょ！　次に“設定”って言葉使ったら、円環の理に導かれてしまったという名目の下に秀を抹殺するからね！」

「メタ発言が移った！？　ていうか、何度も言うけどボディーガードのお前が俺に殺人予告をするのはどうかと思うんだが！」

そんな時だった――俺の前で不意に霧歌が小さな笑い声を漏らしたのは。

「……霧歌？」

「あっ、ゴメンナサイ……。予想以上に秀ちゃんとウリアちゃんが仲良かったから、何かその掛け合いを見てると可笑しくなってきちゃって……」

「仲が良い？　違うな」

「私と秀はただ言い争っているだけよ」

「えーっ？　そうかなぁ……私の見る限りでは、相当仲が良さそうに見えるんだけど」

そう言って霧歌はまたフフッと小さく笑って微笑む。

「……そういえば、ウリア」

「何よ、秀」

「一つ聞きたい事があったんだけど……お前、昨日『魔導獣機』を操っていた奴を倒したんだよな？」

「まぁ、あの広範囲を一気に燃やしたから生きてはいないと思うけれど――『異空繋門（ワームホール）』はそう簡単に空間に創り出せるものではないし」

「ワームホール？　何だよ、それ」

「ワームホールと言うのは、空間のとある地点ととある地点を結ぶ時空のトンネルのようなものよ。机上の空論だけれど、既にアメリカの学者さんがワームホールを使ったタイムトラベルの方法が可能である事を証明しているわ。まぁ、実際にワームホールを創り出す事は今の科学力では不可能だから、よって、タイムトラベルも殆ど不可能に近いんだけど――まぁ、そういう事で、解った？　秀ちゃん」

「確かに辛うじて理解は出来たが、どうしてお前がそうスラスラと流れるように説明しているんだよ、霧歌」

万能すぎるぞ、お前。

「まぁ、とにかく、私は昨日『魔導獣機』を操っていた奴を倒したわよ、ちゃんとね」

「そうか……それなら、当分の間は安全――って事になるのか？」

「まぁね。敵の方が新たな刺客をこの時代に送り込むまで――は、安全、かな」

「でも、お前が昨日倒した奴はこの時代――つまりは、お前の時代からすれば“過去”で死んだ事になるんだよな？　それなら、未来ではその事がすぐに解るはずだから、敵の方も案外間隔を空けずに次の刺客とやらを送り込んで来るんじゃないのか？」

「あら、秀ちゃんにしては中々良い所に気付いたわね」

「霧歌、褒めてくれるのは有り難いが“中々”という言葉は余計だ」

「それなら大丈夫よ」とウリアは言う。

「確かに、私達の時代からすればそれは過去の出来事なのだろうけど――重要なのは、死んだ人間が“未来の人間”だったという事よ。未来の人間が過去で死ぬという事は通常ならば有り得ない事――だから、未来の人間が過去で死んだ場合、未来の――例えば、新聞とかに、その出来事が“書き加えられる”」

「って事は……少なからず、未来が変わった――って、事なのか？」

「でもまぁ、未来の人間が過去で死んだとしても、その人間は“本来ならばこの時代に存在しないはずの人間”だからね。歴史に加えられる事無く、未来の方でもまだ昨日の『魔導獣機』を操っていた奴が死んだなんて事は知られていないかも知れない――でもまぁ、未来とはおそらく連絡を取っていたでしょうから、連絡が途絶えたら解っちゃうかもだけど」

「そうだったのか……それじゃあ、昨日の夜にお前が森林を焼き払ったのもそこまで未来には差し支えは無いと言う訳だ」

「……」

「オイ！　何故そこで黙る！」

「いや、だって、あの森林はその……現代のもの、だから。今の時代のものだから。未来で何かしらの変化が起こっちゃってるかも……」

「アバウトな説明で余計な恐怖を感じさせるな！」

「そうね……あの森林が無くなった事で、将来の地球の酸素量が半分以下に陥(おちい)ってしまうかもしれないわね」

「霧歌！？　お前まで一体全体何を言い出すんだ！？」

怖い事言うのは止めてくれ！

俺はただでさえ命を狙われているんだぞ！　これ以上の恐怖はご免だ！

三つ巴？

「まぁ、良かったじゃない、秀ちゃん。比較的だけど、安全だという事は証明されたんだから」

「おう、やったぜ、霧歌。これで漸く夏休みを満喫できそうだ」

「本当に良かったわね、秀ちゃん。これで心置きなく宿題がやれるというものだね」

「……」

「……」

「……さて、次の『魔導獣機』が襲って来た時の為に体でも鍛えるか」

「秀ちゃん、ちょっと待ちなさい」

「何だよ、霧歌。お前もトレーニングに付き合うか？」

「何トレーニングをするという前提で話を進めようとしているのよ、秀ちゃんは」

「これぞ俺の本当の力――話の流れを我が手中に収める秘儀、『川（リ）の如き話術（バートーク）』とはこの事だ」

「もう……また秀ちゃんは。カッコイイ技名で私を誤魔化そうったってそうは行かないんだから」

……。

「……スマン、霧歌。やっぱり今のは無しにしてくれ」

「えーっ？　『川の如き話術』を？　カッコイイじゃない、どうして無しにしちゃうのよ、『川の如き話術』」

「霧歌、それ以上言うな。それ以上言われたら俺は羞恥で死んでしまう」

「プッ……『川の如き話術』（笑）だって」

「オイ、そこの金髪少女。笑うだけなら未だしも（笑）を付けてんじゃねえ」

……ていうか、川と言えば。

「……あっ、そうだ。折角、敵も居なくなって安全になった事だし――ここは、お祝いも兼ねて明日は皆で泳ぎに行こうぜ！」

「ええっ！？　お、泳ぎに！？」

そんな素(す)っ頓狂(とんきょう)な声を上げたのは意外にも霧歌だった。

「ああ、泳ぎにだ――って、霧歌は別に泳げたよな？　海でもプールでも」

「そ、それは、勿論だけど……そんな、急に言われても、私、困るんだけど」

「困るって……何が？」

「いや、その……」

そう言って、霧歌は自分の体を――主にお腹の辺りを気にしているように見えた。

何なのだろうか。

「そっか……いや、別に俺が急に泳ぎに行きたくなっただけだし。霧歌は無理して付いて来なくても――」

「いや、行く！　行くよ！　一度誘われたからには付いて行くのが男の定め！」

「そ、そうか……ていうか、霧歌は女だよな？」

まぁ、これで霧歌も同伴する事が決まったのだが――問題は。

「ウニ？　何？　明日皆で海栗（うに）を食べに行くの？」

「……」

やっぱり、この未来系魔法少女は海の存在を知らなかったか……。

「……オイ、ウリア。お前プールって知ってるか？」

「ウール？　羊の毛の事？」

「未来から来たから仕方ないかも知れないが、それにしてもその知識の偏り方は一体全体どういう事だ」

つーか、どうして海栗を知っているのに海を知らないんだよ。

海栗の名前の中にも入っているというのに。

それ以前に、お前最初に『魔導獣機』と戦った時に海岸という言葉をちゃんと理解していたよな？

海岸を知っていて海を知らないなんて事があるのだろうか……。

「……あのな、ウリア。海栗――間違えた、海というのはだな……えっと、つまり」

あれ、おかしいな。

案外、海というものを説明しようとすると難しいものがあるぞ。

さて、どう説明したものか――。

「海というのは……そうね、イメージ的には大きな水溜りを連想すれば良いかな。その水溜りに水着という泳ぐ為の専用の洋服みたいなものを着て、それから皆で水遊びをするのよ」

「えっ！？　何それ！　超面白そう！」

「……」

霧歌の素晴らしい説明によって目をキラキラと輝かせているウリア

なのであった。

……つーか、俺の立場は？

「ねぇ、秀！　明日皆で海行くの！？　それじゃあ、私も連れて行ってよ！」

「解ってるって。最初からそのつもりで言ったし」

「7月だから、まだ人余り居ないだろうし……プライベートで遊びに行くなら良いタイミングかもね」

「そうだな……俺もカメラの準備を怠らないようにしないと」

「……」

「……」

「……」

……あれ、何だろう。

ウリアと霧歌の視線が痛い。

ていうか、若干体に刺さっているような気がする。

気のせいだろうか。

「……ねぇ、秀ちゃん」

「な、何だ？　霧歌」

「ちょっとそのカメラ、見せてよ」

「お、おう、解った」

その霧歌の提案に俺は二階の部屋からカメラを持って来た。

ちなみに、デジタルでは無く一眼レフの一般的な真っ黒い方のカメラである。

値段は――忘れたけど、かなりしたのではないだろうか。

「ふーん、中々良いカメラだね、これ」

霧歌は俺の一眼レフを掌で裏、表、更には側面など色々な部分を見ながら感心したような声を上げて――。

「ウリアちゃん、パス」

――ウリアの方へと一眼レフを放り投げた。

そして、宙を舞った俺の大切なカメラは。

「あっ、手が滑っちゃった～」

不意にウリアの右手に出現した炎の剣に両断されてしまった。

「わ――――――――っ！　お、俺の！　俺のカメラが！　ウリアお前何て事しやがる！」

「ゴメン、秀。手が滑って炎の剣を出しちゃった☆」

「出しちゃった、じゃねーよ！　手が滑ってそんなものが出るなんて聞いた事も無いわ！」

「……てへぺろっ☆」

「打ん殴るぞお前！」

しかし、実際に殴った所で――まぁ、殴るつもりは毛頭無いが――二つに割れたカメラは戻って来ない訳で。

「……はぁ」

どうやら、明日はカメラ無しで霧歌やウリアと一緒に海へと出掛ける事になりそうだ。

俺は単に思い出を写真に収めたかっただけなのに……。

……。

いや、本当だって。

変な下心なんて無いって。

本当だって。

7月30日

7月30日。

この日は、俺はウリアと霧歌を交えて何ともリア充な海水浴を味わう――つもりだったのだが。

（――台風●号は勢力を拡大しながら、本州を次第に北北東へと向かっており――）

「……」

そんなテレビから聞こえてくるニュース速報を耳にしながら俺はリビングの外に広がる灰色の空と降り頻る雨、更には吹き荒れる突風――それらが一堂に会している景色をただ無言で見据えていた。

まぁ、昨日の三つ巴の話ではないのだが。

……ていうか。

実際問題、本当に愕然としているのは俺では無くて。

「……」

多分……今、俺の隣で佇んでいるウリアの方だろうなぁ。

俺は横目で先ほどから外の景色を眺めたままで一言も何も喋らないウリアを見据える。

そして、俺は同時に昨日の――霧歌が帰った後の事を思い出していた。

◆◆◆

物語の時間軸は昨日へと遡り――時は、霧歌が帰った後だから、午後3時くらいか。

その辺りで、俺はとある重要な事に気付いたのである。

「そういえば……海には水着が必要なんだけど。ウリア、お前水着なんか持っていないよな？」

「当たり前でしょ。言っておくけどね、私はこの時代に娯楽を求めに旅行しに来た訳じゃないのよ？」

「いや、それは解っているけど……だったら、どうするんだ？」

「えっ、何が？」

「だから、水着だよ、水着。お前、水着が無いと海には入れないんだぞ？」

「ああ、何かそうらしいわね。でも、私は必要無いわよ。いざとなったらこのまま海に入るし」

「いや、それは駄目だろう。お前のその手首にあるヤツって――その、機械だよな？」

「ああ、これ？」

そう言って――ウリアは右腕の手首に装着されている携帯電話ほどの画面が付いた少し大きな腕時計のようなその機械を俺に見せてきた。

「まぁ、ね。これは機械よ。でも、別に心配要らないわよ。精々、周囲の魔力の濃度がどれくらいあるのかを計測して、私の力がその場所でどれほど発揮できるのかを知るくらいしか機能は付いていないから」

「物凄く重要なアイテムじゃねーか。この上無いほどに重要なアイテムじゃねーか。なぁ、ウリア。今度の俺の身の安全の為にもそれを付けたまま海には入らないでくれ、頼むから」

「もう、仕方ないわねぇ……それじゃあ、どうするのよ」

「そうだなぁ……どっちにしろ、服装もそのままじゃ駄目だろうかな。姉さんの部屋にまた着替えを探すついでに、水着も借りたらどうだ」

「実の姉の所有物をまるで自分のものみたいに言うのね、秀って」

「当たり前だろ。自分の家族の所有物は全て俺の所有物みたいなものだ」

「……今の言葉の“自分の家族の所有物”って所を“自分の姉の所有物”に置き換えて復唱してみて」

「あん？　自分の姉の所有物は全て俺の所有物みたいなものだ――これでいいのか？」

「うわぁ……実の姉の洋服だけに飽き足らず、下着や水着までも自分のものと称するなんて、秀はやっぱり生粋の変態だったのね」

「お前が言わせたんだろうが！　何だその誘導尋問は！　告訴するぞ！」

まぁ、余りに見え透いたその罠に引っ掛かってしまった俺も俺で悪いのだが。

「……そういえば、一つ気になったんだけどさ、ウリア」

「何よ、秀」

「お前のその服――どうやって着てるんだ？」

「ああ、これ？　これはね、私の胸元に六角形の中くらいのボタンみたいなものがあるでしょ？」

「ああ、あるな」

「それを押したら、私の着ているこの戦闘服が自動で脱げる機能になっているのよ」

「そうなのか」

「そうなのよ」

俺はウリアの胸元にあるその六角形のボタンのようなものに触れた。

すると、そのボタン全体が何やら光を放ったと思ったら――ウリアの着ている赤いライダースーツのようなものは一瞬にしてそのボタンの中に吸い込まれてしまった。

肩や腰、膝など――それぞれの防具のようなものは吸い込まれたライダースーツに引っ張られて六角形のボタンのようなものの周囲に集まり、合体する。

――そして。

後には一糸纏わぬ――つまりは、全裸のウリアだけが残っていて。

「なっ……ななっ、なっ……！」

俺の前でウリアは顔を真っ赤にして何やら体を震わせ始めた。

どうしたのだろうか。

「何だ、寒いのか？　仕方ない、俺がお前をそっと抱き締めて――」

「何やってくれるんだこの変態がぁあああああああああっ！」

ウリアのその叫び声が響き渡り――ウリアが前方へと突き出した右足は見事俺の腹部を捉える。

「ぐふっ！？」

そして、俺は凄まじい衝撃を腹部に感じながら後方へと吹き飛ばさ

れて――リビングの壁に背中をぶつけて床にうつ伏せに倒れ込んだ。

すると、間髪入れずウリアの怒声が聞こえてくる。

「何すんのよ！　この変態！　バーカ！　死ね！　一回死んで、ついでにもう一回死んで、生き返ってからまた死ね！」

「いや、あの、本当に申し訳ない……単なる出来心だったんです」

「出来心で済めば警察は要らないのよ！　このバーカ！　変態！　さいってい！」

「押したらどうなるかなぁ、って。そしたら、ボタンを押した後の世界には桃源郷が広がっていましたとさ、お終い」

「何を童話チックに語っているのよ！　ていうか、何を勝手に話を終わらせようとしているのよ――って、顔を上げるなっ！　この変態！」

「痛いっ！」

ウリアはあの赤いライダースーツが変形した防具の塊を俺の顔面に投げ付けてきた。

7月30日？

そして、顔面にその防具の塊を受けた事で顔を伏せた俺の頭の上でウリアの足音が聞こえて来た。

おそらく、たった今投げた防具の塊――もとい、自分の洋服を拾いに来たのだろう。

それから、足音は俺の傍から段々と遠ざかって――そして。

「良い！？　秀！　私がこれを着替え終えるまでにまた顔を上げたら、あなたの目を焼き払うからね！」

「……ハイ、了解しました」

俺はウリアの脅し（脅迫と言ってもいい）に素直に応じる。

無論、顔は床に伏せたままだ。

顔を上げれば目の前には同世代の女子が着替えているという全裸を見るよりも何だか興奮するシチュエーションを見す見す逃すのは勿体無いが――って、いやいや、そうじゃなくて。

俺は単に目を焼き払われたくないからだから。

単に、高校二年生にして視力を奪われたくないだけだから。

それだけだから。別に変な下心なんてものはないから。

本当だから。

「……着替え終わったわよ、秀」

「えっ、マジで？」

何の衣服の擦れる音も聞こえなかったのだが――まぁ、衣服ではないから当たり前か。

いや、でも、しかし。

「……まさかお前、俺に意図的に自分の裸を見せて俺の目を潰そうという魂胆（こんたん）じゃないだろうな」

「誰がそんな捻くれた悪知恵を思い付くか。秀じゃあるまいし」

「そうだな……まぁ、それはそうだ」

そこで納得してしまう自分も何か悲しいが。

そんな事を思いながら俺はその場に立ち上がるとウリアの胸元辺りを見据えて――。

「……ん？　あれ？　ウリア、その胸元辺りの六角形のボタンを押すとどうなるんだ？」

「何を忘れたフリをしてもう一度私の服を脱がそうとしているのよ！　本当に記憶が飛ぶまで蹴り続けるわよ！」

ウリアは自分の身を護るべく両腕で胸を隠すような仕草を見せる。

しかし、その行動によってウリアの胸は押し潰されてより一層エロい感じに――って、いやいや、俺は何を言っているんだ。

「全くもう、秀は、え、エッチなんだから……」

「……」

そんな若干頬を赤らめてとても恥ずかしそうに体を捩じらせるウリアに不覚にも心がキュンと来たのはきっと俺の気のせいなので華麗にスルーして貰って構わない。

「……ウリア」

「な、何よ。もうこの服は脱がせないわよ」

「いや、何と言うか……今の表情、合格だ」

「合格!?　私、知らない間に何の試験に合格してしまったの!?」

「日本全国萌える女子の表情コンテストでお前は百点満点で合格した」

「何そのコンテストは！　現代の日本にはそんなに馬鹿げたコンテストが開催されていると言うの!?」

「馬鹿げたとは何だ！　“萌え”は今の日本で最も追求すべき事柄なんだぞ！」

「いや、だから、そんな馬鹿げた事を力いっぱい語られてもなぁ…

…」

「日本全国萌える女子の表情コンテストで見事合格、及び、優勝したウリアさんには、優勝賞品として、胸元のボタンを押される権利が与えられます」

「放棄！　そんなものは貰った瞬間にすぐ放棄するわよ！　ていうか、もう二度と押させないって言ってるでしょ！」

「……ちっ」

「露骨に舌打ちをするな！　ていうか、早くお姉さんの部屋に行くわよ、秀！」

「そうか、今からウリアの嬉し恥ずかしコスプレ大会が開催されて――」

「秀？　何か言った？」

「いや、何でも無い。俺は何も言っていない。さぁ、姉さんの部屋に急ごうか」

ウリアからの問いかけに俺はとりあえず言葉を羅列させてそれを誤魔化しながらウリアと共に二階の姉の部屋に向かうのだった。

◇　◇　◇

ちなみに、これは余談だが、閑話休題の為に行間に挟んでいる三つ

の菱形（ひしがた）の色は物語が進行している時間によって変化する。

つまり、現代の時刻を語る際は黒い菱形を、未来、及び、過去の時刻を語る際は白い菱形を使っている。

だから、上の三つの菱形の色は別に配色を間違っている訳では無いから安心して欲しい。

そして、そんな注意事項を述べている間に俺はウリアと共に姉の部屋の前に辿り着いた。

今度は俺が部屋の扉を開けて先に部屋の中へと足を踏み入れる。

それに続いてウリアも部屋の中に入ってきた。

「ていうか、水着ってどこにあるんだろうなぁ……」

「えっ？　知らないの？　姉さんの洋服・水着・下着の全ての位置は俺の脳味噌に全て叩き込まれている――とか言っておいて？」

「俺はそんな変態染みた発言は生まれてこの方一度もした事は無い。事実を捏造するな、それを信じた人が居たらどうしてくれるんだ」

「心配しなくとも、私はそれを信じているから、安心しなさい」

「安心できねーよ。むしろ不安だよ。ウリア、今すぐに頭の中からその間違った知識を捨てるんだ」

「解ったわよ……えっと、真之乃秀は女子のお風呂を覗いたり、女子の服を無理矢理脱がせたりするような、そんな変態染みた人間で

は無い普通の真人間です――ハイ、捨てたわよ」

「よし、よくやった。流石はウリア――」

……。

「あっ、今お前、本来捨てるべきでは無い知識を捨てやがったな！？」

「真之乃秀は真人間である――私はそれを間違った知識と判別したので」

「その判別が間違ってるじゃねーか！　仕分けに失敗してしまっているじゃねーか！　ちゃんと自分の知識くらい自分で仕分けできるようになれよ！」

7月30日？

そんな会話を交わした後、俺とウリアは二人で部屋の中を隈なく捜索して――漸く水着を発見したの、だが。

「……ねぇ、秀」

「……何だ、ウリア」

「これ――ビキニ、って言うんだっけ？」

「ああ、そうだな」

「このビキニ……私の胸よりも、遥かに大きいん、だけど」

「……」

「……」

「……う、ウリア？」

「……何よ」

「ひ、人には……どうしたって、越えられない壁というものが存在してだな」

「……」

「し、心配するな。貧乳は逆にステータスとも言うぞ？」

「慰めの言葉なんて要らないわよっ、この馬鹿！」

目に涙を浮かべて俺にそう怒声を上げるウリア。

どうやら、自分よりも俺の姉の方がバストのサイズが大きい事が相当ショックだったらしい。

「……ま、まぁ、気にするなって。俺の姉さんは、同性の友達からも羨ましがられるほどの巨乳だったからな。お前の貧相な胸が到底通用しないのは仕方が――」

「貧相？　今貧相って言った！？」

「いや、言ってない！　言ってないから！　その右手に持った炎の剣を仕舞え！　リアルに危ない！」

「……良いもん、別に」

炎の剣を右手から消したウリアはその場にしゃがみ込むと床に人差し指で何度も円の形にグルグルとなぞり始めた。

典型的な落ち込んでいる際に人間が見せる仕草であった。

つーか、お前未来人のくせに遣る事成す事がいちいち古臭いんだが。

「別に、胸があったって、戦闘の邪魔になるだけだし。胸が大きいと肩が疲れるとも言うし。だから別に……別に、胸なんか、胸なんか要らないし……うう……！」

「……」

そして、何かガチで泣き始めるウリア。

赤いカーペットの上にウリアの目から零れ落ちた涙がポタポタと次々に落下してはそこに吸収されていく。

「お、オイ、ウリア、泣くなよ……。し、心配するな、俺は小さい胸の方が好きだぞ？」

「ぐすっ……ほ、ホントにぃ？」

「あ、ああ、本当だとも。俺は巨乳よりも貧乳の方が好きなんだよな、実は。ていうか、案外この日本で巨乳と貧乳でアンケートを取ったら貧乳の方が好きだという人で溢れ返ると思うぞ？」

実際の所は五分五分の良い勝負――と言うか、微妙な結果になりそうだが。

「ぐすっ……それじゃあ、秀は貧乳の方が――小さい胸の方が、好き、なの？」

「勿論だとも。俺は根っからの貧乳派だよ。巨乳はそこから育つ事は稀（まれ）だが、貧乳はまだまだ育つ余地があるだろう？　俺が貧乳を好きなのはそこに理由があるんだよ」

「……ぐすっ」

――そして。

「そ、そっか……えっと、何かありがとね、秀。元気、出た」

「お、おう、そうか。それは何よりだ」

「……でも」

「……でも？」

「秀みたいな……変態に私の胸を好きだと言われても余り嬉しくないなぁ……」

「……」

俺はウリアの脳天に拳を振り下ろした。

「いったぁい！　ちょっと、何て事してくれるのよ！　少し前まで本当に泣いていたか弱い女の子に！」

「うるせえ、さり気無く俺の事を“変態”と呼んだ罰だ」

「何よ！　変態を変態と呼んで何が悪いのよ！」

「何を！？　いい加減にしろよ、この貧乳！」

「ひっ、ひんにゅ……！　そ、そっちこそ、いい加減にしなさいよ、この変態！」

「黙れ、この貧乳が！　まだ言うならもう一度服を脱がすぞ！」

「ひゃあっ！　ちょっ、もう本当に勘弁して！　お願いだから！」

割と本気で俺から距離を取り始めるウリア。

ていうか、今の俺の会話だけを切り取ると何だか俺がウリアの洋服をいつも無理矢理脱がしている変態みたいだな……。

以後、言葉には気を付けなければ。

「仕方ない……胸元のボタンを押すのはまたウリアが寝ている時にこっそり押すとして」

「……秀、今何か不穏な言葉を口走らなかった？」

「いや、何でも無いぞ？　俺は何も言っていない。これは本当だ」

「ていうか、私達この部屋で水着を探していたのよね？　全くもう……誰のせいでここまで話の流れが拗れてしまったのか」

「お前が勝手に胸の大きさがどうとかこうとか言って泣き始めたんだろうが」

「もう、『川の如き話術』の異名を持つのなら、この程度の話の流れくらいちゃんと操作しなさいよ」

「まだその二つ名を引っ張るのかよ！」

それはもう前回で使ったネタだからいいよ！

それ以前に俺の精神的に限界が来ているからもう使わなくていいよ！

じゃないと、俺の精神が本当に羞恥で崩壊してしまう！

7月30日？

「ていうか、どうするのよ。水着が無かったら海に入れないんでしょ？」

「そうだなぁ……おっ、何かあったぞ」

「……何その、水着」

「これは学校とかで使用される指定の水着――通称スクール水着、略称だとスク水だとか呼ばれていてだな。学校とかで着る為だけに作られた水着だが、案外海でも結構こういう水着を皆着ていたりするんだよ」

「その水着……そんなに着たら何というか、可愛く見えたりするの？」

「そうだなぁ……仮に俺がスク水姿のウリアの姿を見たら、そのままお前を家まで誘拐してしまうかもしれないほどに可愛いぞ？」

「解った、スク水は着ない、以上」

「……お前、今の俺の発言を聞いてそう決めたな？」

冗談のつもりだったのに……いや、半分は本気だけれど。

……さて。

「それなら、他に新しい水着を買いに行くしか手段は無いな」

「でも、私お金持っていないわよ？」

「何言ってんだ。俺が出すに決まってるだろ」

「えっ……い、良いの？」

「自慢じゃないが。お前も知っている通り、基本俺は家ではカップラーメンばかりで料理は作らないからな。安いカップラーメンばかり毎日買い込んで食べているから、それなりに仕送りの金が余っているという訳なんだ」

「おお……！　凄い、何か秀が今までで一番輝いて見える！」

「そうか。それはとても有り難いが、俺が水着を奢ってやると言った端からいつもとは真逆の態度になったのは何故だ？」

全く以て現金な奴である。

「今は……まだ3時半か。よし、それじゃあ、ちょっと遠出になるけど、今から水着買いに出掛けるか」

「うん！　そうしよう！　今すぐ行こう！　早速行こう！」

「待て。財布に金を補充する時間くらい作ってくれ」

そんな皮肉を言いながら俺は姉の部屋を出る。

後ろからは嬉しそうな満面の笑みでスキップをしながら付いて来るウリアの姿があった。

◇　◇　◇

少し長らく過去の話を語っているが、実際の所、俺とウリアが台風で海に行けなくなるのは周知の事実なので、少し物語を語るスピードを速めて――。

「わぁ――っ！　凄い、凄いよ！　秀、見て！　景色が後ろに流れて行ってるわ！」

「……そりゃあ、電車に乗ってるんだからな」

――速められそうにも無かったので、諦めて物語の続きを語る事にする。

俺とウリアは流石に家の近くに水着を売っているデパートは存在しないので、電車に乗って少し都会化している街へと出掛ける事にした。

そして、聞けばウリアは電車に乗るのが初めてだそうで。

２０５６年の未来にはこんな身近な技術まで失われてしまっているのか――まぁ、ウリアと一緒に飛んでみて解ったけれど、飛んだ方が電車に乗るより速そうだからなぁ、失われるのも当然か。

しかも、自分で飛べば金掛からないし。

そんな俺が現代の科学技術の将来についてしみじみと考えに耽って

いる内に電車は目的の駅に着いた。

俺とウリアは電車を下りて改札口を出る――その際、ウリアが切符を入れずに改札口を通ろうとして遮断機（と言っていいのか解らないが）で思い切り腹を打つというとても天然で可愛らしいエピソードがあったのだが――そこはあえて詳しくは語らないでおく。

そして、駅を出た俺は微かな記憶を頼りにしてウリアと共にどうにか目的のデパートに到着する事が出来た。

デパートの中の案内板に寄れば水着売り場は三階にあるらしい。

俺はエレベーターのボタンを押してその入り口の前でウリアと共にエレベーターの到着を待つ。

「……」

俺は周囲からの様々な視線がこちらに向けられている事を電車に乗っている時からずっと感じ取っていた。

いや、別に俺がどうとかではなく――問題なのはウリアの“服装”だった。

いつもの戦闘服で出歩くのは流石に周囲の視線を集めるので俺が姉の洋服に着替えてから家を出ようと提案したら――。

「ヤだ！　だって、一刻も早く水着が欲しいんだもん！」

――と、何だかんだで言い包められてしまったのである。

まぁ、実際問題ウリアは先ほどから周囲を頻りにキョロキョロと興味津々に見渡しているので、自分が見られている事に対して差ほど気になっていないようだけれど。

……隣でウリアと同伴している俺は気になるんだよなぁ、視線。

だって、一緒に居る時点で俺に向けられているのと殆ど変わらないからな。

そんな感じで俺が周囲の数多（あまた）なる視線にうんざりしているとエレベーターが漸くやってきた。

俺はウリアと共にエレベーターに乗り込むと三階のボタンを押して急いでエレベーターの扉を閉める。

エレベーターは扉をゆっくりと閉じて――そのまま上の階へと上昇を始めた。

「……エレベーターを見て驚かないって事は、流石に２０５６年の未来にはエレベーターという発明は生き残っているのか？」

「うん、流石にこれくらいの技術は生き残っているわ。尤も、最近ではエレベーターの価値も薄れつつあるけれど」

「まぁ、お前飛べるもんなぁ」

そんな会話を交わしている内にエレベーターが三階に到着し、俺達の前で扉が開く。

エレベーターを出てから少し歩いた所で俺達は早速水着が売られて

いる店を発見した。

「うわぁ……！」

目をまるで星のようにキラキラと光り輝かせながら周囲の至る所に展示された水着を見渡すウリア。

そんなウリアを見て、やっぱりこいつもただの女の子なんだなぁ、と俺はしみじみ思う。

そういえば、最近は忘れつつあったけれど、ウリアはただの俺と同じ歳の女の子なのだ。

魔術を使える――という点を除けば、だけど。

7月30日？

「ほら、さっさと選んで来いよ、ウリア」

「う、うん！　解った、行って来る！」

俺の言葉に二度ほど頷いたウリアは猛スピードで店内へと吸い込まれるようにして消えた――と思ったら、すぐに一着の水着を手にしてこちらに戻って来た。

「これに決めた！」

「えらく速いな！　どれどれ……って、赤いビキニか」

「どう？　どう？」

「良いんじゃないのか？　何と言うか、お前らしさが出ていて」

まぁ、赤いビキニだと単なる露出度が高くなったいつもの戦闘服にしか見えないかも知れないが。

「そっかぁ……それじゃあ、秀！　これ買って！」

「ハイハイ、解ったから。そう急かすな」

そう言いつつ俺はズボンの後ろポケットから財布を取り出しながらレジへと向かって――。

「あっ」

「えっ？」

――偶然、レジにて会計をしようとしていた俺の幼馴染、夜華霧歌と鉢合わせした。

◇　◇　◇

オチが解っているにも関わらず、過去編はまだまだ続く。

「き、霧歌、お前……何でこんな所に」

「……それはこっちの台詞よ」

そう言って――霧歌の視線は俺の手の中にある女物の水着と財布へと移動してから、再び俺の顔へと向けられて。

「……秀ちゃん、まさかそっちの趣味に目覚めたの？」

「お前、一体全体俺に対してどんな誤解を抱きやがった！」

「いや、だって、もう、この状況だけ見ればもうそういう風にしか見えないと言うか何と言うか」

「違う！　俺は女物の水着を買って家でそれを着るような変態じゃない！　ほら、明日海に行くから、ウリアの水着を買ってるんだよ！」

「あ、ああ、そういう事か。もう、秀ちゃんったら、ちゃんと説明してくれればいいのに」

「お前が勝手に勘違いし始めたんだろうが……」

まぁ、誤解が晴れたのならそれはそれで結構だが。

「秀ちゃん、先にお会計済ます？」

「いや、良いよ。お前から先に払えよ。レディーバーストという言葉もあるくらいだし」

「秀ちゃん、それを言うならレディーファーストだよ」

「ああそう、それそれ。俺はそう言いたかったんだ。初めて気付いた」

「自分が言おうとしている言葉くらい理解して喋ろうよ……」

霧歌は苦笑しながらレジに水着を提出した。

「ていうか、ウリアちゃんお金持っていなかったよね？　まさか、秀ちゃんがお金出したりするの？」

「仕方ないだろ。そうしないと、ウリアだけが明日泳げなくなるんだから」

「……フフッ」

「……何が可笑しい」

「いいや、別に」

笑みを浮かべたままレジに財布からお金を出す霧歌。

「秀ちゃんって……やっぱり、優しいんだな、って」

「優しい訳じゃないよ。ただほっとけないだけだ」

「それを世間一般的には優しいって表現するんだよ、秀ちゃん。……ハイ、私は終わったから、次どうぞ」

水着の入ったレジ袋を片手に霧歌は俺にそう促してきた。

「ていうか、秀ちゃんがここに居るって事は……ウリアちゃんも居るんだよね？」

「ああ、店の外で待ってると思うぜ」

「それじゃあ、秀ちゃんの会計が終わるまで私ウリアちゃんと話してくるね」

「ああ、解った」

俺は店の外へと出て行く霧歌の背中を見送る。

そして、俺はレジにウリアが選んだ赤いビキニを提出するのだった。

◇　◇　◇

俺が会計を終えて店の外に出ると、店の前にある木製のベンチでウリアと霧歌は何やら楽しそうに話していた。

ていうか、何度も言うけどお前等この前――と言うか、昨日出会ったばかりなんだからな？

外見だけは数年来（すうねんらい）の友達の雰囲気を醸（かも）し出しているよ、この二人。

「……あっ、秀！」

すると、俺の存在に漸く気付いたウリアがベンチから立ち上がってこちらに駆け寄って来た。

「ちゃんと買って来てくれた！？」

「当たり前だろ。買うと言っておいて買わないという意地悪を俺がすると思うか？」

「思う」

「即答するな」

「ほら」と俺は買って来た水着をウリアにレジ袋ごと差し出す。

「あ、ありがと……うわぁ……！」

早速、レジ袋の中からその赤いビキニを取り出したウリアは顔をキラキラと輝かせる。

本当に精神的には完全に子供だな、こいつは。

年齢的には俺と同じ――戦闘能力では俺よりも遥かに上だというのに。

精神は本当に、子供だ。

まるで――精神は子供のまま、魔術的な知識や戦闘能力だけを詰め込んでいきなり成長させたみたいな。

そんな感じ。

7月30日？

「秀、これで私も海に入れるんだよね！？　秀や霧歌と一緒に海に入れるんだよね！？」

「ああ、勿論だとも。お前は明日海に入れる。この俺が保証してやる」

「そっかぁ……エへへ。楽しみだなぁ……」

赤いビキニを抱き締めながら満面の笑みを浮かべるウリア。

どうやら、見る限り本当に心の底から楽しみにしているようだ。

「……」

明日はちゃんとウリアが海を満喫できるように俺も何か頑張らないとな……。

俺はウリアを見ながらそんな事を思った。

◆◆◆

まぁ、現実には台風で海には行けないというオチが待ち構えていたのだが。

「……お、オイ、ウリア？」

そして、俺はこの章が始まった冒頭から今の今までの回想シーンが終了するまで一言も喋らないウリアを振り返る。

しかし、その俺の問いかけにもウリアは窓の外の暴風雨の方を見たまま一向に言葉を発しようとしない。

「……」

つーか、一言でも良いから何か喋って下さい。

でないと怖いので。何か。

お前が黙っているのって何か物凄く怖いんだよ、ウリア。

すると――そんな俺の思いが届いたのか漸くウリアはその堅く閉ざしていた口を開いた。

「……ねぇ、秀」

「お、おう。どうした、ウリア」

「今日海に行けないのって……その台風ってもののせいなのよね？」

「ああ、台風のせいだ。外でこんなに風とか雨とかが吹き荒れているんじゃ、海どころかおちおち外も出歩けないからな」

「台風って――いわゆる、ハリケーンみたいなものなのよね？」

「まぁ、そうだな。アメリカでは台風の事をハリケーンって呼ぶら

しいし」

「……そっか、解った」

「……解った――って、何をだ？」

「ちょっと今から、外に出て台風を消し飛ばしてくる」

「待て！　落ち着け！　冷静になれウリア！」

何やら不穏な事を言い始めたウリアを必死に押さえる俺。

「離して、離してよ！　だって、台風が無くなれば海に行けるんでしょ！？　だったら、私の力で台風を消し飛ばせばいい話じゃない！」

「確かにそれはそうだが、そういう訳も行かないんだよ！　大体、台風が突然消えたらそれこそまたこの前のお前が焼き払った森林みたいに大騒ぎになるだろうが！」

「知らないわよ！　私は自分の娯楽の為なら幾ら未来が変わろうったって構わない！」

「お前、今物凄く最低な事を言ったぞ！　自分の私利私欲の為にこの世界の未来を棒に振ろうとするな！」

「だって、あれだけ楽しみにしてたのに！　新しい水着も買ってあれだけ楽しみにしてたのにぃ！」

「……まぁ、一章を丸々注ぎ込まないと行けないようなボリューム

の経緯が水の泡になるのは確かに悲しいけれど。それでも、台風を消しに行くな。これ以上の騒ぎはご免だ」

『台風を消す少女！』――なんて記事が新聞の一面を飾るのだけは避けなければ。

「ああもう、解ったから。それじゃあ、また今度行こうな？　夏休みはまだまだ日数あるんだし、我慢してくれよ。な？」

「ううー……ほ、本当に？」

「ああ、今度俺がまた海に連れて行ってやるよ。保証する」

「……何か、昨日もそんな事を言われて、それなのにこんな状況に陥っているような気がする……」

「……き、気のせいじゃないか？」

俺はウリアから目を逸らしながらそう言った。

あからさまな誤魔化し行為だった。

しかし、気が動転しているのかウリアはその事にも全く気付かずに。

「うん……解った。秀がそう言うのなら、そうする」

「まぁ、元気出せよ。今日はお前の好きなシーフードを作ってやるから」

「お昼？」

「ああ、勿論。お昼だけには飽き足らず、夕飯もシーフードを作ってやるよ」

「……いや、夕飯は“しーふーどー”じゃなくてスタンダードが良い」

「……ああそう」

……ウリアは欲望に忠実な少女なのであった。

そして、そんな時である。我が家のインターホンが鳴ったのは。

「おっ、誰か来た……誰だろうな、こんな台風の時に」

「タクシー会社の人が私に気を遣ってタクシーを派遣してくれたとか」

「そんな訳あるか。お前は日本国民全員に認知されているほどの有名人か何かか」

つーか、それ以前にタクシーに乗って行ったとしても海は多分荒れているだろうから入れねーよ。

お前は流されても平気かも知れないが俺が死ぬわ。

そんな事を思いながら俺は玄関へと向かい、扉の鍵を解除する。

「お邪魔しまーす」

すると、玄関扉の向こう側から現れたのは霧歌だった。

7月30日？

傘を持っているようだが――この台風の中では余り活躍出来なかったのだろう。

霧歌の体は雨に濡れていて、それによって透けた洋服の下にはピンク色の下着が――。

「秀ちゃん、一体全体どこを見ているのかな？」

「……えっと、ヴァルハラを」

「へーっ、『神の宮殿（ヴァルハラ）』、ねぇ……」

「いや、色的には桃源郷なのかな？」

「秀ちゃん」

「……ん、ゴホン。それで霧歌。そんな事よりも、お前は一体全体どうしてこんな台風の中、俺の家を訪ねて来たんだ？」

「うーん、何と言うか……我ながら名案を思い付いちゃって」

「名案？　この台風の中、海に行く為のか？　それなら俺もたった今思い付いたけど」

「私が思い付いたのはそういう事じゃないんだけど……まぁいいわ。秀ちゃんの考えから聞かせて貰いましょうか」

「要するに、水着で泳げればいいんだろ？　それじゃあ、皆で水着になって今から風呂で泳ごうぜ！」

「秀ちゃんの考えを聞こうとした私が馬鹿だったよ……」

その場で項垂れながら呆れ返ったため息をつく霧歌。

「……と、言うのは冗談で」

「嘘。絶対半分は本気だったでしょ」

「半分じゃねーよ。三分の二は本気だった」

「半分以上じゃない」

……。

「……そ、それで？　お前の方は何だ？　その名案とやらを聞かせて貰おうじゃないか」

「それはねぇ……」

そう言いながら、霧歌は背中のリュック（今更ながらその存在に気付いた。いや、他の部分に気を取られていた訳では決してない）を下ろし始める。

そして、霧歌はその中から学校で使っている数学の教科書を取り出して――。

「こんな台風の中で私が秀ちゃんの家に押し掛けちゃえば、逃げ場

もどこにも無いし、二人で宿題に集中できるわよね？」

「……ちょっと、俺今からウリアに頼んで台風を消し飛ばして貰うように頼んで来るわ」

「待ちなさい」

俺は洋服の首根っこを霧歌から掴まれた。

「嫌だ！　離せ、霧歌！　俺は絶対に宿題などしない！」

「秀ちゃん。夏休みだから、全く遊ぶなとは言わないけれど、一日くらい宿題とか勉強とかで使ってみたらどう？」

「却下する」

「その言葉を出すまでに一秒と掛からなかったね……秀ちゃん。私、何だか泣きたくなってきたよ」

「とりあえず、俺は宿題なんてしない。夏休みが終わってから、一度宿題を忘れた後に与えられる猶予（ゆうよ）期間で俺は宿題を終わらせて――」

「秀ちゃん」

その言葉と共に俺は霧歌から体を後ろに引かれて――その霧歌に倒れ掛けた体を受け止められる。

その際、霧歌の胸が俺の背中に当たって――。

「さっきの『神の宮殿』――色的には桃源郷だっけ？　あの事を忘れて欲しければ、私と一緒に宿題をやった方が身の為だと思うよ？」

「……いや、しかし」

「さもないと、ウリアちゃんに言い付けちゃうよ？」

「……りょ、了解」

……ここで、俺は改めて理解した事が一つある。

霧歌は怖い。

何だかんだ言って怖い。

今だって俺の事を脅迫してきたしな。

それ以前に、先ほどの事をウリアに言い付けられてしまっては俺の命が危ないのでとりあえず、不本意に渋々と嫌々ながらも霧歌と共に俺はその後勉学に励む事となった。

機械仕掛けの戦士

7月31日――。

「秀！　お腹減った！　“しーふーどー”を作れ！」

「惜しいな。最後の言葉が命令形じゃなければ俺は作ろうと努力はしていた」

「命令形じゃなくても作らないんじゃない！」

「ていうか……お前がこの時代に来てもう4日だぞ、4日。そろそろカップラーメンの作り方くらい覚えてくれよ」

「嫌よ、覚えないわ。だって覚えたらもう秀が朝食・昼食・夕食を作ってくれなくなるじゃない」

「自堕落にも程がある！　ていうか、そんな裏があったのなら本当に今度から作らねーぞ、お前のご飯だけ！」

「嫌よ、拒否権を発動するわ」

「お前にそんな権限を与えた覚えは無い」

「残念だったわね。拒否権というのは私の有する魔術の内の一つよ」

「何だと！？　魔術の中にはそんな便利なものまで存在するのか！」

「嘘だけどね」

「嘘!?　お前、俺の事を騙しやがったな!　折角今、拒否権の使い道をあれこれと考えていた所だったのに!」

「……ちなみに聞くけど、秀は拒否権という魔術が存在したとして、それを一体何に使おうと考えた訳?」

「まぁ、一つ礼を上げさせて貰うなら……あれだな。お前に対して拒否権を発動して、俺がその六角形のボタンを押す手を拒否しないようにする」

「魔術を変態染みた用途(ようと)に使用しないで!」

「良いじゃねーか。どうせ、俺が復活させないと魔術なんてこの世に蔓延(はびこ)らないんだろ?」

「何か開き直り始めた!?　そんな理由でセクハラ行為を正当化するのは止めてよ!」

まぁ、そんなこんなで――繰り返すようだが、7月31日。

7月最後のその日は台風一過で天には果てしなく澄み渡った青空が広がっていた。

燦々(さんさん)と太陽の光が地上に降り注いでいる――まぁ、太陽は別に悪気がある訳では無いのだろうけれど、夏の太陽の光は人間も含めて地球上に存在する全ての生物達には少しばかり強過ぎる。

一時間ばかり外を出歩くだけで体が干上がってしまいそうな――そんな熱帯に居るかのような暑さを夏の太陽は地上に齎(もたら)す。

少しばかり過言のような気もするが。

ていうか、俺達普通の人間の体が干上がりそうならばゾンビとかは一体全体どうなってしまうのだろうか。

一瞬にしてゾンビからミイラへと変貌を遂げてしまうのだろうか。

何となく、そんな事を考えてみる。

ちなみに、これは決して尺稼ぎ――もとい、文字数稼ぎでは無い。

決して。

「秀～、“しーふーどー”、いつもの場所に置いてないよ～？」

「えっ、マジで――ていうか、お前いつの間にキッチンに行きやがった」

「秀が何か適当に変な言葉を並べて文章稼ぎをしている間に」

「文章稼ぎとか言うな。俺はただ単に……そう、哲学を語っただけだ」

「太陽の光が持つ熱の強弱でゾンビがミイラ化するのか否かなんて哲学でも何でも無いわよ」

「心を読まれている！？」

「哲学でも何でも無くて、戯言――いや、それよりも下の存在よ」

「戯言よりも下！？　お前、流石にそれは言い過ぎだぞ！」

「大体、秀が哲学を語るなんて似合わないわよ。ていうか、むしろ、語られる哲学が可哀想だわ」

「哲学に可哀想も何もあるか！　つーか、そんな言われ方をされている俺の方が可哀想だろ！」

「秀の語る戯言なんて所詮はぞんざいな存在よ」

「上手い事言ってんじゃねーよ」

俺にとっては全然全くこれっぽっちも上手くは無いのだが。

「ていうか、どうして“しーふーどー”が無いの？　この前買いに行ったばかりじゃない、カップラーメン」

「それはえーっと……あれだ。俺はいつもシーフードを食べないから、多分その時には一個しか買わなかったんだと思う」

「もう……全く、使えないわね。流石はぞんざいな存在だわ」

「誰がぞんざいな存在だ。確かに語呂は良いかも知れないが、それを連呼するのは止めろ。俺が心の傷が原因で死んでしまったらどうするんだ」

「大丈夫よ。秀は心の傷如きじゃ死なないと私は信じているわ」

「信用してくれるのは有り難いけど、そんな勝手な信用なら俺は要

らない」

「だから、私はこれからも秀の心を中心に攻撃するのよ」

「何をさり気無く悪質な決意表明を行ってるんだよ！　ていうか、俺の心が強いとか云々（うんぬん）はお前が勝手にそう思い込んでるだけだからな！？　逆に言うと俺のハートはガラス製だからな！？」

「ガラス製と言うか障子紙でしょ？」

「障子紙！？　お前、俺の心に何て事を言うんだ！」

障子紙は流石にねーよ！

流石の俺の心でもガラスくらいの耐久力はあるよ！

「しかし、“しーふーどー”が無いのか……仕方ない、それじゃあこうしましょうか、秀」

「一体全体どうするんだ」

「秀がまたスーパーで“しーふーどー”を買ってくる」

「まぁ、それに落ち着くわな。最終的に」

つーか、それ以外に手段は見つからないと思うし。

「解ったよ……まぁ、ウリアー――もとい、女子から罵倒され続けるという事は案外心が躍るものだが――」

「秀？　今何か変態染みた発言をしなかった？」

「間違えた。女子から罵倒され続けるというのは余りやぶさかではないし、俺のガラスのハートが耐え切れないから、素直に俺はスーパーに行く事にするよ」

「何だ、私の聞き間違いか。また何か秀が変態発言をしたら霧歌に報告しようと思っていたのに」

「それだけは勘弁してくれ。ていうか、お前等いつからそこまでのコミュニティを形成してしまうほどに仲良くなったんだよ」

「私達、秀を更生させる為に同盟を組む事にしたの」

「更生って言うな。俺はただ日々を素直な気持ちで生きているだけだ」

「要するに、欲望に忠実に生きているから変態染みた行動を思わず取ってしまうという事なのね？」

「さーて、買い物に行って来るかー」

俺はその場をあからさまに誤魔化してスーパーへと急ぎ足で出掛けるのだった。

◆◆◆

スーパーにてシーフードのカップラーメンをとりあえず三つほど買い込んだ俺は茹(う)だるような夏の暑さの中を一人歩いていた。

俺が今歩いている住宅街の通路には誰も居ない。

人っ子一人居ない――人影すらも、見えない。

おそらく――というか、確実に皆家の中でぐったりまったりと過ごしているのだろう。

冷房を利かせた部屋の中で。

俺の家にも勿論クーラーはあるのだが……電気代を考えるとまだ点けるには至らないか。

ていうか、まだまだクーラーなんか点けなくても大丈夫だしな。

扇風機もあるし、クーラーの出番はまだまだ遠いか。

まだ7月だからか、まだ比較的騒がしくない蝉（せみ）の声を聞きながら俺がそんな事を思っていると。

ふと、前方に佇んでいる一人の男を俺はその視界に捉えた。

最初は、その人物の性別を俺は女だと勘違いした。

何故なら――その男の髪は女のように長くて、後ろで一つに束ねられている（いわゆるポニーテール）髪型だったからだ。

ちなみに、前髪は真ん中から左右に分けられていた。

そして、髪型について俺が女と勘違いした点はもう一つ。

それは、その男の髪の色が“赤”だったという事。

その人物の顔が男らしい顔だったから俺は勘違いせずに済んだものの――って、あれ？

顔も何だか女らしい、と言うか、えらく整った顔立ちをしていないか？

あれ？　それなら俺はこの人物のどこを見て男だと納得したのか。

何となく――というものもあるが、やはり、胸の大きさだろうか。

女だったらあんな断崖絶壁は有り得ないだろう。

しかし、それだけで男と断言するのもおかしいか――女性だってあんなぺったんこな胸をお持ちの方も居るだろう。

あれ？　それじゃあ、今俺の正面に立っている人は男なのだろうか、それとも女なのだろうか。

あれ？　何か夏の暑さのせいか思考が上手く働かないぞ。

そして、その男か女か解らない人物（失礼極まりないが心の声という事でスルーして欲しい）の服装を俺はボンヤリと見据える。

あれは――軍服、だろうか？

軍服のような洋服だが、軍服特有の迷彩柄では無く――その人物が着ているものは黒一色だった。

上も、下も、靴までもが全て――黒。

まるで、それは軍服が森の木々に紛れ込む為の服装ならば、その黒い軍服は夜の闇に紛れ込む為の服装みたいな。

そんな事を――その色は思わせた。

そして、その男は俺の正面に佇んだままゆっくりと口を開く。

「……お前」

……ああ、何だ。

これでハッキリした。

今の声色からすれば、この人物は列記とした男だ。

全く、俺は一体全体何を勘違いしていたのか。性別を間違えるなんて失礼極まり無い――。

「真之乃秀、だな？」

「……」

――その男の問いかけが俺の聴覚器官に伝わった瞬間。

俺の頭の中でモヤモヤとしていた夏の暑さによる倦怠感（けんたいかん）はどこかへと吹き飛んでしまった。

待て……待て。

今、今この男は……俺に向かって、何と言った？

“誰の名前”を――呼んだ？

「……えっ？」

「……もう一度問おうか」

そして――男は再度、言う。

“その名前”を口にする。

「お前は……真之乃秀、だな？」

「……」

どうして――今日初めて出会ったような人物が俺の名前を知っているのか。

不意に目の前に舞い降りた現実に俺は戦慄する。

どうして、この男は俺の名前を知っている？

あっちは知らないけれど、俺の方は確実にこんな容姿の人物には会った事が無いはずなのに――って。

ちょっと、待て。

何か、こんな感じ前にも……無かったか？

そう、四日くらい前にもこんな事が無かったか？

四日くらい前にも――そんな感じの言葉を言いながら俺の目の前に現れた人物は――“少女”は誰だ？

そして、その少女は何と言っていた？

“魔法少女”というトンデモ設定だけでも十分過ぎるほどに十分なのに、その少女はそれに加えて自分を何だと言っていた？

「答えない、か――その沈黙を、俺は答だと受け取っても構わないのか？」

赤い長髪を携えた男は不敵に笑い、俺に再度そんな事を問いかけてくる。

機械仕掛けの戦士？

そして、そこで俺は漸く口を開き――言葉を発する事が出来た。

「お前……何者だ」

「……どうやら、漸く現実が頭に付いて来たらしいな。この夏の暑さで頭でもやられたか」

「そんな事はどうでもいい……俺は、今、お前に聞いてるんだよ。お前の正体をな」

「俺の正体、か。“この時代”の人間がどれほど理解できるか知らないが、かと言っていちいち全てを説明するのも気怠いからな。説明は省いて、専門用語で説明させて貰うぞ」

「構わねーよ。俺だって、一応そういった専門用語はこの四日間で聞き慣れているはずだからな」

「そうか……やはり、“お前”が」

俺の言葉のどこに反応したのか――男はニヤリと再度不敵な笑みを浮かべてこう言った。

「――俺は『混合機関　科学発展側』に属する“第一級（ファースト）”『機械（メカニ）仕掛け（カルウォーリア）の戦士』――ストレンドだ。宜しくな、真之乃秀」

「……やっぱり、お前は未来人か。という事は、お前は俺の事を殺しにやって来たんだな？」

「その通りだ。先日、この時代に送り込んだ俺の部下からの連絡が不意に途絶えてな。部下の生死を確認するついでに、今度は俺がこの時代に派遣されたという訳だ」

「その派遣された奴が、自分から俺の前に出て来るなんて……余裕だな。そんなにお前が未来から転送する『魔導獣機』には自信があるのか？」

「……お前は何を言っているんだ？」

赤い長髪を携える男――ストレンドは怪訝そうに眉を顰めて言う。

「俺が“そんなもの”に頼る訳が無いだろうが。“あんなもの”は、実際に自分の手で戦う事の出来ない腰抜けが使う兵器だ。俺をそんな弱小な人間と一緒にされては困るな、真之乃秀」

「……それじゃあ、お前は一体どうやって俺を」

「まぁ、“今の所”一般的な人間であるお前と、俺の戦闘能力の差は著しく差があるからな。その気になれば白兵戦でお前を片付ける事も出来るが……それは詰まらないだろう？　本当はお前の前で俺の手の内を少しでも明かしてやろうとは思ったが――“アレ”も傍におらず、尚且つ、“今のまま”のお前に、残念ながら俺は少しも興味が湧かないんだよ」

「……お前は一体、何を言っているんだ？」

今度は俺の方が怪訝な声を漏らしていた。

おそらくは表情も怪訝なものとなっている事だろう。

“アレ”という代名詞の正体は解る――おそらく、それはウリアの事だ。

しかし、こいつが――ストレンドがその後に放った言葉の意味が全く以て理解できない。

“今のまま”の俺？

それは一体全体――どういう事だ？

すると、ストレンドは徐に雲一つない快晴の空を仰ぐと――口の端に笑みを浮かべる。

「……オイ、真之乃秀」

「……何だ」

「今、俺はお前に言ったな？　俺はお前には興味が無い――手の内を明かせそうに無い、と」

「……ああ」

「……済まないが、その言葉を少しばかり撤回させて欲しい」

「お前には依然として興味は無いが」とストレンドは俺に右の掌を向けた。

その瞬間、俺はストレンドの右目が僅かに一瞬だけ光ったような気

がした。

――そして。

不意にストレンドの右腕の周囲の空間が歪み始めた。

その現象は『魔導獣機』が転送される際に空間に生じる歪みと似ていた――と言うよりも、同じようだった。

「――手の内を少し、お前に明かさせて貰うぞ」

そうストレンドが言葉を放った瞬間、ストレンドの右手に巨大なガトリング砲が出現した。

「なっ――――」

それ以上、俺が言葉を発する事は許されなかった。

何故なら、ストレンドの右腕に出現したガトリング砲から凄まじい音と共に数多の銃弾が俺目掛けて解き放たれたからだ。

勿論、高速で迫り来る銃弾を俺は捉える事は出来ない――しかし、俺は“銃で撃たれる”という出来事に条件反射で咄嗟に目を閉じる。

――そして。

「秀！」

頭上から聞こえてきた声に俺は閉じた目を再度開いた。

それと同時に目の前に降り立つウリア。

ガトリング砲から放たれた銃弾はウリアの目の前に現れた魔方陣に当たると一瞬にして焼失し、次々と消滅していく。

しかも、その魔方陣は一つだけでは無い――飛んでくるそれぞれの銃弾の進行方向の行き先に一つずつ小さな魔方陣が次々と出現しては、銃弾を焼失させると消えて行く。

一体どういう原理なのか。

それとも、そういう魔術なのか。

とにかく――理屈は解らないが、俺にはウリアが途轍もなく高度なスキルを使用している事を理解する事が出来た。

そして――不意に銃弾の嵐が止む。

それによってウリアの前に小さな魔方陣が現れる事も無くなった。

こちらに向けたガトリング砲を下ろしながら――ストレンドは言う。

「……やはり、実弾はお前には効かないか」

「……何者？　あなた」

「『混合機関　科学発展側』の“第一級”『機械仕掛けの戦士』のストレンド――と、言えばお解りかな？　ウリアール＝ブレイザー」

「ええ、勿論よ。ていうか、まさかあなたのような“第一級”の階

級を持つ『機械仕掛けの戦士』が派遣されるなんて――未来のあなた達はそこまで私達に手古摺（てこず）っていると思い込んでしまってもいいのかしら？」

「まぁ、そう思うのが妥当だろう。手古摺っていなければ、俺みたいなクラスの戦士は普通、派遣されないからな。……それに」

そこで一旦言葉を切ったストレンドは――静かに俺の方へと視線を向けてきた。

「……少々、未来で解った事があってな。“それ”を警戒する為にも、この俺がこの時代に派遣されたという訳だ」

「解った事……？　それは一体何？」

「俺達は敵同士だという事を忘れるなよ、ウリアール＝ブレイザー。俺はお前の敵で、お前は俺の敵だ――敵に俺がそう易々と情報を受け渡す訳が無いだろう」

「……まぁ、それはそうでしょうね」

「……まぁ、そう熱くなるな。ウリアール＝ブレイザー」

ストレンドがそう言った直後、その右腕からガトリング砲が出現時と同じように空間と共に歪んで――消滅した。

「今日はただの挨拶だ。それなりに収穫はあったがな……お前の力を少しでも垣間見れて良かった」

「あなたがこの時代にやって来たという事は、先日までこの時代に居たあなたの仲間がどういう末路を迎えたのかも承知しているのよね？」

「……だったらどうした？」

「覚悟しておきなさい――って、言ってるのよ」

「……それはこちらの台詞だ。ウリアール＝ブレイザー」

「精々首を洗って待っていろ」とストレンドは最後にそんな言葉を俺達に残して。

空間の歪みと共にその場から消えた。

「消えた……？　何だあいつ、未来に帰ったのか？」

「いいえ、違うわ。『空間移動（テレポート）』――魔術と科学を融合させた事で生み出された技術の一つで、二つの地点の空間を無理矢理歪ませて強制的に二つの空間同士の接続する――それで、一瞬にして別の場所へと移動する事が出来るの」

「へーっ、テレポート、か。これは、電車だけじゃなくエレベーターも２０５６年にはすぐお役御免になりそうだな」

「ていうか、秀！」

不意にそう声を上げたウリアは両手で俺の頬をガッチリと捕えると顔を眼前（冗談では無く本当に目の前）まで近付けてきた。

こんな時に不謹慎かもしれないが……その、キスされるかと思った。

ていうか、唇を突き出せばウリアの唇に届くような、ウリアの顔は今そんな近距離にある。

雰囲気に呑まれているのか――俺は唇をウリアに向かって突き出す事が出来なかった。

いや、シチュエーション的には正解なのだろうか、男としては何か不正解のような気がしてならない。

「大丈夫だった!?　怪我とかしてない!?」

「あ、ああ……俺は大丈夫だった――」

「良かった――――っ！」

「むぐっ!?」

俺が言い掛けた言葉はウリアのその叫びに――いや、ウリアの胸によって遮られた。

何故なら、ウリアは不意に俺の顔を自分の胸に押し付けるようにして抱き着いて来たからである。

いや、実際押し付けられていたのだけれど。

「良かった、本当に良かった……！　秀が帰って来るの遅いから、迎えに行こうとして外に出たら魔力の気配がして――ああもう、本当に間に合って良かった！」

「そ、そうか……それは良かったな」

「本当よ！　私もう……秀が死んじゃったらどうしようかと思った……！」

「そうだな……今、俺幸せ過ぎてもう死にそうだ」

目の前に三途の川じゃなくて、何か桃色の世界が見えてきた。

なるほど、人は主に胸に押し付けられたりして至福の時を過ごしながら死ぬ場合、死ぬ前に桃源郷を見るのか。

新発見だな。

……。

「ウリア。もうそろそろ俺の体を――いや、正確には顔を離せ。これ以上は危ない。何と言うか……理性が保てなくなりそうだ」

「えっ――ひゃっ！」

そして、漸く今自分がやっている事に気付いたのか――ウリアは途轍もなく可愛らしい声を上げて頬を軽く上気させた状態で俺から素早く離れるとアスファルトの上に着地する。

「……その、ご、ゴメン、秀」

「い、いや、礼は要らないって。つーか、礼なら俺が言うべきだし、二つの意味で」

「ん？　二つの意味で？」

「いや、何でも無い、忘れろ。つーか、忘れてくれ」

霧歌に今の発言を申告されたら堪らない。

「ていうかほら、シーフード、買って来たぞ」

「あ、ありがと……その、何度も言うけど、ゴメンね？　私が秀に買い物なんか頼まなかったら、こんな事にはならなかったのに」

「だから、別に良いって。どうせ、買い物に行かなくてもあのストレンドとか言う奴とはすぐに会い見えたんだろうし」

「それに」と俺はウリアに微笑んで言う。

「俺がまた誰かに襲われたら、その時はお前が――ウリアが俺の事を助けてくれるんだろ？」

「あ……う……！」

すると、ウリアは顔を真っ赤にしたかと思うと口をまるで地上に投げ出された魚の如くパクパクとさせて。

「あ……当たり、前じゃない！」

そう声を上げて俺から顔を背けてしまった。

「しゅ、秀がまた、ピンチになった時は……この私が、助けに来て上げるわよ」

「おう、宜しく頼むな、ウリア」

「……」

「……」

……いや、何で俺の方をジッと見つめて来るんだよ。

俺の顔に何か付いてるのか？

「……何だよ」

「べ、別に何でも……！　て、ていうか、早く帰るわよ！　早く帰って、秀には“しーふーどー”を作って貰わないといけないんだから！」

「ハイハイ、解ったよ……ていうか、今日はお前にも作り方見せるからさ。それでいい加減、作り方覚えろよ」

「だから、作り方は覚えないって。覚えちゃったら私の自堕落な生活が崩壊――じゃなくて、秀が私にカップラーメンを作ってくれなくなるじゃない」

「お前、今自堕落な生活が崩壊するって自分で言い掛けただろ！？」

「おっと、口が滑る所だったわ。危ない危ない」

「滑ってるよ！　既にお前の口は滑りまくってるよ！」

そんな会話をウリアと交わしながら――俺は先ほどのストレンドの事を思い出す。

（――“今のまま”のお前に、残念ながら俺は少しも興味が湧かないんだよ）

……あの時。

あの時、ストレンドが言っていた言葉の真意は一体何だったのか。

“今のまま”の俺とは――どういう意味なのか。

そんな思考を巡らせながら――俺はとりあえずウリアと共に自宅へと帰路を歩くのだった。

◆　◆　◆

「……なぁ、ウリア」

俺はカップラーメンが出来るまでの三分という時間を待つ間に今、頭の中に浮かんだ疑問をウリアに聞いてみる事にした。

ちなみに、俺とウリアは例の如くテーブルに、互いに向き合う形で座っていて――俺達の前にはそれぞれの昼食であるお湯を注ぎ終えたカップラーメンがあった。

更に余談を語っておくならば、俺はカレーで、ウリアはシーフードである。

「……何よ、秀。私はね、今一秒たりともカップラーメンから目を離す事が出来ないのよ」

「それじゃあ、離さなくていいから。ちょっと聞きたい事があるんだけどさ」

「何？」

「聞きたい事と言うか――その、俺、やっぱりこの前の話って理解できないんだよ」

「この前って、どの前の話よ」

「ほら、お前が森林ごと『魔導獣機』を操っていた奴を倒した時の話だよ。過去で死んだ未来人は歴史に残らないとか――そこら辺の話」

「ああ、そんな話もそう言えばしたわね……それで？　その話のどの辺りが理解できない訳？」

「あの時、俺はお前にこう言ったよな？　お前が倒したその敵は過去で死んだ事になるんだから、未来の本拠地に居る敵にはすぐにその事が解るんじゃないかって」

「ええ、そうね」

「そして、お前は俺にこう答えた――未来の人間は元々過去の世界に存在しない架空の人物みたいなものだから、例え未来の人間が過去で死んだとしても、その死んだ事実自体が残らないから未来に居る敵にその事実は伝わらない――だったよな？」

「うん、多分そんな感じ」

「でも、それってやっぱりおかしくないか？」

「だから、どこがよ」

「だって、確かにその未来の人間がこの時代で死んだ事はすぐには伝わらないかも知れないけどさ。いつかは――いつかの未来にはその事実は伝わっているんだろ？　それなら、その事が伝わった時点の未来からこの時代の過去に来たとすれば、やっぱり、あいつらは間髪入れずに俺達を襲って来るんじゃないのか？」

「うーん……秀のくせに難しい事を尋ねて来るわね」

「“秀のくせに”って言葉は余計だよ」

「確かに、秀の言う通りではあるわね。例えその人が死んでしまった事が“その時”には伝わらなかったとしても、“１０分後”にその事実が伝わってしまえば、その“１０分後”の未来からこの時代に来ればいい話だもんね」

「ああ、そうだろ？」

「でも……よく考えて、秀。それなら、どうして敵は――科学側の人間はその自分の味方が死ぬ前の時間に戻らないと思う？」

「それは……えっと」

……あれ？

「えっ……何でだろうな？　ていうか、そう言われてみればそうだな」

「その味方が死んでしまう前の時間に戻ればその味方を助ける事が出来るのに――どうして、敵はそれをしないのか」

「それはね」とウリアは言う。

「そうしようにも、それが不可能だからなの」

「……どういう、事だ？」

「『世界線（せかいせん）』――って言葉、秀は知ってる？」

「いや、悪いけど全く知らない。聞いた事も無い」

「それじゃあ、『平行世界（パラレルワールド）』は？」

「ああ、それなら流石に聞いた事ある。確か、この世界とは別にこの世界とはほんの少しだけ“何かが違う”世界の事だよな？」

「まぁ、概（おおむ）ね正解かな。この世界とは決定的に“何かが違う”世界――それが『平行世界』。例えば、日本の総理大臣が違っていたり、私達が愛用しているカップラーメンが無かったり――極端に言えば人間自体が存在していなかったり、『平行世界』というのはそういうものの事を言うわ」

「それで、その『平行世界』が今回の話に何か関係あるのか？」

「ええ、勿論よ。ていうか、関係無かったらこんな話しないわよ。秀の脳味噌の許容範囲（きょようはんい）を超えてしまうかもしれないのに」

「そうか、それはそうだな。そして、俺の脳の許容範囲はそこまで狭くは無いから安心しろ」

「でね？」とウリアは話の続きを語り始める。

「敵が過去で死んでしまった自分の仲間を助ける事が出来ないのは――不可能なのは、この『平行世界』が原因なの」

「『平行世界』が、原因？」

「『世界線』――過去から未来に向かって延びる一本の線。それが何らかの出来事によって、二つに分岐した事――それによって、『平行世界』は生まれるの」

「何らかの出来事って……例えば、何だ？」

「そうね。まぁ、何でも良いんだけど……簡単な例で言えば、誰かが死ぬとか、かな」

「誰かが……死ぬ」

「まぁ、だからそれだけが『世界線』が分岐する要因に成り得る訳じゃないんだけどね。例えば、いつも秀が学校とかスーパーとかで使っている道があるでしょ？　そのいつも通っている道順を――“使わないで”、左に曲がる所を右に曲がるとか、そういう事でも『世界線』は移動して、『平行世界』は生まれるの」

「えっ、そ、そんな事で？」

「そうよ。例えば――このカップラーメン」

そう言ってウリアはカップラーメンの蓋を剥がし始める。

そう言えば、もうそろそろ三分経つ頃か。

「秀がこのカップラーメンを箸じゃなく、フォークで食べる事でも、『世界線』は移動して、『平行世界』は生まれるし、今はテレビが点いていないけれど、今この時にテレビを点けるか否かでも『世界線』の変動によって『平行世界』が生まれるの」

「つまり、日々の生活の中で……次々と『平行世界』は生まれているって事なのか」

「そう。でも、『世界線』が移動して、数多の『平行世界』が生まれたとしても、その殆どの『平行世界』は全て同じ結果に辿り着く事になっているの。だって、カップラーメンを箸じゃなくフォークで食べた事で未来が完全に変動して――そうね、アメリカに大型ハリケーンが上陸しなくなるなんて、有り得ると思う？　いや、可能性的には０パーセントではないんだけど、そんな事は殆ど有り得ないよね？」

「それじゃあ……やっぱり、その『世界線』の変動で『平行世界』が生まれる事で未来がそこまで変わらないのなら、あいつらはどうして過去に死んだ味方を助ける事が出来ないんだよ」

「確かに、日常的な『世界線』の変動で創造される『平行世界』では未来そのものは変化しない――だけど、“非日常的”な『世界線』の変動ならば、その時に創造された『平行世界』の先に待つ未来は――変化するのよ」

「“非日常的”な……『世界線』の変動」

「そう、例えば……さっきも言ったけれど、人が死ぬとか、そういう“非日常的”な出来事が起こった場合、『世界線』は大きく変動する。そして、勿論その時生み出された『平行世界』もその変動した分だけ未来が変化するのよ」

「それは解ったけど……でも、どうしてもあいつらが過去の味方を助けられないって事実には結び付かないんだけどなぁ」

「それじゃあ、秀。例えば、自分の味方が過去に死ぬ事が解っていて、秀がその人を助けに行ったとするじゃない？」

「ああ」

「そして、秀はその死ぬはずだった味方を見事助ける事に成功した――そしたら、その時、その味方を助けた秀はどうなると思う？」

「どうなるって……それは――」

……。

「……あっ、そういう事か。『世界線』が“非日常的”な出来事で大きく変動するのなら、その過去で起こった“非日常的”な出来事を無かった事にしてしまったら、未来の自分が消えてしまうのか」

「そういう事よ」とウリアは得意気な笑みを浮かべて頷く。

「『世界線』が変動する要因を消してしまえば、その先に存在していた『平行世界』そのものが消滅して、その先の未来に存在していた自分は消滅してしまう――だから、あいつらは過去の出来事に余り手を出せないの。例え未来人だとしても、死んだのは過去――そ

んな大きな過去の出来事を変えてしまえば、その先の未来が何らかの形で大きく変動するのは目に見えているから」

「何だ、そうだったのか――って、あれ？　でも、あいつらが俺の事をすぐ襲って来ない理由にならなくないか？」

「それは……えっと、これは私の推測なんだけど。多分、今日初めて会ったストレンドって男は、私があの『魔導獣機』を操っていた男を倒したすぐ後にこの時代にやって来たのよ。正確には、私があの男を森林ごと焼き払った――あの場所に」

「えっ……それじゃあ、どうしてすぐに俺の事を襲って来なかったんだろうな。今日みたいに」

「単に、秀の事を捜していたからじゃないの？　だって、２０５６年の未来に――それも、数多の自然災害で地球上のあらゆる文明が根こそぎ滅ぼされたそんな時代にこの家の場所を記したデータが残っていると思う？」

「ああ、なるほど……そういう事か」

「そういう事よ。だから、あいつらは、あの『魔導獣機』を操っていた男が最後に連絡を絶ったこの場所に目星を付けたのね。２０５６年は今から４５年後の未来だし、この町で森林が一夜にして燃えてしまったという怪現象も誰かが覚えていたのかもしれないし」

「なるほどなぁ……あれ、ていうか、それじゃあ最初の男はどうやって俺の事を見つけたんだろうな」

「さぁ？　日本全国の魔力が集中している場所でも探索して、ここ

に辿り着いたんじゃない？」

「でも、俺って魔力持ってないよな？　そして、『魔導獣機』が襲って来たのはウリアが来た後――って、オイ、まさかお前が来た事で俺は急に狙われるようになったんじゃないだろうな」

「さーてと、伸びる前に食べなくちゃ。いっただっきまーす」

「……」

どうやらそういう事らしかった。

まぁ、こいつが来なくても遠い未来のどこかで俺は確実にあいつらから狙われる事になっていただろうから……こいつが来てくれただけ良かったのか。

しかし、『世界線』に『平行世界』ねぇ。

こいつ、本当に頭が良いんだか悪いんだかよく解らない奴だよな――。

「……ん？」

そこで再度俺の頭の中に新たな疑問が浮かび上がった。

「……なぁ、ウリア、もう一つだけ質問があるんだけど」

「何よ、今度は」

「どうして……あいつらは4日前の7月27日から俺の事を襲い始

めたんだ？　ていうか、それ以前にお前も――ウリアも、どうして7月27日に俺の所に現れたんだ？」

「……どういう事？」

「いや、だってそうだろ？　俺は単なる一般的な人間だけど、子供の頃とかの方が圧倒的に襲い易いだろうし、ウリアだって、子供の俺の方が護り易かったりするんじゃないのか？」

「そう言われてみればそうね……でも、その件については私も解らないわ。だって、私のこの時代に送り込んだのは未来の秀なんだから」

「何だろう……俺の子供の頃の時代に行く事が出来ない理由とか、何かあるのだろうか」

「さぁね……そこまでは流石に私も解らないわよ。ていうか、食べないの？　早く食べないと伸びちゃうよ？」

「お、おう、解ってる、解ってる」

そう言って俺は咄嗟にカレーのスープの中から箸で麺を掬い上げる。

カレーのカップラーメンはやはり美味しかった。

いつもと変わらない味で――物凄く美味。

美味しく感じられた――のだが。

俺の頭の中では様々な疑問がグルグルと回ったままで。

ストレンドが言った謎の言葉だとか。

どうして、ウリアもストレンド達も今よりも過去の俺の事を相手にしないのか、とか。

そんな感じの事が――色々と頭の中に残ったままで。

俺はカップラーメンを食べ終わるまでの間、正直、殆ど落ち着いてその味を味わう事は出来なかった。

強襲

8月1日――この日、俺の部屋にはウリアと霧歌が居た。

同世代の女子が自分の部屋に居る――という言葉を聞けば、それはとても喜ばしい言葉かもしれないけれど。

無論、そんな幸せな空間を創り上げる為には何らかの代償が居る訳で。

その代償として、俺は今霧歌と共に宿題を行っていた。

何の宿題かと言えばそれは夏休みの宿題と言う訳で――ちなみに、教科は数学である。

霧歌曰(いわ)く、数学は量だけ多くて意外と面倒に感じるのだが、意外と解いてみれば基本ばかりが集められた問題が多く、それらの全ての問題を解いた後の解放感は凄い――との事だった。

確かに、霧歌の言いたい事は解る。

数学はワークだとか、プリントだとか、量が途轍もなく多いのだがそれらの全てを解いてしまった後は何だか気が楽になりそうな気がする。

とても複雑な迷路から脱出する事が出来た後みたいな。

富士山の頂上に辿り着いた後みたいな。

多分、数学の宿題の山を越えた先に待っているのはそんな解放感なのだろう。

山だけに、富士山と同じ解放感みたいな。

なんちゃって。

……。

……しかし、霧歌の言いたい事の内で理解できたのはそこだけで。

理解できなかった事と言えば――“基本問題ばかりが集められている”という部分か。

「オイ、霧歌。このワークやプリント、基本問題が全然載っていないぞ。どうやら、霧歌の言っていた事は外れたみたいだな」

「えっ、そうかな？　私が解く分には基本問題ばかりで結構楽なんだけど……」

「そうか。それならあれだ。普段成績の悪い俺に対して先生が態と問題を難しくするという嫌がらせをしているんだ、きっとそうだ」

「いや、見比べた限り、私と秀ちゃんがやっている問題は同じだと思うけれど……」

「何？　それじゃあ、どうして俺はお前が基本問題と呼ぶ簡単な問題を解く事が出来ないんだ？」

「秀の理解が通常では“基本”だと呼ばれるレベルにまで達してい

ないからじゃない？」

「……」

ちなみに、俺と霧歌は物置から持って来たテーブルを部屋の真ん中に置いてそこで宿題をやっている。

時には互いに教え合ったりしながら――まぁ、俺が基本的に聞くだけなのだけれど。

時には互いの答を覗いたりしながら――これも俺しかやっていない訳だが、決してズルなどではない。

先に答を知っていた方が計算意欲をそそられるみたいな、そんな感じだから。

だから、別に俺が霧歌の答を時折丸写ししているとかそんな不正は断じて行っていないから。

――そして、少し話は逸れてしまったが。

部屋にテーブルの奥となると狭いので、霧歌のすぐ後ろには部屋の壁が、俺のすぐ後ろにはベッドがあるのだが。

金髪未来系魔法少女はそのベッドの上で漫画を読み耽（ふけ）っていた。

ついでに、時々後ろから先ほどのように俺に罵倒を浴びせて来たりもする。

……厄介な話である。

「……オイ、ウリア。お前は何て事を言うんだ。折角俺がその事実を遠回しにオブラートに包んで話していたというのに。これじゃあ、俺の努力が台無しじゃないか」

「秀、そんな努力を積み重ねるくらいならもっと勉強した方が良いと思うよ？」

「嫌だね、俺は高校で勉強なんかするつもりは毛頭ない。数学なんか特にやる気はゼロだ。方程式とか図形の公式とか、色々な事を高校では習うけれど、それが一体全体将来何の役に立つんだよ」

「まぁ、確かに秀ちゃんの言う通り、将来的には二次方程式とか、球体の体積を求める公式とか絶対に使わないよね」

「だろう？　まさか霧歌が同意してくれるとは思わなかったけどさ」

「でもね、秀ちゃん」と霧歌は言う。

「将来、例えば、どこかの会社に就職した後はそれらの知識は使わないかも知れないけれど。大人になったら、折角覚えたその知識はどこか記憶の隅っこで消えて行くのかも知れないけれど。でも、その会社に就職する為には、大人になる為には、こういう無駄な知識を覚える事も大事なんだよ、多分」

「そういうものなのかねぇ。確かに、勉強すれば良い大学に行けて会社とかも良い所に入れるかも知れないけれど。そういうのって俺は間違っていると思うな。世の中、経歴だけが全てじゃない気がする」

「そうだね、確かに秀ちゃんの言う通りだよね。まともに学校とかに行かずに――こういう言い方は駄目かも知れないけど、不良やニートになってしまった人が案外社会では上手くやれていて、逆に、頭の良い人――俗に言うエリートとかが将来犯罪者とか事件を起こしてしまったりするんだよね」

「そうだな、その考えについては俺も同意だ」

「でしょう？」

「でもまぁ、同じエリートでも霧歌は絶対にそんな事はしないけどな」

「だから、私はエリートじゃないよ……でも、擁護（ようご）してくれてありがとう、秀ちゃん」

「どういたしまして。お礼に俺にキスしてもいいぜ？」

霧歌からのツッコミが飛んでくる前に俺は後頭部を何者かに蹴られた。

ていうか、何者かと言う以前に犯人は一人しか居ない。

「……オイ、何をするんだ、ウリア」

「ゴメン、漫画読んでたら思わず足が滑った」

「そうか。そのまま本当に足を滑らして頭でも打ってれば良かったのにな」

「何か言った？　秀？」

「さーて、宿題宿題、っと」

俺はウリアに対してスルースキルを発動させると何事も無かったかのように宿題に再度取り掛かる。

「はぁ……しかし、８月に入ったばかりだというのに、夏休みだというのに、俺はどうして宿題をやっているのだろうか」

「秀ちゃんのその疑問に答えさせてもらうと、今が夏休みで、夏休みの宿題は夏休みにやるものだからだと思うな、私は」

「霧歌、俺の半分冗談みたいな疑問に真面目に答えなくても良いんだぞ？」

「えーっ、でも、誰にも拾われずにスルーされたら秀ちゃん辛いでしょ？」

「……」

微妙に心配されている俺なのであった。

ていうか、逆に自分がみじめに思えてくるのは気のせいだろうか。

気のせいであって欲しい。

強襲？

「そうよ、霧歌。そんな頭の悪い質問にいちいち答えていたら秀の馬鹿が伝染しちゃうわよ？」

「ウリア、お前もいちいち俺達の会話に割り込んで来るな。それから、俺を微妙に病原菌みたいに言ってんじゃねーよ」

俺の馬鹿さ加減は別に病気じゃねーよ。

元々からこんな感じなだけで。

……何か、自分で言ってて悲しくなってきた。

泣こうかな。泣いたらこの心のモヤモヤは無くなるだろうか。

「……ねぇ、秀ちゃん」

「ん、どうした？　やっぱりキスするつもりになったか？」

「いや、そういう訳じゃなくて……その」

「……何だよ」

「もしかして、何かこの前聞かせてくれた話に進展があった？」

その霧歌の問いに俺は一瞬――ほんの一瞬だけ宿題をやっているシャーペンの手を止めて、それから霧歌に“気付かれないように”またその手を再開させた。

「……どうして、そう思うんだ？」

「いや、何となく……何となく、そう思っただけ」

「そうか……残念だけど、お前の思惑は外れてるよ。まだ、あの話の続きを俺はお前に語る事が出来そうにない。ネタが無いからな」

「そっかぁ、それは残念だなぁ」

「ああ、ゴメンな。霧歌」

「ううん、別に良いのよ……良いんだけど」

「……だけど？」

「……前にも言ったように、隠し事だけは止めてよね、秀ちゃん」

「……」

「私達、友達同士なんだから」

「……ああ、解ってる」

解っている――解ってはいるのだ。

解っているからこそ、俺は“昨日の出来事”を霧歌には話さない。

ストレンドという未来から来た新たな刺客に出会った事を俺は霧歌に話さない。

そう――俺は昨日ウリアと一緒に決めたのだ。

霧歌は確かにもう俺達に――正確には、俺達が関わっている問題に巻き込まれてしまっているけれど。

まだ実際に巻き込まれた訳じゃない。

それならば――更に深入りさせる必要など皆無だろう。

話した所で、更に霧歌を俺達に関わらせてしまうだけ。

話した所で、霧歌に余計な心配をさせるだけ。

話した所で――何も変わらない。

何も変わらないのならば――話す必要など無い。

態々霧歌をこれ以上深入りさせる必要は無い。

そうやって――俺とウリアは昨日二人でその答を出したのだった。

これ以上霧歌を関わらせてはならない。

そんな――答を。

「だから……話の続きが、ネタが出来たら、またお前に話すとするよ」

「うん……絶対だよ？　秀ちゃん」

「当たり前だろ。だってお前は……俺の友達で、唯一無二の幼馴染なんだから」

「……秀ちゃ――」

その霧歌の言葉を俺は最後までよく聞き取る事が出来なかった。

何故なら、俺はまた後ろから――もとい、ウリアから後頭部を蹴られたからである。

しかも、先ほどよりも若干強めに。

「……だから、ウリア。お前は一体全体何がしたいんだよ。もう足を滑らせたという理由は通用しないからな」

「心配しないで。何か秀がカッコイイ事を言い始めたから、それに対するキャラ補正」

「勝手に俺のキャラを補正するな！　ていうか、少しくらい俺にだってカッコイイ場面があってもいいだろうが！」

これでも一応主人公だぞ！

「つーか、今更だけど補正って！　それじゃあ、俺は普段は何もカッコイイ事を言わない、むしろ逆にカッコ悪い人間だって事なのか！？」

「そうね。秀の情報を正確に補うとそうなるわね。秀は普段、いつも犬に噛まれたり、いつもガキ大将から虐（いじ）められたり、いつもテス

トで零点取ったり、それが原因で母親に怒られたりするようなカッコ悪さを持っているから」

「俺はどっかのメガネを掛けた冴えない永遠の小学五年生か」

つーか、逆に考えればその名作は２０５６年まで生き残っているという事なのか……。

ちょっと感動した。

いや、あれは名作中の名作だよ。本当に。

「……ていうか、もし俺がウリアの言う通りのキャラだったとしたら、助けを求めるべきなのは霧歌という事になるのか？」

「えっ、私？」

「おーい、キリえもーん！　助けてよー！」

「あっ、『キリえもん』って良いネーミングだね。合格」

「……」

何か知らないけど霧歌から合格の言葉を貰えた……。

ちょっと感動した。

ていうか、俺さっきから感動してばかりだな。

涙脆い年頃になってきたという事だろうか。

まだ高校二年生なのに。

難儀（なんぎ）な話である。

強襲？

「……ねぇねぇ、キリえもん」

「何だい、しゅう太君」

「……」

まさか、霧歌が俺のボケに乗って来てくれるなんて……。

また感動だな。

くどいようだけど俺はまた少しだけ感動した。

「ねぇねぇ、キリえもん。キリえもんは便利な道具が沢山入っているポケットを持っているんだよね？」

「うん、持っているよ、しゅう太君。私の十六次元ポケットに不可能は無いよ」

「じゅっ、十六次元ポケット！？　次元の桁が違い過ぎる！　十六次元って多過ぎだろ！」

ていうか、それ以前にそんな桁数を兼ね揃えた次元って存在するのか！？

「いや、流石にここだけは元ネタと被ったら駄目かな、って」

「それでも十六次元は多いよ！　何なんだよその空間！　何か多過

ぎて逆に怖いよ！」

「そうかなぁ……？　私のネーミングセンス的にはかなり良いと思ったんだけど」

いや、お前のネーミングセンスはそもそも良くなんかないから。

それこそ、あの青い猫型ロボットが未来の道具を使っても治せないほどに。

「……まぁ、いいか。俺も正直何でこんな小芝居をやっているのか自問自答したい所なんだけど、こうなったらやれる所までやってみるか」

「そうね、どうせならやってみましょうか」

「よし、それじゃあ続きを……ねぇねぇ、キリえもん」

「何だい、しゅう太君」

「僕、女子のスカートの中を覗く為の道具が欲しいんだけど、何か無いかなぁ？」

「よーし、解ったよ、しゅう太君。ちょっと待ってて、台所から包丁持って来るから」

「キリえもん！？　僕が欲しいのはそんな道具じゃないよ！？　つーか、その道具で一体全体何をするつもりだ！」

原作にそんな場面はねーよ！

流血沙汰なんてあの物語の中には存在しねーよ！

原作のイメージが悪くなるだろ――って、こんな小芝居をやっている時点で既に悪くなっているかもしれないが。

「えっ？　霧歌包丁取りに行くの？　何なら私が代わりに秀の首を落としましょうか？」

「ウリア、お前も悪ノリをしてくるな。これ以上被害を拡大しようとするんじゃない」

「……ねぇ、秀ちゃん？」

すると、霧歌が不意に俺に向かって満面の笑みでこんな事を問いかけてきた。

「知ってる？　ルミノール反応を完全に消し去るにはシンナーとかアルコールを使えば大丈夫なんだって」

「何故今のタイミングでそんな小話を挟んで来るんだ！　ていうかお前、その予備知識を用いて今からここで何をするつもりだ！」

「ううん、何にも……ただちょっと言ってみただけ」

「そうか、解った。それならもう金輪際（こんりんざい）そんな事は言うな」

恐怖で俺の精神が崩壊してしまいそうだから。

つーか、霧歌が言うとまた迫力違うんだよなぁ……。

マジで殺人犯とかが誰かを殺す前に言う台詞みたいだった。

いや、そんな事は口が裂けても言えないが。

言ったら本当に殺されそうで怖い。

「……あっ、オイ、ウリアよ」

「何？　秀」

「お前、暇なら一階からお茶注いで来てくれよ」

「えーっ？　秀、見ても解ると思うけれど私は今とても忙しいのよ？」

「どう見たって漫画を読んでいるようにしか見えないんだが」

「えーっ。待ってよ、今キー坊が地球からの留学生として宇宙に旅立っていく感動の場面なんだから」

「お前も今の話題に乗っかって来るのかよ！」

何その無駄なシンクロ率！

ていうか、キー坊って……これまた俺が好きな話の中で一・二を争うものを読んでいるじゃないか。

台風のフー子の話とか、途中であった一時的な最終回も良いんだよなぁ……あの一度未来に帰っちゃう話とか。

「……いや、ていうか、そんな思い出話に浸っている場合じゃなくて。ウリア、頼むからお茶注いできてくれよ」

「もう、仕方ないわねぇ……」

その言葉の通り、仕方無さそうにベッドから下りたウリアはこれまた仕方無さそうな足取りで部屋を後にするのだった。

◆◆◆

暫くして、ウリアがお茶の注がれたコップを三つ乗せたトレイを持って部屋に戻って来た――のだが。

ウリアはまるで雇い立てのまだ働き始めて一週間足らずのウェイトレスみたいな、そんな感じでトレイをブルブルと震わせていた。

つーか、今にも全てを引っ繰り返してしまいそうなんだが。

これってそういうフラグとかじゃないよな？

「お、オイ、ウリア」

「は、話し掛けないで……こ、零れる。零れちゃう、から」

トレイどころかもう何か体にも力が入っているのか、ウリアは体全体を震わせながらテーブルの傍に屈み込んで――何とかお茶を零さずにトレイのテーブルの上に置いた。

「み、ミッションコンプリート……あーっ、疲れた～！」

「お、お疲れ様、ウリアちゃん」

そして、テーブルの上にトレイを置き終わった瞬間、大の字になって仰向けに倒れてしまったウリアに苦笑で労(ねぎら)いの言葉を贈る霧歌。

「ありがとな、ウリア。これで宿題が捗(はかど)りそうだ」

「どういたしまして……ていうか、次からはもう自分で持って来て。これ戦うよりも精神力使うわ……」

「いや、どんだけお前はバランス感覚が無いんだ」

ウリアのような運動神経のある人間はバランス感覚に長けていると聞いた事がある気がするのだが――違うのだろうか？

まぁ、それ以前にウリアは戦闘能力に長けているだけであって運動神経が長けているという捉え方をしていいのかどうか解らないけれど。

強襲？

「ていうか、もうそろそろ４時なんだねー」

霧歌はお茶が注がれて汗を掻いているコップを手に取ると――部屋の時計を見上げてそう言った。

「そういえば、もうそんな時間なんだな。何だかんだ言って、宿題やってて時間の経過にそこまで気付いていなかった」

「案外、宿題で一日を潰すのも悪くないでしょう？」

「うーん……そうだな。霧歌が毎回傍について俺に宿題を教えてくれるのならそこまで悪くないかな」

「あら、嬉しい事言ってくれるじゃない。秀ちゃんが頼めば私はいつでも秀ちゃんに付き合うから、また今度誘ってよ」

「ああ、了解。考えとくよ」

その後、俺と霧歌は宿題に一段落を付けてお茶を飲みながら暫し談笑をした。

その間、それほどまでにお茶を運ぶ作業は辛かったのか――ウリアは仰向けに寝転んだまま一言も言葉を発しなかった。

つーか、疲れ過ぎだろ、お前。

「さて、と……私はもうそろそろ帰るかな。宿題も一段落付いたし、

今日は秀ちゃんと一緒に居られてたのしかったし、秀ちゃんもちゃんと集中して宿題やってたし。今日はかなり充実した一日だったよ」

「充実した一日って、お前は全然充実していないじゃないか。逆に充実しているのはどちらかと言うと俺の方だろ？」

「確かに、それはそうだけどね。でも、私は自分の幸せよりも他人の幸せを感じる方が嬉しく感じたり、充実を感じたりするんだよね」

「そういえば……昔からお前はそんな感じだったような気もするな。自分の事なんか差し置いて、いつも俺の事を優先して助けてくれていたような気がする」

「秀ちゃんは私にとって、“二つの意味”で放っておけない存在だから」

「あん？　“二つの意味”で？」

「なーんでもないわ」

「それじゃあ」と霧歌は持って来た鞄に教科書類を詰めるとその場に立ち上がった。

「またね、秀ちゃん」

「あっ、玄関まで送るよ」

「いいよ、大丈夫だから。どちらかと言うと、昨日も今日も私が強引に押し掛けて来たようなものだし」

「そうか……？　まぁ、霧歌がそう言うならそれでいいけど」

「うん、私が言うからそれで良いんだよ。ウリアちゃんも、またね」

「うん、またね、霧歌」

霧歌はウリアを見下ろしたまま――未だ床に倒れたままのウリアは逆に霧歌を見上げて互いに二人は笑みと共に手を小さく振り返した。

つーか、ウリア。こういう時くらいはせめて起き上がって挨拶をしろよ。

俺が呆れ顔でそんな事を思った時だった。

不意に俺の机の上であの白い欠片が光を放ったのである。

「これは……！　オイ、ウリア！」

「来たわね、久しぶりに……！」

俺とウリアは互いにそう言葉を交わして部屋の大窓から外の景色を振り返る。

茜色に染まる空――そこのとある一点が歪み始めた。

「何！？　何なの！？　これ！？」

そして、霧歌だけが部屋の真ん中で狼狽（ろうばい）していた。

そうだ。霧歌だけはまだ『魔導獣機』に遭遇した事が無いのだ。

霧歌だけはこれ以上深入りさせない――そう誓ったばかりなのに。

「……くそっ！」

俺は光を放ち続けているその白い欠片を引っ掴むと霧歌を振り向いた。

「霧歌！　お前はここに居てくれ！」

「何なのこれ！？　どうなってるのよ、秀ちゃん！」

「奴等が襲って来たんだ……今から、俺はウリアと一緒に外に出る」

「そんな……だって、秀ちゃんが狙われているんでしょ！？　だったら、秀ちゃんは家の中に居た方が……！」

「家の中に居たら……ここに居るお前にも、危険が及ぶだろ？」

「……でも」

「お願いだ、霧歌。俺はウリアと一緒に外に出る。だから、お前はここに居てくれ。今だけは頼む……俺の言う事を聞いてくれ、霧歌」

「……秀ちゃん」

そう呟いて霧歌は少しだけ俯き加減になって少し考えるような表情を見せると。

それから無言で――頷いた。

頷いて、くれた。

俺の言葉を――了承してくれた。

「……ありがとう、霧歌」

俺は霧歌に向かって笑みを見せるとすぐさまウリアを振り返った。

「行くぞ！　ウリア！」

「うん、秀！」

そして、俺とウリアは部屋から飛び出す。

ただ一人、霧歌をその場所に残して――俺達は家の外へと飛び出した。

◆◆◆

俺とウリアが家の外に出た時には既に夕焼け色に染まる空に漆黒の穴が生み出されていた。

しかし、今回の漆黒の穴は今までのものとは少しだけ違っていた。

いや、形状は今までと同じなのだが――違ったのは穴の“向き”。

今までは地上に対して平行に向いていた漆黒の穴は――今は地面と

は垂直に向いている。

穴の向きの違いには何か理由があるのだろうか？

俺がそんな考えを巡らせている内にその穴から“二体”の『魔導獣機』が連続で飛び出してきた。

強襲？

まるで戦闘機のような轟音を周囲に響かせながら夕焼け空の下を猛スピードで飛行するその『魔導獣機』は――最初のものと同じで鳥の形をしていたが、機体の大きさはそれの二分の一程度しか無かった。

しかも、最初のあの怪鳥の『魔導獣機』とは違ってスピードも視界に捉えられないほど速くは無いようだ。

いや、それでも十分に速いのだが。

鳥――と言うよりも、どちらかと言えば先ほど比喩した戦闘機に近い『魔導獣機』は空を高速で旋回している。

俺達が居る位置を把握したのだろう――あと数秒で、あの二体の『魔導獣機』はこちらに向かって来る。

だが、俺は臆さない。

何故なら、俺にはウリアが居るから。

同じ年頃の女子を完全に頼り切るのもどうかと思うが――しかし、これ以外に手段は存在しない。

この時代で、あの『魔導獣機』という未来の技術で作られた兵器を破壊できるのは、同じく未来からやってきたウリアだけなのだから。

「……秀はまた、この前と同じように少し下がっててね」

「ああ、解った。頑張れよ、ウリア」

「勿論よ」とウリアは不敵な笑みと共にこう言った。

「あんなただの兵器――私が一瞬で破壊して上げるわ」

◆◆◆

「――天よ。我は器なり」

私は――唱え始める。

「神の力を受けるべき、器なり」

私の下で深紅の光を放つ魔方陣から溢れ出す魔力が私の体を押し上げて――半重力状態のような、そんな感覚を私の体に与える。

「天よ――その神の器である我に神の力を授けよ」

上空ではこちらに目掛けて『魔導獣機』が旋回を開始していた。

もう数秒もすれば奴等はこちらに襲い掛かって来るだろう――けれど。

「神の力――紅焔天使の力を」

数秒もあればそれで十分だった。

私がそれを唱え終えた瞬間、私の周囲の地面から湧き出した炎が渦を巻いて天に昇った。

巨大な火柱の中で私は自分の体に魔力が満たされていくのを感じていた。

自分の体に更なる力が付与されていくのを感じていた。

背中から生えた淡い深紅の光を帯びた翼。

私の頭のすぐ上に出現する――こちらも淡い深紅の光を帯びた天使の輪。

天使化――紅焔天使となった私は地面を強く蹴って飛ぶ。

背中から生えたその翼を羽ばたかせて私は火柱を突き破って外の世界へと飛び出した。

すると、すぐにこちらに向かって来る二体の『魔導獣機』の姿を捉える事が出来た。

そして、その内の一体が私に向かって接近してくる。

どうやら突進してくるようだ――それを悟った私は右手に魔力を集中し始める。

集約される光――その光は束となり、実体のある剣の形へと変化した。

炎を纏いしオレンジ色の光の剣。

その剣を私は突進してきた『魔導獣機』目掛けて振り下ろした。

しかし、流石は人工頭脳を搭載しているだけあるのか、『魔導獣機』は私の斬撃を躱して私の後方へと飛び去って行った。

私は素早く後ろを振り返る。

それと同時に、先ほどは別の機体が私に襲い掛かってきた。

巨大な刃のようなその機体の翼を私は剣で受ける。

「……！」

凄まじい金属音が鳴り響き――私は剣から腕に伝わって来た衝撃に顔を顰める。

すると、私は二体の『魔導獣機』が不意に上空へと上昇を開始したのに気付いた。

上空へと私を誘っているのか――私は空へと飛翔しようとしてどうにか踏み止まる。

回転しながら上昇し続ける『魔導獣機』の機体から放たれる数多の針のような光線。

それはやがて重力に従い落下を開始して――光の雨となって地上に降り注ぎ始めた。

「させない……！」

地上ごと下界に居る秀を攻撃しようという魂胆だろうけれど――そうはさせない。

そんな事は私がさせない。

私は光の剣を右斜め下に構える。

そして、私は剣に魔力を集中させた。

光の剣に集中するオレンジ色の光――それはやがて眩い(まばゆ)ほどの光を放ち始める。

それは剣の中に十分な魔力が溜まった事を知らせるものだった。

「――≪太陽の斬閃(ソーラーレイ)≫」

私は剣を左斜め上に思い切り振り上げる。

剣から解き放たれた全ての魔力は光へと変化し――それはオレンジ色の天を劈く閃光を創造する。

私が放った斬撃から生み出されたその光線は雨のように降り注いでいた針のような光線を全て消し去った。

それから、今の私の攻撃を避け切れなかったのだろう――二体の『魔導獣機』の内、一体が今の熱線によってその機体を半分に削り取られていた。

そして、半分に削り取られたという事は――勿論、『核』も破壊されてしまった訳で。

私の攻撃を受けたその『魔導獣機』は轟音と共に空中で爆発を起こした。

その爆発によって空中に立ち込める爆煙――すると、不意にその煙の壁を突き破ってもう一体の『魔導獣機』が私のすぐ隣を高速で通り過ぎた。

強襲？

その『魔導獣機』が向かう先は――言うまでも無い。

「しまった……！」

私は天使の羽を羽ばたかせて高速で地上へと降下を開始する。

事実上、今回現代に転送された『魔導獣機』よりも私の速度の方が上だ。

けれど――中々追い付く事が出来ない。

段々と地上が迫り来る中で私は更に降下するスピードを上げて――

そして。

「秀！」

その名前を呼びながら、私はその名前の持ち主である彼の手を掴んで――再度、空の方へと上昇を始めた。

私に追い抜かれた『魔導獣機』はそのまま地上に衝突する事は無く――流石は機械と言うべきか、本当に地上擦れ擦れで減速すると、私達を追って再度上空へと飛び上がってきた。

「……ウリ、ア……！」

後ろの方から――そんな秀の途切れ途切れの声が聞こえてくる。

「安心して、秀！　絶対に……絶対にこの手は離さないから！」

すると、私達の後ろを追って来る『魔導獣機』がこちらに向かって先ほどの針のような光線を連射してきた。

「くっ……！」

私はそれを躱しながら、時には剣で弾きながら何とかその攻撃が秀に当たらないように空を逃げ続ける。

それでも、執拗（しつよう）に私達を追って来る『魔導獣機』。

「……！」

私は空中で一旦停止すると、不意に向きを変えて別の方向へと飛んだ。

すると、『魔導獣機』はそれに引っ掛かったらしく――方向を変えられないまま元々の進行方向へと飛び去って行った。

しかし、それでも飛び去っただけで――また数秒後にはこちら目掛けて突進してくるだろう。

「……」

……どうしよう。

空中で旋回を始めた『魔導獣機』を見据えながら私は思う。

秀を護りながらではこちらの分が悪過ぎる。

一度、秀を地上に下ろすか――いや、そんな事をしていたらまたあの『魔導獣機』に後ろを取られてしまう。

しかし、このままでは事態は劣勢になっていくばかりだ。

「……どうしたら……！」

「……オイ、ウリア」

私のそんな悲痛な声に応えるように――不意に秀がその口を開いた。

「何よ、秀」

「一つ……俺に提案があるんだけど」

「提案？　提案って何の」

「この場の打開策だよ。良いか？　今から――」

「……」

その秀が語った打開策の内容に私は思わず目を見開いた。

「確かに、そうすればあの『魔導獣機』を倒せるかも知れないけれど……でも、秀は大丈夫なの？」

「この場合、大丈夫なのか問われるべきなのはお前だろ。今俺が語った打開策……成功させる自信はあるか？」

「……うん、勿論。当たり前じゃない」

「だろうな……そう答えてくれなかったら、俺は死んでしまう所だ」

私は前方を見据える。

既に旋回して向きを変えた『魔導獣機』はこちらに向かって来ていた。

「……ねぇ、秀」

だから、私は最後の確認を秀に取る。

「本当に、良いのね？」

「ああ、俺はお前を信じるよ、ウリア」

「……解った」

迫り来る巨大な鋼の機体。

私は握っている秀の手を強く握り締めて――そして。

「……ゴメン、秀！」

私は秀を――“空高く放り投げた”。

秀の体を空に放り投げるのは天使化している私にとっては造作も無い事だった。

それから、私は秀を投げる際に使った天に向けたままの左手に向かって――自身の光の剣を握っている右手を上げる。

私の両手は頭上でそのまま合わさって――私は両手で光の剣の柄を握り締める。

集約される魔力――剣から溢れ出す炎と光。

高速でこちらに飛んで来る『魔導獣機』目掛けて私は剣を振り下ろした。

「――≪太陽の一閃（ソーラーブレード）≫！」

次の瞬間、私の５０メートルほど前方にあった『魔導獣機』の機体が真っ二つに切断された。

正確に言うならば、その機体は私が振り下ろした剣――そこから魔力によって延長された光の刀身によって半分にその本体を断たれたのである。

真っ二つにされる事で『核』を破壊された『魔導獣機』は慣性の法則によって私の左右を猛スピードで過ぎ去り――私の後方で大爆発を起こした。

「……ふう」

それから、私は一息つくと右手に持っていた光の剣を消して頭上を仰ぐ。

そして――落ちて来た秀の肘の裏と背中を両手で受け止めた。

「……ちゃんとキャッチして上げたわよ、秀。感謝しなさいよね」

「ああ、礼を言うよ、ウリア。シチュエーション的には立場が男女逆なような気もするけどな」

苦笑と共に冗談染みた事を平気で言う秀。

本当に――こんな時に冗談染みた事を言えるなんて、よっぽど緊張感が無いのか。

それとも……それだけ、私の事を信頼してくれているのか。

どうなのだろう。

後者だったら……嬉しいのに。

◆◆◆

不意な二体の『魔導獣機』による強襲もウリアの活躍によって無事逃れる事に成功した俺はウリアからいわゆる“お姫様抱っこ”をされたまま地上に下ろされた。

ていうか、だから何度も言うけど男女が逆だって。

女子にとっては誰か好きな男子からされたいみたいな、そんな羨望（せんぼう）があるかも知れないが。

男子の場合はただ単に恥ずかしいだけだからね？

それも、女子にお姫様抱っこされるって……二重に恥ずかしいよ。

冗談抜きで。

強襲？

しかも、よくよく見れば俺の家の前では何か霧歌が仁王立ちしていた。

どうしてそんな所に立っているのか知らないけれど、とりあえずウリアにお嬢様抱っこされている所を見られてしまった……。

拙い。軽く死にたい気分になってきた。

「……秀ちゃん」

そして、俺がウリアの手を借りて地上に本当に意味で降り立っていると霧歌が腕組みと共に話しかけてきた。

「……ど、どうした、霧歌」

「……今のが、この前言ってた『魔導獣機』って言う未来から秀ちゃんを狙う兵器？」

「あ、ああ、そうだ。あれが『魔導獣機』って兵器で、その名の通り――ていうか、この前も説明したけど、一つ一つが何かの獣のような形をモチーフにしていて――」

「バカ――――――――――ッ！」

何故か俺はその霧歌の叫び声と共に右の頬を思い切り叩かれた。

その余りの衝撃に俺はアスファルトの上に倒れ込む。

「な、何故……何故俺は今叩かれたんだ……！」

「今私が秀ちゃんを叩いた理由？　そんな事も解らないの！？　秀ちゃんのバカ！　バーカ！」

「いや、解らないって言うか……何か俺さり気無く馬鹿にされていないか――」

――そこで俺は思わず口を噤んだ。

何故なら、いつの間にか俺の目の前に立っている霧歌が――泣いていたから。

「……いや、本当は私だってバカだったの。秀ちゃんから『魔導獣機』って兵器で自分は狙われているって聞いた時――私、何となく戦闘機とか戦車とか現代に既存している兵器を思い浮かべちゃったの。違うに決まっているのにね。２０５６年の未来から転送されてくる兵器だもん……戦闘よりも戦車よりも更に凶悪で強力なものに決まってるのに」

「でも……！」と感極まった声で霧歌は続ける。

「でも、やっぱり……私よりも、秀ちゃんの方がバカだよ。何で……何でもっとあの兵器について教えてくれなかったの？　あんな戦闘機よりも戦車よりも怖いものから秀ちゃんが命を狙われているなんて……私、思いもしなかった。だって、秀ちゃんは私に“いつも通り”に話してくれたから――ううん、違う。あえて“いつも通り”に話す事で、私に余計な心配を掛けさせたくないって、そう思ってくれたんだよね？」

その霧歌の言葉を聞きながら俺はその場に立ち上がる。
やはり――霧歌には隠し事は通用しないようだった。

「……ああ、ゴメン。そう思って――お前にこれ以上心配を掛けさせたくなくて、俺はこれ以上お前には何も話さないし、お前を深入りさせないって、そう決めたんだ」

「という事は……やっぱり、最近また何かがあったんだね？　話をする為のネタが……増えたん、だね？」

「……何か、敵側の戦士の中で一番強い階級を持った男に――この間、会った。会って、ほんの少しだけ戦闘にもなった――まぁ、その時にはウリアが駆け付けてくれて、事無きを得たけれど」

「……心配を掛けさせたくないって気持ちは解るけれど。でも、やっぱり……私にもちゃんと、話して欲しかったなぁ、秀ちゃん」

「でも……話したって同じ事だろ？　俺がそんなかなり強い奴と出会って戦闘になった、って――お前に話した所で何かが変わる訳でも無いし。話した所で、余り意味は無いと思ったから――」

「言わないでよ」

俺の言葉を遮って――霧歌はその目から涙をボロボロと零しながらこう言った。

「話した所で……意味が無い、なんて。そんな事は……言わないでよ……！」

そして、俺はそこで漸く気付く。

自分が口走ってしまった言葉の罪の重さに――漸く、遅くて、遅過ぎるほどに今更ながら気付く。

俺は霧歌に――何て事を言ってしまったんだろう。

「確かに、秀ちゃんの言う通りだよ……私がそんな未来の人から秀ちゃんの命を狙いに来た話を聞いたって、何も出来ない。別に、私はウリアちゃんみたいに秀ちゃんを護れる力を持っている訳じゃないから、そんな話を聞いた所で確かに――“何も変わらない”」

「でもね」と霧歌は未だ涙を流したまま――それでも、俺に優しく微笑み掛けてくれた。

「私にだって……何も出来ない訳じゃないんだよ？　秀ちゃんが、未来の人達から狙われているなんて私達以外に誰も知らないから、秀ちゃんがそんな話を話す事が出来るのはウリアちゃんを除けば私しか居ないし。これは、秀ちゃんが命を狙われている事とは直接的には関係無いかも知れないけれど、秀ちゃんが日々命を狙われて、疲れている時に私が宿題とか、勉強を教えて気を逸らして上げる事も出来る」

「……こんな時に言うのも何だけど、俺は多分宿題や勉強で疲れは取れないぞ？」

その俺の言葉に――霧歌は呆れたように苦笑を浮かべて。

涙に濡れた苦笑を浮かべて言う。

「そうだね……秀ちゃんの事だから、多分宿題とか勉強をしたら逆に疲れちゃうよね？　だったら、今日の宿題の時みたいに、私は秀ちゃんの何気なくて、他愛なくて、どうでもいい話に付き合って上げるよ」

「どうでもいいとか……言ってんじゃ、ねーよ」

「アハハ、そうだね。ゴメンゴメン……ついちょっと、口が滑っちゃって」

「“何気ない”や“他愛ない”は許せるけれど――“どうでもいい”というのは、流石に聞き捨てならないよ、霧歌」

「だから、ゴメンって謝ったでしょ？　秀ちゃん」

「いや、謝られただけでは俺の心の傷は癒されないな。せめて、霧歌が俺の前でメイドコスをしてくれないと俺の心の傷は癒されない」

「ていうか、まだメイドコスを執拗に私に要求してくるんだね、秀ちゃんは。そんなに頼み込まれても、私は多分一生その要求をうんとは頷かないと思うよ？」

「それでも、俺は引き下がらないさ。お前がうんと頷くまでいつまでも頼み込んでやるよ」

「果てしなく無駄な執着心だね……そういう心を問題を解く時に使えるようになれば万々歳なんだけどね」

「……なぁ、霧歌」

「何？　頼まれてもメイドコスはしないよ？　例え土下座をされたとしても」

「……ありがとな」

「……えっ？」

「お前と話していたら――お前といつも通りの談笑を交わしていたら、何かさっきまで感じていた恐怖感とかが無くなっちまったよ。流石はエリートだな。いや、本当に、お前に話しても何の意味も無いなんて……言って悪かった。謝るよ。本当にゴメンな、霧歌」

「……も、もう、秀ちゃんったら」

霧歌は笑みと共に目の端に溜まった涙を指先で拭った。

「そういう所……本当に、秀ちゃんは昔から狡(ずる)いよね」

「狡い？　何が狡いんだ？」

「そして、そういう感じで自覚していない所もまた狡いよね……ねぇ、ウリアちゃん？」

「ええっ！？　な、何でそこで、わ、わたっ、私に話を振って来るのよ！」

急に霧歌から話を振られたウリアは顔を真っ赤にしてあたふたと慌てふためいていた。

ていうか、こいつ最近やけに顔が赤くなるな。

風邪か――熱でもあるのだろうか。

強襲？

「えっ、ウリアちゃんはそんな事を思った事が無いの？　何だ、私てっきりそう思った事があるのかと思ってた」

「べ、別に……わ、私は、その……」

「何だ。俺には何の事かさっぱりだけど、お前も何か霧歌と同じ事を思っているのか？」

「……秀のそういう所を言っているのよっ！」

「そういう所――って痛てえ！」

何か今度はウリアから太ももを思い切り蹴られた。

地味に痛みが後に残りそうな威力だった。

「オイ、ウリアお前！　何でまた俺の事を急に蹴ってきやがるんだ！」

「知らないっ！　自分の胸に聞いてみれば！？」

「自分の胸に聞いても解らないから言ってんだろうが！　よし、解った。お前の言葉の真意を知る為にお前の胸にちょっと聞くから、胸を貸せ、耳を当ててみる」

「なっ、何をさり気無くセクハラ行為をしようとしているのよ！」

ウリアはそのライダースーツのような戦闘服によって強調された胸を隠す為に更に押さえ付けて――更に自身の胸を強調させながら俺から後ずさりを見せた。

「いや、俺は単にウリアの言葉の真意を確かめようと探求心を発動させただけであって、別に疾(やま)しい気持ちはこれっぽっちも無いぞ？」

「いや、疾しい気持ちは絶対あったでしょ！　て、ていうか、探求心を発動させても私の心の中は絶対に明かさないわよ！　秀だけには絶対に明かさないわ！」

「何だよその無駄な決心は……」

何かそれ、差別されているようで逆に傷付くぞ。

「仕方ない、ここはウリアの代わりに霧歌の胸に聞くとするか……。オイ、霧歌、ちょっと胸を貸してくれ」

「家から包丁とシンナーとアルコールを取って来てからで良いなら構わないよ？」

「すまない、俺が悪かった」

霧歌の場合は差別どころの話では無かった。

遠回しだが明らかなる殺人予告だった。

殺人予告をされるのなら、何か訳の解らない差別をするウリアの方がマシというものである。

「ていうか……その、毎回秀ちゃん達は敵から襲われる度にあんな堂々と空を飛んだりして敵と戦っているの？」

「ああ、まぁな。凄いだろ？」

「ちょっと秀。何でアナタが得意気なのよ。空を飛べているのは私の力のお陰でしょ」

「それじゃあさ」と霧歌は人差し指を立てて俺達にこう言ったのだった。

「目撃とか……写真とか、動画とか撮られたりしてないのかな……？」

「……写真に動画を撮られる？」

「いや、だからほら……そういうのって大概がテレビ局とかに持って行かれるじゃない？　ＵＦＯを偶然撮影する事に成功した写真とか動画って。だから、もし秀ちゃん達の闘う姿が写真とか動画に撮られていたら……」

「そしたら……えっ、俺まさか齢（よわい）１７歳でテレビに出られるという事なのか！？」

「秀ちゃんが気になる所はそこなの！？」

「オイオイ、ウリア。どうするよ、俺達もうそろそろテレビデビューだぜ？　取材とか来たらどうしようかな、デパートで新しい服とか買って来なくちゃ」

「そんな心配しなくても秀は新しい洋服を買ったとしてもそもそも顔が何かアレだから意味が無いと思う」

「顔が何かアレって一体全体どういう意味だよオイ！」

「顔が何かアレだから、詳しくは言わないけれど」

「そこをハッキリと言えよ！　何だ、俺の顔がどうアレなんだ！」

「……秀の顔は甜菜に似ている」

「もうそのネタはいいんだよ！」

いい加減くどいよ！

いや、そこまで連続させて使った訳じゃないのだが。

「ていうか、今の霧歌の話だけど……多分、それは無いと思うわよ？　確かに、『魔導獣機』が爆発した音とか、私が空に撃ち上げた魔術とかは見えたかも知れないけれど――私や秀や『魔導獣機』が飛んでいる姿なんて写真や動画じゃ速過ぎて撮る事なんて不可能よ。まぁ、それこそＵＦＯとかに見間違えられるんじゃないかしら」

「そ、そうかしら……？　まぁ、それならそれで良いんだけど。何か腑に落ちないわね」

「大丈夫よ、そこまで心配しなくても。それよりも秀、私お腹空いちゃった。夕飯にカップラーメンを作りましょう」

「作るのは俺だけどな」

「それじゃあな、霧歌」と俺は霧歌を振り返る。

「今日は巻き込んでゴメンな。何なら、家まで送るけど……どうする？」

「……あの、えっと。秀ちゃん？」

「何だ？」

「その事なんだけど……あの、出来ればお願いが」

「何だ、やっぱり家まで送って欲しいとか？」

「う、ううん。そういう事じゃなくて……その」

そう言って——霧歌はどこか言い難そうに俺に向かってこう言うのだった。

「今日……秀ちゃんの家に泊めてくれない？」

「……は？」

「いや、ほら、その……今日も、なの」

「……ああ」

なるほど、そういう事か。

「“また”、か……まぁ、俺の家も同じようなものだからな。同情

するよ、霧歌」

「ありがとう、秀ちゃん。という事は、私は今日泊まっても良いんだね？」

「ああ、勿論だ。俺の家族が俺以外一人も家から居なくなってからは流石に拙くて出来なかったけど、今はウリアも居るし、大丈夫だろ」

「うん、ありがとう。秀ちゃん」

「その代わり、夕飯はカップラーメンしか出ないからな」

「ああうん、泊めて貰うんだし、その点については何の文句も無いよ。ただ、スタンダードがあると助かるかな、私あの味好きなんだぁ」

「……ていうか、お前もスタンダードって名称を使っているんだな」

そんな名称を使っているのは俺だけかと思ってたぜ。

「ああ、あるよ、スタンダードも。この家のカップラーメンの比率はカレーが6割、スタンダードが2割、シーフードが1割だ」

「好物と好物では無い種類の数に歴然たる差があるね……何か逆にシーフードが可哀想に見えて来たよ」

そんな会話を交わしながら俺と霧歌は家の中へと入る。

数年ぶりに霧歌が俺の家に泊まる――俺はその事実に少なからず興

奮せざるを――間違えた、緊張せざるを得ないのであった。

夜の秘密の御話

急な話ではあるが、霧歌が俺の家に泊まる事になり、俺は三人分の手料理を作っていた。

手料理とは言ってもカップラーメンには変わりないのだが。

しかし、インスタント食品も言い方を変えれば手料理と同じなのである。

何故なら、お湯を注いだり電子レンジにそれらを入れたりする際には必ず人の手を使わなければならないからだ。

だから、俺はインスタント食品が手料理であると胸を張って言う事が出来る。

……まぁ、それならば、手を使ってパンに塗るジャムとかも手料理になってしまうが。

ていうか、逆に手を全く使わないで完成する料理などあるのだろうか？

そんなどうでもいい疑問を考えている内に俺の目の前で三つのカップラーメンが三分という時を経て完成した。

蓋の隙間から溢れる湯気とその香り。

俺はトレイの上にカレー、スタンダード、シーフードの三種類のカップラーメンを乗せてリビングへと向かう。

そこで待っていた霧歌とウリアが座っているテーブルの上に俺はそのトレイを置いた。

「ハイ、お待たせ」

「サンキュー、秀」

「ありがと、秀ちゃん……って、あれ？　何で蓋を開けてくれていないの？」

「……お前は一体全体何を言っているんだ。お前、ひょっとしてカップラーメンというものを余り食べた事が無いな？」

「う、うん……大概は手料理を作っているから。どうしても食べる機会が減っちゃって」

「良いか？　カップラーメンに限らず、焼きそばもうどんもそれらのインスタント食品というのはそれぞれ蓋を開ける瞬間が大切なんだよ」

「そ、そうなの？」

「そうだよ、霧歌！　カップラーメンの蓋を開けた瞬間に溢れ出す暖かな湯気と香ばしい香り……！　カップラーメンの蓋を開けるのはね？　夢が沢山詰まっている宝箱を開けるようなものなのよ！」

「あ、ああ、そうなんだ……まさかウリアちゃんにまでそこまでカップラーメンについて力説されるのは思わなかったよ」

「フッ、当然よ」と腕組みと共に得意気な笑みを見せるウリア。

「私、こう見えてもカップラーメンマスターだから」

「にわかが何を言ってやがる、この金髪未来系魔法少女が。まだこの時代に来て一週間足らずのお前がカップラーメンを語ってんじゃねーよ。百万年早いわ」

「秀こそ何を言っているのよ。この“しーふーどー”の良さが生まれてこの方未だに解っていないくせに！」

「それじゃあ、お前だってそうじゃんか！　この前、お前が欲しがるからカレーを一口やったら何かドロドロしていて喉（のど）に詰まる――とか何とかかんとか言っていたくせに！」

「何よ！　このカレーオタク！」

「カレーオタク!?　お前、そんな言葉どこで覚えやがった似非（えせ）未来系魔法少女！」

「誰が似非よ！　誰が偽物よ！　私は列記とした本物よ！」

「現代の時代の流れに完全に呑まれてしまっているお前はもう似非未来系魔法少女で十分だバーカ！」

「くっ、こ、この……！」

「まぁまぁ、二人とも落ち着いて」

まさに一触触発の空気だったのだが――それは霧歌の仲介によって

緩和される事となった。

◆　◆　◆

夕食後――午後１０時を回った辺りでウリアが俺にこんな事を聞いてきた。

「ねぇ、秀。私と霧歌で今からお風呂入って来るんだけど、良いかな？」

「ああ、別に良いけど？　もう暑くなって来たから今日からはシャワーな――って、何でいちいち俺にそんな事を聞いて来るんだよ」

「だって、秀はまた前の私の時のように偶然を装って私達の入浴を覗きに来るかも知れないでしょ？」

「言い掛かりにも程があるな。俺は偶然を装って態とお前達の風呂を覗くほど落ちぶれてはいない。ていうか、この前のお前の一件は事故だって何度も言ってるだろうが」

「ふーん、そっか。まさか、お風呂場に隠しカメラを設置していないわよね？」

「だから言い掛かりにも程があるって！　大体、そんなものを取り付けるくらいなら素直に覗くわ！　いや、覗かないけどさ！」

「……と、言う訳で」

「一応安心は出来そうよ」とウリアは後ろで苦笑を浮かべている霧歌を振り向いた。

「ああ、うん。ありがとう、ウリアちゃん……ていうか、二人ともまさか毎日お風呂に入る前にはこんな会話を交わしているの？」

「当たり前よ、霧歌。念には念を入れて更にその上から念で加工して更に念を新たに重ねないと秀は信用できないからね」

「俺はどんだけ信用されていないんだよ」

まさか、ここまでウリアに信用されていなかったとは……まぁ、居候し始めて一週間足らずだからそこまでの絆を期待するのもおかしいのかもしれないけれど。

「解ったわよ、秀。それじゃあ、私達はお風呂に入って来るからね？　もう一度言うけれど、私達は今からお風呂場に行って来るからね？」

「解った、解った、解ったから。そう何度も言わなくていい。耳に烏賊（いか）が出来たらどうするんだ」

「秀ちゃん、それを言うなら耳に胼胝（たこ）が出来たら、だよ？　それと、耳に胼胝が出来るの『胼胝』は海に居る軟体動物の方の『蛸（たこ）』じゃないからね？」

「……」

苦笑と共に霧歌から訂正されてしまった。

やはり、いざと言う時に無知というものは何だか恥ずかしいと言うか、悲しいものである。

「それじゃあ、行って来るね、秀」

「秀ちゃん、お風呂お借りしますね」

「おう。存分に堪能（たんのう）して来い」

風呂場に向かって行く二人の姿を見送った俺は何気なくテレビを点けてみる。

ニュース番組では相変わらず昨日のウリアと『魔導獣機』との戦闘――もとい、“怪現象”についての報道が。

別のチャンネルでは音楽番組とか、バラエティ番組とか――時折チャンネルを変えながら俺はテーブルに頬杖を着いてそれらの番組を網羅していく。

夜の秘密の御話？

母さんとか、姉さんとか……最近はウリアがこの家にやって来て改めて気付いた事なのだが。

女性というものは風呂を入り終わるのに掛かる時間が男性と比べて比較的長いのである。

いや、それは偶々俺の家に集まる女性がそういうものであるだけなのかも知れないが。

しかし、その仮説が成り立つ場合――ただでさえ、ウリアも中々一度風呂に入ったら上がって来ないのに、霧歌まで一緒に入っているようでは単純計算で二人が入り終わる時間はいつもの二倍になる。

だから、こうやってテレビでも眺めていないと俺は暇で暇で暇過ぎて仕方ないのである。

「……」

……しかし。

あれだけ先ほどウリアに風呂は覗かないと豪語しておいて何だが――今、この家の風呂場に俺と同世代の女子が二人も入浴していて、それにも関わらずここでボーっとテレビを見ている俺は一体全体どうなのだろうか。

何か俺、今世界から自分の存在意義について問われているような気がする。

耳を澄ませてみれば、周囲から聞こえてきそうなくらいだ。

真之乃秀よ、お前はそこで呆然とテレビを鑑賞していていいのか――的な、そんなちょっと渋い声で。

アニメとか映画とか、そういったフィクションに出て来る神様の声は大概がちょっと渋くてカッコイイ声だからなぁ。

きっと、この世界をどこかで見守っている傍観者――もとい、神の声もそんな感じなのだろう。

「……」

いや、行かないけどね？

俺は風呂場には行かないけどね？

こういうシチュエーションで逆に風呂場に行かない事はヘタレだとか意気地が無いとか思われるかもしれないけれど。

俺は常識に則って絶対に行かないからね？

普段の俺を見て常識がどうとか語れる資格は無いかも知れないが、俺は断じて風呂場には行かない。

だって――ウリアなら未だしも、今回は霧歌が居るのだ。

そんな時に風呂場を覗こうものなら――ウリアの如く蹴りだけじゃ済まないだろう。

本当に、冗談抜きで、殺されてしまいそうな……そんな気さえしてきた。

……。

「……バラエティ番組でも観るか」

そう言って俺はリモコンを手に取るとテレビのチャンネルを変え始めるのだった。

◆◆◆

４０分ほど経って、漸くウリアと霧歌は風呂から上がってきた。

その後には無論、俺が風呂に入ったのだが。

ウリアと霧歌が使ったであろうシャンプーや石鹸の香りがそこにはまだ充満していて――いや、何でも無い。

そして、ウリアと霧歌が浸かったであろう浴槽の水に俺は少なからず興奮を――いや、何でも無い。

とりあえず、俺は風呂に入った。

風呂場から出てリビングの時計で時間を確認してみると――俺はどうやら１０分程度で入浴を完遂（かんすい）したようだ。

やはり、男と女では入浴に掛かる時間に違いがあるのだろうか。

何がそんなに時間が掛かるのだろう……髪、とか？

俺がそんな事を思っているとリビングでウリアと共にテレビを鑑賞していた霧歌がこう言ってきた。

「あの、秀ちゃん。ちょっとお願いしたい事があるんだけど」

「おう、何だ？」

「着替えをお借りしたいなぁ、って。急な話だったし、私が着替えを持って来なかったのが悪いんだけど……ほら、その、下着もそのまま、だから」

「ああ、別に構わないぜ？　今から姉さんの部屋に行って適当に漁って来いよ」

「うん、ありがとう。ゴメンね？　秀ちゃん」

「お安い御用だよ」

「それじゃあ、ウリアちゃん」と霧歌はテーブルの椅子から立ち上がる。

「今から私と一緒に着替えに行こうか？」

「えっ、私はこのままで良いわよ」

「でも、ウリアちゃんこの時代に来てからずっとその格好のままな

んでしょ？」

「ああ、これは、その……大丈夫なの。この戦闘服は未来の技術でどんな環境でも適応するように作られたものだから。こんな夏の暑さでも、南極に居てもこのスーツがあれば私はどんな環境にも適応できるの」

ていうか、そうだったのかよ。

しかし、まぁそうだろうな。

だって、そんな機能が付いてないと絶対暑いもん、今の時期。

「だから、別に汗とか私は余り掻かないから大丈夫だよ、霧歌」

そんな事を言うウリアだったが、それでも尚、霧歌は引き下がらないようで。

「駄目だよ、ウリアちゃん。例え余り汗を掻いていなくても、同じ服を1週間くらい着続けるのは女子にとって余りどうかと思うよ？」

「で、でも、この時代の洋服ってその、余り着方が解らなくて」

「それなら、私が教えて上げるから」

「で、でも……その、これと違う洋服を着るのは……」

そう言って——何故かウリアは俺の方を一瞥（いちべつ）して。

「……は、恥ずかしいよ」

「同じ洋服をずっと着ている方が恥ずかしいわよ。ほら、ウリアちゃん立って。このまま同じ服を着ていたら幻滅（げんめつ）されちゃうかもよ？」

「そ、それはヤだ！」

その霧歌の言い回しに勢い良く椅子から立ち上がるウリア。

ていうか、幻滅されるって……一体誰からなのだろうか？

テレビに出ていた憧れのアイドルか誰かか？

ちなみに、俺だったら多分幻滅なんかしないだろうけど。

だって、その格好の方が何かエロティックだし。

……。

……風呂上りの牛乳でも注いで来るか。

「それじゃあ、秀ちゃん。今から私達ちょっと着替えて来るから」

「おう、了解。牛乳注いで待ってるわ」

「うん、ありがと、秀ちゃん」

俺にそう言って笑みを見せた霧歌はウリアと共に二階の姉さんの部屋へと向かうのだった。

◆◆◆

それからまた２０分ほど経って霧歌とウリアはそれぞれ寝間着に着替えて戻って来た。

霧歌は淡いピンク色のパジャマをその身に纏っていた。

「……ど、どうかな？　秀ちゃん」

「……ああ、良い。可愛い。思わず襲い掛かりたくなりそうだ」

「ありがとう……でも、襲い掛かりはしないでね？」

「……それで？」

俺は霧歌の隣で恥ずかしそうに俯いているウリアを振り向く。

「お前はどうして……そんな服装をしているんだ？」

何故かは解らないが、ウリアはおそらく姉が高校時代に着ていたであろうセーラー服を身に纏っていた。

つーか、本当に何でだよ。

もっと他にマシな洋服があっただろうに。

……いや、俺にとっては得な光景なのだが。

「霧歌も一緒に居てこの結果はどういう事なんだよ」

「あ、あの、それが……その。ウリアちゃん、秀ちゃんのお姉さんの服がどれもサイズ合わなくて」

「ああ……なるほどな、そういう事か。まぁ、流石の姉さんの洋服でも高校生時代のものなら合うわな。特に胸とか」

「言うな！　それを言わないでよ、秀！」

「何度も言うが貧乳はステータスとも言うぞ？」

「だから貧乳って言うな！　それからそんな慰めの言葉も要らない！」

……しかし。

「霧歌よ。お前はさり気無く姉さんのパジャマを着こなしているん

だな。俺の記憶が正しいなら、それは確か姉さんが大学に受かって家を出る直前まで使っていたものなんだけど」

「えっ、そうだったの？　でもまぁ、流石の私でも秀ちゃんのお姉さんのバストには適わないよ」

そう言いつつ、見る限り余り適っていない訳でも無さそうだが……。

ていうか、ウリア。お前霧歌の胸を睨み付けてんじゃねーよ。

それは生まれ付きの“差”なのだから、気にしたら終わりだぞ。

「しかし、パジャマ姿の霧歌にセーラー服姿のウリアか……くそっ、カメラを壊されなければ記念に一枚撮っていたものを」

「秀ちゃん、さっきから思考がだだ漏れだよ？」

「おっと、危ない……口を滑られてしまう所だった、ギリギリセーフだな」

「いや、もう秀ちゃんは口を滑らせてしまっているから、ギリギリアウトと言うか、むしろ完全にアウトだよ」

「そうだよ、秀。秀はもう既にアウトローだよ」

「誰がアウトローだ！」

誰が罪を犯した無法者だ！　誰が！

「ていうか、ウリア。お前それ意味を知っていて言ったのか、それ

ともただ単に言葉のニュアンスが似ていたから使ったのか？」

「私はその言葉の意味を理解していてあえてその言葉を使ったの」

「そうか、それはつまり態とという事なんだな！？」

「良いじゃない、アウトロー。アウトローって案外カッコイイ呼び名じゃない」

「確かにアウトローという単語自体はカッコイイかも知れないが、そのレッテルを貼られてしまったら人として終わってしまうんだよ」

「えっ？　秀ってもう既に人として終わっているわよね？」

「怒るぞ、ウリア。流石の俺でも怒るぞ」

俺は別に人として終わってなんかいない。

……そう思いたい。

◆◆◆

午後１１時頃、霧歌の提案で俺とウリアは寝る事になった。

午後１１時に寝るというのは流石に早過ぎると俺は思った。

女子とは言え、幼馴染の友達が家に泊まりに来ているのだから――

何と言うか、雑談と言うか談笑と言うか、そんな事で深夜まで時間

を潰したかったのである。

しかし、霧歌の言う所に寄れば、休みの日であっても毎日この時間帯には寝ているらしい。

……つーか、早過ぎだろ。毎日１１時には寝ているなんて。

「そうでもないよ？」

歯ブラシ（この家にある予備をウリア、及び霧歌には使ってもらっている。いつ母さんや姉さんが帰って来ても良いようにこの家には数本の歯ブラシが常備されているのだ）で歯を磨きながら霧歌はそんな事を言った。

「毎日１１時に寝れば、朝課外までかなりの時間寝る事が出来るし……まぁ、今は夏休みだからそんな事は関係無いけれど、何と言うか習慣付いちゃって。今の生活習慣を変えたくないっていうのが本音だけど」

「ふーん、そうなのか」

「そうそう。ていうか、早く寝ないとお肌とか荒れちゃうし」

「えっ！？　そ、そうなの！？」

ウリアが不意に素っ頓狂な声を上げた。

つーか、ウリア。口から歯磨き粉が飛んでいるんだが。

汚いよ。

「そうよ、ウリアちゃん。知らなかったの？」

「そ、そうだったんだ……全然知らなかった」

まぁ、それを知らないのはウリアにとって当然なのだろう。

何せ、２０５６年はいわゆる未来的な戦国時代である――そんな時代にお肌の事なんかいちいち気にしていられる訳が無い。

その証拠に、ウリアは毎晩俺の部屋で夜遅くまで漫画を読み耽（ふけ）っていた。

時々その漫画に対して笑う等のリアクションを見せるから――いや、俺も夜更かしはするのだが、眠りたい時に眠る事が出来ないのである。

つーか、正直に言うとうるさい。

厄介な話――と同時に難儀な話である。

夜の秘密の御話？

「そっかぁ、今度から気を付けないと……。秀の部屋で寝ると、毎回眠れないんだよね」

「……秀ちゃん、ウリアちゃんと一緒に何してるの？」

「何もしてねーよ！　こいつがただ漫画読んで勝手に燥(はしゃ)いでいるだけだから！　だから霧歌も俺に対して何か疑惑の視線を向けるんじゃない！」

つーか、ウリアも勘違いされるような言い方をするんじゃねえ！

霧歌から睨まれたと言うか蔑まれた視線を向けられただろうが！

「……あっ、霧歌。ちょっと右にずれてくれ」

「あっ、うん。解った」

霧歌は右側に一旦退いて、俺に洗面台を解放してくれた。

俺はコップに注いだ水で口を濯(ゆす)ぐと、歯ブラシを丁寧に洗ってコップの中にそれを入れた。

「それじゃあ、俺、霧歌の分の布団を運んでおくから」

「ああ、うん。ありがと、秀ちゃん」

「どういたしまして。三人寝れるかどうかまだ解らないけどな」

「うん――うん？　ちょっと待って、秀ちゃん」

洗面所から出ようとした俺は霧歌から不意に呼び止められた。

「何だよ、霧歌」

「それはこっちの台詞よ。どうして、秀ちゃんは今三人――つまり、私達が一緒に寝る事が出来るのか否かを気にしている訳？」

「えっ、霧歌もウリアと一緒に今日は俺の部屋で寝るんだろ？」

「何で勝手にいつの間にかそう決定されているのよ。何をさも当然と言った表情で言っているのよ。私は寝ないわよ、秀ちゃんの部屋では」

「な、何だって……！」

「いや、そんなに驚愕されても……当たり前じゃない。年頃の男女が一緒の部屋で寝るなんて不健全です」

「そうよ、秀。秀は不健全な存在なんだからそこら辺の事に注意して貰わないと」

「誰が不健全な存在だ！」

俺自体は不健全じゃないから！

「何だ、そうなのか……てっきり俺は今日霧歌がこの家に泊めてくれたお礼に俺と添い寝してくれると期待していたのに」

「添い寝なんかしません」

「それじゃあ、メイドコス――」

「メイドのコスプレもしません」

「仕方ない……解ったよ。今回は見逃してやるが、次は覚悟しておけよ？」

「……次に秀ちゃんの家に泊まった時に私は一体全体何をされちゃうのかな……？」

「……それでさぁ」

「秀ちゃん、話を逸らさないで」

だが断る。

「確か、物置に客人用の布団があったから、先に行ってそれを――えっと、姉さんの部屋で良いよな？　そこに運んでおくから」

「華麗に私の言葉をスルーしたね、秀ちゃん……まぁいいわ。今回はこれ以上、追究しないでおく……藪を突いて蛇じゃなくて熊が出て来たら嫌だし」

「熊じゃなくてライオンかもしれないしな」

「秀ちゃん、ちょっと黙って」

……幼馴染から黙れと言われてしまった。

何かちょっと凹む。

「……ま、まぁ、とりあえず、布団は姉さんの部屋に運んでおくから」

「うん、解った。お願いね」

霧歌のそんな言葉を背に受けながら俺は洗面所を後にするのだった。

◆◆◆

俺が布団を物置から姉さんの部屋に運び終わった頃に丁度霧歌とウリアが二階にやってきた。

「それじゃあ、また明日ね、霧歌。良い夢を」

「ちょっと待ちなさい」

霧歌にセーラー服の首根っこを掴まれるウリア。

「な、何？」

「ウリアちゃんは一体全体どこに向かおうとしているのかな？」

「しゅ、秀の部屋だけど――って霧歌？　何か笑顔が怖いんだけど？」

「何でウリアちゃんは秀ちゃんの部屋に向かっているのかな？」

「だ、だって……私はいつも秀の部屋で寝ているから」

「私が今日この家の中に居る以上、そんな事は許しません」

「えーっ？　だ、だって、秀の部屋に行かないと漫画が読めない……昨日途中まで読んで物凄く続きが気になるんだけど……」

「ウリアちゃん。自分の貞操（ていそう）と漫画の続き、どちらが大切なの？」

「漫画の続き！」

「……ウリアちゃん」

「何？」

「……怒るよ……？」

「ひぃっ……ご、ごごっ、ゴメンナ、サイ……！」

「それじゃあ、もう秀ちゃんの部屋で寝たりなんかしない？」

「し、しない……しないわよ。誓う、誓うから、許して下さい……！」

「そっか。うん、解ってくれればいいの」

そう言ってニッコリと満面の笑みを見せる霧歌。

対するウリアは青ざめた表情で目の端に涙を浮かべていた。

『魔導獣機』にも全く臆さないウリアが霧歌に対しては本気で恐怖していた。

ウリアの中での恐怖を感じるものの順列が間違っているような気がする――いや、確かにあの笑顔を浮かべる時の霧歌は何物にも勝る恐怖を感じさせるが。

ていうか、ツッコミが遅れたが、俺と一緒の部屋で寝る事で貞操どうとかこうとかっていう話になるのはおかしいだろ。

まぁ、確かに同世代の男女が同じ部屋で寝泊まりをするのは駄目かも知れないが……。

何と言うか、信用されていないようで、俺はまた若干凹んだ。

夜の秘密の御話？

「……という訳で、ウリアちゃんは私と一緒に秀ちゃんのお姉さんの部屋で寝る事になったから」

「ああ、うん。解った」

「ウリアちゃんの貞操は私が護り切るから」

「何か無駄な決心と共に俺に濡れ衣が！？　そんな決心しなくても大丈夫だから安心しろ！」

そして、姉さんの部屋へと向かって行く霧歌とウリア――いや、ウリアだけは霧歌に殆ど引き摺られているような感じだったけれど。

「……はぁ」

何と言うか、俺は心の傷から溢れ出したため息をついて自分の部屋へと戻るのだった。

意外にも、俺の心に入った傷は深かったのである。

致命傷だったのである。

しかしまぁ、俺のハートがただ単にガラス製だったからという理由も挙げられるのだろうけど。

◆　◆　◆

私は今晩、霧歌と一緒の部屋で寝る事になった。

正直、秀の部屋にある漫画本の続きは物凄く気になっていて、それこそ夜も眠れないほどに気になっているのだが……。

あの霧歌の黒々しいオーラを見せ付けられては、霧歌の言葉に同意せざるを得なかっただろう。

ていうか、あんな霧歌初めて見た。

怖かった……いや、冗談抜きで本当に怖かった。

『魔導獣機』とか、戦闘中でさえあんな恐怖を感じた事は無かったのに。

何と言うか……私があの霧歌の笑顔を見た時、根源的な恐怖を感じ取ったのだ。

私の肌が、私の身体が、私の神経が――私の全てが。

霧歌から発せられるそのオーラを――感じ取った。

……まぁ。

ラスボスに遭遇してしまった時のようにな、そんな感じで私は語っているけれど、実際問題、霧歌はラスボスでも無ければ中ボスでも、ましてやその辺に居る雑魚キャラでも無く――ただ単なる一般人なのである。

でも、あんなオーラを一般人が出せるものなのだろうか……霧歌は一体何者なのだろう。

「ウリアちゃんは、ベッドで良いからね」

そう言って、霧歌は今ベッドの隣の床に秀が運んで来た布団を敷いていた。

何か、先ほどの威圧感から私は咄嗟に霧歌にベッドを譲ろうかと思ったのだが――。

その霧歌の気持ちを裏切っても何か後が怖いので、私は素直に霧歌の言葉に従う事にした。

「……あの、霧歌？　手伝おうか？」

「ううん、大丈夫。泊めて貰っている身なんだから、これくらいは自分でやらないとね」

「そ、そっか。それならいいけど……」

「……よし、これで完成、と」

布団を敷き終わった霧歌はその上で両手を腰に当てて得意気な表情を見せた。

「それじゃあ……もう、寝る？」

「もう寝ちゃうの？　ウリアちゃん、今日の戦いで疲れていたりす

る？」

「いや、そういう訳じゃないけど……」

「そっか。それならもう少し起きていようよ。折角なんだし、今日は特別に夜更かしして色々と話さない？」

「話すって……何を？」

「色々よ、色々。私とウリアちゃん、時空を越えてこうして巡り会えたのに、お互いの事をまだ余り知らないじゃない？」

「……確かに」

私は先ほどの霧歌から感じ取った黒々しいオーラ――と、あの時感じた凄まじい悪寒を思い出す。

「お互いの事……まだ余り知らないかもね」

「でしょう？　それに、ウリアちゃんから未来の事とか色々聞いておきたいし」

「未来の事？　それならこの前、秀から説明があったじゃない」

「そういう未来じゃなくて……その、ウリアちゃんが覚えている範囲で良いから、そういう戦争とは別の未来の事とかを聞いてみたいなぁ、って」

「ああ……そういう事か。でも、私が生まれてきた時には既に戦争の真っただ中だったし、この２０１１年から戦争が始まるまでの歴

史に関する情報は全て自然災害で無くなってしまったから……多分、私から話せる事は何も無いわ」

「そっかぁ……それは残念だなぁ」

「ゴメンね、霧歌」

「ううん、良いのよ。別にそこまで聞きたいって訳じゃなかったし。言うなれば、ついでに聞いておこうかなって感じだったから」

「……それじゃあ」

私はベッドに腰を下ろしながら霧歌にこう問いかけた。

「霧歌が私に聞きたい本命の事柄は――何なの？」

「うーん……そうだね。私の本命は……私が本当に聞きたいのは」

そう言って、霧歌は私にニッコリと微笑み掛けるとこう言ったのだった。

「――秀ちゃんの事、かな？」

「……秀の事？」

私は唖然とする――唖然として、瞼（まぶた）をパチパチと瞬（またた）かせた。

「秀の事で……霧歌が私に聞くの？　秀の事を知りたいなら本人に聞けば良いというか――それ以前に、私なんかよりも霧歌の方が秀の事を知っているんじゃないの？　幼馴染なんだから――」

「違うわ」

そう言って――霧歌は私の言葉を途中で遮って、言う。

「私が聞きたいのは……ウリアちゃん、あなたが秀ちゃんの事をどう思っているのかって事よ」

「私が……秀の事をどう思っているのか？」

何だろう。

どういう意味なのだろう、それは。

私は、その霧歌の質問の真意が解らなかった――その目的が理解できなかった。

「そんな事を聞いて……どうするの？」

「どうもしないよ、私は。ただ……ちょっと、ね。今の内にそれをハッキリさせておこうと思って」

「……」

やはり――何度考えても霧歌のその質問の意味が私には解らなかった。

だから、私はその質問を聞いて頭の中に浮かんだ答えを――霧歌に答える。

「私は……秀の事を、“護らなければならない対象”として見ているわ。だって、それは未来の――２０５６年の秀から私に科せられた任務のようなものだから。だから、私は……秀の事を護るべき人間として、そう見ているわ」

「……本当に？」

「……な、何が？」

「本当に――ウリアちゃんは、秀ちゃんの事を“そういう風な見方”しかしていないのかな？」

「えっ……な、何？　霧歌は私に何が言いたいの？」

霧歌が何を言っているのか――私に何を聞こうとしているのか。

全く――理解、できない。

「……ううん、ゴメン」

「何でも無い」と霧歌は不意に顔を伏せてそう言った。

「私がちょっと……勢い余ってウリアちゃんに色々と聞き過ぎちゃった。本当にゴメンね、ウリアちゃん」

「う、ううん……私は別に、気にしないけど」

「うん……ありがとう。でも、今のは本当に……本当にただ、確認したかっただけだから」

「確認？　確認って……何の？」

「さぁ、何だろうね？」

「でも」と霧歌は私に向かって顔を上げる。

その霧歌の顔には――いつもの笑顔が浮かんでいた。

「私にもまだ……チャンスはあるって事が、解ったよ」

「……チャンス？」

私は首を傾げてみる。

しかし、当然の事ながらそんな事をしてもその霧歌の言葉の真意は解るはずも無く。

「いや、本当に何でも無いから、ウリアちゃん。さっきの事は忘れて――ていうか、忘れてくれると嬉しいかな」

「まぁ、別に良いけど……それじゃあ、次は何を話す？」

「そうだねぇ……ウリアちゃんから私に対して何か質問はある？」

「霧歌に……質問、か」

うーん。

あの黒々しいオーラの事を聞いてみてもいいのだろうか……いや、何か駄目なような気がする。

理由は解らないけれど、何か駄目なような気がする。

だから、私は今浮かんだとある素朴な疑問を霧歌にぶつけてみた。

「それじゃあ……霧歌はどうして、今日秀の家に泊まりたいだなんて言ったの？」

「ああ、それは……そういえば、まだウリアちゃんには話してなかったね」

「何を？」

「私の家庭の事、だよ」

霧歌は苦笑と共に話し出す。

「私の家って――秀ちゃんの家とは逆で、さ。私には父親が居ないの」

「それって……その、もしかして事故？」

「ううん、事故じゃないよ。お父さんがお母さんと喧嘩して家を出て行った――まぁ、一般的な言い方を使用させて貰うのなら、離婚だね」

霧歌は、言う。

苦笑であるが、明らかに“笑み”を浮かべて――霧歌はまるで自分の自慢話を語るがの如く淡々とした口調で語り始める。

「私のお父さん、酒癖が悪い人だったの。お酒を飲むと私やお母さんに暴力を振るって来て……それで――お母さんの方も怒りか何かが爆発しちゃったんだろうね。最終的には、お父さんとお母さんは大喧嘩になっちゃって、お父さんは家を出て行っちゃった。普通は逆なのにね。それで、お父さんの方の行方はまだ解らないんだけど、事実上は離婚になったの」

「……その、ゴメンね？　霧歌……そんな事聞いちゃって」

「ううん、別に良いのよ。私が聞かれて、私が話したかったから話しただけだし。それに、もう幼稚園生くらいの事だから……そこまで鮮明に覚えている訳でも無いし」

「よ、幼稚園生って……そんな頃から、霧歌にはそんな事があったの？」

「うん、そう。でも、そこまで珍しい事じゃないと思うよ？　いや、こんな私みたいなケースはそこまで多い訳じゃないけれど、少ない訳でも無いだろうから」

「……霧歌は、どうしてその事をそんな風に話せるの？」

「そんな風にって……どんな風に？」

「……だから」

――だから。

「そんな……何となく、平気そうに、だよ。本当は辛い事なのに、それをどうして――そんな風に、平気そうに話す事が出来るのかな、って」

「……ウリアちゃん？」

「私だったら……私にもし――もし、だけど、そんな過去があるのなら、私は多分、霧歌みたいには話せない、かな」

「……そうだね」

そう言って――霧歌は私に優しげな笑みを見せてくれた。

「確かに、ウリアちゃんの言う通りだよね。辛い事を平気そうに話す事なんて出来ないよね、普通は。辛い事を思い出す時には辛い表情で、時には泣いたりするのがセオリーだけど……でも、でもね？」

そして、霧歌はこう言った。

「でも、そんな辛い経験の後に人生が変わるような――そんな素敵な出来事があったら、多分人はどんなに辛い事でも……まぁ、私みたいに全然平気って訳じゃないだろうけど、でも、少しは辛い気持ちにならないで話せるんじゃないかな？」

「……それじゃあ、霧歌にはそんな辛い出来事も覆（くつがえ）してしまった――そんな幸せな出来事があったの？」

「勿論よ。物凄く幸せな出来事が――あの時の私を変えてくれた」

「……それは、何？」

「……それはね」

私の質問に――霧歌はまた嬉しげな笑みを見せてこう言った。

夜の秘密の御話？

「私のお母さんがお父さんと離婚したって言ったでしょ？　それで、いつ行方不明になったお父さんが現れるか解らないから、お母さんと一緒にこの町に引っ越して来たの。でも、私はその事に余り賛成じゃなかったの。だって、幼稚園に入ってその頃は結構経っていたから、友達と別れたくなくて……でも、お母さんの事を考えたらそういう訳にも行かなかったから、仕方なく、私は元居た幼稚園を離れる事になったの」

「こっちに来て幼稚園に入ったばかりの頃は……辛かったなぁ」とその当時の事を思い出しているのだろうか――霧歌は布団の上で膝を抱えながら苦笑を見せた。

「ウリアちゃんにも解るかな？　学校もそうだけれど、幼稚園とかって時間が経過した後に転入とかするとその時はもうその施設の中で子供同士の絆が色々と出来ちゃってて……余り、友達の輪に入れないんだよね。だから、こっちに引っ越して来たばかりの頃は本当に辛かった。幼稚園に行っても誰とも喋らずに、遊ばずに、ただ敷地内の隅っこにある砂場で一人で遊んでいたから……」

「でもね？」と霧歌はまた嬉しそうな微笑を浮かべて言う。

「そんな時……秀ちゃんが私に話し掛けてくれたの。秀ちゃんは私に話し掛けてくれて、私と一緒に遊んでくれて……そして、私と友達になってくれた。あの時は本当に嬉しかったなぁ……冗談抜きで、あの時の秀ちゃんが私の目にはヒーローに見えたの。女子的な発想で言えば白馬に乗った王子様って所なのかな？　今は言うだけで恥ずかしいけれど、当時の私は子供だったから、そういう発想が生ま

れたのかもしれないわね」

「……秀が、白馬に乗った王子様」

「あっ、その事だけど。秀ちゃんには絶対秘密だよ？　約束だからね？」

そう言って私に霧歌はウインクと共に人差し指を口に当てる仕草を見せてきた。

その霧歌の仕草に私は無言で頷く。

「あの時……秀ちゃんが私に話し掛けてくれなかったら、一緒に遊んでくれなかったら、友達になってくれなかったら――私はきっと、今のような人間にはなれなかったと思う。勉強を頑張れたのも、自分でも驚くくらいに明るい性格になれたのも……きっとそれは、秀ちゃんのお陰だから」

「……霧歌は、随分と秀の事を尊敬しているのね」

「うん、当たり前じゃない。だって、秀ちゃんは私の未来を変えてくれた人なんだから」

「……秀が、未来を」

その霧歌の言葉に――私は“その事”を思い出す。

そう、秀は私を“助けてくれた”。

秀は深い闇の中から私を“救い出してくれた”。

秀が居なければ――きっと、今ここに居る私は存在しないのだろう。

過去にも、未来にも。

現在だって。

こんな――こんな“平和”な私はどこの時空にも、世界線にも、平行世界にも存在しなかっただろう。

秀が、居なければ。

だから――だからこそ。

私はこう思うのだ。

秀を助けたいと、秀を救いたいと。

秀は私を助け、救ってくれた――それならば、今度は私が秀を助ける番だ。

秀のお陰で今の私が居る。

それならば、私が秀の未来を護らなければ。

秀が私の未来を切り開いてくれたのと――同じように。

「……そうね、霧歌の言う通りかもしれない」

「何が？」

「秀が白馬に乗った王子様みたい――って事よ」

「何よ、それ。どちらかと言えば、秀ちゃんにとってはウリアちゃんの方が白馬に乗った王子様でしょ？　あっ、この場合は白馬に乗った王女様か」

「でも……何かアレよね。秀が白馬に乗って現れたらカッコイイと感じるよりもまず笑ってしまうかもしれないわ」

「あっ、それ言えてるかも。秀ちゃんが白馬に乗って登場なんかしてきたら、逆に笑いが止まらないかもね」

「……霧歌、せめてあなたくらいは私の言葉を否定しないと駄目だと思う」

秀の立つ瀬が無くなってしまうだろうから。

幼馴染からも貶（けな）されてしまうのは流石に可哀想な気がする。

「……あれ？　そういえば今更だけれど、霧歌の家庭の事が、霧歌がこの家に泊まる事と何の関係がある訳？」

「う……そ、それは、その」

言葉を濁らせながら霧歌は苦笑と共にモゴモゴと私にこう答えたのだった。

「私その……お化け屋敷のトラウマのせいで、幽霊が苦手で……」

「幽霊？　そんなものが怖いの？　あんな非科学的なもの、過去にも現在にも未来にも存在しないから、怖がるだけマシだと思うわよ？」

「うう……未来からやってきたウリアちゃんが科学的に否定してくれると少しだけ心が軽くなるけれど、心に芽生えたトラウマは中々無くならないものなんだよ……」

「そ、そうなんだ……」

半分泣きそうな表情でそんな事を言ってくる霧歌。

何と言うか……先ほどの黒々しいオーラを放つ時の霧歌とは真逆で。

「……フフッ」

それが何だか可笑しくて、私は思わず小さく笑ってしまった。

「わ、笑いごとじゃないんだよ！？　ウリアちゃん！　私にとっては死活問題なんだから！」

「あ、ああうん……ゴメン、霧歌」

そして――私と霧歌は暫し談笑を重ねに重ねた後。

夜の1時を回った所で漸く寝る事にした。

「……それじゃあ、話す事も話したし。もうそろそろ寝ましょうか、ウリアちゃん」

「うん、そうね。これ以上話す事も無さそうだし、漫画も無いし」

「ていうか、今度から夜更かしは止めるんじゃなかったの？　美容と健康の為に」

「……そ、それは」

……えっと。

「そ、その……今読んでる漫画を全部読み終わったら……夜更かしは止めるわよ」

そう言った私に――霧歌は全てを見透かしたが如く笑みを見せて。

「……そうだね。今読んでいる漫画を全部読み終わったら、早寝早起きを心掛けてね、ウリアちゃん」

「うん……出来るだけ心掛けてみる」

「それじゃあ、電気消すね」と布団の上に立ち上がった霧歌はそのまま部屋の入り口に向かって歩き出す。

そして、霧歌が部屋の入り口の傍にある電灯のスイッチに触れようとした所で――。

「き、霧歌」

私は霧歌の背中に向かって声を上げた。

「何？　ウリアちゃん？」

「……その」

「ん？」

「……いや、何でも無い。お休み、霧歌」

「うん、お休み、ウリアちゃん」

そう言って霧歌は私に微笑んでくれた――その笑みは私の心に安心感を齎してくれた。

そして、私はそんな霧歌に微笑み返しながら布団に潜り込む。

すると、程無くして部屋の電気が消えた。

私のすぐ隣の布団に霧歌が潜り込む音が聞こえてくる。

「……」

私は暫しの間――何も見えない真っ暗な空間を見据えた後。

何(いず)れは話さなければならない“その事”を考えながら――静かにその目を閉じた。

決闘

8月2日――。

あの二体の『魔導獣機』の強襲があった翌日、やはりニュースや新聞では昨日の事が大きく騒がれているようだった。

霧歌の心配していた写真や動画は無かったようだが――それでも、昨日のウリアと『魔導獣機』の戦闘を見ていた人は少なからず存在しているらしい。

それこそ、ＵＦＯだとかそんな噂も流れ始めているようだ。

「しかし……何かアレだな」

俺はテレビで流れているニュースをテーブルに座ってそこに頬杖を着いて見ながら言う。

「段々と昨日の事が――と言うよりか、この前の森林の一件からこの町に都市伝説が増え始めているけれど、その中心に居るのが自分だと思うと……何だかやぶさかではないと言うか、少なからず嬉しい気分になるのは何故だろうな」

「自分の事で世間が騒いでいると勘違いするからじゃない？」と俺の正面に座るウリアは俺と同じ体勢で言う。

「ネット上で誰かに対して殺人予告を出して世間を騒がせるみたいな――そういう感じで秀は誰でも良いから自分の相手をして欲しい頭のおかしい人みたいな考えを持っているのね」

「長々と語っておいて最終的に俺を罵倒する言葉で落ち着かせるな」

「ていうか、やっぱりテレビは来なかったわね」

「お前もそれを気にしているじゃないか。案外俺と同類じゃないか」

「秀と同類なんてゴメンよ。虫唾（むしず）が走るわ」

「お前、侮辱罪って犯罪を知っているか？」

「秀の同類なんてゴメンよ。悪寒（おかん）が走るわ」

「言い直しても同じだ！　虫唾も悪寒もそこまで変わらねーよ！」

そもそも、意味はともかくどちらにしてもそれらの言葉は罵倒だからな！

「まぁ、テレビは来なくて良かったかもね……」

「えっ、どうしてだよ」

「だって、秀が生き恥を掻かずに済んだじゃない？」

「お前、それは一体全体どういう意味だ！」

どうしてテレビに映るだけで生き恥を晒す事になるんだよ！

「……あれ？」

俺はここで漸くその事に気付いた。

「そういえば、霧歌は？」

「さぁ、私が起きた時にはまだ寝ていたわよ？」

「何だ、そうなのか……てっきり、今日は起きたばかりで洗面台で少し乱れたパジャマを着た霧歌に会えると楽しみで柄にも無く早起きをしてきたというのに……」

「秀が珍しく早起きしていると思ったらそんな裏話があったのね。殴ってもいい？」

「だが断る」

「まぁ、昨日は日付が変わって、1時まで二人で話していたからね……霧歌が寝坊しているのは慣れない夜更かしのせいでもあるんじゃないかしら？」

「1時まで夜更かしってお前……何を話してたんだよ」

「べっつにー。何でも無いわよ。互いに持ち合わせている颯人の変態談をどちらが多く話す事が出来るか勝負した以外には何も話していないわ」

「お前、俺が傍に居ない事に託けて何てトークショーを開催してやがるんだ！　つーか、最早それは虐めの域だよ！　陰口を叩くなんてお前等最低だぞ！」

「陰口なんて叩いていないわよ。昨日は単なる自慢話をしただけな

んだから」

「その自慢話に問題があるって言ってるんだよ！　ていうか、変態談って何だよ！　失敗談みたいに言うな、初めて聞いたわそんな単語！」

「ああもう、五月蠅いなぁ。朝からツッコミだけは冴え渡っているわねぇ……流石は変態だわ」

「それから、何かと俺を罵倒する時に変態という言葉を乱用するな。俺がそれに慣れてしまったらどうするんだ」

「慣れるの？　逆に慣れてしまうの？　秀は」

そんな会話を交わしている内に――霧歌がリビングにやってきた。

霧歌の目は開いているのか否か判別できないほどに一本の横線となっていた。

つーか、あれって閉じたままなんじゃね？

ほら、時々フィクションの世界とかで居るじゃん。確実に目を閉じたままなんだけど、それでも平気そうに道を歩いて人と会話している奴。

あれって、実際問題前とか見えているのだろうか？

霧歌が二階からここまでやって来れたという事は見えてはいるのだろうが……。

後で聞いてみるか。

「オイオイ、大丈夫か霧歌。お前は何度かこの家に泊まりに来た事はあるけれど、そこまでの顔を見たのは俺生まれてこの方初めてだぞ」

「うーん。私って目覚まし時計が無いと起きれないタイプで……ふわぁ。だから、目覚まし時計があればどんなに睡眠時間を削ってもその時間に起きれるんだけど、その代わりに目覚まし時計が無いといつまでも寝ちゃうんだよねぇ……」

「何かそれ、さり気無く話している割には物凄い体質だよな」

「もう歳なのかねぇ……」

「いや、俺達まだ高校二年生なんだが。つーか、そこまで眠いのか？　何なら俺が一緒に添い寝をしてやってもいいぞ？」

「ううん、いい、大丈夫、間に合ってます」

「……」

……何、今の対応速度。

以上に速かったと言うか、光の速度だったと言うか。

ていうか、別に光速で一蹴しなくても良いじゃないか……。

「……それじゃあ、私ちょっと洗面台で顔洗って来るねー」

相変わらず眠たそうな顔で霧歌はそう言って――。

徐にパジャマを脱ぎ始めた。

「ってオイオイオイオイオイオイオイオイ！」

そこは流石の俺でも止めざるを得なかった。

「待て、ちょっと待て、霧歌！　お前、言葉と動作が噛み合っていないぞ！？」

「ん……あっ、ゴメンナサイ、秀ちゃん。私、寝惚けていると言葉とは逆の動作をしてしまうのよ」

「だから何その特異体質は！　つーか、顔を洗うという言葉の逆が服を脱ぐってどういう事だよ！」

そんな反意語は存在しないだろ！

「まぁ、今のはいつもの癖でもあるんだけどね。私の家、お母さんとか朝帰りで私が起きた時にはまだ寝ているから。だから、朝はとりあえず服を脱いで、外の空気を肌に直接当てて目を覚ますんだよね、私」

「……と、いう事は。お前が起きる時間帯に合わせてお前の家を訪問したらお前の全裸が拝めるという事なのか？」

「秀ちゃん、流石の私でも下着くらいは身に着けてるよ？」

「霧歌。ツッコむ所が間違っていると俺は思うんだが」

うーん。

やはり、寝惚けている時の霧歌といつものように会話を噛み合わせるのは難しいようだ。

決闘？

「仕方ないなぁ……ほら、俺が洗面台まで連れて行ってやるから。付いて来い」

「うん、解った……それじゃあ、私はパジャマを脱ぐね？」

「だから何故そうなる！　寝惚けている時のお前の思考回路は一体全体どうなっているんだ！」

つーか、“俺が洗面台まで連れて行く”という言葉の逆も“服を脱ぐ”になっちまうのかよ！

さっきは“顔を洗う”という言葉の逆でそうなっていましたよね！？

そんな感じで俺は洗面台に辿り着くまでに五度霧歌がパジャマを脱ぎ出すのを阻止したのだった。

今考えればそれはとても惜しい事をしたと懸念していたりもするのだが――。

まぁ、それは後の祭りである。

引っ繰り返ったお盆の中の水は決して元に戻る事は無いのだ。

◆◆◆

霧歌は顔を洗うといつも通りの真面目な俗に言うエリート的な雰囲気をその身に取り戻した。

その証拠に、霧歌が顔を洗い終えた後、俺は霧歌とこんな会話を交わした。

「ところで霧歌。お前、さっき寝惚けてパジャマを何回も俺の前で脱ごうとしたんだぜ？」

「まさか秀ちゃん、それに託けて私の下着の色を見たり、胸を揉んだりしていないでしょうね？」

――という言葉が霧歌から返って来たから、もう霧歌は完全に覚醒したようである。

万々歳だ。

……いや、俺の心境は万々歳では無いのだが。

まさか、あの質問をするだけで霧歌からあんな言葉を返されるとはな。

幼馴染で、しかも親友であるだけに何か複雑な心境である。

「秀ちゃん、何か冷蔵庫とかに野菜ある？」

リビングに戻る途中、俺は霧歌からそんな質問を受けた。

「いや、多分――と言うよりも、確実に存在していないな。葱（ねぎ）の切れ端さえも存在していないと俺は自身と誇りを持ってそう断言しよ

う」

「いや、多分そんな事に誇りは要らないと私は思うよ？」

苦笑と共にそんな事を言って来る霧歌。

うん、やはり、いつもの霧歌にちゃんと戻っているようだ。

「でもそっかぁ……無いのかぁ。あるなら、私が何か手料理を御馳走して上げようと思っていたんだけどなぁ、昨日泊めて貰ったお礼に」

「えっ？　泊めて貰ったお礼は身体で返すって俺に言わなかったっけ？」

「……だから、返そうとしているじゃない。私がこの体を――主に、手を使って、秀ちゃんに料理を振る舞うって言ってるんだから」

「……お前、よく俺が咄嗟に、それも適当に思い付いたどうでもいい言葉に対してすぐそんな返答が出来るよな」

「まぁ、秀ちゃんの言語パターンは長年の付き合いで熟知しているからね」

「マジか」

「うん、マジ、大マジ。ちなみに、秀ちゃんの言語パターンは百八式まであるよ」

「百八式って」

波動球かよ。

「儂の波動球は百八式まであるぞ」

「止めろ、霧歌。それ以上言うな」

「大丈夫だよ、秀ちゃん。色々と漢字を変換して元ネタの本文とは繋がりが無いように見せ掛けたから」

「そのネタバレをしている時点で既にアウトと言うか、そもそも、意味が一緒なら幾ら漢字を変えても無駄だからな？」

そして、俺達はリビングの扉を開けてその中に入る。

リビングでは、ウリアが一人テーブルに頬杖を着いてテレビを見ていた。

「それじゃあ、話を戻すけれど」

「ああ、大いに戻してくれて結構だ。つーか、戻せ」

「私は秀ちゃんに手料理を御馳走したい訳なのですよ」

「……だから？」

「だから……その、お買い物に付き合ってくれると、嬉しいなぁ、なんて」

「どうかな？」と霧歌は小首を傾げて俺にそう問いかけて来た。

いや、別に買い物に付き合うくらい造作も無い事と言うか。
それ以前に、そんな小首を傾げて可愛らしく問われてはそもそも断れないと言うか何と言うか。
「……あ、ああ、別に構わないけど？」
「おっ、引き受けてくれるんだ。ありがとね、秀ちゃん」
「別に……買い物に付き合うなんて、俺で良ければいつでも付き合ってやるよ」
「本当に？　未来永劫？」
「未来永劫って……未来にまでそんな関係を俺に求めるな。行くなら将来結婚するであろう旦那さんと行けよ」
「……だから言ったんじゃん」
「あん？」
「ううん、何でも無い」
「ウリアちゃーん」と霧歌はテレビをボーっと見据えているウリアに向かってこう問いかけた。
「私達、これから昼食の買い物に行くけどウリアちゃんはどうする？」

「いや、私は遠慮しておく。昼食の準備が出来るまで自堕落にテレビを見る――それが私のアイデンティティー」

「お前のアイデンティティーは最低最悪だな」

要するに、お前は単なる自堕落で怠惰な人間だという事か。

自分で言っていて悲しくないのだろうか……ていうか、そもそもこいつは意味を知っていて言っているのか。

矢鱈知識が豊富そうに見えるこいつだが、知っているのは未来の知識だけで余り常識的な事は知らないからなぁ、こいつ。

決闘？

「それじゃあ……ウリアちゃん、私達が帰って来るまでお留守番してるの？」

「うーん、まぁ、そうなるかな」

「……本当にそれで良いの？」

「えっ？」と不意に低い声を出した霧歌にウリアはこちらを振り返ってきた。

ていうか、俺も思わずウリアを振り返った。

何だ。一体全体どうしたと言うんだ、霧歌。

何か怖いぞ。

「ウリアちゃんは確かに、秀ちゃんを護る時には激しい運動をしているかも知れないけれど。女の子の体って、少し気を抜いたら……“膨らむ”のよ？」

「……まっ、またまたそんなぁ」

引き攣った笑顔でウリアは霧歌にこう言葉を返す。

「い、幾ら霧歌の言葉であっても私は騙されないんだから。そ、そう、簡単に、人の体が膨張する訳が――」

「そう？　それなら別に私はもうウリアちゃんに構わないけれど。まぁ、一人家の中で自堕落にテレビ番組を貪って下っ腹が出て来ても？　それはウリアちゃんの怠惰な私生活が招いた結果であって、私には無関係だし？　ウリアちゃんの体がどうなってしまっても私は知らないけどね」

「待ってっ！　ちょっ、霧歌、私を見捨てないで！」

涙目でこちらに――主に霧歌に向かって手を延ばしてくるウリア。

つーか、霧歌よ。

お前将来詐欺師とか、その辺の職業に就けそうだな。

いや、詐欺師は別に職業でも何でも無いのだが。

「ねぇ、霧歌！　私は一体全体どうすればいいかな!?」

「うーん、まずはさっき言ってた変なアイデンティティーを変える――と言うか、抹消する事と。それから、買い物に付いて来るのが面倒なら、お散歩にでも行って来たらどうかな？」

「う、うん、解った！　行って来る、私今すぐ行って来る！」

そう言ってすぐさまテーブルの椅子から立ち上がるウリア――。

「ってちょっと待てウリア。出掛けるならせめて着替えてからにしろよ」

言い忘れていたが、ウリアは昨日の寝間着――もとい、姉さんの高

校時代のセーラー服を未だに着ているままなのである。

俺的にはウリアがその格好をしなくなるのは些か悲しいと言うか、寂しいものがあるが――まぁ、近所をあんな格好で出歩かれるよりかはまだマシだろう。

それ以前に、金髪の少女とセーラー服は何だかミスマッチのような気がする。

いや、俺は別に構わないのだけれど。

「う、うん、解った！　いつもの格好に着替えてから行って来るね！」

そして、俺達にそう声を上げたウリアは全速力で俺と霧歌の間をすり抜けて二階へと戻って行った。

「……ウリアちゃんって純粋なのねぇ、ああ見えて」

「いや、お前が言葉巧み過ぎるだけだろ」

「そうでもないよ。あんなの、心理学の本を読んでいたらちょちょいのちょいだよ？」

「一般的な高校生はそんな本なんか読まねーよ」

ていうか、多分読んでいたとしても今の高校二年生の時点で理解できているのはそれだけ本気の奴だけか、ほんの一握りの人数だけだと思うのだが。

まぁ、そんな特殊なカテゴリーに入ってしまうのがエリートである所の霧歌であって。

「それじゃあ、私達も準備を済ませて出掛けるとしますか」

「ていうか、何でウリアも買い物に誘わなかったんだ？　ウリアが昼食に何を食べたいのかも聞けるし、外を出歩かせるんだったら別に俺達と一緒でも良かったんじゃないのか？」

「……もう、相変わらず秀ちゃんは鈍感だなぁ」

「えっ？」

「女心が解っていないって話だよ。全くもう……秀ちゃんったら」

そう言って廊下を階段に向かって歩き出す霧歌。

呆然とその背中を見据える俺なのであったが――今霧歌が何を言いたかったのか、幾ら考えてもその欠片さえも理解できない俺なのであった。

◆　◆　◆

私は、秀のお姉さんの部屋に辿り着くと、すぐさまセーラー服からいつもの戦闘服に着替えて、部屋を飛び出した。

階段を下りる途中で私は霧歌と擦れ違う。

「あっ、もう行くの？　頑張ってね、ウリアちゃん」

「うん！　応援ありがとう、霧歌！」

そんな応援の言葉を私に投げ掛けてくれた霧歌にお礼を言った私は階段を駆け下りて玄関に飛び出す。

ちなみに、言い忘れていたが、私は靴を履いていない。

いざと言う時に邪魔だし――それ以前に、この私が着ている戦闘用のスーツは足の爪先（つまさき）まで覆い隠してくれるので、靴を履かなくても大丈夫なのである。

問題無いのである。

この時代にある韓国という国では『無問題（もーまんたい）』って言うんだっけ？

確か、この前見ていたテレビでそんな事が言われていたような……まぁ、別に思い出さなくてもいいか。

「オイ、ウリア」

私は玄関扉を開けようとした所で後ろからそんな声が飛んできた。

私は後ろを振り返る――そこには案の定、秀の姿があった。

「余り遠くまで行くなよ？　迷子になった時、捜すのが面倒だし、それ以前に心配するからな」

「うん、解ってるって」

「それから、俺もだけどお前も狙われている身だという事を忘れるなよ」

「うん、それも解ってる。この前みたいに、秀がピンチに陥っている時はすぐに助けに行くから」

「ああ、ありがとな、ウリア」

「どういたしまして、秀」

「いってきます」と。

私は秀にそう言って――玄関扉の向こうに広がる外の世界へと足を踏み出した。

◆◆◆

それにしても、散歩というのは一体全体何をすればいいのだろうか？

流石の２０５６年の未来からやっていた私にも“散歩”という存在

は知っているのだが。

具体的に“散歩をする”という概念については全くに無知と言っても過言では無いのである。

まぁ、意味については“ただそこら辺を果てしなく歩く”というのが散歩だと私は思っているのだけれど。

そんな事をして本当に何か面白い――もしくは、楽しいのだろうか？

私の中のその疑問が私の頭の中にインプットされている“散歩”についての情報がもしかして間違っているのではないかと更なる疑問を抱かせる。

「やっぱり、家でテレビを見ていた方が良かったかなぁ……いや、でも、太るのは嫌だからなぁ」

その理由もあるが――私が家に戻らないのは霧歌の存在も少なからず理由として存在している。

何と言うか……今戻っても霧歌は秀と一緒に買い物に出掛けていて家の中には決して居ないのだろうけど。

何か、後から私が散歩をサボって家に戻った事がバレでもしたら……怖い。

その先の未来には死が待っているような気がする。

死が私を手招きしていそうな気がする。

いや、割と本気で私はそんな事を思った。

「しかし……死ぬのは嫌だけれど、こうしてただただ道を歩き続けるというのも何だか暇よね」

かと言って他に行く当ても無いのだが。

……いや、待てよ。

「……久しぶりに、行ってみるかな」

◆◆◆

私がふと思い付いて気ままに向かった“その場所”は――私が以前、最初に『魔導獣機』を操っていた男と戦った場所だった。

いわゆる、“一夜にして森林が燃えて無くなるという怪現象が起こった森”――である。

まぁ、怪現象とは言っているけれど、その怪現象を起こした主犯は私なのだが。

でも、魔術が正当化された未来でも魔術は怪現象の内の一つなのだから――ニュースとかで報道されている“怪現象”という表現は一応正しかったりもする。

ちなみに、ここまで私は歩いてきた。

こんな真昼間から空を飛ぶような馬鹿な真似は幾ら私でもしない。

いざとなれば人の目にも止まらぬ速さで飛ぶ事は出来るけれど――何と言うか、そこまでしてこの場所に向かう事はしたくなかったのである。

ていうか、空を飛んでしまってはそもそも散歩している意味が無い。

「……」

その土までも黒く焼け焦げてしまった場所には何も残ってはいなかった。

ただただ――平らな地面が続いている。

何度見渡しても――見据えても、目を凝らしても、そこには何も無かった。

私の炎で――全てが燃え尽きてしまったのだ。

「……」

――そして。

その目の前に広がる真っ黒な景色の上にふと――“その光景”が重なる。

「……っ！」

私は“その光景”が見ていられなくて、咄嗟にギュッと目を閉じた。

それから――暫く経って、私はその目を開いてみる。
そこには先ほど映った“その光景”は無かった。
「……はぁ」
私は思わずため息をつく。
ため息と言うよりも――安堵の息、だろうか。
そもそも、どうして私は安堵の息なんかをついているのだろうか。
どうして私は――“その光景”が見えなくなった事で安心感を覚えているのか。
安心なんかしてはならないはずなのに。
私は“その光景”を逆にずっと見ていなければならないはずなのに。
“その光景”は――私が犯した決して消える事の無い罪であるはずなのに。
未来でも、現代でも、過去でも――どこに行ったとしても消えない大罪であるはずなのに。
どうして――どうして。
どうして、私は。

「――余裕だな、ウリアール＝ブレイザー」

「！」

不意に後方から聞こえてきた声に私は咄嗟に後ろを振り返る。

――そこには。

「……あなたは、確か」

「俺の事を覚えていてくれたか。光栄だな、ウリアール＝ブレイザー」

赤く長い髪を後ろで束ねた髪型――いわゆる、ポニーテールに上から下まで真っ黒な軍服を着た男。

「……ストレンド」

「ほう、俺の名前まで覚えていたのか。それは更に光栄な話だな」

決闘？

「……言っておくけれど、ここに秀は居ないわよ」

「以前に会った時には俺はお前にまだ言っていなかったか？　俺は、“今の”真之乃秀には興味が無いんだよ。ウリアール＝ブレイザー」

「今の秀には興味が無い……？　それは一体どういう事なの？」

「……そうか。お前はまだ知らないのか」

「だから、一体何を――」

「そう慌てるな、ウリアール＝ブレイザー」

私の言葉を遮ってストレンドは言う。

「お前が“それ”を知らないのも当然なのだろう。何故ならお前は“目覚めた”後すぐに、未来の真之乃秀の手によってこの時代へと送られたのだからな」

「……」

「まぁ、慌てる事は無い。近々お前にも――知る時が来るだろうからな」

「……あなたが何を言いたいのかは解らないけれど。秀の事を狙わずに、私の方にそっちから出向いてくれた事には礼を言っておくわ、ストレンド」

「確かにそうだな。俺は本来、真之乃秀の命を狙うべきなのだが――“今は”あいつを襲う時ではない。と言うよりも……ウリアール＝ブレイザー、先ほども言ったが、お前は意外と余裕だな」

「……何が余裕なのよ」

「お前はこの時代の真之乃秀を守護する為に派遣された存在なのだろう？　それならば――今のように真之乃秀の傍から離れていていいのか？」

「私も、あなた達にそれなりの信頼を抱いているという事よ。あなた達が夜――もしくは、夕方にしか秀を襲わないのは、この時代の歴史が少なからず変動するのを恐れているからでしょう？」

「ほう、その事を見透かされていたか」

「少し考えれば解る事よ、馬鹿にしないで。……それに、私だってそれは同じだし」

「まぁ、確かに陽が落ち始めてから真之乃秀を襲った方が『魔導獣機』や魔術による戦闘をこの時代の人間が目にする確率は下がるだろう――しかし、ウリアール＝ブレイザー。これは俺なりの気遣いだが、最近ではそうも言っていられなくなったようだぞ？」

「……どういう事よ」

「先日の『魔導獣機』がお前等を襲った件については覚えているな？」

「ええ、勿論」

「ああいう襲撃は本来、真之乃秀を襲う為にこの時代に派遣された人物――今は俺だな。そういう人間が真之乃秀を襲撃する為に、未来に『魔導獣機』を要請して、初めてこの時代に転送できるものだ――しかし、先日のあの『魔導獣機』は俺の要請によるものではない」

「……この時代に、もう一人未来からやってきた人物が居るって事？」

「無論、それはお前等の敵であり、俺の同士であるという事になるのだが――まぁ、それは表面上の同士であり、本当の同士ではないと俺は思っているがな。どうやら、組織内のいわゆる『強硬派』の奴等が勝手に動き始めたようだ。奴等の動きは味方の俺としても気に食わない事だが――流石の俺でも、この時代に居るそいつらを捜し出して抹殺する訳にも行かないのでな」

「……どうして、そんな事を私に教えてくれる訳？」

「だから、その理由は今言っただろう。俺が抹殺する訳には行かないから、ウリアール＝ブレイザー――お前が代わりにそいつを捜し出し、抹殺しろと言っているんだ」

「だから、どうしてそんな事を私に頼んで来る訳？　本当に秀の命を狙っているのなら――その強硬派だか何だか知らないけど、その連中に私達をこれからも襲わせていた方が任務を遂行しやすいでしょう？」

「実の所、『科学発展側』と『魔術発展側』の抗争など、俺にはど

うでもいいんだよ。俺はただ、戦争でより強い奴と戦いたくて、そして、俺が偶然所属していた組織がお前達の敵である『科学発展側』だった――俺がお前達の命を狙っているのは単なる名目に過ぎないからな。お前等が俺が殺すよりも先に他の誰かに殺されるのを指を銜えて待っている訳には行かないんだよ、ウリアール＝ブレイザー」

「……それで、その強硬派の人達よりも先に私を殺しに来たって訳？」

「いや、今日の所は単なる遊びだ」

「えっ？」

私はそのストレンドの言葉に思わず唖然とした声を上げてしまった。

「遊び――って、何なのよ、それ」

「より正確に言えば――そうだな、俺はお前と決闘をしに来た。それ以前に、お前には特に抹殺の指令は出ていないからな。むしろ、機会があれば未来に連れて帰って来いとも俺は上層部から命じられている」

「そう――未来に連れ帰って、自分達の武器にしようという訳なのね」

「お前はそう簡単に他の誰かに対して屈するような人間では無いように見えるがな。まぁ、その時はどうにかして上層部はお前を支配しようと努めるのだろう――薬でも、頭の中に機械を入れてでもな」

「……決闘、って言ったわよね？　遊びの決闘だって」

「ああ、俺はそう言った」

「でも、それはあなたがそうしたいだけであって――私は別にそうしなくてもいいって事よね？」

「そういう事だ。私を殺したければ殺すがいい――まぁ、お前に出来るなら、だが」

「……言ってくれるわね。いいわよ、受けて立とうじゃない」

「――俺の申し出を受けてくれて感謝するぞ、ウリアール＝ブレイザー」

ニヤリと不敵な笑みを浮かべたストレンドの右目がキラリと赤く光った――ように見えた瞬間。

ストレンドの右側の空間が歪み――そこから細長い筒のような物体が姿を現した。

それは、いわゆるロケットランチャーであった。

ストレンドは宙に浮かぶその武器を引っ掴むと――その武器に備え付けられているスコープで一瞬にして私に標準を合わせてその引き金を引く。

細長い筒のような砲口の後ろが爆発を起こし、白い煙を上げながらその筒から放たれた弾頭が一直線に私目掛けて滑空してきた。

しかし、私に現代兵器は効かない。

私は迫り来るその弾頭を見据えながら素早く目の前に深紅色の光る魔方陣を生成する――飛んできた弾頭はそれに衝突して大爆発を起こしたが、私はその衝撃も爆風も――粉塵すらも届く事は無かった。

「……現代兵器は効かないって以前の戦闘で確認したんじゃなかったかしら？」

私は魔方陣を消しながら風に流れて行く粉塵の奥からストレンドにそう問いかける。

「今のはただの挨拶だ」

晴れて行く粉塵の向こう側からストレンドの姿が現れる――その手には既に先ほどのロケットランチャーの姿は無かった。

「開戦の狼煙（のろし）というものは――派手な方が良いだろう？」

「……そうね」

私はそうストレンドに言葉を返しながら足元に深紅の光を放つ魔方陣を出現させる。

その魔方陣から放出される魔力――私はその魔力で背中に炎の翼を、右手に炎の剣を創造した。

決闘？

「それは――あなたの言う通りだと思うわ」

私は黒い地面を蹴って――飛んだ。

一気にストレンドとの距離を縮めた私は右手に携えた炎の剣を振り下ろす。

私の放った斬撃をストレンドはその場から跳び上がる事で躱した。

私は後ろを――ストレンドが跳び上がった方を振り返る。

ストレンドは跳んで――更に“空中を蹴って”ジャンプし、地上２メートルほどの高さで“立ち止まった”。

“空中に平然と立っている”ストレンド――私はその足に履かれている靴を見据えてそのストレンドの行動を理解する。

「――『大気踏靴（スカイウォーカー）』、か。良いもの持っているじゃない」

「空を飛べるお前にはさして羨望は湧かないだろう。それに、良いものとは言っても、これは兵士になれば全ての人間に配給される基本的な装備の一つだ――故に」

これはただの安物に過ぎないのだよ――とストレンドは再度空間を歪ませてその右腕に先日と同じくガトリング砲を装備する。

「……まぁ、基本的な装備にしてはちゃんとしていると俺は思って

いるがな！」

そう声を上げてストレンドは私目掛けて幾千もの銃弾の雨を放射する。

しかし、私はそれを躱さない――躱す必要など皆無だ。

何度も言うが、私には現代兵器は通用しない。

≪守護聖域（サンクチュアリ）≫――それは周囲に存在している魔力の層を物体が通過する振動からその物体の位置を特定し、それに対して自分を自動的に守護する術の事だ。

自分で言うのも何だけれど、こんな上級クラスの魔術は私か――もしくは、私と同等の才能を持った魔術師にしか扱う事は出来ないだろう。

“自動的に守護する”とは言っても、少なからず自分の意識は必要なのである。

≪守護聖域≫に入り込んで来る銃弾によって魔力の層の振動を感知した際には一瞬だけそちらに意識を向ければ私とその銃弾との間に魔方陣の壁が出現する。

簡単そうな話に聞こえるだろうけれど、それはガトリング砲になるとまた違ってくる。

雨のように降り注ぐ銃弾全てに意識をそれぞれいちいち向けなければならないからだ。

けれど――私にはそれが出来る。

出来て、しまう。

自分でも怖いくらいに――完璧にそんな攻撃でさえも防ぐ事が出来てしまうのだ。

よって――ストレンドが頭上から放ったガトリング砲による銃弾の雨も私は≪守護聖域≫によって難無くその雨を全て魔方陣によって焼失させた。

ちなみに、この≪守護聖域≫に通用しないのが何故現代兵器だけなのかと語っておけば――それは単純な理由で。

単に、魔術が物体ではないからである。

いや、正確には物体なのだけれど――銃弾や先ほどのロケットランチャーの弾頭のように、確実にそこにある魔力の層をその質量で圧迫し、そこで発生させる振動を魔力は起こさない。

つまり、魔力は現代兵器と比べて“軽量”という事なのである。

まぁ、それは当然の事で――そこら辺に漂っている空気のような存在を寄せ集めて周囲に出現させるものなのだから、実際に目に見えるほどの質量を持った兵器よりも、軽量なのは当たり前の事なのだが。

しかし、そこまで重量の違う現代兵器よりも強力であるのが――魔術の怖い所なのである。

「……お前のその≪守護聖域≫という魔術は資料では確認していたのだが――なるほど。それは資料に記されていたよりも更に厄介な魔術であるらしいな。前回も試してみたが、全く現代兵器が役に立っていない」

「だから、さっきからそう言っているでしょ？　いつまで無駄な事をやるつもりよ」

「それは、お前が俺に少なからず本気で掛かって来るようになるまでだ」

「それじゃあ、あなたの方から少なからず本気を出してみたらどう？　まさか、未来からやって来てまでこの時代の兵器を使う戦い方が――あなたの戦い方って訳じゃないわよね？」

「無論、それは違うがな。俺なりに、お前に対して敬意を表しているつもりなんだよ――ウリアール＝ブレイザー。俺はお前の事を強者として認めている、故に、俺はお前がその力を発揮するまで、それと同程度の力は発揮しないんだ」

「敬意を表しているという言葉が嘘では無いのなら――それこそ、その強者である私を全力で倒そうとするのが敬意というものじゃないのかしら？」

「……」

その私の言葉に空中に佇むストレンドは再度ニヤリと不敵な笑みを見せて。

「そうだな……確かに、お前の言う通りだ。それならば、その言葉

の通り――俺は、お前の敬意を表して、少しだけ手の内を明かす事にしよう」

そう言ったストレンドの右側の空間が――また歪む。

そして、その空間の歪みから現れたのは十字架のような形をした漆黒の剣だった。

「――これは、この時代にあるスイスという国の『ロングソード』と呼ばれる武器をモチーフにそれを科学的に改良したものだ」

「名前は『ミスティルテイン』」とストレンドはその漆黒の剣の柄を静かに掴む。

「北欧神話において、主神であるオーディンの息子、バルドルの命を奪ったとされる剣の名前だ――まぁ、無論それは当てられた名前であって、本物ではないがな」

「さて」とストレンドは空中から飛び降りて――地面に着地する。

「俺はこうやって手を明かしたぞ――お前も、何かこれに見合う力を出したらどうだ？」

「けれど、私はその剣の――その剣を携えた状態でのあなたの力を知らないもの。その力を知るまでは、私はそれに見合う力を出す事は出来な――」

――そこで私の言葉は途切れる事になる。

いや、“遮られた”――と言うのが一番適当なのだろうか。

何故なら――私がその言葉を言い掛けた瞬間に。

ストレンドの手によって振るわれたその漆黒の剣から放たれた白い光の斬撃が――私のすぐ左隣を轟音と共に猛スピードで過ぎ去ったからだ。

私の言葉はその爆発にも似た轟音によって掻き消されてしまったのだ。

そして――暫し時は流れてその斬撃は私の左隣から消滅する。

光の斬撃が通った後の地面は――まるで地割れでも起こったが如く大きく抉(えぐ)られていた。

「――≪裁き(ジャッジ)の光(ライト)≫」

ストレンドはそう言って振り上げ切った漆黒の剣をゆっくりと下ろす。

おそらく、それが今の斬撃の――魔術の名前なのだろう。

決闘？

「……言い忘れていたが、この剣は――この兵器は、２０５６年の未来にも一本しか存在しない。何故なら、これは俺の為に製造された特注品だからだ。自分で言うのも何だが、俺はそれほど未来では認められた人間であり――この『ミスティルテイン』はその俺に見合う武器なんだ」

「――さて、もう一度問おうか」とストレンドは依然として不敵な笑みをこちらに向けたまま言う。

「今の俺の力を見て、まだ“力を見せない”などと言えるのなら、言ってみろ。何度も言うが、俺はお前に敬意を表している――よって、１０秒だけお前に時間をくれてやる」

「……でも、あなたは私を殺せないはずでしょう？」

「敵である俺のその言葉に信頼を置いているとすれば、お前はそこまでの存在だったという事だな、ウリアール＝ブレイザー。まぁ、確かに、俺のその言葉は嘘ではないが、お前が本気――ではなくとも、少なからず力を発揮しなかった場合、俺はお前の事を殺すぞ」

「……良いでしょう、解ったわ」

「あなたの要求に応じて上げる」と私は足元に深紅の光を放つ魔方陣を出現させた。

「――天よ。我は器なり。天よ――その神の器である我に神の力を授けよ」

足元の魔方陣から立ち昇る魔力を私は感じる。

そして――私はその最後の言葉を唱えた。

「神の力――紅焔天使の力を」

私の周囲から湧き上る炎の柱――それは渦を巻いて、私を中心とした巨大な火柱を創造する。

その中で、魔力によって私の背中には先ほどの翼とは違い、ちゃんとした形状を持つ深紅の光を帯びた翼が創造される。

そして、私の頭上には――同じく、深紅の光を放つ天使の輪が浮かび上がった。

炎の火柱が解けて行く――その向こう側に見えたストレンドはやはり不敵な笑みを浮かべたまま私に向かってこう言った。

「――≪紅焔天使（ウリエル）≫か……お前によく合った上手い名前を付けたな」

「……一体全体何の事かしら？」

「惚けるなよ、ウリアール＝ブレイザー……本当は解っているのだろう？」

「……さぁね」

私の右手にオレンジ色の光が集約される――それは光の剣となって空中に創造された。

私はその光の剣の柄を握り締める。

「あなたが何を言っているのか――言おうとしているのか。私にはさっぱり理解できないわ」

私は地面を軽く蹴って――文字通り、そこから飛び上がった。

淡い深紅の光を帯びた翼を羽ばたかせて飛翔した私はストレンド目掛けて突進する。

私は光の剣を振り下ろす――すると、ストレンドは先ほどのように避けず、私の斬撃に合わせて漆黒の剣を振り上げて来た。

ぶつかり合う二つの刃――焼け焦げた大地に凄まじい金属音が鳴り響いた。

「……そうか、なるほどな」

そして、ストレンドは納得したようにこう言った。

「お前――まだ、真之乃秀に“その事”を話していないんだな？」

「……だから、さっきから何を言っているのか、私には全く解らないわね」

「まぁ、良いだろう。誰にだって……話したくない事柄はあるものだからな」

「……何よ」

……何なのよ、その口ぶりは。

「解ったような口ぶりで……話さないでよ。あなたには解らないわよ……私の気持ちなんて！」

私は剣を振り下ろしてストレンドを前方へと弾き飛ばす。

その直後、私は剣をまた振り上げた――そして、その刀身に魔力を集中させる。

集約されていく魔力は光へと変換され、刀身はオレンジ色の光を放つ。

「――≪太陽の斬閃（ソーラレイ）≫！」

私は振り上げていた光の剣を一気に振り下ろした。

その瞬間――前方で着地するストレンド目掛けてオレンジ色の閃光が解き放たれた。

対するストレンドはその漆黒の剣を――『ミスティルテイン』を迫り来る閃光に向かって振り上げる。

「――≪裁きの光（ジャッジライト）≫」

ストレンドの剣から解き放たれた光の斬撃は私の放ったオレンジ色の光と衝突し――互いの魔術は相殺し合って大爆発を起こした。

大地に吹き荒れる突風――凄まじい衝撃波が私を襲う。

その衝撃波の勢いに任せて私は空中に飛び上がった。
私は空中から下界に広がる焼け焦げた広場を見下ろす。
その場所は今起こった爆発によって大量の砂塵に包み込まれていた。
ストレンドの姿は私の目には映らない――。
「――――っ！」
――そして、私が気付いた時にはもう遅かった。
いつの間にか――私の背後には剣を振り上げた状態のストレンドが居た。
振り下ろされる漆黒の刃。
私はその斬撃を咄嗟に光の剣でどうにか受け切った。
「くっ……！」
間一髪――ストレンドの攻撃を受け切った私は淡く光るその翼を羽ばたかせてストレンドと距離を取る。
「惜しいな」
ストレンドは『ミスティルテイン』の刀身を肩に乗せながら不敵に笑う。

「もう少し――お前が気付くのが遅ければ、一太刀入っていたものの」

「……どうして？」

私はストレンドに問い掛ける。

「どうしてあなたはそんな速度を――『魔術発展側』の人間でも無いあなたがあんなに速く動けるのよ」

「何だ、気付いていなかったのか――いや、ここは覚えていなかったのかと問いかけるのが正しいのか？」

「……何ですって？」

「俺は、お前に一度見せたはずだがな。お前も、未来の人間ならば知っているだろう？　空間と空間の狭間を行き来する――『空間移動』と呼ばれる移動方法を」

「ああ……そういえば、そんなものもあなたは見せてくれたわね」

先日の事である――先日、ストレンドが秀を襲撃した際の事だ。

迂闊（うかつ）だった。

そんな最近の事を、忘れていたなんて。

決闘？

「まぁ、お前がそんな事すらも忘れてしまうのは当然の事なのだろう――なぁ、ウリアール＝ブレイザーよ。今の毎日は――楽しいだろう？」

「……黙って」

「２０５６年の未来と比べると流石に技術力では劣るが――平和の度合いではかなり勝っていると感じるだろう？」

「……黙ってよ」

「平和な日々は楽しいだろう？　何故なら……お前は未来で――」

「黙れ！」

私は咆哮（ほうこう）する。

そして、足元に深紅に光る魔方陣を出現させた。

――何も、何も聞きたくは無かった。

ストレンドの言葉をこれ以上聞いていたくは無かった。

私が――私が何者であるかなんて。

そんな事は、私が一番知っている。

だから、これ以上は知りたくは無い。

改めて自分が何者かなんて――気付きたくはない。

私は――私は、私は、私は……っ！

「――――っ！」

魔方陣から飛び出した大量の炎が空中のとある一点に集まって行く。

その多大なる炎は――巨大な球体へとその形を変えた。

「≪破滅（プロメテウス）の業火≫！」

私はその魔術の名前を叫ぶ。

すると、それに呼応するように空中に浮かぶ巨大な炎の塊はストレンド目掛けて落下を開始した。

魔術のその大きさから避けようにももう間に合わないだろう。

『空間移動』をしようにも距離的にも時間的にもそれは不可能だ。

――それなのに。

迫り来る死の炎にストレンドは怯えるどころか再度不敵な笑みを浮かべて。

「――≪裁き（ジャッジライト）の光≫！」

振り上げられる漆黒の剣――そこから放たれた光の斬撃は巨大な炎の球体に向かって直進する。

その炎の塊にぶつかった瞬間、光の斬撃はそれに弾き返されてバラバラに砕け散った。

「ほう――ならば」

依然として不敵な笑みを浮かべたままのストレンドの手にある漆黒の剣の刀身が――二つに割れる。

いや、二つに分裂して左右に分かれたというのが妥当か。

剣の鍔（つば）の横幅ギリギリまで分かれたその漆黒の刀身の狭間が光を放ち――その狭間から更に大きな光の刃が飛び出してくる。

その身の丈ほどの大きさへと変化した『ミスティルテイン』をストレンドは振り上げて。

再度、斬撃を繰り出すと共に――その魔術を再び迫り来る巨大な炎の塊に向けて解き放った。

「≪裁き（ジャッジライト）の光≫！」

空中の巨大な炎の塊を劈く光の斬撃。

真っ二つに斬り裂かれた炎の塊はゆっくりと左右に割れて――大爆発を起こした。

「……」

周囲に立ち込める爆煙――その隙間から見えるその空中に佇むストレンドを私は見据える。

「……ふう。まさか、お前に“この形態”を見せる事になるとはな」

変形した漆黒の剣――『ミスティルテイン』を見てそんな事を言うストレンド。

「あわよくば、お前の“本当の力”を見る事が出来ると思ったのだが――しかし、ここまで追い詰められては無理のようだ。どうやら、ここが退き時らしい」

二つに分かれた漆黒の剣が閉じる――その間にある光の刀身は押し潰されるように消滅した。

「勝手にお前に決闘を申し込んでいて何だが、俺はここで退かせて貰う。次に会い見(まみ)える時はお前の本当の力と対峙できる事を――心待ちにしているぞ」

その言葉と共にストレンドは『空間移動』でその場から景色に吸い込まれるようにして消えた。

「……」

私は何も言えなかった。

何も言葉を返す事が出来なかった。

私はただ――空中に漂う砂塵の中で何の言葉も発しないまま。

その空中に浮かんだまま――暫しの間、無言で俯いているだけなのであった。

◆◆◆

「ウリア！」

「ウリアちゃん！」

私がフラフラとした足取りで道を歩いていると――不意に私を呼ぶ声がして、私は顔を上げる。

すると、前方から買い物袋を手に提げた秀と霧歌がこちらに向かって走って来るのが見えた。

そこで、私は漸く気付く。

ああ――そうか。

気付けば、私は秀の家の近くまで辿り着いていたのか。

「……どうしたの？　二人とも」

「それはこっちの台詞だ！　この馬鹿！」

「そうよ、ウリアちゃん！　どうしたのか聞きたいのはこっちなんだから！」

秀はいつに無く血相を変えて――霧歌は今にも泣きそうな声で私に向かってそう声を上げてきた。

「お前、未来からやってきた奴と今の今まで戦っていたんだろ!?　そうなんだな!?」

「ウリアちゃん、私本当に心配したんだから……！　秀ちゃんの家の前まで戻って来た時点で向こうの森の方で何か爆発みたいな音が聞こえて来たから……私、またウリアちゃんが誰かと戦ってるんだって、そう思って……！」

決闘？

「……だから、どうしたのよ、二人とも。秀はそんなに怒って、霧歌はそんなに泣きそうな顔で……私がこうして帰って来ているのはその戦った敵に勝った――いや、今回は買っていないけれど、そういう事なんだから、それはそれでそこまで言わなくても――」

「そこまで言うに決まってるだろ！　この馬鹿！」

私の言葉を遮って――私の声を遮って秀は再度そう声を荒げて。

私に向かって、こう言った。

「勝敗が全てじゃない、お前が帰って来たから良いなんて事は決して無い！　お前が帰って来るか否か以前に――こっちはお前の事を物凄く心配したんだぞ！」

「……心配、してくれたの？　私の事を？」

「当たり前だろ！　今日だって、お前が散歩に出掛ける前にそう言ったばかりだろうが！」

「……ああ、そういえば」

そうだったわね――と私は俯き加減で呟く。

「……ゴメン、秀。でも、敵から喧嘩を売られちゃったら、それはもう買うしかないって、そう思っちゃって」

「……いや、俺こそ悪い。お前の気持ちも考えないで怒鳴っちまった。お前は俺の為に戦ってくれてた……そうなんだな？」

「うん、そう。この前、秀を襲って来た人――今回は、勝負は着かなかったけれど」

「そっか……頑張ったな、ウリア。俺の為に……今日も、ありがとな」

そう言って、秀は微笑みながら私の頭の上に手を置いてくれた。

その行動によって私は頬が紅潮するのを感じ取る。

その秀のさり気無い行動が――何だか嬉しくて、何だか恥ずかしくて。

思わず笑顔になるのを――抑える事が出来なくて。

「……ウリアぢゃん」

すると、私は何か私の事を変な呼び方をしてきたその人物を――霧歌の方を振り向く。

私が霧歌の方を向いた時には既に霧歌は頬に大量の涙を垂れ流していて――。

「ウリアぢゃ――――――んっ！」

「うわっ！」

私は不意にこちらに跳んできた霧歌の抱擁を躱す事が出来なかった。

霧歌の大きな胸に埋まる私の顔。

何だか、このシチュエーションは秀がとても喜びそうだなぁ、とか。

霧歌私と違って胸大きいなぁ、とか。

そんな事を考えていたら――何だか、とても複雑な気分になった。

いや、霧歌は私の事を心配して私を抱き締めてくれたのだろうけれど。

何かその……素直に、その抱擁を私は喜ぶ事が出来なかった。

私の心が捻くれているのだろうか？

「ウリアぢゃん……本当に、本当に無事で良かったぁ……！」

「き、霧歌……苦しいよ」

「もう嫌！　苦しくても絶対に離して上げない！　もうウリアちゃんを家に連れて帰って私の部屋のぬいぐるみコレクションの一つにする！」

「霧歌、好意は有り難いけれど、その気持ちは受け取れないわ」

ていうか、霧歌の部屋ってぬいぐるみコレクションがあるんだ。

そんな事を私は思う。

もしかしたら――ていうか、おそらく確実に秀も私と同じ事を思ったに違いない。

「……それじゃあ、無事にウリアも帰って来た事だし。ちょっと遅いけれど、今から昼飯の準備をするか？」

「うん……そうだね、秀ちゃん」

未だに涙ぐみながら漸く私をその谷間から解放してくれる霧歌。

「ほら、ウリア、行こうぜ。今日の昼飯は霧歌お手製のオムライスだってさ」

「オムライス？」

「ああ、お前は知らないのか。でもまぁ、知らなくても心配するな。初めて食べたとしても絶対に万人が気に入るかなり美味しい食べ物だからな」

「味って作る人によって変わるものじゃないの？」

「何だ、お前霧歌の料理の腕を疑っているのか？　一応言っておくけれど、霧歌の料理の腕は抜群だぞ？」

「……そっか」

それならちょっと楽しみ、かな。

「それじゃあ……私、今から料理の下準備を始めて来るね」

「ああ、うん、解った霧歌――って、いい加減お前は泣き止めよな？」

「これは違うの。玉ねぎを切っていたら自然と涙が出て来て……」

「まだ玉ねぎを切るどころか料理さえ始めてないじゃねーか」

そんな秀のツッコミを受けながら霧歌は秀の家の中へと消えて行く。

――そして。

「ほら、俺達も行こうぜ」

そう言って――秀は私に向かって左手を差し出してきた。

「俺達も何か手伝える事があるかもしれないし」

「ああ、うん――」

――そう言って、私は秀の左手を握ろうとして。

（今の毎日は――楽しいだろう？）

「……」

不意に頭の中に響き渡ったストレンドのその言葉に――握ろうとしたその手を止める。

そして――私は秀にこう問いかけた。

ふと、頭の中に浮かんだとある疑問を――口に出してみた。

決闘？

「……ねぇ、秀？」

「ん？　どうした、ウリア」

「私って……ここに居ても、いいのかな？」

「あん？」

「私って……この家に、秀や霧歌と一緒に居ても……いいのかな？」

そして――そんな私の質問に秀はこう答えたのだった。

「お前って案外馬鹿なんだな」

私は秀の脹脛（ふくらはぎ）を蹴った。

「もう！　何よ！　秀こそ馬鹿なんじゃないの！？　私がこんなに真剣に質問しているのに……何よ、何なのよ！」

「い、いや、ゴメン……そういうつもりで言った訳じゃなかったんだよ、本当に」

私の前でその場に蹲りながら消え入りそうな声を上げる秀。

「つーか……何でそんな事、聞いて来るんだよ、お前」

「べ、別に……良いでしょ、そんな事」

私の前で周囲は痛みに体を震わせながらその場に立ち上がる。
その目の端には若干涙が浮かんでいるように見えた。
「い、良いから、早く答えてよ。こんなに真剣に私が悩んでいるんだから、しっかりと考えてから、出来るだけ早く答えてよ」
「答えてよって――そんなもの、考えるまでもねーよ」
そして――秀は平然とした表情で私にこう答えるのだった。
「居て良いに決まってるだろ」
「……ほ、本当に？」
「ていうか、この家以外にお前に行き先なんか無いんだし――それに別に気にしなくても良いんだぜ？　俺の生活費とかそういう事をお前は気にしているのかも知れないが、別に気にしなくても構わないって、お前は俺の命を護ってくれているんだから」
お前は俺にとって必要なんだから――と秀は言った。
そう言って、くれた。
私に向かって――そう言ってくれた。
それが――その秀の何気ない言葉が。
私は本当に――本当に。

「……ん？　どうかしたのか？　ウリア？」

「……ううん、何でも無い」

そう言って――私は目元を指先で拭ってから。

顔を上げると共に秀に向かって満面の笑みを見せたのだった。

「……ありがとね、秀」

いつかは壊れてしまうこの日常。

いつかは終わりを迎えてしまう――この平和な日々。

いつか遠くない未来、きっと今のようなこんな風に――秀や霧歌と笑い合えるような、そんな平和な日々は存在していないのかもしれないけれど。

――それでも。

今は、このままで良いと私は思う。

いつか終わりを迎えてしまうのなら――いつか壊れてしまうのなら。

それならば、今は――今だけは、こんな平和な日々を味わっていても多分罰は当たらないだろう。

いつかは秀に“あの事”を打ち明けなければならないだろうけれど。

それはきっと――今では、ない。

平穏な日常を壊す時はきっと今ではないから。

だから――だから私は差し出された秀の左手を握り返す。

私はこれから秀と一緒に霧歌の料理を手伝いに行く。

平穏な日々は――とても詰まらないけれど、とても楽しい。

こんな平和な日々がいつまでも続けばいいのに――なんて。

未来から来た私が言っても――何の意味も無いのだろうけど。

8月3日

8月3日――。

この日、俺はウリアや霧歌と共に図書館へと足を運んでいた。

「秀ちゃんは、お弁当の中では何が好き？」

「あん？」

俺の正面の席に座る霧歌が不意にそんな事を問いかけて来た。

俺はノートから顔を上げて正面を見る――そこに居る霧歌は先ほどからずっと読んでいる本に視線を落としたままだった。

ちなみに、俺の隣では今ウリアが何か小説を読み耽（ふけ）っている。

いつもテレビだとか、漫画だとかを観て読んだりしている――いわゆる、現代っ子の雰囲気を醸し出しているウリア。

そんなウリアには悪いけれど、小説を読み耽っているウリアというのは――何だか、違和感を覚えざるを得なかった。

まぁ、未来からやってきたウリアが現代っ子の雰囲気を醸し出しているのもどうかとは思うが。

更に余談を語っておけば、今のウリアは霧歌がチョイスした姉さんの洋服を着ていた。

理由は当然――あの戦闘服では図書館の人の目を引いてしまうからである。

でもまぁ、そのウリアの“折り畳まれた”洋服――もとい、防具の塊はちゃんと持って来てはいるので、万が一俺が命を狙われたとしても大丈夫と言えば大丈夫なのだけれど。

「……えっと、それで何て？　霧歌？」

「聞いてなかったの？　こんなに近くに居たのに？」

「いや、ちょっと心の声で状況説明をしていたら霧歌が俺に何て言ったのかを忘れちまってさ」

「さり気無くメタな発言を織り交ぜて来るよね。まぁ、別に良いけれど」

「だからね？」と霧歌は読んでいる本のページを一枚捲（めく）る。

ちなみに、今の会話を交わしている間も霧歌はずっと本に視線を落としたままであった。

「秀ちゃんは、お弁当の中では何が好き？」

「女子のお手製弁当だな」

「いや、そういう事を聞いている訳じゃなくて……」

「女子のお手製弁当は母さんのお手製弁当に匹敵する」

「いや、だからそういう事じゃなくて……ていうか、それじゃあ、秀ちゃんのお母さん立場が無いよ」

流石にその俺の言葉には顔を上げざるを得なかったようで――霧歌は俺に苦笑を見せた。

「だからね？　お弁当の中身の話だよ、中身」

「中身？　それはつまり……お弁当の中に入っているメジャーなおかずの中で何が好きだっていう事か？」

「うーん。まぁ、そういう事でもある、かな？　本当は、海苔弁当とか、唐揚弁当とか、チキン南蛮弁当とか……そういう、市販されているお弁当の中で、何か好きなのかって聞いてみたつもりだったんだけど」

「俺がお弁当のおかずで気に入っているのは……何だろう、ミートボールかな？　あれは最強だな。ちなみに、次に好きなのはソーセージだ」

「それじゃあ、市販されているお弁当の中では？」

「そうだなぁ……唐揚弁当、かな。あのレモン汁と塩コショウ、それに唐揚の肉汁が奏でるハーモニーが堪らないよ」

「……秀ちゃん、今何か良い事を言おうとして失敗したでしょ？」

「失敗!?　今失敗したのか、俺って!?」

「しーっ」

そう声を上げた俺に霧歌は唇に人差し指を当ててこちらに顔を近付けて来た。

「あ……ああ、ゴメン」

そうだった。

そういえば、ここが図書館だという事をすっかり忘れていたぜ。

「静かに、ね。秀ちゃん」

「お、おう……悪い」

「そして、一応付け加えておくけれど。さっきの秀ちゃんの言葉は絶対に失敗してたよ？」

「……ああ、俺に現実を見せ付けてくれてありがとう」

かの有名なグルメリポーター張りの上手い事を言ったつもりだったのだが……。

……。

「……そういえば、あの有名なグルメリポーターは美味いものを食べて上手い事を言っているんだな」

「なるほど。美味しいの“美味い”と上手の方の“上手い”を掛けた高度な言葉だね。流石は秀ちゃん、ちょっと見直しちゃったよ」

「霧歌、俺がさり気無く思い付いたその言葉を事細かに解析するんじゃない。何か恥ずかしいだろうが」

「えっ？　何が？」

「……いや、何でも無い」

こいつはこいつできっと悪気は無いんだろうなぁ……。

いや、悪気が無いからこそ逆に怖いのだけれど。

「……それで？　秀ちゃんはレモン汁と塩コショウ、それに加えて唐揚の肉汁のハーモニーという点から、唐揚弁当がお気に入りなんだね？」

「霧歌、お前本当は態と言っているんじゃないだろうな」

「私は……うん、角煮弁当が好きかな。豚の角煮が入っているヤツ」

「えっ？　そんな弁当あるのか？」

「うん、あると思うよ？　この前アニメでヒロインのキャラが食べている所を観たから」

「つーか、お前アニメとか観てるんだな。意外と言うか何と言うか……それに、お前の話からするとそれって深夜アニメだよな？」

「アニメを観るくらい、教養の一つだよ？」

「いや、それは教養の一つではないだろう」

「アニメ――主に、深夜アニメは日本を代表する文化の一つだよ？」

「いや……まぁ、それは否定しないけどさ。最近もとある軽音部の深夜アニメが社会現象になったばかりだし」

「第２期の最終回は泣けたよねぇ……今ここでタイトルを叫んじゃってもいいかな？」

「止めろ。物語的にも場所的にも、ここでタイトルを叫ぶのは止めろ」

閑話休題。

8月3日？

「……それで、霧歌。弁当と言えば、少し気になる事があるんだけど」

「ん？　何？」

「弁当って、メインのおかずの下にスパゲッティが敷かれているだろ？」

「うん、そうだね」

「そのスパゲッティって……何で下に敷かれているんだ？」

「うーん……えっとねぇ。確か、そのメインのおかずの油や水分で容器がふやけてしまうのを防ぐ為――だったかな？　ちゃんとした理由は解らないけれど、他にも見栄えの為だとか、お客さんにお得感を感じさせる為だとか……色々と理由はあるかな」

「ふーん、そうだったのか。いや、何か気になってさ、あのスパゲッティの存在が。メインの下にどうしてスパゲッティが入っていたのか……そうだったんだな、そんな理由があったのか」

「まぁ、私も殆ど憶測な部分もあるし、どこかでそんな理由を見掛けたような気がしたから、間違っているかも知れないけどね」

「いや、良いよ。ありがとな、霧歌。お陰で俺の中の疑問の９０パーセントが解消されたよ」

「ていうか、お弁当のスパゲッティに疑問の9割を消費させていたんだね……逆に残りの1割の疑問が何なのか気になるよ」

「残りの1割？　それなら毎日同じテーマで変わっているよ」

「そうなの？　それは一体どんな疑問なの？」

「霧歌の着ている下着の色だ」

「ふーん、そうなんだぁ……。そうだ、ちょっと広辞苑を借りて来ようかな。ねぇ、知ってる？　秀ちゃん？　広辞苑って人を殺せる鈍器にも成り得るんだよ？」

「俺が悪かった。だから殺さないでくれ、お願いだから」

俺は図書館の机に両手を着いて座った状態の土下座を霧歌に見せた。

死ぬのは嫌だ。

これはこの世で生を授かった全ての人間に当て嵌まる言葉だと思う。

……いや、今のは全体的に俺の方が悪かった訳なのだけれど。

「しかし、こういう日も中々良いものだな」

「えっ？」

「いや、だからさ。休日にこうやって皆で図書館に来て、宿題をすると言うのは――中々風情があっていいな、って」

「そうだね。図書館で皆と宿題をやるというのは、中々風情があって、趣があって、良いものだよね」

「何か、一人で図書館に来て宿題をやる分には余り詰まらないと思うけれど。皆と――友達と一緒に宿題とか、勉強とかをする分には本当に楽しく思えるな、何だか」

「友達と一緒にやる――って言うのが何だか楽しく思えちゃうんだよね。ていうか、そういう事を秀ちゃんが思えるようになったっていうのは、秀ちゃんが少なからず成長した――って事なのかな？」

「まぁな。俺を褒めるか、俺の肩を後で揉んでくれても構わないぜ？」

「褒めるのはともかく、どうして秀ちゃんは私からのマッサージを御所望なのかな？」

「女子からマッサージをされるというシチュエーションは中々、日本男児の夢と言うか、希望と言うか、希望の星と言うか」

「いや、希望の星ではないでしょう。ていうか、秀ちゃんの勝手な願望を日本男児全てが願っているように語らないで」

「日本男児と言うより、全世界の男の頭の中って大概がそういうものだぜ？　頭を開けたら、中にある脳味噌は大概がバラ色になっているものだぜ？」

「うん、解った。とりあえず、秀ちゃんの頭の中が常にバラ色だっていう事が解った」

「まぁ、俺の脳味噌は常にピンク色だけどな」

「秀ちゃん、それ自慢げに言う事じゃないから」

「そして、今日の霧歌の下着の色はピンク色だ」

「……」

「……えっ？」

「……わ、私……ちょっと、別の本取って来るね？」

「えっ？　えっ、ええっ？」

徐に椅子から立ち上がった霧歌は俺に視線を合わせないで目を伏せつつその場から立ち去ってしまった。

そして――俺は幾多にも並んだ本棚の中に消えて行く霧歌の背中を見据える俺。

「……ていうか、えっ、マジで？」

まさか……当たってしまったのだろうか？

えっ、マジで？

今日の霧歌の……その、色って、ピンクなのか？

「……」

何だか、折角的中させたのにも関わらず、嬉しい反面、複雑な気分となってしまう俺なのであった。

◆◆◆

１０分経っても、霧歌は帰って来る事は無かった。

やっぱり当たったんだろうなぁ……何だか悪い事をした。

後でジュースでも奢ってやろう。

そんな事を思いながら俺は隣のウリアの方へと視線を向ける。

ウリアは未だ何か小説を読み耽っているようだった。

普段、自堕落な生活を送っているウリアが……そこまで小説が好きでも無さそうなウリアがここまで集中するほどの小説なのか。

「……」

何を読んでいるのだろうか。

物凄く気になる。

8月3日？

「……なぁ、ウリア？」

「……うん」

「お前、それ何読んでるんだ？」

「……うん」

ウリアはその小説のページを一枚捲る。

「……いや、うん、じゃなくてさ。お前、それ何の本を読んでいるんだ？」

「……うん」

「……オイ」

どうやら、本の内容に集中し過ぎて俺の言葉が耳に届いていないようだ。

「……オイ、ウリア」

「……うん」

「お前のフルネームは何だ？」

「……うん」

「お前の好きなカップラーメンはカレーか？」

「……うん」

「今日、帰ったらお前のあの戦闘服の六角形のボタンを押してもいいか？」

「却下」

「何でそこだけ普通の返答なんだよ」

聞こえているのか聞こえていないのかどっちなんだ。

「……もう、何なのよ、さっきから」

鬱陶しそうにこちらを振り返って来るウリア。

「私は本を読んでいるのよ。今、本当に面白い所なんだから、邪魔しないで」

「あ、ああ、そうなのか……悪いな、ウリア」

「本当よ……喋って来なくなるまで態と無視していたのに」

「オイ、お前は今とんでもない事を口走りやがったな？」

「さーて、読書読書、っと」

そう言って、あからさまに俺の言葉を無視したウリアは再度小説に

視線を落とした。

「……この野郎。後で帰ったらお前の胸を揉んでやるからな」

「何を大々的に堂々とセクハラ的な発言を私に宣言しちゃっているのよ。脅しのつもり？」

「いや、マッサージのつもりだ」

「マッサージで人の胸を揉むなんて変態の思想じゃない、むしろ秀は変態じゃない」

「誰が変態だ。俺はだな、お前の胸を好意で揉もうと――いや、日頃疲れているであろうお前の為に胸を揉もうと思ってだな」

「今好意って完全に言っちゃったわよね？　ていうか、私は日頃、秀を護っていて別に疲れてなんかいないし、例え疲れていたとしても胸なんか疲れないから」

「それは解らないだろう。胸だって体の一部なんだから疲れているかも知れないじゃないか。どれ、ちょっと揉ませてみろ。凝っているかもしれないぞ？」

「何を馬鹿な事を言って――って、何を本当に揉もうとしているのよ！」

「痛ってえ！」

ウリアの奴、読んでいる本で俺が延ばした右手を挟んできやがった！

つーか、何だその高度な攻撃方法は！

高度に加えて陰湿だよ！

地味に痛かったわ！

「ほらほら二人とも？　図書館で騒いじゃ駄目だよ？」

すると、そんな声と共に霧歌が漸く俺達のもとに戻って来た。

「もう、何があったのよ。まぁ、どうせウリアちゃんと二人きりになった秀ちゃんがウリアちゃんに厭らしい事をしようとしたか、もしくは実行してしまったんだろうけど」

「……お前、もしかしてエスパーか何かなのか？」

「否定はしないんだね、秀ちゃん。それは逆に潔くて私は好きだよ？」

「えっ？　告白？」

「違う。それに、どうせ告白をするならもう少しちゃんとやるわよ」

「それはそうか……時に霧歌、お前胸とか凝っていないか？」

「秀ちゃん、マッサージと称して厭らしい事を実行しようとしないの。ていうか、今の秀ちゃんの言葉で秀ちゃんがウリアちゃんに何をしようとしたのか解ったわ」

「……お前、もしかしてエスパーか何かなのか？」

「また否定はしないんだね、秀ちゃん。それはやっぱり逆に潔くて私は好きだよ？」

「えっ？　告白――」

「だから違うってば」

「もう」と新たに本棚から取ってきた本を机の上に置きながら椅子に座る。

「秀ちゃんは本当にもう……相変わらずなんだから」

「俺はいつになっても昔と変わらない人間なのさ」

「変わらないのは良い事かも知れないけれど、そういう所だけは――そういう所だけでもいいから変わって欲しかったなぁ」

「……ところで、霧歌」

「ん？　何？」

「俺は今日来てから一時間ほどずっと宿題をやっている訳だが……霧歌、お前は宿題をやらないのか？」

「私、もう終わったから」

「マジかよ。お前、まだ夏休みが始まってから一週間しか経っていないんだが」

「前にも言ったでしょ？　夏休みの初日から一週間以内に宿題を全て終わらせてしまったら――後の休みはかなり楽に過ごせる、って」

「それは確かにそうだけど……そう言いながら、お前はまだ俺の宿題に付き合っているじゃないか」

「秀ちゃんの宿題には付き合っているけれどね、ちょっと読みたい本もあったから……今日はそのついで」

「ついで、ねぇ……ついでで俺の宿題に付き合ってくれてありがとな、霧歌」

「……本当に、秀ちゃんは鈍感だよねぇ」

「あん？　何がだよ」

「何でも無いわよ、何でも……。気にしないで」

そう言って――霧歌は新しく取ってきた本を開くとそれを読み始める。

「しかし……もう霧歌は宿題が終わったのか。本当に凄いな――いや、俺視点で言えばだけどさ」

「そう？　それほどでもないよ……本当なら、五日くらいで終わっていたし」

「お前はまだ本気を出していないと言うのか」

「本気を出したら三日で終わるわ」

「さっきのも本気じゃなかったのかよ」

大声で叫びたいのを何とか堪えながら俺は霧歌に向かってツッコミを入れる。

8月3日？

「ていうか、三日ねぇ……そこまで宿題をやる速度が速いのなら、俺の宿題もついでにやってくれたら大助かりなんだけどなぁ」

「やって上げても良いけど……」

「えっ、いいの？」

「多分、先生にバレたら大変な事になるだろうから。止めた方が良いと思うよ？」

「ああ……そういえば、俺達のクラス担当の数学教師はそういう事を絶対に許さないタイプの人間だったような」

きっと、宿題を霧歌がやった事がバレてしまったら、俺だけに限らず、霧歌までもその数学教師の餌食になってしまうだろう。

多分、夏休みに出した倍の宿題をまた一週間以内にやって来いとか——そんな罰を受けそうで怖い。

霧歌ならそんなものはそれこそ三日で終わらせてしまうのだろうが、俺には宿題だけでも大変なのに数学の宿題が倍になるなんて即死級の罰である。

つーか、死ぬわ。

冗談抜きで死んでしまうわ。

「仕方ない……それなら、宿題を霧歌にやってもらう作戦は止めておくか」

「うん、それが得策だね。それに、そんな事がバレたら学級委員長に怒られちゃうだろうし」

「ああ……それも嫌だな。あいつ、俺に対して何だかやけに口五月蠅いんだよなぁ……。つーか、俺以外のクラスメイトを怒っている姿を見た事が無い」

「そうなんだよねぇ……放課後も居残って二人きりで秀ちゃんに説教するとかなったら私も困るし……」

「そうだなぁ――って、あん？　何でお前が困るんだよ、霧歌？」

「さぁね。とにかく、架凪呀さんに怒られない為にも、ちゃんと宿題を夏休みの間に終わらせた方が良いと思うよ？　まぁ、夏休みの宿題はその期間中に終わらせるのがセオリーというものだけれど」

「そうだなぁ……。なぁ、霧歌」

「何？　宿題なら写させないからね？」

「いや、もうそれは不可能だと解ったから諦めた」

「可能だったら諦めてなかったんだ……」

「それはさて置いて……俺って、もしかして架凪呀から嫌われてるのかな？」

「えっ？　どうして？」

「いや、さっきも言ったけれど、架凪呀ってやけに俺の事を集中的に怒って来るんだよな。俺が授業で居眠りをしていた時も、俺が授業で宿題を忘れた時も……まぁ、悪い事をしているのは俺であって、怒られる事には異議は無いんだけどさ。何かこう……本当に何となくだけど、俺ばかり集中的に怒っているような、そんな感じがするんだよ」

「うーん……それはその」

「何て言えば良いのかな……」と難しい表情で腕組みをする霧歌。

その腕組みによって霧歌のただでさえ大きなその胸が強調されて――いや、何でも無い。

「何か解っているような口ぶりだな、霧歌」

「うーん、何となく、架凪呀さんの真意は解らないでも無いんだけど……それをどうやって秀ちゃんに説明したらいいのか解らないのよね。でも、少なくとも秀ちゃんは架凪呀さんから嫌われてはいないと思うよ？」

「何でそんな事が解るんだよ」

「だって、秀ちゃんと架凪呀さんって席が隣同士でしょ？　時々だけど、秀ちゃんが忘れ物した時とかも架凪呀さんは秀ちゃんと席をくっ付けて教科書を見せてくれるし、それに、架凪呀さんが忘れ物をした時だって、秀ちゃんも普通に架凪呀さんと席をくっ付けて、教科書を見せているでしょ？」

本当に嫌われているなら秀ちゃんにそんな事させないわよ――とそれが霧歌の言い分であった。

「……まぁ、確かにそう言われてみればそうなのかも知れないな」

俺は納得したように呟く。

一度、架凪呀に消しゴムを貸してやった時、彼女は何だか顔をほんのりと赤くしていた事があった。

熱でもあるのだろうかと思い、俺がその事を架凪呀に尋ねると――。

（べ、別に、赤くなってなんかいないわよ！　アンタの見間違いなんじゃないの！？）

――と、怒鳴られた事があったっけ。

あの時、どうして架凪呀はあんな事を言ったのだろうか。

未だに考えてもよく解らないな……。

「秀ちゃん、ボーっとしていないで、さっさと宿題を終わらせる」

「へいへい……解ったよ」

まぁ……何はともあれ。

夏休みが明けて早々に数学教師にも、学級委員長にも怒られなくない俺はとりあえず先ほどから手が止まりっ放しの宿題に再度手を付

け始めるのであった。

◆　◆　◆

奇跡が、起こった。

結局、昼の十二時から午後五時までずっと宿題をやっていた俺なのだが。

何と、数学の宿題を全て終わらせる事が出来たのである。

これを奇跡と呼ばずに何と呼ぼうか。

いや、五時間掛ければそれは流石に終わるだろうとか思うかもしれないけれど。

俺だぞ？

自分で言うのも何だけれど、こんな低学歴を擬人化させたようなこの俺が五時間で数学の宿題を終わらせる事が出来たんだぞ？

以前から少しずつやっていたとは言え、これはまさに奇跡に近い。

いや、ていうかもう奇跡だ。

そんな奇跡の余韻に浸りながら――俺はウリアや霧歌と共に図書館からの帰路を歩いていた。

その帰路である住宅街の通路は茜色に染まり――俺の好みである幻想的な空間へと生まれ変わっていた。

「凄いじゃない、秀ちゃん」

夕陽の光に照らされながら霧歌は俺の隣で笑顔と共にそう言ってくれた。

「まさかとは思ったけれど……本当に宿題を終わらせてしまうなんて」

「いや、本当に自分でも驚いてるよ。俺の中にまさか……こんな力が眠っていたなんて」

「そんな問題の束くらい五時間もあれば誰だって解けるでしょ」

「ウリア、お前は黙ってろ」

俺の隣に居る霧歌の更に隣で呆れ顔と共に言うウリア。

8月3日？

「ていうか、秀」

「何だよ、ウリア」

「明日も今の所に行かない？」

「今の所って――ああ、図書館の事か？　何だよ、そんなに本が読みたくなったのか？」

「うん、まぁ、そんな所、かな。今日私が読んでた本のシリーズなんだけど、全部読み切れなくて……だから、明日も行きたいなぁ、なんて」

そう思ったのよ――とウリア。

「いや、そこまで読みたい本があったなら、借りてくれれば良かったじゃないか。どうして借りて来なかったんだ？」

「えっ？　あの“としょかん”って場所、本を借りる事が出来たの？」

「……お前、次から図書館に行く時はそのシステムをちゃんと理解した上で行くようにしろよな」

俺は呆れ顔でキョトンとした表情を見せているウリアにツッコミを入れる。

その間に居る霧歌も半ば呆れたような苦笑を浮かべていた。

「……それじゃあ、私はこっちだから」

帰路の途中に存在するとある分岐点に差し掛かった所で不意に霧歌がそんな事を言った。

「おう、またな、霧歌。今日は宿題を見てくれてありがとな」

「またね、霧歌」

「うん、秀ちゃん、ウリアちゃん、またね」

そう笑顔と共にそう言って――霧歌はこちらに背を向けたまま自身の帰路を歩き出した。

「……さて、俺達も早く帰るとするか」

「そうだねぇ……早く帰って“しーふーどー”を食べないと」

「まだ時間的に早いから作らねーよ」

そして――俺とウリアもそんな会話を交わしながら家に向かって帰路を再び歩き出すのだった。

◆◆◆

「……」

夜――夕食も食べ終えて、風呂にも入り終わった俺は部屋の机に着いて、その“白い欠片”を無言のままただ呆然と見据えていた。

「……俺が今から19年後に魔術を復活させて……それで、この欠片が魔術を復活させる為の鍵、か」

「何を今更そんな事を感慨深そうに呟いているのよ」

俺のベッドで寝転んで漫画を読みながらウリアはそんな事を言ってきた。

ちなみに、格好はまさかのセーラー服である。

何やら、以前この格好で寝てからと言うもの――体中を服の隙間から風が通り抜ける涼しげな感じが気に入ったらしい。

部屋の中で高校生でも無いのにセーラー服を着るというのは些かどうかと思うが……。

まぁ、俺的には万々歳なので特に何も言っていない。

ていうか、俺この光景を誰かに見られたら絶対に勘違いされるよな……悪い意味で。

同年代の女子と同じ屋根の下で寝食を共にしているだけでも拙いのに。

“寝”の方に至っては屋根の下どころか一緒の部屋である。

……まぁ。

同年代の女子と一緒に寝られるというシチュエーションはそうそう味わえるものではないと思うので、その為ならば俺は別に勘違いされても平気だけどな！

……。

……いや、何でも無い。

俺は何も言っていない。

何が言っていたとすればそれは単なる俺の戯言だから忘れてくれると有難い。

「……何よ」

俺がそんな事を思っているとウリアが漫画からこちらに顔を向けてこう言ってきた。

「まさか、また自分が魔術を復活させた事に実感が湧かないとか――そんな事を言い始めるんじゃないでしょうね」

「いや、そういう訳じゃないけど」

「それじゃあ、どうしてそんな事を呟いてみた訳？」

「それは……何となくだよ、何となく。理由なんて無い」

「そう。それなら良いんだけど」

「……ていうか、ウリアさ。何気無く――と言うか、さり気無く俺のベッドの上に居るけど、お前にはちゃんと寝る場所があるだろ？　布団という名の」

「ああ、これ？」

そう言って――ウリアはベッドの上からそのすぐ下の床の上に敷かれている布団一式を見下ろして言う。

「これ、秀が自分で寝る為に運んできたものじゃなかったの？」

「そんな訳ないだろ。俺が厚意を以てお前の為に布団を一式運んで来てやったんだろうが。それもお前がこの家にやってきたすぐ後に」

「ゴメン、昔の事だから忘れちゃった」

「一週間前の出来事を昔とか言って誤魔化してんじゃねーよ」

「私、過去じゃなくて未来に生きる女だから、未来人だけに」

「誰が上手い事を言えと言った！」

上手い事を言った事は認めるが、得意気な顔を止めろ！

何だかイラッとする！

「ほら、漫画を読むならベッドの上じゃなくて布団の中で読め。さもないと、俺はお前を襲うぞ」

「襲ってみなさいよ――襲えるものならね。返り討ちにして上げるわ」

「言ったな、ウリア……言っておくが、俺は女子を襲う時にのみ、攻撃力が５０００ポイントアップするんだ！」

「ご、５０００ポイントですって……！　何よそれ、ゲームエンド級の上昇値じゃない！」

つーか、お前元ネタが解るのかよ。

どこでそんな知識を得ているのだろうか……一般常識は余り知らないくせに。

本当に知識が偏っている未来系魔法少女である。

8月3日？

「まぁ、そういう訳だから。一刻も早くベッドから下りないと俺は本当にお前を襲うぞ。それでも良いのなら――明日の朝、俺と一緒に同じベッドの中で目を覚ましたくないのなら早くベッドから下りろ」

言った後だから言える事だが……我ながら最悪の脅し文句だと思った。

「仕方ないわね……朝起きて最初に飛び込んでくるのが秀の顔だなんて真っ平ご免だし、ここは下りてやりますか」

「最後の最後まで上から目線だな、お前」

しかもさり気無く暴言を放って来るし。

本当に襲ってやろうか、こいつ。

俺はそんな事を思った。

いや、絶対に襲わないけれど。

……いや。

本当だってば。

◆◆◆

――漆黒の闇が、広がっている。

ここはどこなのだろう。

私は一人――闇の中に佇んだままそんな事を思った。

四方八方にはただ果てしない闇が存在している。

前にも、後ろにも、右にも、左にも、上にも、下にも――。

私の周囲は完全に闇によって取り囲まれていた。

――ここは、どこなのだろう。

黒磯の景色を見渡しながら私はそんな事を思った。

すると、不意に漆黒の空に四角い穴が空いた。

いや、正確には“空いた”――と言うよりも、不意に漆黒の空が長方形の形状に白く光ったと言った方が良いのだろうか。

突如瞬いたその光に私は目を細める。

そして――その長方形の光を見上げてみた。

それと同時に長方形の光の中に――まるで映画のスクリーンのように映像が流れ始めた。

そこに映し出されたのはとある荒廃した街並みの風景。

地面の至る所が――紅い炎で“燃えている”。

すると、荒廃した街並みの中から漆黒の巨大な戦車が現れた。

戦車は多大なる轟音と共に“こちら”に向かって砲弾を撃ち込んできた。

その直後――スクリーンの向こう側で何か紅い光を帯びた魔方陣のようなものが出現する。

その魔方陣によって滑空してきた砲弾は防がれ、爆発を起こす。

その瞬間、不意にスクリーンの映像が歪み――その歪みが収まった頃には、その映像は戦車と向かい合わせになっているものではなく、戦車を遥か上空から見下ろしているものとなっていた。

その戦車に向かって段々と映像が近付いて行く。

映像の端にオレンジ色の光の剣の刀身が映った。

映像は戦車に向かって勢い良く降下して――そして。

オレンジ色の剣を戦車に深々と突き立てる。

一瞬にして劫火に包まれる巨大な機体。

映像が戦車から離れた瞬間――その戦車は爆発を起こした。

跡形も無く吹き飛ぶ戦車。

中には人も乗っていただろう――そして、その中に居た人物は、きっと――。

――すると、今度は映像が１８０度後方へと回転する。

それは映像の後方から針のような光線の雨が降り注いできたからだった。

その光の時雨に反応したのだろう――１８０度後ろを振り返ったその先には何人もの武装した黒い軍服を着た人々がこのスクリーン目掛けて光線を連射していた。

しかし――そのスクリーンの前に現れた魔方陣によって、先ほどの戦車の砲撃と同じくその光線は防がれてしまう。

それでも、その人々は攻撃を止めない。

いや――“止める事が出来ない”と言った方が正しいのか。

何故なら、止めてしまえば――“死んでしまうから”。

しかし、止めなくても――自分達がどちらにせよ死んでしまう事など、その武装した人々は承知の上なのだろう。

だからこそ、その人々は攻撃をし続ける。

どうせ死んでしまうのなら。

味方の組織の為に――。

一矢(いっし)報いて、死にたいだろうから。

――そして。

スクリーンの下の端――どうやら地面にまた新たな紅い光を帯びた別の魔方陣が出現したようだ。

その魔方陣から空中へと昇り始める大量の劫火。

スクリーンの視点が斜め上を向く――そこには既に巨大な炎の塊が生成されていた。

それから、スクリーンの視点が先ほどの攻撃をし続けている武装した人々へと向いた――その瞬間。

不意に、スクリーンに振り下ろされた左腕が見えた。

その直後――空中に創造された炎の塊はその武装した人々目掛けて落下した。

スクリーンの全てが劫火によって紅く染まる。

耳を劈くような爆音と吹き抜ける烈風の音がスクリーンからこちらへと溢れ出してくるように私の耳に届いた。

……止めて。

いつの間にか――私は無意識にそう呟いていた。

それでも、映像は止まらない。

スクリーン上ではその映像が流れ続ける。

すると、燃え上がる劫火の中――先ほどの武装した集団の内の一人が瓦礫（がれき）の中から這（は）い出して来るのが見えた。

おそらくは、先ほどの魔術の攻撃を受けた中の生き残りだろう。

血塗れで、大火傷を負ったその人物は膝から瓦礫の上に勢い良く倒れ込んだ。

8月3日？

そして――また映像が動く。

映像はその倒れ込んだ人物の前で停止する。

その映像はその倒れ込んだ人物を覗き込むように下へと向けられた。

そこに倒れていたのは――女性だった。

どうやら、防火服のようなものを着ていたらしく――焼失した服の隙間から見えるその白い背中には火傷どころか傷一つも無かった。

黒い軍服と共に白いブラジャーは焼き切れてしまっていたが。

しかし――背中には火傷は無かったものの、先ほど語ったように、その女性の顔や首には大火傷があった。

炎の光を反射している長い茶髪も――その先端は焼け焦げて真っ黒になってしまっている。

……止めてよ。

私はまた呟く。

今度は知らず知らずの内では無く――自発的に、私は呟く。

何故なら、私はこの後の展開を“知っているから”。

だからこそ――私はそう呟く。

けれど、そのスクリーンは止まる事を知らずに――動く。

スクリーンの左端から不意に出て来た腕がその女性の頭を――髪を、掴んで、その体を引っ張り上げた。

その痛みに顔を顰める女性――微かな呻き声も聞こえてくる。

先ほどの爆発の際に頭を打ったのか――頭からは血が絶えず流れ出ていた。

そして――更にスクリーン上の映像は動きを見せる。

今度はスクリーンの右端から先ほどのオレンジ色の光を放つ剣の刀身が出て来た。

その刀身はゆっくりと持ち上げられて――同じように持ち上げられたその女性の首筋に当てられる。

それから、不意にその光の剣の刀身が映像から姿を消した。

光の剣が振り上げられたのだ。

剣は振り上げられた後に所有者によってどんな動きを見せるのか――この事の顛末を知っている私でなくともそれは解るだろう。

だから、私は剣が振り上げられると同時に殆ど反射的に目を瞑った。

今度こそ何も視えなくなった――果てしない暗闇の向こう側から。

先ほどの女性のものと思われる断末魔の叫びが聞こえて来た。

それから、一瞬にしてその叫び声は無くなり――消えて、後は炎が周囲の瓦礫を燃やす音だけが聞こえて来た。

それ以外には――何も、聞こえなくなった。

……思い出したくない。

これ以上は――見ていられなかった。

見たく、なかった。

……これ以上、思い出したく、ない……！

だって――だって、これは。

これは私の――。

私の――。

◆◆◆

「……」

俺はベッドの上で仰向けに寝転んだまま目の前に掲げたその白い欠片を――呆然と見据えていた。

ちなみに、部屋の電気は既に消されて――ベッドのすぐ下にある布団の中ではウリアが既に寝息を立てている。

ウリアは先ほどからゴソゴソと何やら寝返りを繰り返していた。

眠れないのだろうか。

何か悪い夢でも――見ているのだろうか。

「……」

そして――俺は何故こうも今日になってこの白い欠片の事がこんなにも気になるのか。

何となく――先ほど俺はウリアにはそう答えていたけれど。

まぁ、その答は強ち間違ってはいなくて――本当に理由など解らないのだ。

単にボーっとしたくて俺はこの白い欠片を眺めているのかもしれない。

本当は心の中に何か思う所があって俺はこの白い欠片を眺めているのかもしれない。

しかし――本当の理由は解らない。

どうしてだろう。

どうしてこの欠片の事が――気になってしまうのだろう。

俺がそんな事を考えていた時だった。

不意に――本当に何の前触れも無く。

俺の右手の中にあるその白い欠片が淡い光を灯したのだ。

「！」

俺はハッとしてベッドの上に上半身を咄嗟に起こす。

しかし――その時には既に欠片から光は失われていた。

「……何だったんだ、今のは」

俺は手の中にある欠片を見て言う。

『魔導獣機』がまた転送されたのか――いや、それならばこの欠片はその『魔導獣機』がこの時代から消滅するまでずっと光を放っているはずだ。

――それならば。

今の光は、一体全体何だったのか――。

「思い出したくないっ！」

「うわっ！」

そして、俺は突然訳の解らない言葉を叫びながら起き上ってきたウリアに思わず声を上げてしまった。

8月3日？

つーか、何なんだよお前。

驚かすんじゃねーよ。

「……ど、どうした、ウリア？」

俺はまだ驚愕によって高鳴る心臓の鼓動を感じながら冷や汗と共にウリアにそう問いかける。

「……」

すると――ウリアは無言のまま呆然とこちらを振り返って来て。

「……はぁ」

――と、安堵の息をついた。

「……う、ウリア？」

「何だ……夢、か」

「夢？　何か悪い夢でも見たのか？」

「えっ？　あっ、いや、その……」

「正直に言えよ。気になるだろうが、心配にもなるし。話してみろよ」

「え、えーっと……ね？」

そう言って――ウリアは苦笑と共に人差し指を立ててこう言ったのだった。

「か、カレーのカップラーメンに追い駆けられる夢を見た……」

「お前どんだけカレーを嫌ってるんだよ！」

深夜にも関わらず俺は大声でウリアにそうツッコミを入れてしまった。

いや、でも、だってさぁ。

カレーは本当に美味しいんだぜ？

本当なんだぜ？

「ていうか、秀の方こそ何でこんな時間に起きてるのよ」

「えっ？　いや、その、それは、だな……」

「何よ、気になるじゃないの。正直に言いなさいよ」

「……え、えっと」

……えっと。

「……ぜ、全世界の人間の性別が全て男子になるという悍（おぞ）ましい夢

を見てしまったんだ」

「なるほど……それは本当に色んな意味で悍ましいわね」

むさ苦しい夢だわ――と呆れ顔で言うウリア。

「ああ、本当に末恐ろしい夢だったよ。この世界に女子が居ないなんて、俺にとっては生きる目標が無くなったも同然だからな」

「ああ、なるほど、秀にとってはそっちの意味で悍ましいのね」

「何だよ、他に何か悍ましく思う理由があるとでも？」

「いや、何でも無いわよ……そうね、秀が眠れない理由がそんな事で安心したわ」

「そんな事とか言うな、俺にとっては死活問題だ。……ていうか、お前の方こそ大丈夫なのか？」

「……うん」

私は大丈夫――と俯き加減に小さな笑みを浮かべてウリアはそう言った。

「……そっか、それならいいけど」

「うん……本当に大丈夫だから」

「……」

「……」

「……それじゃあ、おやすみ、ウリア」

「うん……おやすみ、秀」

「良い夢を」

「そっちこそ、ね」

そう言って――俺とウリアは互いに布団に潜り込んで就寝する。

しかし、俺は暫しの間、眠りに就く事は出来なかった。

先ほど、白い欠片が放った――謎の淡い光。

あの光は一体全体何だったのか。

その疑念が頭の中で渦を巻いて――俺が結局眠りに就いたのは午前四時を回った後なのであった。

学級委員長

8月4日。

この日も、俺とウリアは昨日に引き続いて家から少し行った所にある図書館に赴(おもむ)いていた。

別に、ネタが無いからだとか、そんなメタな理由では当然なくて。

ウリアが昨日読んでいた小説の続きが読みたいと言って聞かなかったのである。

「何だ、そんなにハマったのか？」

「もうハマりにハマって足が抜けなくなるくらいにハマっちゃったわよ。このままだとそのまま沈んで頭の先まで埋まってしまいそうだわ」

「その比喩はどうかと思うが……お前がどれだけその本にハマっているのかが解ったよ」

「本当に面白いんだから。秀も一度読んでみた方が良いと思うわよ？」

「いや、俺は……」

「それとも、秀には文字ばかりの本なんて高難度過ぎるかしら？」

「誰もそんな事言ってねーだろ。俺だって、小説くらい読めるよ」

「本当に？」

「五ページで断念する自信があるがな」

「早っ！　ていうか、自信を持つべき所ですら無いから！」

「ていうか、その小説のタイトルとか解らないのか？　俺の知っているタイトルだったら……少しは興味が出そうな気もするんだけど」

「えーっとねぇ……」

そう言いながらウリアは図書館の本棚から取り出したその小説の表紙を見下ろして――。

「タイトルは『とある魔術の――』」

「言わんでいい。ていうか、それ以上は言うな。絶対に言うな」

「何よ、秀からタイトルを言えって私に夜這いして来たくせに」

「もうそこまで聞いた時点で解ったからそれ以上は言うな。そして、俺はお前に夜這いなんかしていない」

「あぁ……昨日は秀に身体中を弄（まさぐ）られて寝るどころじゃなかったわ」

「だから夜這いなんかしていないって言っているだろ！」

「ハイハイ、解りました……そういう事にしておきましょうか」

「お前、いい加減にしろよ。確かに日頃は常にお前をどうやって襲おうかと考えてはいるが今の所、俺はその考えを実行した事は無いんだぞ」

「考えてはいるのね」

「……」

閑話休題。

「……そ、それで？　お前はどうしてその小説にそこまで惹かれたんだ？」

「何か、物語の流れが私の居た時代と似ているなぁ、って」

「お前、まさかそれはこの物語がその作品と内容がどこかしら似ていると揶揄（やゆ）しているのか？」

「誰もそんな事は言っていないでしょ。それにパクリだとかオマージュだとかインスパイアだとか……色々言われているけれど、今の時代、多少設定が似ているなんてよく有りがちな事よ」

「まぁ、確かに……これだけ作品が世の中に溢れ返っている時代じゃ、逆にどんなものにも似ていない作品や物語を創り出す方が難しいのかもしれないな」

「問題なのは、似ている上でどれだけ他の作品や物語よりも面白いものを創れるのか否かよ」

「お前、今微妙に深い事を言わなかったか？」

いや、深いかどうかは俺の判断だったのだけれど。

「でも、お前の言う通りだよなぁ……この時代、似ている作品なんかそこら中にある訳だから、どれだけ他よりも群を抜いて面白いものを創る事が出来るかが問題になって来るよな」

「……ていうか、そろそろこの本借りて帰りたいんだけど」

「何だ？　もうお腹空いたのか？　来る前に食べたばかりだろ」

「いや、テレビで番組表観てたら観たい番組があった」

「お前、現代の生活に取り込まれ過ぎだろ」

「現代の生活に足を突っ込んでしまったら足が抜けなくなってしまったのよ」

「そしてお前は意外と何にでもハマり易いんだな」

「勘違いしないで！　私は何にでもハマるようなそんな軽い女じゃないわよ！」

「いや、今の話を総合するとどう考えてもお前は軽い女だ」

「私はそんな尻軽女じゃないわよ！」

「まぁ、尻軽女ではないだろうな」

つーか、どこで覚えたそんな言葉。

未来だろうか――いや、戦国時代の２０５６年にそんな言葉がよく使われる事があるのだろうか。

すると……テレビ？

昼ドラか何かで耳にしたのか――まぁ、半ばどうでもいいけれど。

「それで？　私はこの本を借りて早く帰りたいんだけど」

「それなら、早く本を借りてくればいいじゃんか」

「何を言っているのよ、この私が図書館で本を借りれる訳が無いじゃない」

「威張って言うな。それこそ威張って言う事じゃないから」

そういえば、こいつは図書館で本が借りれるというシステムさえも理解していなかったのか……。

「仕方ないなぁ……ほら、俺が借りて来てやるから、貸してみろ」

「秀って図書館での本の借り方を知っているの？」

「余り俺を見縊（みくび）るなよ、ウリア。幾ら俺だって本くらいは借りる事が出来るさ」

「それ以外は何も出来ないけどね」

「何て事を言いやがる！　俺の生きる意味が“図書館で本を借りる

”以外に何も無いみたいに言ってんじゃねーよ！」

「秀、図書館では静かに、だよ？」

「くっ……！」

こいつ……そういうルールだけは微妙に理解しやがって……！

「……と、とにかく、貸せよ、その本。俺が借りて来てやるから」

「うん、ありがと、秀」

そう言って――俺に微笑んでくるウリア。

笑っていれば可愛いのになぁ……まぁ、笑わなくても可愛いけれど。

……えー、ゴホン。

そんな事を思いつつ俺は図書館の受付へと足を進めるのだった。

◆◆◆

「あっ、そうだ」

図書館の入り口にてとある事を思い出した俺は立ち止まる。

「ん？　どうしたの、秀？」

そして、その隣でウリアも立ち止まって俺を振り返って来る。

「忘れてた……俺、宿題でちょっと解らない所があるからさ。参考書借りようかな、って」

「ああ、そうなの――ていうか、そもそも図書館に参考書ってあるの？」

「……いや、知らないけど」

「知らないのに借りようとしているの？」

「と、とにかく、俺はちょっと参考書を探しに行って来るからさ。お前、観たいテレビあるんだよな？」

「うん、そうだけど……」

「それなら、先に帰ってろよ。お前がこの前、戦った相手もすぐまた攻めて来るとは思えないし」

「でも、あいつは――ストレンドは味方の内の『強硬派』の人達が秀の命を狙って勝手に動き出したって」

「いいっていいって。俺の命の為にお前の生活まで制限する訳には行かないし、それに、本当に少しの間だけだし、大丈夫だって」

「制限って――ボディーガードが護るべき人の為に生活を制限されるのは当然だと思うけど。それに、テレビなんかを優先して秀の事を護れなかったらそれこそ……私、立ち直れないし、未来の秀に顔向けできないよ」

そう言って――苦笑と共に顔を伏せてしまうウリア。

まぁ、確かにウリアの言う事は一理ある。

俺だって、誰かを護るボディーガードか何かで――観たいテレビを優先してその人を護れなかったなんて、話にならない。

……けれど。

俺とウリアは決定的に違う。

何が違うかって言うと――生きている“時代”が違う。

――だから。

「……あのな、ウリア」

俺は俯いてしまったウリアの頭に静かに手を乗せた。

「俺はさ、ウリアにこの時代の事をもっと楽しんで欲しいんだよ」

「……楽しんで欲しい……？」

「お前の生きてきた時代――２０５６年ってさ、戦争ばかりの世界なんだろ？　その世界では、当然娯楽なんて殆ど無い訳で……お前がどれだけ詰まらないテレビ番組でも、それほど豪華でも何でもないカップラーメンで物凄く喜ぶのも、漫画や小説に没頭しているのも――大概の理由が、未来に娯楽が無いからなんだろ？」

娯楽が無いからこそ。

２０５６年という時代に――何も生きていて楽しいという事が無いからこそ。

生きるという事が誰かと戦うという事と同列視されている時代だからこそ。

ウリアは何気ない事で喜んだり、嬉しがったり、楽しめる事が出来るのだろう。

そんな生きていて何も楽しいとは思えない時代を生きてきたウリアの気持ちを――。

“解る”――なんて事は言わない。

ていうか、解るはずもない。

だって、俺はその時代を生きて来た訳では無いから――そんな戦うだけの日々を経験してきた訳ではないから。

少し前の戦争を生き抜いてきた人々の気持ちを――現代の人々が理解できない事と同じだ。

その気持ちを聞いて、理解する事は出来る。

しかし、その気持ちを完全に理解する事は出来ない。

何故なら――俺はその人自体じゃないから。

その気持ちを完全に知る事は出来ない。

俺はウリアじゃないから。

ウリアの気持ちを――完全に理解する事は出来ないのだ。

――だから。

「だからせめて……お前が、俺を敵から護り切って、いつか未来に帰ってしまうその日まで……お前には、出来るだけこの時代を楽しんで未来に帰って欲しいんだ」

「……な、何よ」

何なのよ――とそう呟きながらウリアは俺から顔を背けてしまった。

「何かカッコイイ事言っちゃって……普段は馬鹿みたいな事しか言わないくせに」

「さり気無く俺の事を馬鹿にするな」

「……少し、だけだからね？」

そして――ウリアは再度俺を振り仰いで言う。

「本当に、少し参考書を探して、無かったら帰って来てよ？」

「ああ、約束するよ」

「それに」と俺はズボンのポケットから白い欠片を取り出す。

「これもあるし……何か異変が起こったら、すぐにこの欠片が知らせてくれるさ」

「……解った」

俺の言葉に渋々頷いてくれたウリアは一人借りたその小説を手に図書館の入り口を潜って家に帰り始めるのだった。

「……さて、と」

そして俺も……約束してしまったからには、出来るだけ早く帰らなければならない。

ああ見えて、ウリアは心配性だからなぁ。

「……まぁ、心配性じゃなかったら、４５年後の未来から俺を助けに来ようなんて思わなかったかもしれないけれど」

そんな事を呟きつつ、俺は早速図書館の中を参考書を巡って歩き始めるのだった。

◆◆◆

参考書の捜索は難航した。

図書館の受付だとか、館内の本を探すパソコンのサービスだとか、そういうものを使えば一発なのだろうけど……。

この館内にあるのかどうかも解らないものをいちいちそんなものを使って探そうとは何だか思えなかったのである。

パソコンのサービスの方なら未だしも、受付の人には若干迷惑にな

ってしまうからな。

まぁ、実際の所、それらは俺が人に聞いたり、パソコンを使って検索したりする事を面倒がっている事に対しての建前であり、口上であるのだが。

「しかし……何でこんなに本があるんだよ」

いや、俺の今の言葉は図書館だから当たり前の言葉なのだろうけれど。

それにしても……この図書館には本当に色々な、様々な本が数多に存在する。

それこそ、星の数ほどに。

「流石は総合図書館って所か……“総合”が付くだけあって、本の多さは半端ねーな」

そして、俺がそんな事を呟きながら本棚と本棚の間に生まれた細長い道を歩いている時だった。

「あっ」

――俺は正面から歩いてきた人物に思わず声を上げてしまっていた。

「……あっ」

それから、その人物も俺に気付いて、そう声を上げて立ち止まる。

「……」

「……」

互いに無言のまま互いを見合う俺とその人物。
沈黙の時が俺達の周囲を取り囲む中――その人物の口がゆっくりと開かれた。
「……アンタ、真之乃秀――」
「スミマセン、人違いです」
「ちょっと！　待ちなさいよ！」
俺は素早く後ろを振り返って来た道を戻ろうとしたのだが――その人物に呼び止められた。
「……何でしょうか？」
「そして、何で敬語なのよ――それから、その露骨に嫌そうな顔をするのは止めなさい」
「多分、人違いをなされていますよ、あなた」
「何を言っているのよ、アンタの名前は真之乃秀でしょう？」
「俺の名前は駅須虎（えきすとら）です。そんな物珍しい名前では御座いません」
「何よ、そのある意味その辺を探せばどこにでも居そうな名前は。偽名ならもう少しちゃんと存在していそうなものにしなさいよ」
「……見抜かれたか」

「当たり前でしょ。駅須虎なんて、アンタの本名よりも更に稀有な名前じゃないの」

「……今の駅須虎はドラマとかの登場人物A的な“エキストラ”という言葉を掛け合わせて作った偽名で――」

「解っているから解説は無用よ」

……バッサリと斬り捨てやがった。

咄嗟に思い付いたにしては中々クオリティの高い偽名だと思ったのに。

「……はぁ」

俺はため息混じりに先ほどから俺の放つボケに的確にツッコミを入れて来ている人物――もとい、その女子を振り返る。

その女子の名前は架凪呀琴羽というもので、俺や霧歌が所属するクラスの学級委員長である。

昨日も一度語っているような気もするが、この琴羽という人物は俺を執拗に叱って来るのである。

いや、学級委員長という立場以前に、俺が授業で居眠りをしていたり、宿題を忘れたりする事を怒る事は当然なのだろうけれど。

何かに託けてこいつは俺を注意してくるのである。

制服のシャツがズボンから出ているとか、髪の毛に寝癖が付いているとか。

そんな事細かに俺に対して注意をしてくるのだ。

お前は俺の母親か何かなのかと、毎回こいつから注意をされるごとにそんなツッコミをしてしまうほどだ。

以上の理由から――俺は少なからずこの架凪呀琴羽という人間を苦手に思っているのである。

嫌いではない。

俺の事を叱ってくれたり、注意してくれたりしてくれる事は嬉しい事だし、有り難い事だと思うから。

……いや、俺が別にM気質を備えている変態的な人間という訳では無くて。

「ちょっと、何故ため息をついているのよ、真之乃秀」

「いや、ちょっと……お前を見ていたら思わずため息が漏れて」

「なるほどね。もしかして、私の事を遠回しに侮辱しているのかしら？」

「い、いや、そういう訳では無いから。決してそういう訳では無いから、誤解はするな」

「ふーん……まぁ、良いでしょう」

「それで？」と架凪呀は俺にこう問いかけて来た。

「真之乃秀は、どうしてこんな所に居るの？」

「どうしてって……図書館に来る理由なんて本を借りる以外にないだろ」

「……言っておくけれど、図書館には漫画本は置いていないのよ？」

「そんな事は百も承知だよ！」

何かウリアもそんな事言ってたな！

俺は普段どれだけ文字が書かれた本を嫌っていると周りから思われているんだよ！

「真之乃秀、図書館では大声を出さない――という鉄則を知っているわよね？」

「いや、お前の――お前のせいだからな、今のは」

俺は途中で声量を抑えつつ架凪呀にツッコミを入れる。

「……あっ、でも、ライトノベルは確かあったわね。真之乃秀、小説が読みたいのならそういうものから読むと良いわよ」

「だから、俺は別に小説を探しに来た訳じゃないんだよ、今日は」

「それじゃあ、何を探しに来たの？」

「……さ、参考書」

「……さ、参考書、ですって……！」

「何でそこで驚愕の表情を見せるんだよ」

そんなに俺が図書館で参考書を探す事がおかしいのか。

「あっ、ゴメンナサイ……真之乃秀が、あの真之乃秀が、学校ではあんな感じの真之乃秀が、正確に言うと単なる馬鹿の真之乃秀が……まさか、図書館にまでやって来て参考書を探しているなんて思いもしなかったし、夢にも見なかったし、そんな幻さえ見た事は無かったから、ちょっと驚いちゃって」

「それはすまなかったな、架凪呀。そして、今の言葉って後半からは単なる俺の罵倒だったよな？」

「私はただ単に普段の真之乃秀の生活風景を見た観点から正確な情報を語っただけよ」

「それは時に人の心を傷付けるという事をお前はもう少し理解した方が良いぞ」

「そうね、“言葉の暴力”って言葉もあるくらいだし……今日から気を付けるとするわ、真之乃秀」

「そうか……いや、解ってくれればいいんだ」

「それで、普段はあれだけ勉強をしているようには到底見えるはず

もない馬鹿の真之乃秀がどうして図書館で参考書なんて探している訳？」

「お前はアレか、数秒前に言った事を全て忘れてしまうほどの記憶障害でも抱えているのか！？」

「しーっ」

「くっ……こ、この……！」

駄目だ……！

図書館って大声で叫べないから何かやり辛い……！

「……ちなみに、今私が真之乃秀を罵倒する言葉を言ったのは、私が気を付けるのは“今日から”であって、その言葉が意味するのは“今日から後ろ”――つまり、“明日”であって、私が真之乃秀に罵倒を浴びせないように気を配るのは“明日以降”という事になるからよ」

「お前はそこまでして俺の事を罵倒したいのか。それから、最終的に俺の事を罵倒していたんだな、お前」

「それで話は変わるけれど」

「勝手に話題を変えてんじゃねーよ」

しかし、架凪呀が俺のそんな言葉を聞く訳も無く。

「図書館に参考書なんて置いてないわよ？」

「えっ、マジで？」

「ええ。精々あって辞書が限度ね。流石に参考書は……うん、置いてなかったと思うわ」

「そっか……無いのか、参考書」

「私の言葉が信じられないのなら、受付にでもパソコンの館内検索サービスでも何なりと使えばいいと思うわよ？」

「いや、別にそんな事はしないよ。それに、俺はお前に少なからず信頼を置いているし」

「ひぇっ！？」

「えっ？」

……何だ、今の声は。

そんな事を思う俺の前方には何やら頬を赤く染めた架凪呀の姿があった。

「どうした架凪呀――ていうか、今の声はお前か？　何と言うかその……ヒヨコみたいな声だったぞ？」

「う、五月蠅いわね！　黙りなさいよこの馬鹿！」

「しーっ」

「うっ……ご、ゴメンナサイ」

……何か、初めて架凪呀に勝った気分になった。

何故だろう。普段から間違いを指摘されまくっているからであろうか。

普段、俺に注意ばかりしてくる架凪呀を注意し返すと言うのは何というか……些か心地が良いものだな。

しかも、俺から注意を受けた架凪呀はしゅんと肩を縮めてしまって

いた。

何だろう。

何だかその架凪呀が……俺には少し可愛く見えた。

俺にはもしかしてS気質があるのだろうか――いや、そんな話は今はどうでもいいな。

「……それで、お前は今どうしてそんなヒヨコみたいな声を上げたんだ？」

「ちょ、ちょっとビックリしちゃったから……それと、次にその“ヒヨコみたいな声”って言ったら殺すからね」

こちらを睨み付けてくる架凪呀。

何だか、その視線にはマジで殺気が込められているような気がしてならなかった。

「……び、ビックリしたって……何でそんな声を出してしまうほどにお前は驚いたんだよ」

「だ、だから、その……真之乃秀が、私を信頼してくれているって、言ったから」

「何だ、そんな事に驚いたのか？　当たり前だろ、俺とお前は同じクラスメイト同士なんだし、お前はそのクラスの学級委員長なんだし、信頼を置いて当然の存在のはずだろ？」

「……」

「……か、架凪呀？」

何か、架凪呀がこちらを呆然と見つめたまま動かなくなったんだけど……。

な、何で？

俺今何か変な事言ったか？

「……お、オーイ、架凪呀～？」

俺は架凪呀に向かって手を振ってみる。

しかし、架凪呀はこちらを呆然と見つめたままビクともしない。

その架凪呀の頬は若干紅潮しているようにも見えたが――今はそんな事よりも。

「……」

少しそこにボーっと佇んでいる架凪呀を見て思考を巡らせた俺は傍にある本棚から適当に一冊の本を取り出す。

「……」

それから、俺は架凪呀の目の前まで歩いてみた。

しかし、それでも架凪呀はボーっとしたまま何のリアクションも示

さない。

「……仕方ない」

見兼ねた俺は手に取った本の表紙を架凪呀の頭にゆっくりと振り下ろした。

「目を覚ませ」

「痛っ……って、ハッ！　な、何？　今何が起こったの？　何か頭に衝撃が……」

漸く我に返った様子の架凪呀は周囲をキョロキョロと振り返り始める。

そんな彼女に俺はこう言葉を掛けてやった。

「実は、たった今お前の頭の上に寄生型のエイリアンがやって来たんだけどな」

「き、寄生型のエイリアン？」

「それを追い払おうとして、本で撃退しようとしたらお前の頭から逃げちまって……そしたら、俺の振り下ろした本がそのままお前の頭に当たっちまった訳だ」

「な、何だ、そうだったのか……真之乃秀、アンタのお陰で助かったわ」

「どうやら、奴等はお前に寄生する事によって地球を侵略しようと

していたらしいな……しかし、俺の活躍によってどうやら地球侵略の危機は去ったらしいな」

「ええ、そうね……本当にアンタは良い活躍をしたわ、真之乃秀」

礼を言うわ――と架凪呀は俺の手から本を静かに抜き取って。

「――って、そんな訳は無いでしょ」

「痛っ」

俺を呆れ顔で見上げながら頭に本を振り下ろしてきた。

「何なのよ、寄生型のエイリアンって。エイリアンにも知識はあるんだから、私よりも、もう少し寄生して得な人間を選ぶに決まっているでしょ？　それと、ここでエイリアンの撃退に成功したとしても他の人間が餌食になる可能性だって否めないんだから、それだけで地球の侵略を防いだ事にはならないわよ」

「……架凪呀、冗談めいた単なるネタ的な会話にそこまで事細かにツッコミを入れられると、言ったこっちとしても何だか恥ずかしいものがあるんだけど」

「それならそのまま死んでしまえば？」

「何て事を言うんだ」

「心配しないで、骨はあえて拾わないで上げる」

「いや、そこは拾って行ってくれよ」

「ていうか、そもそも何故アンタは私の頭を本で打ったのよ」

「だから、寄生型のエイリアンが――」

そこまで言った所で、俺は架凪呀から本でまた頭を叩かれた。

「何度そのネタを言うつもりなのよ。叩くわよ、主に本で」

「……それなら叩く前に言ってくれないだろうか？」

「次、そのネタを使ったら真之乃秀の記憶が飛ぶまで本で殴り続けるからね」

「怖い事を平気で言ってんじゃねーよ」

「それで、もう一度問うけど、どうしてアンタは私の頭を本で叩いたの？」

「それは……その、何かお前がボーっとしていたからだよ」

「私がボーっとしていた？　そんなはずはないわ」

「いや、してたんだって。本当なんだって」

「私が呆然とした無防備な状態であったなら、真之乃秀は間違いなく私の身体を触るなり何なりして襲っているはずだもの」

「襲わねーよ！　それから、お前にはまだ俺の変態性を見せた所は一度も無かったよな！？」

何でそんな周知の事実みたいに語ってるんだよ！

「真之乃秀、しーっ」

「いや、ゴメン。解ってはいたんだけど、今のは流石に叫ばざるを得なかった」

「それと、確かに私は真之乃秀の変態性を垣間見た事は無かったけれど、たった今真之乃秀が自分で自白してきたから、最終的に私は真之乃秀の変態性を知る事になってしまったわ」

「しまった……！　俺としたことが、何たるケアレスミスを……！」

「存在がケアレスミスみたいなアンタがそれを言う？」

「存在がケアレスミスって何！？　存在自体が微妙な失敗って何！？」

「真之乃秀、しーっ、ってば」

「……」

……やっぱり、俺に図書館は色々な意味で向いていないみたいだ。

「……オイ、架凪呀」

「何よ、真之乃秀」

――だから、俺は架凪呀に向かってこう提案するのだった。

「……外に出ようか」

◆
◆
◆

架凪呀と共に図書館を後にした俺はどこに行く訳でも無くそこら辺の道を歩いていた。

「そういえば、架凪呀」

「何？」

「お前、本借りなくて良かったのか？　図書館に居たって事は、俺と同じで何か本を借りる為だったんだろ？」

「ああ、うん、そうなんだけど……借りたい本が先に借りられてて。仕方なく帰ろうとして居たら、アンタと出会ったって訳よ」

「ふーん、そうだったのか」

「それで……変態性を持つ真之乃秀」

「忘れてくれ。さっきの事はどうか忘れてくれ」

「嫌よ。折角手に入れた真之乃秀の弱みだもん。こんな貴重な情報はちゃんと記憶の中に留めておかなくちゃ」

「何の為に？　お前は一体全体何の為に俺の弱みを収集しているんだ？」

「気にしないで、ただの趣味だから」

「人の弱みを収集する事が趣味なんてお前はどうにかしているぞ！」

俺はそう声を上げて架凪呀にツッコミを入れる。

ていうか、漸く大声を出す事を気に掛けないで全力でツッコミをする事が出来た。

何だかやけに気持ちが良かった。

「ていうか、真之乃秀。アンタは一体何の為に参考書を探していたの？」

「夏休みの宿題の為だ」

「ああ、夏休みの宿題、ね……アンタも偶（たま）には学問の類で行動を起こす事があるのね、見直したわ」

「それはどうも。まぁ、宿題だからな……夏休みまでに終わらせるのがセオリーってものだろ？」

「あら、いつも学校で宿題をほぼ毎回忘れている真之乃秀の言葉とは思えない言葉ね」

「うるせーな。ていうか、俺は別に“ほぼ毎回”宿題を忘れている

訳じゃないからな。“殆ど”忘れているだけだからな」

「言葉の表現が違うだけじゃないの……」

俺に向かって呆れ顔を見せてくる架凪呀。

「ていうか、どうせさっきのアンタらしくない言葉も夜華さんの請け売りなんでしょ？」

「……何故解った」

「解るわよ。そもそもアンタの言いそうな言葉じゃないし、アンタにそんな言葉を言って来そうなのはアンタの周りじゃ、夜華さんしか居ないからね」

「何だその言い方は。それじゃあ、俺の周りに霧歌以外に頭の良い奴が居ないみたいな言い方じゃないか」

「そもそも、アンタって友達居ないし」

「友達が居ないんじゃない、あえて作っていないんだ」

「それって、友達が居ない人が強がって使う典型的な言葉の一つよね？　自分は負け組じゃないみたいな、そんな感じの」

「……」

返す言葉も無かった。

「いや、ていうか、俺にはちゃんと友達くらいは居るからな？　昼

休みだってちゃんと俺は屋上で売店のパンを友達と楽しげに話しながら食べているんだぜ？」

「夜華さんとでしょ？」

「だから何故それを知っているんだ！」

そもそも、屋上で食べる奴なんか少ないし、俺と霧歌が行った時には毎回誰も居なかったはずなのに！

「私はクラスメイトの事なら何でも網羅しているからね。何せ学級委員長だし」

「それは学級委員長とは言わない。ストーカーと言うんだ」

「ストーキングなんてしていないわよ。私はただクラスメイトの後を気付かれないように気配を消しながら尾行しているだけで」

「それをストーカーって言うんだよ」

「主に真之乃秀を尾行しているだけで」

「そして、何故俺限定でストーキングしてるんだよ！」

「それはその……アンタがクラスで一番の問題児だからよ」

「理由になっていそうで理由になっていない！」

「ああ、でも、心配しないで。もうストーキングはしていないから」

「そうなのか……？」

「うん、アンタの家を特定できた所で止めたから」

「行く所まで行ってんじゃねーか！」

そして、そんな事を平然と笑顔で言うんじゃない！

「何で俺をストーキングしているんだよ。何で俺の家の特定にまで至っているんだよ……ていうか、架凪呀が俺をストーキングして本当に何のメリットがあるんだよ」

「秘密よ。アンタに教える訳が無いじゃない」

「ああそう……」

知りたかったけれど、実際の所は何か怖くてその理由を聞きたくないのが本心だ。

「……それでさぁ、真之乃秀」

「……何だよ」

「参考書、欲しいんでしょ？」

「ああ、欲しいけど……何だ、お前まさか違法染みた値段で俺に参考書を売りつける訳では無いだろうな」

「そんな訳無いでしょ。私がそんな事をする人間に見える？」

「見える」

そして、俺は架凪呀から腹部に拳を食らった。

「ぐ、おお、お……！」

俺は殴られた腹を押さえてその場に蹲る。

「アンタが私に失礼極まりない発言をするからよ」

「俺は本当の事を言っただけだ……」

「今度は蹴りを食らいたいようね？」

「ゴメン！　悪かった！　だから蹴りだけは勘弁して下さい！」

素早くその場に立ち上がりながら俺は架凪呀に謝罪をした。

ていうか、どうして俺は架凪呀に謝罪をしているのだろうか。

どう見たって悪いのは架凪呀の方なのだが……。

「……それで？　参考書がどうかしたのかよ」

「だから、そんなに欲しいのなら私の参考書を貸して上げましょうか？」

「……何だって？」

「だから、私がアンタに参考書を貸して上げましょうかって言ったのよ」

「お、お前が俺に参考書を貸す、だって？　何だ、今日は空から槍でも降って来るのか？」

「真之乃秀」

「ハイ、どうも申し訳ありませんでした」

架凪呀がまた拳を握り始めたので俺は素直にまた謝罪をした。

どう見たって今のは俺の方が悪かったから。

「えっ？　本当に？　本当に貸してくれるのか？　参考書」

「何でそこまで私は疑われているのよ……本当よ。参考書、必要なんでしょ？」

「ああ、うん。宿題でちょっと解らない事があるから」

「ていうか、宿題で解らない事があるなら、それこそ夜華さんに聞けばいいのに」

「いや、ほら、確かに霧歌は頭が良いけれど、さ。そこまで霧歌に毎回聞くのも悪いし……ていうか、夏休み中は今までずっと殆ど毎日宿題を見て貰っているし」

「……ふ、ふーん」

すると、架凪呀はどこか不機嫌そうに頬をぷうっと膨らませて。

「そ、そうなんだ……ていうか、毎日って。幼馴染って立場は本当に羨ましいわね……」

「えっ？　何だって？」

「い、いや、何でも無い。何でも無いから……気にしないで」

「そ、そうか？　それならいいけど……」

「そ、それじゃあ……今から私の家に行きましょうか？」

「えっ？」

「何よ、その反応は……何か不満？」

「い、いや、そういう訳じゃないんだけど……」

何だろう……何なのだろう、この気持ちは。

何か怖いんだけど。

そもそも、俺は架凪呀に対して少なからず苦手なイメージを持っていた事もあるのだろうけど。

先ほどの架凪呀の堂々たるストーカー宣言で何か架凪呀の家に行くのが本当に怖くなってきたのである。

「……お前、俺を家に連れ込んで俺を取って食うつもりじゃないだろうな」

「私は妖怪か！」

「えっ？　お前の主食は人肉だよな？」

「だから、私は妖怪かって！　本当に侮辱罪で訴えるわよ！」

「それが出来るのなら俺だってお前の暴言を侮辱罪として告訴しているよ」

しかも、何度もな。

「そっか……お前に俺を取って食うつもりが無いのなら」

「だから無いって言ってるでしょ」

「お前の好意に肖って参考書を借りる事にするかな」

「えっ？　という事は、アンタは今から私の家に来る訳？」

「まぁ、そうしないと参考書を借りる事が出来ないと言うか、そもそも、お前から俺を家に誘って来たんだよな？」

「うーん……それはそうなんだけど、うーん……本当に来る？」

「だから、お前が俺を誘ったんだよな！？」

「いや、その、いざアンタが家に来るとなると何だか緊張しちゃって……」

「誘う前は緊張しなかったのに誘った後に緊張するってどういう事だよ」

緊張するタイミングがおかしくないか？

「まぁ、いっか……私から言い出した事だしね。それじゃあ、私の家に案内して上げるから、付いて来なさい――」

――そう言い掛けて、架凪呀は不意に立ち止まった。

それに釣られて俺も思わず立ち止まって架凪呀を振り返る。

「……架凪呀？」

架凪呀の雰囲気に異変を感じた俺はそう架凪呀に問いかけてみる。

しかし――架凪呀はこちらを振り返りもせず、何の言葉も返そうとしない。

ただ――空の辺りを仰いだままじっとその青の一点を見つめている。

「……か、架凪呀――」

そして、俺が再度架凪呀に声を掛けようとした時だった。

不意に俺のズボンのポケットの中で白い光が発光したのである。

「！」

その光に気付いた俺は咄嗟にポケットからその白い欠片を取り出す。

すると、白い欠片はやはり眩く白い光を周囲に解き放っていた。

「……これは……！」

それから、俺は素早く架凪呀を振り返る。

「……真之乃秀、それは……？」

俺の手の中で光っている欠片を指差しながら架凪呀はそんな疑問の声を上げていた。

それは当然の反応なのだろう。

だって、架凪呀は俺やウリアとは何の関係も無い――魔術とも科学とも関係の無い単なる一般人なのだから。

そして、そんな一般人である架凪呀の傍に今俺が居ては――おそら

く架凪呀を巻き込んでしまうだろう。

――それならば。

「ゴメン、架凪呀。参考書はまた今度借りる事にする！」

「あっ、ちょっと、真之乃秀！？」

後ろから架凪呀の声が聞こえて来たが、俺はそれを振り切るようにしてその場から走り出した。

◆◆◆

俺は住宅街の通路を縦横無尽に駆け抜ける。

出来るだけ、架凪呀の傍から離れる事が目的だったからだ。

だから、その為には場所を選んでいる場合では無かったのである。

本当ならば俺の家に向かえば良かったのだろうけれど――残念ながら、この時の俺はそこまで知恵が回る状態では無かった。

――そして。

「なっ……！」

不意に“進行方向の先”に現れた空間の歪みに俺は足を止める。

空間の歪みはどんどんその激しさを増して行き――最後には渦を巻いて空間に漆黒の穴を空けた。

「オイオイ……マジでこんな昼間から、しかもこんな場所に転送させるつもりかよ……！」

そして――俺が恐る恐るそんな事を呟いた瞬間。

漆黒の穴の中から――『魔導獣機』が飛び出して来た。

アスファルトを砕きながら、その――おそらく、狼をモチーフとした『魔導獣機』は漆黒の穴の前に着地する。

その『魔導獣機』は普段見慣れている機体よりも比較的小さいものだった。

しかし、モチーフとされている狼の大きさとは掛け離れているような気もするが。

景色から漆黒の穴が渦を巻きながら消えて行く。

その直後――。

『魔導獣機』が吠えた。

咆哮する『魔導獣機』――轟くその雄叫びが周囲の住宅の窓ガラスを震わせ、粉砕していく。

「くっ……！」

俺は咄嗟に両耳を塞いで自身の鼓膜を条件反射で護る。

そして、咆哮を終えた『魔導獣機』は俺に向かって――跳躍した。

『魔導獣機』が蹴り上げた地面が爆発する。

狼型の機械の獣は俺との距離を一気に詰めると――その鋭い鉤爪(かぎづめ)を俺目掛けて振り下ろして来た。

その斬撃に合わせて俺は膝を曲げてその場にしゃがみ込む。

俺の頭上をその巨大な鉤爪が空を切る音が聞こえて来た。

俺はそのまま前に転がるようにして跳んだ――それによって、俺は『魔導獣機』の巨体の下を掻(か)い潜(くぐ)って、その機体の後方の位置を取る。

それから、俺はその場に素早く立ち上がって後ろを振り返る。

それと同時に『魔導獣機』は地面を削りながら地面に着地して――こちらを振り返って来る。

弾け飛んで行く地面のアスファルト。

『魔導獣機』はその大きな口を開けると――そこに収束させた光を弾(たま)に変化させて、それをこちらに目掛けて発射してきた。

「く――う――っ！」

俺は前に倒れ込むようにして文字通り光の速度で飛んできたその攻

撃を躱す。

俺の後方に飛んで行った光の弾は地面に着弾して――大爆発を起こした。

「――――っ！」

俺は声を発する事も出来ないままその爆風に体を吹き飛ばされて、地面の上を何度か転がる。

吹き荒れる突風と砂塵の中――俺は目を薄く開いて周囲を確認する。

すると、こちらに向かって既に跳躍した『魔導獣機』の姿を俺は捉えた。

声を上げる間も無いまま俺は体を反射的に右に回転させる。

その直後、俺が先ほどまで倒れていた場所が『魔導獣機』の鉤爪によってバラバラに砕け散った。

それによってまた俺はボロボロになったアスファルトの上を転がる事になったのだが、先ほどの爆発よりかは衝撃が少なかったので、比較的すぐに立ち上がる事が出来た。

それから、俺は『魔導獣機』が次の手に転じる前にその場から駆け出した。

無論、逃げる為である。

行き先は勿論、俺の家だ。

ウリアの居る――俺の家だ。

端から見れば些か滑稽な話かもしれないが――しかし、俺は何も出来ない、ただの一般人だ。

確かに俺は“この問題”に関わっている――深く関わっている重要な人間だ。

けれど、俺はその割に途轍もなく無力な人間なのである。

果てしなく無力な人間で――嫌になるほどに無力な人間なのだ。

だから、今の俺には逃げる以外の選択肢は無い。

「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ……！」

俺は息を切らして走りつつ首だけを後ろに向ける。

『魔導獣機』は俺とは比べものにならない速度で住宅街の通路を駆けていた。

陸上選手ならともかく――俺の脚力と比べられても『魔導獣機』は不快に感じるだけなのだろうが。

ていうか、それ以前に陸上選手でもあの『魔導獣機』の速度に勝る事は不可能だろう。

だから――陸上選手ですらない俺は少なからず『魔導獣機』に追い付かれないように何か策を取らなければならない。

住宅街の通路は入り乱れた迷路のようになっている。

俺はその地形を利用して、住宅街の通路の曲がり道を連続で次々と曲がり続けた。

これで『魔導獣機』を錯乱させて、撒(ま)けるなど思っていない。

ただ、こうやって曲がり角を連続で曲がる事で少しでも追い付かれるまでの時間を稼ごうと思ったのだ。

そして、それはどうやら地味に効力があったようで。

先ほどから五分ほど『魔導獣機』との鬼ごっこが繰り広げられているが――俺はまだ一向に追い付かれる様子は無い。

これなら逃げ切れる。

逃げ切れなくとも――何とか時間を稼ぐ事が出来るはずだ。

俺は走りながらそんな事を思った。

――けれど。

どうやら、その考えは甘かったようだ。

俺がまた曲がり角を曲がった所で――先ほどまで走っていた道の方から何か爆発に似た音が聞こえて来た。

何の音なのだろうか――そんな事を思いながら俺は後ろを振り返る。

そこには――何と、地面を蹴って家の屋根の上を跳び越えてショートカットをしてきた『魔導獣機』の姿があった。

そして、俺がその『魔導獣機』に気付いた瞬間――その巨大な鉤爪がまた俺の頭目掛けて振るわれた。

俺は腰を曲げて何とかその斬撃を避ける。

かなりギリギリだったから髪の毛の数本でも持って行かれたかも知れない。

それから、その俺の避け方がいけなかったのだろう――俺はそのままバランスを崩して前のめりに転んだ。

「うっ――く――っ！」

転んだ衝撃に顔を顰めて呻き声を漏らしながら俺はまたアスファルトの上に体を転がす。

回転する景色。

そして、その景色が漸く止まったと思った時には――目の前に『魔導獣機』の巨体があった。

「……」

もう、動く気力も体力も何も俺の体には残ってなどいなかった。

転んだ事で体の至る所に擦り傷や切り傷を負ってしまっている。

服も所々が破けてしまっていた。

最早立ち上がる事すら、出来ない。

すると、『魔導獣機』が俺を見下ろしたままその口を開ける。

そこに光が集約され始めた――俺に向かってあの光の弾を放つつもりのようだ。

そちらの方が良い。

俺はそんな事を思った。

鉤爪で首を刎ねられるよりも――光の弾で顔を一瞬にして吹き飛ばされた方が痛みを感じずに済むだろう。

俺は覚悟を決めた。

俺は死ぬ覚悟を決めた。

どうせ死ぬのなら――痛みを感じずに一瞬で死にたい。

そんな俺の下に天からの遣いがやって来たのだろうか。

晴れ渡る青空の果てから――紅い光の翼を携えた天使が舞い降りた。

オレンジ色の光の剣の刀身が『魔導獣機』の頭を貫く。

その機体の苦しげな咆哮が周囲に響き渡った。

その咆哮が五月蠅いとでも言うように光の剣が突き刺さったまま捻り上げられる。

それによって咆哮が聞こえなくなった――しかし、それで『魔導獣機』が絶命した訳では無い。

『魔導獣機』はその機体の中にある『核（コア）』と呼ばれる箇所を破壊しないと、その機体は動作を停止しない。

不意に光の剣が振り上げられて――『魔導獣機』の頭部が刎ね飛ばされた。

空中に飛んで行くその頭部――重力に従って落下してくるそれに当たらないように俺は素早く起き上がると道の端に体を移動させた。

そして――その頭部を失った『魔導獣機』の機体の上に仁王立ちしている炎の天使。

ウリアの姿を――俺は見据えた。

「……う、ウリア」

「……だから、言ったでしょ？」

ウリアは俺の方を見ずに――『魔導獣機』の機体を見下ろしたままこう言った。

「テレビなんかに感けていて、秀の命を護れなかったら――私の立つ瀬が無いって」

「ああ……悪かったよ、ウリア」

「フンッ……謝ったって、許して上げないんだから」

すると、『魔導獣機』の方で動きがあった。

その巨体を震わせた『魔導獣機』はウリアを無理矢理自身の体の上から振り落とそうとする。

しかし、ウリアは勿論振り下ろされる事は無く――背中から生えた光の帯びた翼を羽ばたかせて空中へと飛翔する。

顔を失ってもセンサーか何かでウリアを感知しているのだろうか――狼型の『魔導獣機』は地面を吹き飛ばすほどの脚力で空中のウリア目掛けて跳躍した。

ウリアもそれに臆する事無く――突進してくる『魔導獣機』目掛けて飛翔する。

迫り来る機械の獣。

その巨体目掛けてウリアは光の剣を振るった。

両断される『魔導獣機』――勝負はやはり一瞬にして着いた。

空中で爆発する二つに分かれたその巨体。

「くっ……！」

俺はその爆発によって巻き起こった爆風と衝撃波に目を細めながら両腕を顔の前に持って来てそれらに耐え切った。

通路に充満する爆煙の中にウリアはゆっくりと降り立つ。

「……う、ウリア――」

俺はその時ウリアにお礼を言おうとしたのだが。

ウリアによって右手を強く掴まれたのでその言葉は途切れてしまった。

「えっ？　何？」

「逃げるわよ」

「えっ？　何から？」

「早くここから立ち去らないとこの騒ぎで人が集まって来るでしょ」

「ああ……そういう事ね――」

そして、俺がそう言い切る前にウリアは猛スピードで空中に飛び上がっていた。

ある程度まで上昇したウリアは一度空中で停止すると――再度、速度を上げて俺の家に向かって一直線に飛翔した。

凄まじい高速によって歪んでいく景色を眺めながら――俺はこんな事を思った。

架凪呀は……大丈夫だっただろうか。

◆◆◆

ウリアの手によって家に何とか帰り着く事が出来た俺は、ウリアの手によって家の中まで運ばれた。

何とも情けない話だけど……少し俺の言い分も聞いて欲しい。

いや、本当に体が動かなかったんだって。

あれだけ住宅街の中を全力疾走して、体中に怪我を負って、死にそうな場面に何度も遭遇して。

それでまだ動ける奴が居たら俺はそいつとメールアドレスを交換したい。

ついでに電話番号も。

女子ならお近付きになりたい。

……とまぁ。

それくらいに、俺の体は全然全くこれっぽっちも少しも動かなかったのである。

だから、俺はウリアに担がれたまま部屋まで運ばれて今はベッドの

上に座らせられている状態だ。

ウリアは俺を部屋に置くと（実際、全く動かない俺は物同然なので、そんな扱いをされても仕方が無い）救急箱を取りに行く為に俺の部屋を出て行った。

ちなみに、救急箱は確か母さんの部屋にある――と思う。

もし、母さんの部屋で救急箱が見付からなかったら、それはウリアの探し方が下手か、俺の記憶が間違っているかのどちらかだ。

「……」

俺は無言のまま（と言うか、そもそも言葉を発する力も余り残っていない）ベッドに横向きに倒れ込んだ。

そして、先ほど俺の命を奪おうと襲い掛かってきた狼型の『魔導獣機』の事を思い出す。

あの『魔導獣機』は昼間にも関わらず俺を襲って来た。

今までは俺を襲う時間は決まって夕方や夜だったはずなのに――。

いや、俺の命を狙っている相手がそんな決まった時間に襲って来るなんて思い込んでいる俺も俺で安易な考えなのだろうけれど。

それでも――本当に昼間に、真昼間にあの『魔導獣機』は俺に襲い掛かって来た。

夕方や夜では無く、人目に付く真昼間に。

今まではそんな襲い方を敵はしてこなかった。

――と言う事は。

「……これが、ウリアが――ストレンドが言っていた、いわゆる『強硬派』って奴等の仕業なのか？」

俺が誰にでも無くそんな問いかけを呟いた時だった。

不意に、部屋の扉が勢い良く開かれて救急箱を抱えたウリアがやってきた。

どうやら、俺の記憶に間違いは無かったようである。

「お、おう、ウリア……ありがとな、救急箱」

「礼なんて要らないわよ、これくらい」

「ていうか……お前、そもそも治療とか出来るのか？」

「当たり前でしょ。２０５６年は誰でも応急処置が出来る時代なのよ。ていうか、それ以前に秀の怪我って擦り傷とか切り傷ばかりだし、絆創膏とかガーゼで済むでしょ」

そう言いながらウリアはピンセットで取り出した綿（わた）に消毒液を染み込ませて――。

俺の腕の傷口にそれを勢い良く押し当てて来た。

「痛ってえ！」

「ほら、男の子なんだから、これくらい我慢しなさい」

「お前は俺のお母さんか！　いや、消毒液が染みるんじゃなくて、ピンセットが突き刺さったんだよ！」

「大丈夫よ、実際に突き刺さっている訳では無いみたいだし、そもそも手加減したし」

「手加減って何だよ！　ていうか、それってお前態とやったんじゃねーか！」

「調子に乗って私を図書館から先に帰した罰よ」

仕返しと言ってもいいわね――とウリアは言う。

「図に乗って、私を先に帰したりするから、命の危機に晒されるのよ。ああもう、本当に滑稽よね、秀って。清々したわ」

「……」

……もしかして。

「ウリア……お前、俺の事心配してくれたのか？」

「……」

そして、ウリアは更にピンセットを俺の腕に捻じ込んで来た。

「痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！」

「……当たり前じゃない。心配したに決まってるでしょ。でなきゃ、あんなに急いで駆け付けて、こうして秀を治療したりはしないわよ」

「いや、治療と言うかこれは拷問なんじゃ――」

「おーっと、手が滑った」

「痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！」

――その後も、拷問という名のウリアによる治療は続けられた。

いや、治療は無事に完遂されたのだが……うん。

治療されているはずなのに、冗談抜きで死ぬかと思いました。

幼馴染

8月4日。

私こと、夜華霧歌は部屋で洋服を選んでいた。

「うーん……どれがいいかなぁ」

私の部屋の床やベッドの上や机の上――の至る所には今、所狭しと私がクローゼットから取り出した洋服が置かれていた。

足の踏み場も無い状態である。

そして、私が部屋をそんな状態にしてから既に一時間が経過しようとしていた。

朝七時には起きたんだけどなぁ……既に八時ですよ、いつの間にか。

どれだけ洋服を選んでいるのかってツッコまれてしまいそうな感じである。

でもまぁ……これは仕方の無い事なのだ。

何せ、今日は秀ちゃんの家を訪れようとしているのだから。

秀ちゃんとは私の幼馴染で――って、もうこの説明は要らないのかな？

ていうか……いけないいけない。

またメタな発言をしてしまった。

秀ちゃんから最近は何度も指摘されているからなぁ……気を付けないと。

さて、立て直し立て直し。

それで、私はこれから秀ちゃんの家を訪れようとしているのだけれど。

着て行く洋服を選ぼうと朝七時からクローゼットを引っ繰り返していたら……。

一時間も経ってしまった訳なのである。

いや、別にそれは私に気が多いだとか、そういう訳では無くて。

決断力が無い訳でも無くて。

だから……ね？

何とか解って貰えないかな？

私と同じ女の子だったら解って貰えるかもしれないけど……多分、解って貰えないよね。

えーっと。

尤（もっと）もらしい理由を挙げておくと、えー……うん、そうだね。

ほら、女の子が男の子の家に行く時って最低でも何かしらお化粧だとか、そういうものをしていくものじゃない？

例えその男の子が自分の彼氏じゃなくて、単なる友達だったとしても、ね？

まぁ、私はまだ高校生だから、お化粧とかは流石にしないけれど。

最低でも、す――ん、ゴホン、昔からの幼馴染である男の子の前ではちゃんとした洋服を着て行かないとね。

これが、私が一時間も洋服を選んで、悩んで、選んで、悩んで――を繰り返している理由です。

理由になったかな？

その辺が不安だけれど……うんまぁ、話が進まないから。

もうそれは理解して貰えたって事で。

話を進めさせて頂きます、ハイ。

……えーっと。

どこまで話したかな？

私が洋服を選んでいる所から話し始めて――ああ、まだ何も話が進んでいないのか。

拙い拙い。

ヤバいヤバい。

早く話を進めないと。

「うーん……それじゃあ、もうこれにしようかなぁ」

このまま洋服を選び続けていては色々な意味で埒が明かないような気がするので。

私は散らかした洋服の中から適当に組み合わせたその一組を拾い上げた。

ていうか、こんな事をするなら最初から適当に選んでおけば良かったかな……。

今までの一時間は何だったのだろう。

何か損した気分。

まぁ、自分で選んだ結果なのだから、文句の言いようも無いのだけれど

「さぁてと、早く着替えて秀ちゃんの家に行かないとね」

そう言いながら、私は上着を着て、スカートを腰に当てると、そのジッパーを上げ始めて――。

「……」

――ジッパーを上げ始めて。

「……あ、あれ？」

じ、ジッパーを……。

あれ？

「……」

……え、えっと。

どうやら、スカートのジッパーが壊れてしまっているようなので。

あー……他のスカートを穿く事にします。

「……」

……しかし。

「それにしても、良かったなぁ……秀ちゃん達と一緒にこの間、海に行かなくて。台風さん、本当にありがとう」

台風様さまである。

……。

……ゴメン、本当に申し訳無いのだけれど。

今の発言は、無しの方向で。

◆
◆
◆

結局、スカートを選び直していたらまた一時間ほど経過してしまったので。

本当は秀ちゃんの家で朝ご飯を作って一緒に食べるつもりだったんだけど……。

これでは辿り着く頃にはお昼になってしまうので。

仕方なく、私は家で朝食を食べてから秀ちゃんの家に向かう事にした。

「……よし、ごちそうさま、っと」

両手を合わせて私の栄養の糧となって下さった食材に宿る神様達に私は拝んでから、食器を片付けた私は今度こそ秀ちゃんの家に出掛けるべく、鞄を持って玄関に向かう。

踵までちゃんと靴の中に足を収めた私は家の中を振り返る。

「それじゃあ、行って来ます」

本当は――私以外の唯一の家族であるお母さんは既に仕事に出掛けていて家にはもう居ないのだけれど。

やはり、家を出る時にはこう言うのがセオリーだと思ったので。

「……行って来ます」

私はもう一度小さくそう呟いてから、家の玄関扉を閉じて、秀ちゃんの家に出発した。

◆◆◆

家の外には果てしない澄み渡った青空が広がっていた。

暑いけれど、太陽も燦々と輝かしい光を地上に送ってくれている。

麦わら帽子でも被ってくれば良かったかな。

雰囲気も出たし、秀ちゃんも多分喜んだと思う。

……多分だけど。

ていうか、何を言っているんだ、私は。

何はともあれ、青天広がる今日8月4日は誰が何と言おうとお出掛け日和だった。

誰かが違うと言っても私がそれを言わせない。

……って、私は一体全体誰と張り合っているのだろう。

とか何とか、ノリツッコミをしてみたり。

「……あっ」

私はとある建物を見付けてその場に立ち止まる。

私の視線の先には昨日秀ちゃん達と一緒に行った図書館があった。

実を言うと、私の家は図書館の近くにあるのである。

「そういえば……昨日、ウリアちゃんが読んでた小説をもう一度読みたいとか言っていたっけ」

もしかしたら、その小説を借りる為にここに居るかも知れないなぁ

……。

行って……見よう、かな。

「……いや、秀ちゃんの家に一旦行ってからでもいいよね」

私はそうして図書館の前から歩き出す。

――しかし。

その後すぐに、私はまた立ち止まる事となった。

それは、どこか住宅街の奥の方から何かが爆発したような音が聞こえて来たからだ。

◆
◆
◆

「な、何……？」

私はその場に立ち止まって、周囲を見渡す。

すると、また何かが爆発したような――そんな音が聞こえて来た。

私は空を振り仰ぐ。

けれど、秀ちゃんやウリアちゃんが言っていた――『魔導獣機』がこの時代に転送される際に出現する漆黒の穴はどこにも見えない。

空のどこにも、存在していない。

でも、あんな爆発のような――と言うか、確実に何かが爆発している音なんて日常茶飯事で聞こえて来るようなものではない事は私も重々承知している。

それならば――まさかあの漆黒の穴は空だけに出現するという訳では無いのだろうか？

しかし、そんな疑問は、今はどうでも良かった。

その事を考えるのなら後にいつでも出来る。

今、私が考えるべきなのは――全く以て別の事だ。

もしも、あの爆発音が『魔導獣機』によるものなら。

それは必然的に――秀ちゃんやウリアちゃんが襲われている事と繋がるのだから。

「……」

――例え、本当に『魔導獣機』が秀ちゃんやウリアちゃんを襲いにまたこの時代に転送されて来ていたとしても。

私には何も出来ない。

それは勿論理解している。

秀ちゃんからはエリートとか言われている私だけれど。

それは、普通の人よりも、私が幾分だけ頭が良いだけの話であって――知識量が多いというだけの話であって。

私は途轍もなく無力な人間なのだ。

果てしなく無力な人間で――嫌になるほどに無力な人間だ。

あの謎の音が頻発している場所に私が駆け付けたとしても――私には、どうする事も出来ない。

精々、私には秀ちゃん達の戦いを少し離れた所で見守る事くらいしか出来ないだろう。

――それでも。

例えそれが、私の限界だったとしても。

友達が命の危機に晒されているかも知れないのに。

親友が――幼馴染が死にそうになっているのかも知れないのに。

そんな状況で、動き出さないでいる事など今の私には到底不可能だった。

「秀ちゃん、ウリアちゃん……！」

そして、私は駆け出した。

今も絶えず聞こえてくるその爆発音を頼りに住宅街を走り始めた私

は――。

「あっ」

三度ほど曲がり角を曲がった所で、私はとある人物とバッタリ鉢合わせしてしまった。

その人物は――。

「……か、架凪呀さん」

「……そう言うそちらは、夜華さんじゃない」

架凪呀さんの方も私と鉢合わせして少し驚いたのだろう――少し唖然とした表情のまま私に向かってそう言ってきた。

幼馴染？

架凪呀琴羽さん――黒髪の首の辺りまで垂れたポニーテールが特徴のこの彼女は私のクラスの学級委員長だ。

ちなみに、秀ちゃんは何か昨日この架凪呀さんの事を少し悪く言っていたけれど。

実際の所は、架凪呀さんはそこまで悪い人では無い。

ていうか、むしろ良い人だ。

秀ちゃんだって、いつも架凪呀さんから怒られたり、叱られたりしなかったら――良いイメージを持っていた事だろう。

まぁ、架凪呀さんが秀ちゃんにきつく当たっているのは……何となく予想が着いているのだけれど。

そして、これは余談だけど、架凪呀さんからは私はどうやらライバル視されているらしい。

それは架凪呀さんの学年順位が私に続いていつも二位だから――らしい。

どう考えてもそれ以外の事でライバル視されているように思えないでも無いのだが。

今は気付いていないフリをしている。

嘘も方便。

時にはそういう嘘も必要なのだ。

「どうしたの？　何か急いでいるみたいだけど……もしかして、さっきから聞こえてくる爆発音と何か関係しているの？」

「……」

……鋭い。

流石は学級委員長。

ここで“流石”と“学級委員長”という言葉をセットにして使っていいのかは――解らないけれど。

「……う、うん、まぁね。何か近くで爆発が起きているみたいだから、早く逃げなきゃって、そう思って」

「でも、夜華さんの家ってここから逆方向よね？　それなら、むしろ私の目には夜華さんが謎の爆発が起きている渦中に巻き込まれに行っているようにしか見えないんだけど」

……。

「……ねぇ、架凪呀さん」

「何？　夜華さん」

「こんな時に質問するべきがどうか悩んだのだけれど……気になる

から、聞くね？」

「ええ、どうぞ？」

「どうして、架凪呀さんは私の家の場所を知っているのかな？」

確か架凪呀さんには家の場所を教えていなかったはず……。

「簡単な事よ。私が学級委員長だから」

「うん、それは理由になっていそうで理由になっていない微妙な理由だね、架凪呀さん」

「それは冗談で」

「冗談なんだ」

「私が夜華さんをストーキングしたからよ」

「そっちが冗談であって欲しかったなぁ！」

得意気に言う彼女に私は思わずそう声を上げてしまっていた。

これがいわゆるツッコミというヤツなのだろう。

私も時々秀ちゃんにツッコミを入れるけれど……ここまで大声を上げた事は無い。

そっか。

秀ちゃんはいつもこんな感覚を味わっているのか……なるほど。

何だかスカッとした清々しい気分になった。

……って。

今はそんな事はどうでもよくて。

「あら、夜華さんがそんな声を上げるなんて珍しい事もあるものね。今日は空から槍でも降って来るのかしら？」

「まぁ、今のは流石に声を上げざるを得ない状況だったからね……」

「……真之乃秀と同じ事を言ってる」

「えっ？」

「あっ、いや……何でも無いの。独り言だから、気にしないで」

「そ、そう？」

何か秀ちゃんの名前が聞こえたような気がしたのだけれど……。

気のせいだったか。

「……それで？」

「えっ？　何？」

「夜華さんはどうしてこちら側に向かっているの？　何度も言うけ

ど、夜華さんの家はここから逆方向よね？」

「ていうか、私をストーキングした話は否定しないんだね」

「仕方ないじゃない。紛れも無い真実や事実を否定するほど私は馬鹿じゃないわよ」

「うーん、でも、私は流石に一度でいいからその事実だけは否定して欲しかったなぁ……」

苦笑を見せる私。

出来れば嘘であって欲しかった。

だって、架凪呀さんは私のクラスメイトで、学級委員長だったから。

「まぁ、私は夜華さんのクラスの学級委員長だからね。クラスメイトをストーキングして、家の住所とかを調べるくらい、やって当然の事よ」

「架凪呀さん、多分夜華さん以外の世界中の学級委員長はそんな事をしていないと思うよ？」

まぁ、解らないけれど。

そうであって欲しい――今の言葉は半分私の願望でもあった。

「心配しないで、夜華さん」

「何？　実は今の話は全て嘘だったとか？」

「そう、嘘よ。夜華さんと真之乃秀をストーキングした以外の話は全て嘘」

「……出来れば、嘘でもいいから、私と秀ちゃんをストーキングしたという話も嘘だって言ってくれないかな？」

「却下するわ」

「やっぱりね……うん、解ってはいたけれど」

私は苦笑した。

と言うか、最早苦笑しか浮かべる事が出来なかった。

「それで……話がいつの間にか結構ずれていたけど。夜華さんはどうして今、この状況で家とは反対の方向に向かっているの？」

「それは――」

と、私がそう言い掛けた瞬間、今までよりも遥かに大きな爆発音が住宅街に轟いた。

私はその爆発音が聞こえて来た方を振り向く。

そして、私はその方向に空へと延びる煙の柱を発見した。

それによって、先ほどから聞こえてくる音が爆発によるものだと私は確信する。

「……」

私は今すぐにでもここから駆け出したかった。

駆け出して――秀ちゃんやウリアちゃんの下へと駆け付けたかった。

でも……今目の前に居る架凪呀さんを無視する訳には行かない。

「……どうすれば」

空に向かって延びるその煙の柱を見据えながら私がそう呟いた時だった。

青空の下――私はそこにほんの一瞬だけ星のように煌(きらめ)いた赤い光を捉えた。

「……あれは」

そして――その光の正体に辿り着いた私は安堵の笑みと息を吐く。

すると、架凪呀さんがこちらを振り返ってきた。

「どうしたの？　何か安心しているみたいだけど……」

「あ、ああ、ううん。別に何でも無いのよ、何でも……」

「……ふーん」

怪しげにこちらを見据えてくる架凪呀さん。

まぁ、疑われるのも当然の事だ。

さっきから私の行動は謎の部分が多過ぎる。

それこそ、自分でも解ってしまうくらいに。

「……まぁ、いいけど。それじゃあ、私は今から家に帰るから」

「えっ？　帰っちゃうの？」

「ええ。こんな所に居たら私まであの謎の爆発に巻き込まれるかもしれないし……ちょっと、友達に参考書を貸す約束をしているから」

「ああ、そうなんだ」

「ええ、そうなのよ」

それじゃあ、また今度ね――と架凪呀さんは私に小さく手を振ってその場から走り去ってしまった。

「……そういえば」

そういえば、架凪呀さんの方こそ、どうしてこんな所に居たのだろう。

いや、今は夏休み中だから――別に架凪呀さんがどこに居ようとそれは自由なのだろうけれど。

図書館に用でもあったのだろうか？

そんな事が気になったけど――今は、何より。

「……そうだ、秀ちゃん……！」

先ほどの赤い光――あれはきっとウリアちゃんだ。

ウリアちゃんが駆け付けたなら、もう秀ちゃんは助かっている頃だろう。

そして、その私の予想はどうやら的中していたようで。

私が先ほど煙の柱が上がっていた場所を振り返ると同時にまた大き

な爆発音が聞こえて来た。

その直後――その爆発が起こった辺りから再度赤い光が空中に飛びだして。

そのまま秀ちゃんの家の方角へと飛んで行った。

「良かった……ウリアちゃん、『魔導獣機』を倒したんだ」

そう呟いた私は駆け足で秀ちゃんの家へと向かい始める。

怪我はしていないだろうか。

血は出ていないだろうか。

頭を打って気絶でもしていないだろうか。

そんな色々と――本当に色々と秀ちゃんの事を気に懸けながら。

私は住宅街の通路をその人の家に向かって急ぐのだった。

◆◆◆

秀ちゃんの家の玄関の前に立った所で私はハッとして立ち止まる。

それから、鞄の中から私は手鏡を取り出した。

それで、私は今の前髪の調子を確認する。

いや、前髪に調子の何も無いのだろうけれど。

私の言う“調子”というのは、その――前髪の“状態”という事である。

……それなら、前髪の“状態”って言った方が早いよね。

うん。

よし、今度から前髪の状態で統一しよう。

――それで、私は秀ちゃんの家の前で前髪の状態を確認する。

走って来たので、前髪どころか髪全体が微妙に崩れていた。

折角出る前に丁寧に整えて来たのに……。

ていうか、走って来たから、微妙に洋服とかも歪んでしまっている。

髪や洋服と――それらを全て直すのに私は五分ほどの時間を要してしまった。

「前髪良し、髪全体良し、洋服良し……よし！」

私は手鏡をパタンと閉じる。

これで私の身嗜(みだしな)みは完璧になった――はず。

ミッションコンプリートである。

そんな訳で、私は秀ちゃんの家のインターホンを押した。

それから、私は腕時計で現在の時刻を確認する。

現在の時刻は――午前１１時３８分。

うん、中々丁度良い時間だ。

今日も命を永らえる事が出来た秀ちゃんの為に私が腕を揮って手料理をご馳走してやろう。

「……秀ちゃん、喜んでくれるかな」

そして、私がそう呟いた時だった。

「ハーイ、今開けまーす」

玄関扉の向こう側から聞こえてくる秀ちゃんのいつものほんの少しだけ気の抜けた声。

その気の抜けた声を聞くと私も気が抜けてしまう反面――何だか、最近は安心してしまう。

今日も秀ちゃんが家に居てくれた――みたいな。

そんな安堵感。

幼馴染？

玄関扉のロックを解除する音が聞こえて来て、その扉がこちら側に開かれた。

ちなみに、これは余談だけれど、秀ちゃんの家を訪ねる時は玄関扉の開き方に注意をしておかなければならない。

インターホンを押してそのままの場所に居ると、開けられた玄関扉で顔を打ってしまうからだ。

無論、秀ちゃんの幼馴染である私はそんな失敗はしない。

開けられた玄関扉の向こう側には勿論秀ちゃんの姿があって。

「……って、おう、霧歌か。今日は何か色々と知り合いに会う日だな」

――そう言ってきた秀ちゃんの体の至る所には包帯や絆創膏やガーゼが貼られていた。

「それで？　どうした霧歌――」

「秀ちゃ――――んっ！」

「うおあっ！？」

何か秀ちゃんが言ったような気がしたけれど、私はいつの間にか我を忘れて秀ちゃんに抱き着いていた。

いや、跳び掛かっていたと言った方が良いのかもしれない。

「ちょっ！？　霧歌！？　霧歌さん！？」

「な、何でこんなに傷だらけなの！？　いつもなら戦闘に巻き込まれても傷一つ無しで帰って来るのにぃ！」

「い、いや、それはそうだけど！　そうなんだけど！　とりあえず俺から離れろ！　いや、本当は離れて欲しくないけれど、何かいつものお前らしくないから、とりあえず離れ――」

「ああ――――っ！」

すると、その秀ちゃんの声を遮ってまた別の声が私の耳に届いた。

私は顔を上げる――そこには二階に続く階段の前でこちらを指差しているウリアちゃんの姿があった。

何やら、ウリアちゃんは口をあんぐりと開けていて――こちらを指差すその人差し指はワナワナと震えている。

「しゅ、秀と霧歌……な、ななっ、何を二人で、な、何をそんな所で、な、ななっ、何をそんな……ふ、ふしだら、な……！」

「……ふしだら？」

「……ふしだら？」

私と秀ちゃんの声が重なる。

それから、私達は互いを見合って――おそらく、秀も私と同じ事を感じ取ったのだろう。

「ちっ、違う！」

「これは違うのよ、ウリアちゃん！」

互いに頬を赤らめた私と秀ちゃんは素早く玄関に立ち上がった。

「ち、違うんだよ、ウリア！　これは違うんだ！」

「そ、そうよ！？　私達は別にふしだらな事も疾(やま)しい事もしていないわよ！？」

「何かさぁ！　玄関を開けたら急に霧歌が俺に襲い掛かって来てさぁ！」

「そうそう、私が秀ちゃんを襲って――って秀ちゃん！」

「いや、だって、実際そうだったじゃん！」

そうだった……。

私とした事が、我を忘れて傷だらけの秀ちゃんを見て思わず跳び掛かってしまったのだ。

「いや、その、ゴメン……傷だらけの秀ちゃんを見たら、居ても立ってもいられなくて、つい……」

「……霧歌、お前――」

「なーんだ。私はまたてっきり秀が欲望を抑え切れずに霧歌に襲い掛かったんだと思ったわ」

「何か勝手に濡れ衣を着せられている!?　ていうか、“また”って言うなよ！　俺はまだ霧歌に襲い掛かった事は無い！」

「という事は、秀はこれから先の未来のどこかで少なからず霧歌に襲い掛かろうとしているのね？」

「当たり前だろ！」

「秀ちゃん、そこは肯定しちゃ駄目よ」

とりあえず、私は秀ちゃんにツッコんでおいた。

ていうか、流石に今のはツッコまざるを得なかった。

それ以前に、秀ちゃんは少なからず私の事を常に狙っているのか…

…これは気を付けなければ。

まぁ、正当な手段を踏めば許可はして上げるつもりだけど。

……ううん、何でも無い。

出来れば、今の私の発言はすぐにでも忘却して欲しい。

ていうか、忘れて下さい。

お願いします。

◆◆◆

色々とゴタゴタはあったけれど、私は当初の計画通り、秀ちゃんとウリアちゃんに昼食を作って上げる事にした。

秀ちゃんの家には基本食材が無いけれど、この前作った食材の余りが冷蔵庫に残っていた事を私は覚えていた。

この前はオムライスを作ったから……ソーセージや玉ねぎ、それからコーンやピーマンも残っている。

ていうか、秀ちゃんに料理を作るって意気込んで来たのは良かったけれど――私はそれしか食材が残っていない事に今更ながら気付いた。

仕方が無い。

少し簡素なものになってしまうけれど……ソーセージと野菜で擬似肉野菜炒めでも作るか。

そして、そんな大雑把（おおざっぱ）な計画の下（もと）、私は今昼食を作っているという訳である。

隣では秀ちゃんが野菜を切ってくれていた。

「野菜くらい、普段料理をしない俺でも切れるよ」

——と言うのが秀ちゃんの言い分だったのだが。

先ほどから横目で一瞥を繰り返している限り、その言い分とは反対に秀ちゃんはどうやら野菜を切り慣れていないようだった。

ていうか、むしろ下手だ。

見ているだけでハラハラする。

料理を終える頃にはまた一つ絆創膏が増えているのではないだろうか。

そんな不安さえも感じてしまうほどの手付きの悪さだった。

「……あ、あの、秀ちゃん？」

「霧歌。今の俺に話し掛けるな。俺の今の気を散らしてしまうと俺は自分の指を間違えて切り落としてしまいそうだ」

「そ、そっか……それならうん、仕方ないね」

苦笑と共に食い下がる私。

本当は秀ちゃんと野菜を切る担当を変わって上げたかったのだけれど……。

指を切り落とされるよりかは絆創膏が一つ増えた方がどう考えてもマシだ。

私はフライパンに油を敷きながらそんな事を思った。

ちなみに、ウリアちゃんはリビングでテレビを観ている。

何を観ているのかとキッチンとリビングを隔てている壁に空いた長方形の穴から私はウリアちゃんの様子を覗いてみた。

ウリアちゃんはテレビを観ているにも関わらず退屈そうにテーブルに頬杖を着いてチャンネルを一定のテンポで変え続けていた。

おそらくは観たい番組が無いのだろう。

まぁ、今は丁度午後12時くらいだし……この時間帯には余り面白い番組はやっていないのが逆に普通だから仕方ない。

そして、私は明らかに暇そうなウリアちゃんに苦笑を見せるとキッチンへと顔を引っ込める。

「よし、切り終えた！」

それと同時に秀ちゃんのそんな声が聞こえて来たので私はそちらを振り返った。

かなり歪な形になっていたけれど――秀ちゃんはちゃんとピーマンを切り終える事が確かに出来ているようだった。

歪な形だったけれど。

大事な事なので二回言いました。

「フッ、俺に掛かればピーマンを解体するなんて朝飯前だぜ」

「もうお昼だけどね。ていうか、解体って……そこまで大袈裟に言わなくても」

たかが“ピーマンを切る”如きで得意気になっている事にはツッコまないでおいた。

何と言うか――秀ちゃんにも、プライドはあるだろうから。

「でも、霧歌。もう俺は限界だ、精神的に……ちょっと休んだら、体力的には回復したんだけど、最早精神的に俺はもうこれ以上の行

動は無理のようだ」

「ああ、うん、解った……後は私がやるから。秀ちゃんは、ウリアちゃんと一緒にテレビでも観てて？」

「ああ、そうさせて貰うよ。後は任せた、霧歌」

「うん、後は任されたよ、秀ちゃん」

そして——ふら付いた千鳥足でキッチンを後にする秀ちゃんを見ながら私は苦笑を浮かべて。

「……さて、始めますか」

私は料理を開始する。

私の手料理を食べて美味しいと笑ってくれるその顔を——連想しながら。

◆◆◆

ソーセージの擬似肉野菜炒めを完成させた私はそれをリビングで待つ秀ちゃんとウリアちゃんのもとに持って行った。

「ハイ、出来ましたよー」

「おっ、出来たか！」

逸早く私の手料理に食い付いて来てくれたのは秀ちゃんだった。

「オイオイ、香りも見た目も美味い料理じゃねーか」

「……秀ちゃん、“美味い”ってまだ食べていないよね？」

「霧歌の料理は食べなくても美味いと解るくらいに美味いものだから、別に先に美味いと言っても罰は当たらないんだよ」

「そ、そうなんだ」

何か知らない間に私の料理は過大評価されているようだった……。

何だろう。

何か嬉しい反面、恥ずかしいなぁ。

「でも、今更だけど、流石にご飯は余っていなかったんだよねぇ……どうしよっか？」

「それなら心配するな、主食は俺が用意するよ」

「主食って？」

「カップラーメン」

「ああ……」

確かに麺類は炭水化物だからご飯の代わりにはなるだろうけど……。

例え“擬似”であっても、肉野菜炒めにカップラーメンって何だかカロリーが高い組み合わせじゃないだろうか。

またスカートのジッパーが上がらなくなったらどうしよう……。

「それじゃあ、秀。ちゃっちゃと作って来てねー」

「……お前、本当にいい加減にもうそろそろカップラーメンの作り方くらい覚えろよ」

「あら、それが今日秀の命を救った恩人に対する言葉遣いかしら？」

「へいへい、悪う御座いましたよ」

「秀」

「……何だよ」

「“ウリアお嬢様”が抜けているわよ――って痛っ！」

そう言い切る前に秀ちゃんから頭にチョップを食らうウリアちゃん。

「な、何をするのよ！」

「お前が調子に乗って来たからだ。出る杭は打たれると言うだろう」

「な、何よぉ！　助けて上げたんだから私の事をそうやって呼んでくれてもいいじゃない！」

「それなら、毎日お前に朝・昼・夜の三食を提供している俺はお前

の胸を揉んでいいくらいの権利はあるはずだ」

「無いわよ！　そんな権利！」

……。

そんな二人の遣り取りに――苦笑する私。

ていうか、何か私さっきから苦笑しかしていないような気がする。

「……」

それにしても……この二人は毎日この家でこんな会話を交わしているのか。

何だろう。

何だか、羨ましい。

……いや、別にウリアちゃんが秀ちゃんからセクハラ的な発言を受けているのが羨ましい訳では無くて。

何だろう……何かこう、一つ屋根の下で仲睦まじくしている感じ？

それが何だか私には羨ましかった。

いつか私にも……こんな日が訪れてくれるのだろうか。

そんな事を思ってみたり。

「それじゃあ、俺はカップラーメンを作って来るから。それまで待っててくれ」

「ハーイ」

「うん、解ったわ、秀ちゃん」

私はウリアちゃんと共に秀ちゃんの背中を見送って――それから、ウリアちゃんの“服装”を今一度見た。

実は、先ほどからずっと気になっていたのだけれど……。

その話題に触れるタイミングが解らなくてずっと放置していたのだ。

触れるのなら、きっとそれは今だろう。

「……ねぇ、ウリアちゃん？」

「ん？　何、霧歌？」

「その……どうして、ウリアちゃんはそんな格好をしているのかな？」

ウリアちゃんの格好――それは私が以前この家に泊まりに来た時にウリアちゃんが着ていたもの。

セーラー服だった。

「ああ、これ？」

そう言って――ウリアちゃんは自身の格好を見下ろして。

「実は……秀からこれを着るように最近は強要されていて――」

「聞こえているからな」

キッチンから飛んで来るその声。

振り返ってみると、キッチンとリビングを隔てる壁に空いた長方形の穴からこちらを――主に、ウリアちゃんの方を睨み付けている秀ちゃんの姿があった。

「……と、言うのは冗談で」

そして、苦笑と共に話を続行するウリアちゃん。

「私、この前霧歌が泊まりに来た日からこの……何だろう、スースーした感じ？　この洋服って着ていると涼しいから……何か病み付きになっちゃって」

「ふーん……そうなんだ」

確かに……涼しい事は涼しいだろうけど。

何か……心配になってくる。

勿論、秀ちゃんがこのウリアちゃんの格好に食い付かない訳が無い訳で。

秀ちゃん、こういう格好をしている女子とか好きそうだからなぁ……。

それで、ウリアちゃんはこれを天然でやっていると来ている。

「……あざとい」

「えっ？　何て？」

「う、ううん、何でも無いの、何でも」

しまった。

ついつい本音が口を衝いて出てしまった。

「そういえば……ウリアちゃんの服装と言えば、家の中では――髪型もそうだけど、あの戦闘服は着ていないのね」

「ああうん。髪型もずっとツインテールじゃ疲れるし……洋服も右に同じよ」

「ふーん……ねぇ、ウリアちゃん」

「何？」

「あの戦闘服って、誰でも着れるの？」

「……誰でも、って？」

「いや、だから、その……ボタン一つで着る事が出来るのなら、誰の体にもフィットするのかなぁ、って」

「ああ、そういう事ね。確かに、霧歌の言う通り、あの戦闘服は誰の体にもフィットするように作られているわ。ボタンを押した人の指先から、その人の体のサイズを計測して、その大きさに合うように自動的に伸縮するようになっているから」

「ふ、ふーん……そうなんだ」

「……それで、何でそんな事聞くの？　まさかとは思うけれど、霧歌あの戦闘服着たいの？」

「ええっ？　い、いや……それはどう、かな？」

誰でも――誰のサイズにも自動的にフィットする点には正直惹かれるけれど。

ウリアちゃんが着ているあのレオタードのような戦闘服を着た私――。

……。

いや、駄目だ。

無理無理。

色んな意味で何かもう駄目な気がする。

「……うーん、やっぱり私にはあの戦闘服は無理かも――」

「何っ！？　霧歌があの戦闘服を着るだって！？」

「秀、霧歌も誰もまだそんな事は言っていないから」

キッチンからカップラーメンの容器を片手にそんな声を上げながら秀ちゃんが顔を出してきた。

そして、そんな秀ちゃんに冷静なツッコミを入れるウリアちゃん。

何かもう……手慣れている感じだった。

それほど、この家では今のような発言が日常茶飯事という事なのだろうか。

コミュニケーションを築くのは大切だろうけれど……何かそれは色々と駄目なような気がする。

私があの戦闘服を着るのと同じように。

幼馴染？

「何だ、着ないのか……まぁ、今のタイミングで霧歌があの戦闘服を着たとしてもカメラが無いから意味が無いけどな……」

「秀ちゃん、そのカメラで一体全体何を撮るつもりだったのかな？」

「まぁ、最低でも心のアルバムに収納すれば大丈夫だけど……」

「……」

どうやら、秀ちゃんの中には“心のアルバム”と呼ばれる記憶機関が存在するらしい。

それならば、当然私がその中身を確認する術は皆無なのだけれど――何と言うか、如何わしい思い出ばかりが詰まったアルバムのような気がする。

気がするだけだけど。

「時にウリア。人の記憶を写真や紙に印刷する術は２０５６年の未来の技術には存在しないのか？」

「えーっと……多分あったと思う」

「そうか……いや、それだけ聞ければもう充分だ。そうだな、それなら俺は絶対に２０５６年の未来まで死ぬ訳には行かないな」

「秀ちゃん、そんな不真面目な理由で未来への生存を志（こころざ）さないで」

ていうか、２０５６年にはそんな如何わしい――いや、素晴らしい機械が発明されているのか。

これは拙い。

絶対に秀ちゃんだけには購入させないようにしないと。

「ていうか、秀。早くカップラーメン作ってよ」

「ああ、悪い悪い。今作るから」

「早くしてよ。でないと折角霧歌が作ってくれた料理が冷めちゃうじゃない」

キッチンに戻って行く秀ちゃんに追い打ちを掛けるようにウリアちゃんは言った。

「ゴメンね、ウリアちゃん。秀ちゃんっていつもあんな感じだから……一緒に住んでて、色々と気苦労があるでしょ？」

「まぁね……秀はいつもあんな感じだから、毎日毎日私の貞操の危機を感じざるを得ないし」

「て、貞操って……」

まぁ、その言葉を否定はしないけれど。

「でもまぁ……逆に言えば、秀のあの性格でこっちは退屈しないかな。秀は変態だし、セクハラばかりしてくるけれど……でも、一緒

に居て面白いし、楽しいし、何よりこっちまで明るくなれるから」

「……」

そのウリアちゃんの言葉と――その嬉しげに語る表情に私はハッとする。

そうか。

ウリアちゃんは……その秀ちゃんの内面に気付く事が出来たのだ。

秀ちゃんは確かに――言っては悪い気がするけれど、変態で、セクハラ行為や発言ばかりしてくる人だ。

でも、秀ちゃんはとても良い人だ。

それは、秀ちゃんの親友であり、その姿をずっと隣で見て来た幼馴染である私だからこそ――言える言葉で。

秀ちゃんはいつも明るくて、一緒に居たらこっちまで明るく元気になって。

一緒に居たら楽しい――秀ちゃんはそんな人だ。

だからこそ、その内面に気付けた人は秀ちゃんの周りに自然と集まるようになる。

それは私であり、ウリアちゃんであり。

そして多分――今日偶然出会った、あの人も。

「……ねぇ、ウリアちゃん」

「ん？　何？」

「これからも多分……秀ちゃんと一緒に暮らしたり、秀ちゃんの事を護ったりして、色々とまだまだ気苦労すると思うけれど」

そして――私はウリアちゃんに向かってこう言った。

「秀ちゃんの事、宜しくね？　ウリアちゃん」

「それは……まぁ、勿論そう思っているけど。何で？　何で急にそんな事言ってきたの？」

「うーん……何でだろうねぇ？」

私はそう言って苦笑する。

本当に何で私はそんな事を言ってしまったのだろう。

「何よそれ……変な霧歌」

「……本当にね」

本当だ。

今日の私は――と言うよりも。

最近の私は色々と変だ。

自分でも――そう思ってしまうくらいに。

◆　◆　◆

「なぁ、ウリア」

昼食の席にて、秀ちゃんがカップラーメンの蓋を開けながらウリアちゃんにそう問いかけた。

ちなみに、秀ちゃんのカップラーメンはカレー。

私がスタンダードで、ウリアちゃんがシーフードである。

「今日俺を襲った『魔導獣機』……あれ、空から出て来なくて、道のど真ん中から急に出て来たんだけどさ。ああいうのも有りなのか？」

「まぁ、別に『異空繋門（ワームホール）』は空に出現させる義務は無いからね。それはまぁ、名前に“空”って付いているくらいだから空に出現させる方が手軽なのよ？　空には殆ど障害物が無いし、地上には建物がいっぱいあるから――その分、空間の質量が圧迫されていて、『異空繋門』が出現させ難いのよ」

「でも、今日の『魔導獣機』は難なく出て来たぞ？」

「それについては――考えられる原因は2つ。一つは、今日倒した『魔導獣機』がいつも転送されてくる機体よりも比較的サイズが小

さかったから。その分、空間を圧迫しなかったのね――そして、もう一つは、その『魔導獣機』を転送した人間がかなりの実力を持った人物だったか」

「えっ？　転送するのに実力云々が関係あるのか？」

「一応、ね。未来から転送する訳だから――勿論、過去の建物の位置とかは未来とは断然変わってくる。だから、未来で座標を計算して、建物も何も無い場所に『異空繋門』を出現させないと、もし建物がある場所に『魔導獣機』を転送させたら、その建物の『魔導獣機』が時空上で融合してしまうのよ」

「……ちなみに、融合するとどうなるんだ？」

「建物の壁がその機体の一部を押し退けて減り込んだり、その機体の一部が建物の壁一部を押し退けて減り込んだりするわ。そうね、それでもまだ解らないのなら、人間で例えると――」

「いや、例えなくていい。例えなくていいから」

その秀ちゃんのツッコミはまさにファインプレーだった。

内容は解らないけれど、食事中にする話では無い事だけは直感で解ったから。

「まぁ、何にしても、『異空繋門』が出現するのは空だけじゃないって事よ。そして、地上に出現させるのは座標軸の計算を一瞬で出来る実力も伴われる――まぁ、今日転送された『魔導獣機』が小さかったから、そこまでの実力は要らないのかも知れないけどね」

「そうだったのか……今度から注意しないとな」

「ていうか、そもそも今回の一件は秀が悪いんだからね？　ちゃんと約束したのに……早く帰って来るって」

「ああ、いや、その……ちょっと図書館で友達に会っちゃってさ」

「友達？　何をまたそんな言い訳を言っているのよ、秀は」

「いや、言い訳じゃないって。本当に会ったんだからさ」

「だって、秀に友達が居る訳ないじゃない」

「そこかよ！　有りもしない理由で俺の話を真っ向から否定するな！」

「そうよ」とここで秀ちゃんに加勢するのは他でも無い私である。

「秀ちゃんにだってちゃんと友達は居るわよ」

「そうだそうだ！　言ってやれ、霧歌！」

「秀ちゃんは確かに、授業の合間の休み時間も一人で机に突っ伏して昼寝をしていて、昼休みは毎日私と一緒に屋上でお昼を食べていて、放課後に帰る時はいつも私と一緒に帰っているけれど、ちゃんと友達は居るわよ！」

「お前は一体全体どっちの味方なんだよ！」

えっ？

「えっ？　何が？」

「“何が？”じゃねーよ！　お前は遠回しにだけど確実に俺を追い込んでいるだけじゃねーか！　単に俺の心の傷を抉っているだけじゃねーか！」

「いや、私はウリアちゃんにありのままの秀ちゃんを知って貰って、それから秀ちゃんに友達がちゃんと居る事を知って貰おうと」

「ありのままを話しちゃ駄目じゃん！　少しは嘘を交えて話して貰わないと！」

「駄目だよ、秀ちゃん。真実を相手に知って欲しいのなら、ありのままの自分を相手に語らないと」

「いや、そうなんだけど……！　それはそうなんだけど……！」

何やら苦しそうにテーブルに突っ伏す秀ちゃんなのであった。

どうしたのだろう。

お腹でも痛いのだろうか？

◆　◆　◆

結局、秀ちゃんとウリアちゃんの夕飯は私が作る事になった。

まぁ、私から言い出した事だったので……と言うか、私も秀ちゃん達に料理を作れてうれしいので。

それはそれで良いのだけれど。

「本当に良いのか？　霧歌」

玄関先で靴を履く私に秀ちゃんは心配そうに後ろからそう声を掛けてくれた。

「夕飯まで作って貰って……材料代とかはまた霧歌が払うんだしさ。俺達にはカップラーメンがあるから、それはそれで別に良いんだけど……」

「良いのよ。気にしないで」

そう言って私は玄関に立ち上がる。

「私の分も作るんだから、食材のお金の事は大丈夫だし、私が作りたくて作るんだから……そういう事は、言いっこ無しだよ？　秀ちゃん」

「そ、そうか？　それなら良いけど――いや、良くはないんだけど。何かもう本当に……悪いな、霧歌。最近は特に色々と」

「良いのよ。それも気にしないで」

そう言って――私は後ろを振り返って秀ちゃんと向き合った。

「秀ちゃんにお節介を焼いているのも私の勝手だし。秀ちゃんにお節介を焼かされるのはもう慣れているし……それに、私が秀ちゃんにお節介を焼いているのは、今までのお礼のつもりだから」

「お礼？　俺何かお前にお礼を言われるような事をしたっけ？」

「さぁ……私が抱いているこの気持ちは、秀ちゃんから見たらお礼を言われるのに値しない事なのかも知れない。ていうか、多分秀ちゃんはその事を覚えていないと思う……何しろ、何年も前の事だから」

――それでも。

私はこれからも秀ちゃんに感謝し続けるだろう。

あの日――幼稚園の砂場で遊んでいる私に秀ちゃんが話しかけてくれなかったら。

今の私は、存在しないのだから。

「何だ、そんなに昔の事なのか？　それなら……多分、本当に覚えていないかも知れないな」

「だから良いって。それなら、私が勝手に秀ちゃんに感謝し続けるだけの話だから」

「それも何だかなぁ……俺が覚えていないのに、お前から感謝されるというのも何だか駄目なような気がする」

「うーん」とそして秀ちゃんは何やら腕を組んで悩むと。

「……そうだ、霧歌」

「何？　秀ちゃん？」

「宿題とか、夕飯とか、色々と俺にしてくれるお前に……俺から何かしらのお礼をしたいと思う」

「お礼？」

「今度、遊園地にでも、行くか？」

「……」

――その秀ちゃんの問いかけに。

私は思わず言葉を失ってしまった。

声が、出なかった。

その突然の――秀ちゃんの、問いかけに。

「……えっ？　ええっ？」

「だ、駄目か？　やっぱり、遊園地とか……今更、子供っぽいかな？」

「う、ううん、そういう訳じゃ、ないの……そういう訳じゃ、ないの。ただちょっと……ちょっと、その、嬉しくて」

「そ、そうか？」

「うん。涙が出てしまいそうなくらい」

「それは……大袈裟じゃ、ないか？」

そう言って苦笑する秀ちゃん。

その苦笑に私も思わず苦笑する。

「……でも、あれだよね、秀ちゃん？」

「えっ？　何がだ？」

「ウリアちゃんもどうせ……一緒なんでしょ？」

「いや、俺は別に二人きりでも良いけど？」

「……二人、きり」

確かにそれは嬉しいけれど――それは駄目だ。

今日みたいな事が――秀ちゃんの身にいつ降り掛かるか解らない内

は。

秀ちゃんの傍にはウリアちゃんが居ないと。

……少し、勿体無いけれど。

「……ううん、どうせ行くなら、ウリアちゃんも一緒に行こうよ。その方が楽しいだろうし、秀ちゃんの身を護る為にもその方が良いだろうし」

「そうか……それじゃあ、今度、ウリアも一緒に三人で遊園地に行くとするか」

「うん、そうしようよ。大体、海にも行っていないんだから、その埋め合わせも兼ねて、絶対に行かないとね」

「そう言えばそうだったか……それじゃあ、海にも行かないとな。霧歌やウリアの水着姿も拝みたいし」

「ん？　何か戯言を言ったかな？　秀ちゃん」

「いや、確かに戯言は言ったけれど他には何も言っていない。ていうか、戯言だから無視して貰っても構わない」

「仕方ない、今回ばかりは無視して上げよう」

「恩に着るよ、霧歌」

「その代わり、遊園地に連れて行かなかったら絶対に許さないからね？」

「解ってるって。俺が今まで約束を破った事があるか？」

「うーん……秀ちゃんの割には意外と少ないかも知れないねぇ」

「オイ」

「アハハ。冗談だよ、冗談」

「それじゃあ」と私は玄関扉を押し開ける。

「夕飯の買い出し、行って来るね」

「おう、いってらっしゃい、霧歌」

「……」

「……何だよ」

「い、いや、別に……」

何だか夫婦同士のお見送りみたい――とは口が裂けても言えなかった。

「そ、それじゃあ、行って来るね」

「ああ、宜しく頼む」

「うん、宜しく頼まれた」

そう言って――私は玄関扉を閉めて茜色に染まった地上の世界を歩き出す。

そして――私は地上と同じく茜色に染まった天空の世界を仰いだ。

「……」

――何だろう。

そんな空を見上げていたら、何だか心の中が清々しい気持ちで溢れた。

そんな気持ちのまま私は静かに笑みを浮かべて住宅街の通路を歩き出す。

大好きな友達と、大好きな親友の為にまた手料理を振る舞うべく。

私は、近くのスーパーに向かって歩き出した。

8月5日

8月5日。

「い、痛てて……」

この日――俺は筋肉痛によって目を覚ました。

「あっ、ヤバい、体全体が痛い……」

それはおそらく――と言うか、確実に昨日の出来事が原因だな。

あれだけ『魔導獣機』から逃げる為に住宅街の中を駆け回ったら……それは、ねぇ？

筋肉痛になっても致し方が無いと俺は思うんだよ、うん。

まぁ、多分それは年頃の高校二年生の男子が言う台詞じゃないんだろうけど……。

運動しようかなぁ。

腕立て伏せとか、腹筋とか。

三日坊主で終わらせてしまう自信があるが。

「う、ウリア……悪いけど、ちょっと体を起こすの手伝ってくれないか――」

――と。

俺はそこで口を噤む。

先に言っておけば、ウリアはまだ起きていなかった。

極度の疲労からウリアが夜更かししている間に俺が就寝してしまった事もあるのだろう。

だから、まだ時計を見ていないけれど……多分、時刻は早朝辺りに違いない。

ベランダに続く大窓――そこで閉め切られたカーテンの隙間から射し込んでいる太陽の光の強さを見てもそれが伺える。

そして、これは余談なのだが、ウリアは俺よりもいつも早く起床している。

本人に聞く所によると、夜更かししているのは俺と一緒なのだが――何やら空腹で目が覚めるらしい。

全く、俺よりも小柄なくせにその小さな体のどこに栄養が吸収されているのか。

胸に吸収されているのだろうか？

それにしてはやけに小さいような気がする――って、それは今はどうでもよくて。

いや、実際の所、どうでもいい事は無いのだけれど。

「……」

もう一度言うけれど……俺は今日、ウリアよりも早く起きた。

いや、そこに問題は無い――問題はそこでは無いのだ。

問題、なのは。

「……」

ウリアは霧歌が先日この家に泊まりに来た時から寝間着にセーラー服を使用している。

だから、今俺の目の前にはまだ起床していないセーラー服を着たウリアの姿があって。

その寝格好はセーラー服を着ているからなのだろう……スカートとか上着だとか、もう色々な所が大胆にも肌蹴(はだけ)てしまっていて。

ウリアの白い太腿(ふともも)だとか、白いお腹やおへそだとか。

その辺の所も……色々と、垣間見えてしまっていて。

いや、垣間見えてはいないな。

どちらかと言うと、垣間無く隙間無く色々と見えてしまっている。

「……」

うわ、どうしよう。

本当は今すぐにでも体を起こしたいのだけれど――今、体を起こしてしまったらこの至福の時が消え失せてしまいそうな気がする。

そんな事を思っていた時、不意にウリアが寝返りを打った。

その際、ウリアの真っ白な肌を持つ両脚が動いて――そして。

その黒いスカートの中にある何かピンク色のものが垣間見えた。

「……」

外から小鳥の囀る声が聞こえて来た。

俺は部屋の時計を振り仰ぐ。

時計の針は午前7時28分を指していた。

ちなみに、俺の携帯のアラームが作動するのは午前9時半である。

「……」

俺は、筋肉痛で痛む体を何とか動かして――寝返りを打って、顔を“ウリアの方に向けて”二度寝をする事にした。

よもや、こんな朝からこんな至福な時を過ごす事が出来ようとは。

思っても見なかったと言うか、夢にも思わなかったと言うか。

何と言うか……ね？

……ん、ゴホン。

いかんいかん……朝だというのに何やらテンションが上がって来た。

直ちに二度寝をしなければ。

そんな訳で完全に目が覚めてしまった俺であったが、その瞼が重くなってくるまで目を開けておく事にした。

そういえば……２０５６年の未来には人の記憶を写真に起こす機械が発明されているんだっけ。

早く発明されないかなぁ。

ていうか、発明されて購入したとしても絶対にウリアや霧歌には見せられないな。

見せたら殺されてしまいそうな気がする。

いや、絶対に殺されるな。

命を懸けてもいい。

まぁ、“絶対に殺される”という予想に自分の命を懸けるというのは――些かおかしなものなのかも知れないけれど。

◆◆◆

薄暗い部屋に携帯アラームの音が鳴り響く。

時刻が9時半に達したのだ。

ていうか……結局、起きてから一睡も出来なかったな。

俺は鳴り響くアラームを止める。

それと同時に、ウリアがもぞもぞとその場に上半身を起こした。

8月5日？

「んっ……ふわぁ」

ウリアはその場に座ったまま背伸びをして――口の前に手を持って行きながら大きな欠伸をする。

その目の端に浮かぶ涙。

ボサボサに乱れた金色の長髪。

もう見慣れたつもりだったけれど――先ほどのピンク色の“アレ”を見てしまったからなのか、何だか緊張してしまう。

「……」

そして――俺は偶然と装って起床する事にした。

「んっ……おっ、ウリア。起きたのか」

「ふわぁ……ああ、お早う、秀。早いわね」

「ああ、何か今日は早く目が覚めちゃって……ていうか、お前いつもこんな朝早くから起きてるのか。随分と早いな」

「前にも言ったじゃない……お腹が空くと、私は自動的に起床するようにプログラムされているのよ」

「お前はロボットか」

プログラムされているって何だよ。

意味が解らん。

「あっ、間違えた……インプットされているのよ」

「どっちもそこまで変わらねーよ」

「という訳で、お腹が空いたわ、秀。カップラーメンを作ってよ」

「お前……よく起きてすぐにカップラーメンを食べたいとか思えるよな。起きてすぐにカップラーメンを食べられるとか考えられねーよ」

「そう？　そうでもないと思うけど？」

「いやいや、そうでもあるよ。起床したのちにすぐカップラーメンなんて、太っても知らねーぞ」

「余計なお世話よ。この馬鹿秀」

「でも、お前ってそこまで大食らいにしてはそこまで太らないよな」

「えっ？　そう？　太ってない？」

「ああ、太ってねーよ。全く、その栄養はどこに向かっているのか……。胸？　胸なのか？　いや、それは有り得ないか。だってウリアの胸はそこまで大きくないし」

「秀。聞こえているからね」

「おや、聞こえていたか」

「白々しいにも程があるわよ。ちなみに、私のバストサイズはZカップだから」

「Zカップって何だよ！　どんだけデカいんだよ！　つーか、有り得るかそんなバストサイズなんて！」

「ほら、どう見たってZカップでしょう？」

そう言ってウリアは背中を反らせて何やら胸を強調し始めた。

「どう？　あなたにも、目を凝らせば見えてくるはずよ。この私の素晴らしき豊満な胸が」

「うーん……どう目を凝らしてもどの角度から見ても俺の目には地平線しか映らないな」

「地平線？　今地平線って言った！？」

「いや、違う。俺はそんな事は言っていない。多分、断崖絶壁の聞き間違いだ」

「もっと酷くなってるじゃないの！」

「最大限に譲歩して……俎板（まないた）にしか見えない」

「一緒じゃないのよ！」

「俺の目ではどうやっても解らないな……仕方ない、俺が計測してやるから、ちょっと揉ませてみろ」

「なるほど、それは良い考えね――って揉ませて堪るか」

ちっ。

自然な流れでウリアの胸を揉もうと思っていたのだが……。

世の中、余り上手く行かないなぁ。

世知辛い世の中である。

「まぁ、とりあえず、俺の目にはお前の胸がZカップになんて映らないよ。むしろマイナスZカップにしか見えない」

「マイナスZカップ――ってまさかそれ、一番小さいAカップよりも私の胸が小さいって言いたいの!?」

「洒落の利いた上手い言い方だろ?」

「だーまーれっ！　ていうか、その秀の言い方だったら私の胸って凹んでいる事になるんだけど!」

「えっ？　違うのか?」

「久々に言わせて貰うわ。殺すわよ、この馬鹿秀!」

顔を真っ赤にして涙目でこちらに声を荒げてくるウリア。

どうやら、こちらとしても少し言い過ぎてしまったようだ。

「わ、悪かったよ……カップラーメン二個作ってやるから、な？」

「何よ。私の機嫌がカップラーメン如きで直るとでも思っている訳？」

「いや、そんな事は思っていないけど……」

「まぁ、食べるけどね」

「食べるのかよ」

しかも二個きっちり食べてしまうのかよ。

朝からどんだけ食うんだよ、お前。

◆◆◆

結局、朝から俺はウリアの為にカップラーメンを作る事になった。

勿論、二つ。

味は――シーフードが一つしか無かったので、もう片方はスタンダードで勘弁してもらう事になった。

ちなみに、俺の朝食は昨日霧歌が作ってくれた卵焼きやハンバーグ、

それからソーセージ――もとい、片方の端を何又（なんまた）にも切られた、いわゆる“タコさんウインナー”であった。

そんな朝食――と言うよりも、どちらかと言えばお昼のお弁当に入っているような、そんなおかずを霧歌は昨日態々作り置きをしてくれたのである。

8月5日？

将来は良い奥さんになりそうだ。

いや、俺が霧歌と結婚したいとか、そういう訳では無くて。

しかし、その作り置きは有り難いのだけれど、おかずだけでは流石に何だか物足りないので――。

俺は俺自身の為にもう一つカップラーメンを作る事にした。

いや、だって、ご飯が無いから仕方ないんだよ、これが。

カップラーメンだって立派な炭水化物です。

異論は認めません。

「ほら、出来たぞ」

カップラーメン三つが乗ったトレイを左手に、電子レンジで温めた霧歌特製おかずの詰め合わせを右手に持って俺はリビングへと向かう。

「ご苦労、下僕」

「誰が下僕だ」

そうツッコミを入れながら俺はウリアの前に湯気を上げるカップラーメンを二つ置いて行く。

それから、俺の席の前にカレーのカップラーメンとおかずの詰め合わせを置いて――俺は席に着く。

「しかし……昨日の今日だから、流石に筋肉痛が酷いぜ」

「普段運動をしないからでしょ。秀の事は私が責任を持って護るけれど、少なからず自分の事は自分で護って貰わないと流石の私も困るわ」

「いや、それは解っているけど――ていうか、“責任を持って護る”って、さっき俺に久々の殺人予告をしていたお前の言う台詞とは思えないな」

「だから、今日からでも少しずつ運動を始めたら？　私に出来る事があったら手伝って上げるから」

「そうだなぁ……それじゃあ、とりあえず握力の向上の為にお前の胸を揉んでおくか」

「そうね、握力の向上の為に――って、だから揉ませるかって」

「お前、最近ノリツッコミが多いよな」

ウリアのツッコミの能力が向上しているような気がする。

いかんいかん。

ツッコミ担当として気が抜けなくなってきた。

「あ、握力以外にも何か他に鍛えなくちゃならない所があるでしょ。ていうか、筋肉痛って……どこが痛いのよ」

「うーん……主に足、かな」

「足が痛いのなら、とりあえずスクワットを５０００回やって」

「殺す気か。筋肉痛で傷んでいる俺の足に更に追い打ちを掛けるつもりか」

足が壊れるわ。

「もう、折角アドバイスして上げているのに……いちいち五月蠅いわね」

「それは悪かったな。そのアドバイスがもう少し常識的なものだったら俺も聞く耳を持てるんだが」

「何を言っているの。私はあくまで常識的よ？　ていうか、むしろ私の体の９０パーセントは常識で構成されているんだから。その辺の所をよく理解して頂かないと困るわね」

「そうか。とりあえず、お前が実は人間でないという事が解った」

体の９０パーセントが常識で構成されているって。

人として必要な色々なものが欠如しまくってるじゃねーか。

その点についてはお前は逆に人として非常識な存在だよ。

◆◆◆

俺とウリアが少し量の多いような朝食を食べ終えた所で家の中にインターホンが鳴り響いた。

「誰だ？　こんなに朝早くから」

「霧歌じゃないの？」

「霧歌って――まぁ、有り得ない話じゃないけれど。昨日の今日だぞ？」

「霧歌なら来てもおかしくないわよ……ていうか、早く出ないと」

「解ってるって」

そう言って俺は玄関へと向かう。

玄関に辿り着いた俺はその扉のロックを解除して、玄関扉を外側へと押し開く――。

「痛っ！」

――と、その扉が何かにぶつかった感触と音がしたと思ったら、外から何やら小さな悲鳴が聞こえて来た。

「おっ？」

俺は唖然として扉をゆっくりと更に押し開いてみる。

そこには――鼻の辺りを押さえて頬を赤らめたまま涙目となっている我がクラスの学級委員長、架凪呀琴羽の姿があった。

「架凪呀じゃないか。どうした、鼻を押さえて顔を赤くして涙目になって……花粉症か？」

「ち、違う！　たった今アンタが開けたで鼻を打ったのよ！」

「そうか。まぁ、解ってはいたけどな」

「アンタ、私に喧嘩を売っているの？」

「架凪呀、お前に一つ忠告しておくけれどな。俺の家の扉は外に開くタイプだから、玄関扉の目の前で待っていると顔を打つ羽目になるんだぞ？」

「今更そんな事を忠告されても遅いわよ！　何！？　本当に私に喧嘩を売っている訳！？」

「ていうか、お前俺の事をストーキングしてこの家の場所を突き止めたんだろ？　それなら、扉がどちらに開くのかその辺の事も調査済みなんじゃねーのかよ」

「フンッ、私を見縊らないで欲しいわね！」

「いや、見縊ってはいないが」

「幾ら私でも、ちゃんとその辺りの事は線引きしているのよ。クラ

スメイトの家の場所を知る以上の事はしない――それ以上の境界線は越えない、それが私が自分に科しているルールなの」

「まぁ、クラスメイトをストーキングしている時点である程度の境界線は越えてしまっていると思うけどな」

ていうか、そんなルールを科す前に越えてはならない一線が存在したと俺は思うのだが……まぁ、今更言っても後の祭りか。

8月5日？

「それで、架凪呀ストーカーさん」

「誰が架凪呀ストーカーさんよ。ちゃんとした名前で呼びなさいよ。架凪呀様って」

「さり気無く自分の事を様付けで呼ばせようとするな。俺をストーキングしたお前なんか架凪呀ストーカーで十分だろ」

「何が十分よ。十分どころか、九分にも八分にも七分にもなりはしないわ」

という事は六分以下にはなるという事なのか……。

まぁ、そもそもこの“分”というものが何かの単位であるか自体解らないのだけれど。

「……それで、架凪呀。お前はここに一体何をしに来た」

「あら、理由が無いと友達であるアンタに会いに来ちゃいけない訳？」

「俺達は友達と言うか何と言うか……一種のただならぬ関係だからな？」

「た、ただならぬ関係だなんて……そ、そんな」

「照れるな！　頬を赤らめて俺から顔を背けるな！」

「いや、だって……ねぇ？　もう、真之乃秀のエッチ！」

「うるせーよ！　俺は全く以てそんな意味を込めて言ったつもりは無い！　お前は俺をストーキングしたんだから、ある意味ではただならぬ関係だろうが！」

「何だ、そういう事か。全くもう、まどろっこしい言い方しないでよね！」

「お前が勝手に勘違いしたんだろ！」

「べ、別に、勘違いした訳じゃないんだからね！」

「いや、お前は完全に良からぬ事と勘違いしていただろ！」

「本当なんだからねっ！」

「だから勘違いしてただろって！　ていうか、しつこいわ！」

そして、さっきから話が全然前に進まないんだが。

むしろ後退し続けているんだが。

「ていうか、架凪呀。お前は一体全体ここに何をしに来た。俺とこんな談笑を繰り広げに来たのか？」

「違うに決まっているでしょ。アンタと談笑を繰り広げるくらいなら壁に向かってずっと独り言を呟いていた方がマシよ」

「俺は壁以下の存在だと言うのか！」

「失礼。口が危うく滑りそうになったわ」

「いや、もう完全に滑っちゃってるから！　お前の口は滑り切ってしまっているから！」

「それで、今日アンタを訪ねてきた目的だけど」

「やっと話に入ってくれるのか……」

漸く、本当に漸く話的にも物語的にも進展してくれる……。

ていうか、ここに到達するまでで何か物凄く疲れた……。

話は始まっているようでまだ始まってすらいないのに。

どういう事だ、これは。

「昨日、アンタ途中で急に帰っちゃったからさぁ」

「あ、ああ、昨日の事は、その……悪かったな。ちょっと急用を思い出して」

「良いのよ、急用なら仕方ないわ。私もアンタの事をそこまで束縛するつもりは無いし。アンタを束縛して家に監禁するつもりならあったけれど」

「あったのかよ」

「冗談よ。それでさぁ」

そう言って――架凪呀は持っていた鞄の中から一冊の本を取り出す。

「ハイ、これ」

そして、それを俺に手渡してきた。

「……これは」

架凪呀が俺に手渡してきたもの――それは数学の参考書だった。

「参考書？」

「ほら、昨日アンタ元々私から参考書を借りる手筈（てはず）だったでしょ？　それで昨日はアンタが――急用だっけ？　それで急に帰っちゃったから、忘れない内にアンタに渡しておこうと思って」

「……えっと、架凪呀。態々参考書を俺に貸す為だけに家を訪ねて来てくれた事は嬉しいんだけど」

「だけど？」

「その、言い難いんだけど……俺、もう数学の宿題は全部片付けちゃったんだよな。だから、その、この数学の参考書は……」

「ああ、良いのよ、気にしないで。ていうか、私がその可能性を考えていなかったと思う？」

「えっ？　どういう事だ？」

「こういう事よ」と架凪呀は再度鞄の中に手を突っ込むとそこから二冊の参考書を取り出しては俺に手渡してきた。

「国語とか社会関係の教科は教科書を見れば大体解るだろうから…物理と化学の参考書を選んで持って来て上げたわ。どうせ、その二教科はまだ終わっていないんでしょ？」

「あ、ああ……よく解ったな」

「当然よ。ちなみに、アンタの夏休み前の期末テストの物理と化学の点数が両方とも３９点だった事も知っているわ」

「お前、何でその事実を知っているんだ！」

ちなみに、俺が通っている高校の赤点は４０点未満である。

いや、本当に１点足りなかっただけなんだよなぁ……。

まぁ、赤点である事に変わりは無いのだけれど。

「知っていて当然じゃない。アンタと私の席は隣同士なのよ？」

「だからって、俺はお前にテストの点数を見せた覚えは無いぞ」

「覚えが無くて当然でしょうね。アンタが夜華さんと昼休みにお弁当タイムを取っている隙を見て私がアンタの鞄の中から勝手に取り出して見たんだから」

「お前、俺のプライバシーをさり気無く侵害してんじゃねーよ！

一応個人情報だぞ！」

「だったら、セキュリティソフトでもインストールする事ね」

「学校の鞄にセキュリティソフトも何もあるか！　ていうか、俺の点数を知っているのなら、お前も点数を俺に開示しろよ！」

「……知りたい？　本当に知りたい？　真之乃秀がそこまで知りたいと言うのなら私の物理と化学の点数を教えて上げるけれど……本当に？　本当に知りたい？」

「いや、もういいや……知らなくていい。ていうか、むしろ知りたくなくなった」

どうせ知っても更に絶望感が増えるだけだ。

絶望感が、募るだけだ。

「はぁ、全く……これだから頭の良い奴は嫌なんだ。こっちなんかテストの点数で自慢した経験すら無いと言うのに」

「いや、それは私のせいじゃなくてアンタのせいだからね？」

「言っておくけれど、俺は中学までは頭が良かったんだからな」

「それ、高校に進学できた人が言う常套句（じょうとうく）よね」

8月5日？

「確かに常套句かもしれないけれど、中学時代に頭が良かったのは本当だからな？」

「それじゃあ、1足す1は？」

「……いや、考える間も無く2だと思うけど」

「おおーっ」

「喧しいわ！　どこまで俺を馬鹿にすれば気が済むんだよ！　それからその拍手を止めろ！」

俺は打ち鳴らされるその拍手を止める為に架凪呀の両手を引っ掴む。

「ひゃっ！　だ、駄目よ、真之乃秀！　アンタはクラスメイトで、私は学級委員長なんだから！」

「だからどうした！　ていうか、お前は一体全体何を言っているんだ！」

そして、そう声を上げながら俺は架凪呀の両手を振り払うように離した。

「……ていうか、話は変わるけどさ、真之乃秀」

「今度はどうした」

「よくよく……よーく見ると、アンタ怪我をしているわね」

「そんなによく目を凝らさなくても解るだろ。ちょっと昨日色々あってな」

「もしかして……昨日の謎の爆発に関係あるの？」

「……」

鋭い。

流石は学級委員長。

まぁ、今の言葉の遣い方には多少の語弊があるかも知れないけれど。

「ま、まぁな。俺のこの傷はその爆発に原因が有るかも知れないし無いかも知れない」

「どっちなのよ。ていうか、本当にあの爆発に巻き込まれたのならテレビ局にその事を話せばお金か何か貰えるかもね。ニュースでも、朝から原因不明の爆発が起こったって大騒ぎしているから」

「あ、ああ、機会があったらな」

「えっ？　という事は昨日何が起きたのか多少は知っているの？」

「あっ、いや……その」

鋭い。

本当に鋭いな、こいつ。

学級委員長という立場を差し引いても鋭いかも知れない。

いや、別に学級委員長が雰囲気を察する速度においてトップクラスの階級みたいな――そういうものではないのだが。

しかし……本当に鋭い。

素直に全てを話す訳にも行かないし……いかんな。

何か別の事を言って誤魔化さなければ。

「……き、聞いてくれるか、架凪呀」

「昨日起こった事を？　良いわよ、話してみなさい」

「聞いても、驚かないか？」

「当たり前でしょ。何せ、私は学級委員長なのよ？」

架凪呀の中ではどうやら学級委員長は色々な立場において相当物凄い人の代名詞らしかった。

まぁ、確かに誰でもなれるものではないが。

「……それじゃあ、話すぞ？　架凪呀」

「ええ、良いわよ。ドーンと来なさい」

「実は……昨日、空を仰いだら、突然俺の前にＵＦＯが現れて――」

「ハイ嘘～」

「決め付けるの早いな！　もう少し俺の話を聞いてからでも良いだろ！」

「どう聞いたって嘘です。本当にありがとうございました」

「……お前の脳内にはそっち方面の知識も存在するのか？」

「当たり前でしょ。何たって私は――」

「学級委員長だからだろ。本当に学級委員長である架凪呀は万能で凄いな」

しかし、それでもまだ霧歌の方がこの学級委員長である架凪呀よりも上の存在なのである。

架凪呀が学級委員長なら、それより上のランクに君臨する霧歌は一体全体何なのだろうか。

神、かな。

いや、それだと学級委員長が神の一つ下のランクという事になって、学級委員長という役職が最早訳の解らないものになってしまうな。

うーん。

後でゆっくりと考えよう。

架凪呀が帰ってからでも遅くは無いはずだ。

「しかし、本当に否定の速度が半端無かったな……聞く耳を持たないとはこういう事か」

「あら、アンタでもそう言った慣用句ぐらいは知っているものなのね」

「当たり前だろ。流石の俺だってこれくらいの慣用句は知っているよ」

「感心したわ。真之乃秀には記憶能力があったのね」

「当たり前だろ！　流石の俺にだって記憶能力くらいはあるよ！」

ていうか、人間である以上誰にだってあるよ！

「真之乃秀には記憶能力が存在していた――これは世紀の大発見ね、もしかしたら明日の新聞の一面を飾るかも知れないわよ」

「飾られて堪るか！　ていうか、普段俺は周りからどれだけ記憶能力が無いと思われているんだよ！」

「そして、真之乃秀は新聞の一面から、雑誌のインタビュー、そしてテレビへ――絵に描いたようなシンデレラストーリーじゃない。良かったわね」

「良くねーよ！　今のお前の言葉だけを聞いたらちょっと良く聞こえるけれど、全然良くないから！」

それ以前に、そんな内容でテレビに出られたとしても俺は全然嬉しくなんかない！

むしろ恥ずかしいよ！

「それから、真之乃秀は歌手としてもデビューを――ああ、これは駄目ね。真之乃秀に生き恥を掻かせてしまうわ」

「既に記憶能力の有無でテレビ出演している時点で生き恥を掻いているとは思うんだけど……一応聞く。それは一体全体どうして俺が歌手デビューをしたら生き恥を掻く事になるんだ？」

「だって、真之乃秀って音痴よね？」

「フッ……勝手に決めつけられては困るな、架凪呀」

「えっ？　まさか、アンタって歌が――」

「そう思ったか？　だがしかし、実は違う――何故なら、俺は音痴か否か以前に、友達と一緒にカラオケに行った事が無いんだよ！」

「真之乃秀、それは決して堂々と言い放つ言葉ではないわよ」

「どうだ、参ったか！」

「そうね……ええ、参ったわ。アンタには色々な意味で頭が上がらないわよ」

そんな事を呆れ顔で言って来る架凪呀。

しかし、今の俺の言葉は架凪呀の予想を上回った良い言い回しであったと思う。

霧歌であれ、架凪呀であれ、誰であれ――頭の良い奴を何かをやって出し抜く事が出来た時には何だか猛烈に嬉しく感じる。

その代わり、俺の心の傷が更に深くなった気がしてならないのだが。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7335x/

ボディーガードは魔法少女

2011年11月3日03時19分発行